十三）に女郎花咲澤生花かつみと云つるに似り
白管自、　是迄考らぬといはん序なり
不知事以、所言之吾背、」　歌の意は考らぬこともて吾背の人にいひさわがれしをいためるなり
梅花、吾者不令落、青丹吉、　冠辭
平城人、來管見之根、」　奈良なる人のきたり見んとするをねがふ吾なれば梅の花はちらさじと廻りてにをはによめるなり且末の句之根と書るは借字なり之根によりてくさ〴〵の說あれどさては古意ならず正しくは願乞意にて欲得と書に同意なり
如是有者、何如殖兼、山振乃、止時喪哭、戀良苦念者、」
今本二の句何如を奈爾々と訓たれどさては如くの字餘れりよて伊加泥と訓り古今歌集に「山吹はあやなく咲そ花見んと植けん人のこよひこなくに」と云も似たり
この歌は末の句より二の句へかへして心得べし
春去者、水草之上爾、　水は借字にて眞草なり（卷一）みくさかりふきといふに同
霜結之、　上は序にておく霜の消とつゞけしなり
消乍毛我者、戀渡鴨、」
春霞、山棚引、鶯、妹乎相見、後戀毛、」　こも上は序なり今本鶯をおぼつかなと訓たれども然よみては歌の意と同らず霞の棚引ておぼ、しく見ゆる如おほよそにも妹をし見てあらはさでこひんとよめるなり
春霞、立爾之日從、至今日、吾戀不止、片念爾指天、」
今本此末の句本之繁家波と有こは既に云如くもとはみきなり木だちの繁きに戀の繁きを譬たるにて本の句にかけあはず必此歌の末ならじ一本をもて改
左丹頻經、　冠辭
妹乎念登、霞立、春日毛晚爾、　長き春の日ぐらしおもふとなり戀のおもひのたらずながきにたとへたるなり
戀度可母、」
靈寸春、　冠辭
吾山之於爾、　此吾山は吾終の吾葬する地をさし云其火葬のけむりに霞をたとへて次の句に立霞といふ
立霞、雖立雖座、　今本たちてもゐてもと訓たれどさては雖の字餘れり依て改む
君之隨意、」　吾身まかりぬとも君がまに〳〵といふなり（卷五）に中〳〵にいかに考りけん【卷五の歌如何知兼と有を今本になに、と訓るは如の字餘れりよしはそこに云】吾山にもゆる煙のよそに見ましをてふも吾身のたまへどふるともなくて人をぬらす春雨の情は人皆考りてあれば雨に留られたりと人はおもはんに此雨の中に今更歸行給ふ事なかれといふなり、
春雨爾、衣甚將通哉、七日四零、七夜不來哉、」　右とは別の歌ながら春雨はつよくふらぬよしはひとしかばかりの雨に衣のいたく通らんや雨のふるほどはこじとの給ふにやとなり、
梅花、令散春雨、多零、客爾也君之、廬入西留良武、」
此歌は夫などの旅に行しを雨いたくふる日に家なる妻などのおぼつかなみてよめるならんか
國栖等之、　吉野の奥に國栖てふ里有紀（神武）に此里人始てまゐりし事見えたり是を人にすらと訓しはひが事なり四言の句有事を仙覺などは考らで強て五言によまんとするこそをこなれ
春菜將採、司馬乃野之、　國栖の里に在野なり「あすよりはわかなつまんと考めし野に」といへるに混じて是をも考めしのと訓しは非なり是は下に考ば〳〵といはん序にて國栖の里人等が云々てふ意にていへるなり
數君麻、思比日、」
春草之、繁吾戀、大海、方依浪之、　今本依を往として終の煙の立るまで君を考らでであらまし物を考りそめてくるしと云なり上よりのつゞけがら是にあはせて考るべしさて此歌立霞たてれど、いふは少く後のさまなり
見渡者、春日之野邊爾、立霞、見卷之欲、君之容儀香、」
春日のうら〳〵と春日野にたてる霞をあはれと見る如く見まほしと譬たり、
戀乍毛、今日者暮都、霞立、明日之春日乎、如何將脫、」
【卷五、戀管母今日者在目杵玉連將開明日如何將暮】戀忍びつゝもやうやく今日の日はくらしぬるがあすのながき日をいかにしてとおもひ入てよめり、
吾妹子爾、戀而爲便莫、春雨之、零別不知、出而來可聞、」
今本初句吾背子とあれど次の歌と全く問答と見ゆ次の歌は女の答たるにて君者伊不往とよめりさらば此歌は男のよめるなれば吾妹子とありしを亂本のまゝに傳りしならんにて吾妹子と改む歌の意は春雨は降とも見えぬ小雨にてうち考めれど妹戀しらのすべなければ其雨をもおもほえず出て來ぬといふをふるわき考らずといへる
今更、君者伊不往、春雨之、惜乎人之、不知名國、」　こは女の歌なり男のかへらんとする時にふるわき不知と

かたゆくなみと訓たれどゆくとては千重の辭にかなはずよりて往は依の誤として改訓つさて浪は千重までかかれるなり

千重積、」上の二句は戀の玄げきをいひ次の二句は思ひの千重につもりぬるといはん料なり

不明、今本ほのかにもと訓たれどさてかなはず

公乎相見而、菅根乃、　冠辭

長春日乎、孤悲渡鳴、」今本孤戀とあるは悲を誤れるなり一本によりてあらたむ

梅花、咲而落去者、吾妹乎、將來香不來香跡、吾待乃木曾、」梅の花の咲るをりからに妹が來り逢ふ事などありてよめる歟女の男のがり行事はあらねど其折ふし來れるによりてかくよめるならん吾待の木曾は（卷十五）「吾屋の君松樹に零雪の」とあり

白檀弓、　冠辭

今春山爾、去雲之、逝哉將別、戀敷物乎、」此歌は旅などに行とてわかれををしみてよめる歟

丈夫之、今本丈を大に誤る故に改む

伏居嘆而、造有、四垂柳之、縷爲吾妹、」（卷十四）長歌に丈夫之手結がうらとつゞけしは冠辭考に見ゆ此歌のますらをは冠辭にあらずまき柱ふとき大丈夫とおもへる吾やなど云類なりますらたけをすらふしゐなげきて妹おもふ餘りに吾造れる縷をよと云なり古へは吾妹と定る女は男の髮あげすめり後なれど「君ならずして誰かあぐべき」とよめる類をおもへさて青柳の縷は四垂柳もてすればなり、

朝戸出之、君之儀乎、曲不見而、長春日乎、戀八九良三、」朝毎に逢よしのありけんにはつかに見たるあしたによめるならん

問答。

春山之、馬酔花之、不惡、　色よく咲花なればたとへいふなり

公爾波思惠也、　よしやなり

所因友好、」人のいひさわぎて言よするなり、

石上、振乃神杉、神佐備而、今本神備而とありてかみびてもと訓るは佐を脫せるなりよりて補ふ（別卷）に同歌あり石上振の神杉神成戀我更爲鴨これ同歌の轉なり

吾八更更、戀爾相爾家留、」前の歌は女の思ひよする男に逢ん事かたくしてあり歷たるを人のいひさわけれどもとゆおもへるなれば右の歌よめるを男はかく年歷て女のいふを序としてよしさらに戀にあひたりとよめるならんか

狹野方波、實爾雖不成、花耳、開而所見社、戀之名草爾、　狹野方は借字五味葛なりさねかづらをさぬかづらともさぬがたともいへりかつらの津良約多なればなり又秋の部に沙額田の野邊の秋萩とよみ（卷二）に師名立都久麻左野方息長之越智能小菅とよめるは地名にてこれとは別なりさて歌の意は實には戀のならずともうはゞのよきさまにもあれかしそをだになぐさめにせんとみぬかたによそへてよめり名草は借字なぐさめなり

狹野方波、實爾成西乎、今更、春雨零而、花將咲八方、」雨のうるほひにさく花の如く今さらうはべばかりの面清にすべきや既に實なりしをとなり春雨とはたゞ時節にていへるのみ此二首かならず春とは定めがたし四時の外の雜歌ならんか

梓弓、　冠辭

引津邊有、莫告藻之、花咲及二、不會君毛、」（卷十一）到筑前國志麻郡云云とありて其次に引滯亭舶泊之（此間に夜或は日の字を脫せり）作歌七首とありこれにあはせ見れば引津は筑前の地名なり引津の邊の丶は辭にて引津の方なり野にあらず（卷八）旋頭歌に「梓弓引津邊有莫告藻之花摘までではあはざらめやも名のりその花」とありいづれかまことなるらん玄らず

川上之、伊都藻之花之、　記に倭建命御歌やつめさす出雲多祁流賀と云冠辭はいやつ芽さしいづる藻てふ事にて藻は芽のつねに生玄げるにつゞけしなりさればこゝに川の上のとあればいづる藻の花のいつも〳〵といひかけたるのみこはやごとなき御說にて冠辭考とは異なり委は別記にいふ

何時何時、來座吾背子、時自異目八方、」常及あらんやをとこしからんやとして轉じ約ていふなり

春雨之、不止零零、　今本此零々をふる〳〵と訓せりこは乍を零に誤りしと本居宣長はいへれど今考るに零零のまゝにてふりつゝと訓が古意ならん

吾戀、人之目尙矣、　紀（齊明）中大兄皇子命の君がめをほりとよませ給へるは御母天皇の御かほを見まほしさせ給ふなり古へは人に逢まくほるをめをほるなどいひしなり

不令相見、　男のかれ〳〵なるを春雨の降つゞくにかこ
　ちてうらむるなり
吾妹子爾、戀乍居者、春雨之、彼毛知如、　雨をさして
　彼とはいへり、
不止零乍、」　吾妹子に我戀ゑぬびつゝたえぬ涙とともに
　春雨のやまず降ぬるは吾思ひをゑる如くふるとなり
相不念、妹哉、本名、菅根之、長春日乎、念晩牟、」　お
　もはぬ妹を戀るがよしなきにながき春日を戀くらさん
　かとなげくなり
春去者、先鳴鳥乃、鶯之、　是も鶯の春とつゞけしと同
　じつづけがらにて雪のうちより鳴諸鳥に先だち聲を出
　すをあげて下に言さきだてしといはん序とせり
事先立之、　事は借字言なり
君乎之將待、」　はやくいひ出し頃の契にたがはず其君を
　待んと云なり（卷十二）に一こと出しはたが言なるか小
　山田のなはしろ水の中よどにして」ともよめり
相不念、將有兒故、玉緒、長春日乎、念晩久、」　末の句
　佐久約須にてくらすなりこの三首は問答ともなしその
　上終の此歌は三首のはじめの言の變にて或本の歌なら
　んを今本にはならべ書たり亂書のまゝならんとおもへ
　ば例によりて小書とす又此上の二首も問答とある標に
　あらねど挽歌などのまぎれ入しとは別にて春の雑歌に
　春ならぬも有例にならへり

夏雜歌。

丈夫丹、出立向、　是を契沖は軍に出立向こと、いへれ
　ど丈夫丹と云りし軍にといふまではなく事遠し（卷一）
　に丈夫之得物矢手挿立向射流圓方波云云（卷二十）あら
　しをればほさ手狹むかひ立かなるまゑづみ云云是らは
　的に向なり（同卷）に（長歌）あづまをのこは伊田牟可比
　かへり見せずて又其下にけふよりはかへりみなくてお
　ほ君のゑこの御楯刀伊涅多都吾例波などを思ふにこゝ
　の丈夫丹云云といふも丈夫どち立向ふ勢ひをおもひて
　丈夫爾の言を冠辭とせしならんさて出立向は我家を出
　立て向はるゝ故郷の神なび山なればさ云のみ
故郷之、　飛鳥郡
神名備山爾、明來者、柘之左枝爾、　桑の類なり
暮去者、小松之宇末爾、里人之、聞戀麻田、山彦乃、答
　響萬田、　今本萬田をまでにと訓たれど田も假字なれば
　假字の下に字はそへられず依てあらたむ
霍公鳥、郡麻戀爲良思、左夜中爾鳴、」

反歌

客爾爲而、妻戀爲良思、霍公鳥、神名備山爾、左夜深而
　鳴、　調のとゝのひたる歌なりこともなく打となへたる
　によく調ふぞかたき
霍公鳥、汝始音者、於吾欲得、　われに得させよとなり
五月之珠爾、交而將貫、」　さつきの珠は薔橘の實を糸し
　てつなぎて玉緒などの如くする手進と見えたりさて玉
　緒と云は首玉手玉足玉などの遺れる手風なりけり
朝霞、棚引野邊、足檜木乃、　冠辭
山霍公鳥、何時來將鳴、」　かくるゝ事なし
旦霞、　八重といはんためなり
八重山越而、　多くの山を越てなり
喚子鳥、吟八汝來、屋戸母不有九二、」
霍公鳥、鳴音聞哉、宇能花乃、開落岳爾、　岡の山田な
　り
田草引嫌嫌、」
月夜吉、鳴霍公鳥、欲見、吾草取有、　庭を掃しなるべし
　さて此夜のさま親き友がきなどに見せまくほりしなり
見人毛欲得、」　此歌上の歌のこたへにあらず、
藤浪之、散卷惜、霍公鳥、今城岳叫、　今城は大和國高
　市郡紀（雄略）に新韓又紀（齊明）に今來と見えたり今本
　に叫とあるは叫は誤なり叫吉吊切驕去聲呼也、
鳴而越奈利、」
旦霧、　上に同言あれば是も霞ならんかされど既いふ如
　く霧は秋とのみおもへるは後なれば朝霧と云も嫌な
　し
八重山越而、霍公鳥、宇能花邊柄、　今本宇を字に誤る
　一本によりて改つ
鳴越來、」　越來を今本にこゆらしと訓るは誤なり
木高者、曾木不殖、霍公鳥、來鳴令響、戀令益、」　意明
　なり
難相、君爾逢有夜、霍公鳥、他時從者、今社鳴目、」　右
　に同じ
木晩之、暮闇有爾、　木晩は木茂りて小闇きに夕べ殊更
　なれば云一云有者、
霍公鳥、何處乎家登、鳴渡良武、」　今本に武を哉に誤る
　假字はむとあり哉をむと訓ことなし
霍公鳥、今朝之旦明爾、　旦明は朝開と書く如く借字に
　て朝影なりくはしくは（卷一）の長歌の下に見えた
　り

鳴都流波、君將聞可、朝宿疑將寢、」

霍公鳥、花橘之、枝爾居而、鳴響者、花波散乍、」　かくる、事なし

慨哉、四去霍公鳥、　今本慨哉四をよしゑやしと訓たるは誤れり既記(神武)に慨を于黎多乘と訓りよりて訓も句も改むさてうれたきはうしふれいたきてふ約たる謂なり四以下二の句にてほと、ぎすを詈て醜ほと、ぎすといふ(卷十三)に忘草を去こ草と詈りたる歌もあり

霍公鳥、喧奈流聲之、音乃遥左、」　かくざまなる終の左はつかに鳴をにくみしなり

今社者、音之有蟹、　聲のかる、までになり

來喧響日、」　どよまめは麻米の約米にて來鳴どよめと令る辭なり

今夜乃、於保束無荷、　おぼつかなきはやみをいふなり

霍公鳥、喧奈流聲之、音乃遥左、」　かくざまなる終の左は志奈の約にてはるけしなどいひ入る辭なり

五月山、　五月山は地の名にあらず五月の頃の山を云(卷八)に佐伯山とあるも字の誤にて五月山なるべき事はその卷にくはしくいふあはせ見るべし

宇能花月夜、　五月の始さでも卯の花の殘り咲たる夕月夜に霍公鳥をき、てあかずおもへるなり

霍公鳥、雖聞不飽、又鳴鴨、」

霍公鳥、來居裳鳴奴香、　今本奴を脫せし事去るしよて補ふ

吾屋前乃、花橘乃、地二落六見牟、　花たちばなをちらすを見んといふなり

霍公鳥、厭時無、　いとふ時はなけれどもの意なり

菖蒲、蔕將爲日、　續紀(聖武)に天平十九年五月五日太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲爲蔕比來已停此事從今而後非菖蒲者勿入宮中と見えたりかつらにせん日は五月五日をいふなり

從此鳴度禮、」　こ、より鳴渡れなり

山跡夜、啼而香將來、霍公鳥、汝鳴毎、無人所念、」　此歌は挽歌なれど郭公をよむ故に此歌にまぎれ入しなりよりて小字とすこ、に山跡といふは大名を云ならんさて山跡にありし人のなきをおもふか又なき人を葬しゆゑをいふか

宇能花乃、散卷惜、霍公鳥、野出山入、來鳴令動、」　歌の意かくる、事なし

橘之、林乎殖、霍公鳥、常爾冬及、住度金、」　がねはか

にといふに同じ

霧之、　今本雨晴なりとあるは誤なり霧の一字を二字としたるなり霧はのちにもゆふばれと訓て雨のはれたるをいへればなり晴は字書に見えずよりてこはこせのあまばりの訓をたすけて二字を一字とす婆利の利は禮に通ひてあまばれなり

雲爾副而、　たぐひといふ言のもとはたてならぶてふ語をはぶきつゞめていふ言なりされば其意得て副の字をも用たり

霍公鳥、指春日而、從此鳴渡、」

物念登、不宿旦開爾、霍公鳥、鳴而左度、爲便無左右

二、　さ渡るのさはことおこす語なり歌の意は物もひにいねがてなるにまして郭公の聲のものがなしくきこゆればせんすべなきまでおもはるとなり、

吾衣、於君令服與登、　今本吾衣於の三字をわがきぬをと訓たれど於はてにをはに下におくべき字にあらずこは於君と訓せんとておける事去るければ誤り去るしよりて句も訓もあらためつ

霍公鳥、吾干領、　【契沖は竿にかけてほしたる衣の袖を云歟されど君にきせよと吾に去らする心得がたしといへり今本誤字多を考得ざる故なり撰要抄云君は霍公鳥を指吾乎領は吾を去らせてと訓べしと云り奥人おもふに吾に去らせてとはいふべきにわれを去らせてとはちと不穩聞ゆ領は承上令下謂之領と有は吾をうながしと可訓】今本吾乎領とありてわれを去らせてと訓たれど歌の意とほらず字も訓も誤れりとす領は衣一領などいひて衣の事にいへばきぬと訓べし日下部高豐云乎は干の誤なりこをよしとして改つさて歌の意は竿にかけほしたる袖に郭公の來居て鳴を其衣を君のきせよと鳴といへるなり

袖爾來居管、」

本人、霍公鳥乎八、　こはほと、ぎすをさしてもとつ人といふなり年毎に待戀居るものなればさか云又霍公鳥を故友などいふ事もありすべて時鳥のみならず(卷五)には「遠つ人かり跡の池」とよめるも雁を人に譬なり

希將見、　今本希將見をまれに見んと訓るはあしゝよりてねぎて見んとよめり希はこひねぐ意なればなり

今哉汝來、　今本ながくると訓るはてにをはたがひて意をなさずよりてあらためつ

戀乍居者、」　歌の意は郭公をこひ去たしみつゝ居ははや

こよとねぎてだにも見んさらば今や郭公のこんを云るなり

如是計、雨之零爾、　良久約るなり、

霍公鳥、宇之花山爾、猶香將鳴、」

默然毛將有、　今本もだもあらんと訓むさもあるべけれどなほはたゞの意何事もなくあらん時を云なり

時母鳴奈武、日晩乃、　和名抄に茅蜩比貝維志と見えたり【日晩乃日のくれのと讀む歟日ぐらしの物念時といふはいかにもおだやかならず】

物念時爾、鳴管本名、」　物思ふ時にむなしく鳴つるまゝに吾思ひのそはりぬればたゞあらん時になげかしとなり

思子之、衣將摺爾、爾保比乞、　今本乞を與と見てにほひせよと訓れどさ訓んやは世の歌に當る字なしこはおもへる子か衣にすらんに匂へとこへるにてこそとよむべきなり

島之榛原、　橘ノ島ノ宮同地にて大和國高市郡なり

秋不立友、」　是は夏咲るを見てよめるにあらずまた花なきを乞てよむなり或人榛にて秋萩ならずと云は僻事榛は借字なり

風散、花橘叫、　叫は既にいふ如くなれば字を改

袖受而、爲君御跡、　おはしますとなりおはせりはそこに人の居給ふをも又來り給ふをも古へよりいへば何れにても聞ゆこはむかしの人の袖の香ぞするてふ意なり今本きみに見せんと、よめるは誤れり見せんとよむべき字もなくさ讀みては歌の意もとほらず

思鶴鳴、」

香細寸、花橘乎、玉貫、將送妹者、三禮而毛有香、」　みつれは羸なり痩おとろへたるなり（卷十一）に「三禮二見津禮かたもひをせん」とあり橘の花さけはいつも玉にぬきおくるなるにわれにおくりこさぬは妹のやまひにみつれてもあるかといふなりこは相聞の歌なり

霍公鳥、來鳴響、橘之、花散庭乎、將見人八孰、」　こはたれかはある君ならずしてはといふなり

吾屋前之、花橘者、落爾家里、悔時爾、相在君鳴、」　橘のちりて後來れるをかく云なり女歌なり

見渡者、向野邊乃、石竹之、落卷惜毛、雨莫零行年、」　雨はふるなどねかへるなり行年は去年の意さればこぞの言もてこその辭にかり用たるなり

雨間開而、　今本にあま、あけてとよめるはわろしあめはれてと訓べし集中の例なり

國見毛將爲乎、故郷之、花橘者、散家牟可聞、」　橘の散るばかりの事に國見など云べからずこは國見せん時に橘の咲てあらば興あらんに雨ふりこめて國見もせざる間に橘はちりなんかとをしめりさて此古郷は飛鳥藤原などの古京を云ならん、

野邊見者、皤麥之花、咲家里、吾待秋者、近就良思母、」　意明なり

吾妹子爾、相市乃花波、　相市は借字棟なり

落不過、今咲有如、有乞奴香聞、」　初めの吾妹子はあふといはんのみ今本乞を子と誤れること既いふ如くなれば改むありこせぬのぬは後にたゞぬてふにてね又はなは通ひて今咲る如くありこそよとねがふ意なり

春日野之、藤者散去而、　今本ちりゆきてと訓たれど去はいにてなればいを略てちりにてとよむそいにしへなり

何物鴨、御狩人之、折而將挿頭、」　こは御狩などのあらんする前に藤の花のちりしを惜みてよめるなり

不時、玉乎曾連有、宇能花乃、　二三の句を上にして心得るにてうのはなのたまをぞぬけるなり

五月乎待者、可久有、」　花實など糸はもとより菊の類にもつらぬくは後のわらはべもするわざなりさて玉にぬくはもはら橘にて五月の事なるよしは集中に見ゆされば五月の花を玉にぬき其手風より五月をまつを久しみてよめる歌なり、

問答。

宇能花乃、咲落岳從、霍公鳥、鳴而沙渡、公者聞津八、」　き、つるやのるを略けるなり

聞津八跡、君之問世流、霍公鳥、小竹野爾所沾而、　去ぬ、はしほ〳〵に同じ且今本沾を沼に誤る一本により て改む

從此鳴綿類、」

譬喩歌。

春日野之、藤者散去、橘、花落里爾、通名者、山霍公鳥、將令響鳴、」　秋萩を鹿の妻てふ如く橘を霍公鳥のあるじの樣にいへり然しば古今歌集に「あきはぎにうらぶれをれば足曳の山下とよみ鹿の鳴らん」とよめる類にて橘の花ちる里にかよはば霍公鳥のねたみて鳴とよめるをおもてにて妹が里にかよはゞ其里人のこちたくいひさわがんかとたとへたり

夏相聞

春在者、　今本春在の間に之の字有既云如なれば薬

酢輕成野之、　すがるは似我蜂にて他し虫の子もて子とす雀公鳥も鶯の卵の生るをいふなり似たる物をもていふのみなすは似を約し言なりさて此野はたゞに野をいふにて地の名にはあらぬなり

雀公鳥、　こゝまでは下にほど〳〵といはん爲の序のみ

保等穂跡妹爾、　保等穂跡はほどよくを略きたるにてよくまれあしくまれ其ほとらひのまに〳〵あふべきをひたぶるにあはぬをうらめり

不相來爾家里、」　よきほどらひにあはずてふ事の序歌なり

五月山、　既云

花橘爾、雀公鳥、隱合時爾、　良布は留の延言

逢有公嘲、」　雀公鳥は花橘にかくるなるにわれはかくろへずあへるをよろこべる意のみ

雀公鳥、來鳴五月之、短夜毛、獨宿者、明不得毛、」　歌の意かゝる事なし、

日倉足者、時常雖鳴、君戀、　今本に我君とあれど去かしては次の句につゞきがたし君とありし本の書の消し

を吾と見て誤を傳へたるならんと思へば改む【ときじくてふ言非時又は不定の字はあつれど常及の意なる事此日倉足者云云の歌もて意を去れ】

手弱女我者、　ますらを吾は又せの人われは皆同じ

不定哭、」　今本の訓にても聞ゆれど集中の例もて改む

人言者、夏野乃草之、　此之の下に如を入て心得べし

繁友、妹與吾、携宿者、」　たづさはりは手さはりなりづは助字なり携の字はあて、書しのみ人言の去げきはいとはじとなり

迺者之、戀乃繁久、夏草乃、苅掃友、生布如、」　おひしくは生及なり

眞田葛延、夏野之繁、　夏野までは繁くといはん序なり、

如是戀者、信吾命、　藝は我伊の約

常有目八方、」　戀死んかといふなり

吾耳哉、如是戀爲良武、垣津旗、　冠辭

丹頬合妹者、　今本丹類全と字を誤るゝはしくは冠辭考に見ゆ

如何將有、」　意かくる事なし

片搓爾、絲叫曾吾搓、　こは糸を搓といふなり惣て糸はもろ手ならでかたゝへよるは常なり

吾背兒之、花橘乎、將貫跡母日手、」　我背の橘とりて玉にぬきなんとおもひて糸をよるといへるにかたよりといへるは背はさばかりおもはぬをよせてよめるなり

鶯之、往來垣根乃、宇能花之、　こゝまではうきといはん序なり

厭事有哉、　あればにやを略いふなりうぐひすのうめ花のうきごとゝつゞけたるも古へにておもしろし

君之不來座、」（卷十二）に雀公鳥鳴けるをのへのとありて下は同じ小治田廣耳と見えたり

宇能花之、開登波、　句をきりて心得べし

無二、有人二、　さくとはなく有人にして思ひひらけて我方へよらざる人をいふなり

戀也將渡、獨念爾指天、」

吾社葉、憎毛有目、吾屋前之、花橘乎、見分波不來鳥屋、」　意明なり

雀公鳥、來鳴動、岡部有、藤浪見者、君者不來登夜、」　歌の意かくる事なし

隱耳、　今本かくしのみと訓りさても聞ゆれど去のぶ意を得て借たれば訓をあらためつ

戀者苦、瞿麥之、花爾開出與、朝旦將見、」　上に開とは天漢、　あまの川と訓は後なり委は古事記を引て別記に

なしにといふとは異にてこゝはあらはれ出て相逢んといふなり

外耳、見筒戀牟、　今本筒を箇に誤る

紅乃、未採花乃、色不出友、」

夏草乃、露別衣、　今本つゆわけごろもと訓るは誤なり末の句に衣手とさへあれば訓のあやまりをおもへ【奥人按に此歌三句にきもせぬにとあれば今本のまゝに露わけごろもとよむぞよろしつゆわけしきぬと訓てはきこえがたくおもはる】

不著爾、我衣手乃、干時毛名寸、」

六月之、地副割而、照日爾毛、吾袖將乾哉、於君不相四手、」　上の歌も此歌もともに戀あまれる涙をよめれど何にたくめる事もなくとほりてあらはにして然も意はふかし後の世に「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ去らねかわく間もなし」てふは其頃の歌にはあらはにかくれたる事なくよき歌なるを此二歌にくらべてはかざりてたくみたればいともたがひて意あさくまことなきを見よ

秋雜歌

いふ
水左閉而照、船章、　今本章を竟としてふなわたりと訓たれど意とほらず字を誤るよりて考るに船竟二字は艤の一字にてふなよそひかとおもへれど字のちかければ暫章としてよそひと訓む、本竟を競に作りてきそひとよめりされど水左閉而照といへばよそひの方つゞきてきこゆ
舟　人、　彦星を云なり
妹等所見寸哉、」　相見えきやなり寸は計利約やはよに通ひ妹はたなばたつ女をさしていふなり
久方之、　冠辭
天漢原丹、奴延鳥之、　冠辭
裏歎座津、乏諸手丹、」　一年に一たび逢ます事の遠くすくなければ奴延鳥の如うらなきまして二星の逢夜の遠きをわびましつとなり
吾戀、　吾は彦星なり
婦者知遠、　織女は去りてあるをなり
往船乃、　別れの時をいふなるべし
過而應來哉、　來ん年ならでは來べきやなり
事毛告哭、」　事は借字にて今年別れては又こん年ならでいもに言ものらぬといふなり今本告火と有てつげらひとあるは字も訓も誤れり哭の訓の消しならん
朱羅引、　冠辭
色妙子、　冠辭考色栲の條にくはし
數見者、　去きたへよりいひくだせり
人妻故、吾可戀奴、　此歌七夕の歌にあらずまぎれてここに入しなるべし【○眞淵云色妙は借字子は女を云にて敷栲の妹と云に同しさて敷細布てふ敷は物の繁くうつくしきをいひ細布はよき絹布を云古語女のうつくしく和やかなるに譬なり或本にはこたへと訓しは誤れり神祇令の集解に敷和者宇都波多也云云敷は絹布の織目の繁き意和はなごやかなる意にて美織なり敷は下に敷事にのみ思ふはかたくるし
天漢、安渡丹、　古事記に天安川原とあるは都の地名なりかく云は古事記の考にくはしく云此歌にて安渡といふは天津銀河の事なりそれを彼地名の安川原にとりなしてよめるなり
船浮而、我立待等、【今本云秋立待等妹告與具】今本秋立待等とある秋は我の誤ならんと橘千蔭がいへるによるべし

妹告乞、」　今本與具とあるは誤なり（卷三）に其誤るよしはくはしく云
從蒼天、　今本おほぞらにとあるは誤なり去かよみてはあまれり
往來吾等須良、汝故、天漢道、名積而叙來、」　なづみは既に云如くいたづきなやみにしそといふなり
八千戈、神自御世、　八千戈神は大穴持神の一名なり古く久しき事にいはんためなり
乏嬢、　一本嬢と有
人知爾來、苦思者、」【與人按に告苦字をかくは誤しかされどもありこせのまゝたすけ告　思者とよまるれば改ず有なむその義はつげの計を延れは伎豆となる故借て書るならむ】今本告思者とありてつぎてしもへばと訓り告は苦の誤去るかれば字も訓も改む神の御世より久しくねもごろにおもへるともし妻なれば人も去りにけりと隔句によめりさて外になくおもふ妹をともし妻といふ將かゝるたぐひは皆彦星織女となりてよめると見るべし此歌も前の歌も彦星になりてよめるなり
吾等戀、丹穂面、　丹穂の穂はをの如く唱ふべしこはさにつらふなどいるに同じく艶やかに色づきいでたるかほばせをいふよし冠辭考に委し
今夕母可、　可は疑の辭なり
天漢原爾、石枕卷、」　今本いはをいそと訓たれど既川原とあればさかよむべからねばあらたむ末の句まくとよみこせたれども歟と終たればまかんと訓べし
已嬢、乏子等者、立見津、荒磯卷而寐、吾待難、」　今本此歌字も訓もいと誤れり三の句一本競今本竟とありてともにあらそひつと訓たれど織女の誰とともねをあらそはんよしもなく歌の意もとほらねば竟は立見の二字の一字となれりとす末の句の訓も誤れりよりて改む歌の意は彦星の逢夜をまつ心からともしづまも吾をまちがてに立見つゝありそをまくらとしてぬるならんとなり今本吾を君に誤れるならんと黒生か云へるによるべし
天地等、別之時從、自嬢、然取手而在、　今本取を叙に誤り訓もよしなければ改取手を契と訓は遊仙窟によれり契たるの多は互阿の約なり
金待吾者、」　今本の訓はよしなしこは秋まつわれは妹と去か契りおけりといひ天地のわかれし時より手に取てある秋とつゞけて契の久しきを云ならん

彦星、嘆須嬢、　なけかすの加は伎麻の約

事谷毛、　事は借字言なり

告爾叙來鶴、　今本の余は爾の誤

見者苦彌、」　彦星のなげきますを見ればくるしきに織女他足爾の言をだにつげに來つるといふはなげきをなごめんとなり此だにはさへの如し輕く見るべしさてこは七夕にあらず其前後などよめるならん

久方、　冠辭

天印等、水無河、　天漢をさしてたゝちにみなし川といふなり

隔而置之、神世之根、」　此歌は久方の天とつゞけ下してその言の玄るしと天漢てふものを神世より定めおかして二星の逢瀬をへだて年に一夜のみなるがうらめしといふなり

黑玉、　冠辭

雹霧隱、　遠といはん序なり

遠鞆、妹傳、速告乞、」　つたへはのちも言づてなど云が如しさてつたへてふ言古くはきこえず末の句終の乞を今本與に誤る事前に云が如し此歌も七夕に限らず

我戀、妹命者、　今本汝戀とあり汝にては人より彦星を

さしていふ事となるさらば妹の命とは有べからず此歌も彦星になりてよめるにて我戀る妹の命なりよりて汝は我の草の手を見誤として改

他足爾、袖振所見都、及雲隱、」　此歌の意は妹の命も戀る心はせちなればあくまで袖ふらせれどつひに遠く雲がくりて見えぬを彦星のあかずなげきますと彼佐用比賣をふくみて彦星になりてよめるなり

夕星毛、　夕星の事冠辭考に委し【和名抄に太白星名長庚暮見於西方爲長庚（中不豆々）卷二に夕星之彼往此去大船猶豫不足見者云云長庚星の或暮西に往或晨東に去て見るに譬へたるなり眞淵】

往來天道、及何時鹿、仰而將待、月人壯、」　月人壯は下にも彦星をかく譬し有こはみにおしむといふほどのたとへなり歌の意は夕星すらとゆきかくゆくにいつまでか遠くむかひたちて彦星をあふぎてまたんやと織女のなげゝるなり

天漢、己向立而、　己は借字來向なり（卷十二）相むきたちて又（卷十八）安川許牟可比太知豆

戀樂爾、　今本樂を等とするはホをオと見たる草の手の誤なりらくは留の延言

事谷將告、　事は言なり

嬢言及者、」　つまといふまではなりこも其夜にかぎらぬなり

水良玉、　水は須伊約志なれば假字に用ひたりさて此白玉は鰒玉とて眞珠の事なりそは得がたかる物にて人のめづらしむを星の裝なれば五百都集と多きをいふさて其おほきは首玉手玉足玉の數あるをいひてそをとくこともなくひたぶるにあはん日を待に譬へぬとなり

五百都集乎、解毛不見、吾在哥太奴、　今本吾者于可太奴と有は字も訓も誤れり者は在の誤于可は哥の二字となれると見ゆ訓もよしなければあらためつありがたぬはありがてぬなり（卷十八）に思良多麻能伊保都々度比乎手爾牟須比於許世牟安麻波牟賀思久母安流香とあり

相日待爾、

天漢、水陰草、　今本水陰草とよみたれど唐にても隈の意に陰を用ふ此朝庭にもくまといふに隈の字を充たりこをもて見れば水陰をみづくまと訓て水ぎはの草なるを玄るさて此比もはら唐意をこのめばかくことわりこめて字をあてしをおもへ

金風、　此秋風をかく書るをもても上にいふことわりを玄れ

靡見者、時來良之、」　今本時來之と訓れど來の一字さまで添へ訓べきにあらず良の脫し事玄るかれば補ふさて此歌も星になりてよめるなり天漢に草あるべくもなしそは人の常にてよめり後世天の川てふ所あるなどよりあやまる事なかれそは後に作り出て付たる名にて古意にあらず

吾等待之、白芽子開奴、今谷毛、　紀（神武）に任莽波豫、伊莽波豫、阿々時夜塢、伊麻儀而毛阿誤豫、伊麻儀而毛阿誤豫、とあるは今よとの給へるのみこゝの今だにも右に同じ

爾寶比爾往奈、越方人邇、」　歌意は吾まちし萩の咲たれば彼ころもにほはせとよみし如く今萩はらに入たち衣にほはし織女のがりゆかんてふをかくよめりとせんかさはとりがたし萩に衣にほはせなまめきゆかんとよめる相聞の歌のこゝにまぎれたるものなりと見ゆれば例の小書にするなり

吾世子爾、裏戀居者、　うらは字の如くうらにて心を云さればこゝろに戀をればなり、

天河、夜船搖動、梶音所聞、」 かぢのおとのおを畧いふは古訓なり

眞氣長、 既氣長てふにいひし如く此氣も來經を約云年月日の末經るも久にこひしといふなり

戀心自、 今本こころしゆと訓しはわろし

白風、妹音所聽、紐解往名、」 秋風のさそひて妹がおとなひさこゆればうちくつろぎ紐ときてゆかんとなりこは人の常にていふにて長紐など解てかたぬぎするほどの事を斯は云なり

戀敷者、 戀及にて戀くすればなり

氣長物乎、今谷毛、 既くはしく云如く今もなり

乏牟可哉、可相夜谷、」 下にあふべきものをとて此歌ありさて歌の意はこひ〳〵すれば殊に長く遠くおもはれいともともしかりしを今あふべき夜とだになりぬればさぶしばかりもともしむまじとなり

天漢、去歲渡伐、 わたりば、渡庭なりこは弓場舟場の類なるを皆爾波の爾を畧けるなり爾波の波をわの如くいふは半濁なり爾を畧ける故に本濁に婆と云其濁を去らせて伐の字をかけるなり

遷閉者、 こぞのわたりばうつろふは渡場のかはるといふなり

河瀨於蹈、 於はてにをはの乎にはあらずふむにを於レ蹈と置るなり

夜深去來、」 ふけいにけるなり來はくるのくをけに通しけるなり渡かねて河瀨をたどるに夜のふけぬるををしめるなり

白古、 今本にむかしよりと訓るはいまだし此下に古へにおりてし機を云云によりて訓をあらたむ

舉而之服、 服は借字にて絹なりさて糸を機に去り上るを舉ると云なりいにしへより三の句までは末に年ぞへにけるといはん序のみなり

不願、 うちすてたるとなり

天河津爾、年序經去來、」

天漢、夜船搖而、雖明、將相等念夜、袖易受將有哉、」 今本哉を脫せり訓も誤れり哉とおさへずしては歌の意とほらず必ありて脫せし事去るければ字を補ひ訓もあらためぬ袖かへすは袖かはしまくらまかずあらめやなり

遙媛等、 今本嫫とあるは媛を誤る事去るかればあらたむ

手枕易、 手枕さしかはしてなり

寐夜、雞音莫動、 今本の訓はいまだしよりて改動はどよむにかれゝばこゝはなくにかりたるなり

明者雖明、」 こも男星になりてよめるなり

相見久、厭雖不足、稻目、 冠辭

明去來理、舟出爲牟嬢、」 あかねども夜明ぬれば別て船出せんとなり

左尼始而、何太毛不在者、 左尼の尼は紀に仁禰兩音なりさてさねそめていくばくもあらねばとは初秋のみじか夜をいふあらねばはあらぬになり今本にいくたと訓るは誤なりこはいくばくと訓

白栲、 冠辭

帶可乞哉、 別れを惜なり

戀毛不遏者、」 こゝもつきぬになり

萬世、携手居而、 今本てたつさひてと訓るは誤なりたつさはりは手障の意こゝに携手と云は意を添るのみ

相見鞆、 あひ見るともなりるを畧は古への常なり

念可過、戀爾有莫國、」 今本爾を奈に誤るかゝる所の奈は爾阿の約の訓なれば奈と書よしなし

萬世、可照月毛、 常に去ばし雲かくるゝもくるしきを譬にいふなり

雲隱、苦物叙、將相登雖念、」 萬代に照べき月すら去ばしの雲かくれも苦しき物なりまして二星は萬世に逢なん事とは思ひ給へど一夜を待情のくるしきといふなり

白雲、五百遍隱、 五百は多く重るをいひかくりてはかくれしを約いふかを濁るは音便なり

雖遠、 とほけどもはとほけれどもなり皆古訓今本の訓はいまだしければあらたむ

夜不去將見、妹當者、」 此歌七夕の歌ならず相聞の歌まぎれ入しなりよて例の小書す

爲我登、織女之、其屋戸爾、織白布、織互兼鴨、」 吾ためとはこも彦星になりてよめればなりおりてけむは織互加安良牟の加安良約加なるをけに通してげんと云けを濁は音便なり

君不相、久時、織服、白栲衣、垢附麻互爾、」 こゝもあかづくまで久しく相見ぬと織女になりてよめるなり

天漢、梶音聞、孫星與、織女、今夕相霜、」 天つ川の梶の音聞ゆべくならねとか

秋去者、河霧、天川、河向居而、 むきあてはを牟加比

の加比約伎なりよりてむかひゐてなり

戀夜多、」 織女に成てよめるなり

吉哉、雖不直、 たゞにあふ事なくともなり

奴延鳥、浦嘆居、告子鴨、」 子は妹をいふ妹にあはんとねがふ事をかくいふなればこは欲得の意なり此歌七夕の歌ならずまぎれて入ならんよて小書す

一年爾、七夕耳、相人之、戀毛不盡者、 つきぬになり

佐雰曾明爾來、」 今本に戀も不遏者夜深往久毛と有一本をよしとしてこゝに取

天漢、安川原、定而、神競者、磨待無、」 磨は借字時なり天の安川の神集はいつと定らずたび〳〵あへりしを此星合の事は安川の定りてより一年に一度としたるはいかにとうらみをふくめる意をこゝに其神集は時またなくにとのみいひ二星の心になりてよめるなりさて安川をいふはたゞ其久しきをいふ今本四の句をこゝろくらべは五の句をときまつなくにと訓るは誤にて歌の意とほらずよりて訓をあらたむ此歌の左に此歌一首庚辰年作なりとあり考るに天武天皇白鳳九年なり

右柿本朝臣人麻呂歌集出、 右の一首をいふか又前の三十餘首ともにいふか別の三十餘首の書體多く人麻呂集に似たれば皆人麻呂の歌集ならん

棚機之、五百機立而、 五百津岩村などいふ如はたものの具のおほきをいふなり

織布之、秋去衣、 たゞ秋の衣と云なり

孰取見、」 あはぬ間をいひなげくことなりたれかは取見む男星のみとり見給んといふも又の逢瀬の遠きをもなげくなり

年有而、 年毎に有てなり

今香將卷、烏玉之、 冠辭

夜霧隱、遠妻手乎、」 年毎に今宵逢べきさだ有て遠妻の手を枕まかんとよろこべるなり

吾待之、秋者來沼、妹與吾、何事在曾、 ありてぞなり あれの禮は利豆の約なり

紐不解在牟、 歌の意は待し秋の來りぬれば何ぞこよひ あはであるべきてふをかくいふのみ

年之戀、 年の戀とはやがて前の年毎と同じくたゞちに年に一度の逢瀬と聞ゆあらけき古言を思へ

今夜盡而、明日從者、如常哉、吾戀居牟、」 かゝるぞ古の調べなるそ

不合者、 今本あはざるはとあるはいと誤れり

氣長物乎、天漢、隔又哉、吾戀將居、」 歌の意又似たるなり

戀家口、 計久約久にてこひしくなり

氣長物乎、可合有、夕谷君之。不來益有良武、」 織女に天漢、川聲清之、 川の音きよしは波の音の高きなりなりてよめるなり男星の來ますを待わびよめるこゝろ

牽牛與、織女、今夜相、天漢門爾、波立勿謹、」 織女牽牛之、秋擕船之、浪蹉香、」 川音清く聞るは男星の舟の檝の動て浪のさわぐかとなり

を必たなばたつめとよむ證この歌なり

秋風、吹漂蕩、白雲者、織女之、天津領巾乍、」 白雲を天漢、川門立、吾戀之、君來奈里、紐解待、」 織女になりてよめるなり一本天間川向立とあり

折にあひ織女の天津領巾と見たるなりならびて調のよきを見よ

數〻裳、相不見君矣、天漢、舟出速爲、夜不深間、」 玄 天漢、川門座而、 今本川門座而とよめるは誤なりよりて訓をあらたむ

年月、戀來君、今夜會可母、」 こも織女になりてよめるなり

ばゝも相見るにもあらざればふな出いそがせとなり

秋風之、清夕、天漢、舟擕度、月人壯子、」 さきにもいふ如く月人壯子は男星をたとへよめるなり但此歌は人よりいふなり

明日從者、吾玉床乎、 玉床は玉飾の意もてほめていふのみなり

天漢、霧立度、牽牛之、織音所聞、夜深往、」 夜もなかばなれば男星の擕來ます梶の音のきこゆとなり

打拂、公當不宿、 こゝのいねずは不寐といふにて牽に君舟、今擕來良之、天漢、霧立度、此川瀨、」 前の歌に同じ意なり

あらず記(允恭)に多志陀志爾韋泥氏牟又紀(雄略)に韋泥受とあるは牽宿にてこゝとは別なり

孤可母寐、」

天原、往射跡、白檀、挽而隱在、 隱在はかくせるとは訓れず加久禮留の禮は利世の約なり

月人壯子、」　夕月のゆみはりのまゝに入たるをかくよめるなりこは月の歌のまぎれてこゝにいりたるなり既云如くなれば例の小書す二の句今本訓を誤れり

此夕、零來雨者、男星之、早撥船之、賀伊乃散鴨、」　かいのちるかもは擢の雫のちるかもなりこは其槻村はちりにける鴨又三笠の山は咲にけるかもなどよめるたぐひなり

天漢、八十瀨霧合、　句なり

男星之、時待船、今撥良之、」　八十瀨霧合て夜も更ぬ男星の今船撥いづらしと云なり

風吹而、河浪起、引船丹、　風立て渡がたし引船に渡りこよとなり今本訓よしなし

度裳來、夜不降間爾、」

天河、遠度者、無及、公之舟出者、年爾社俟、」　歌の意かくれたる事なし

天河、打橋度、　下にも棚橋渡と有に例によりて改む

妹之家道、不止通、時不待友、」　こも男星になりてよめるなり打橋わたせよ常にかよはんといふなり

月累、吾思妹、會夜者、今之七夕、續巨勢奴鴨、」　今之の之は助字なり今七夕つゞけこそと願意なり

年丹裝、吾舟撥、天河、風者吹友、浪立勿忌、」　年に一度よそふ舟なれば浪もゆめ〳〵たつなとなり

天河、浪者立友、吾舟者、率撥出、夜之不深間爾、」　こは右の歌に和たる如し自のついでなる歟

直今夜、相有兒等爾、事問母、未爲而、左夜曾明二來、」　此歌もかくるゝ事なく安らかに古意なり

天河、白浪高、吾戀、公之舟出者、今爲下、」　浪の高きは彦星の船出ます浪のさわぎかなり

機、踏木持往而、天河、打橋度、公之來爲、」　織女になりてよめるなり機のふみ木を橋として待んといふなり

天漢、霧立上、　卽雲をいふなり

棚幡乃、　こは奈良に至て轉てかく畧きいひ機女をよめるなりたゞしくいはんにはたなばたつめなり此歌にはじめて此畧は見えたり

雲衣能、飄袖鴨、」　雲を衣とし其雲の旋を袖のひるかへるかといふなり

古、　さきつ比といふばかりをかくいふか古言なり

織篆之八多乎、　今本篆を義に誤る其事は(卷四)の別記に委

此暮、衣縫而、君待吾乎、」　はやく織たるはた物を此夕衣にぬひて男星をまつとなり末の乎はそへたるのみ

足玉母、手珠毛由良爾、　由良は既いふ如く玉のゆりて鳴音を云

織旗乎、公之御衣爾、縫將堪可聞、」　あへんかもはぬひあはせんといふなり

擇月日、逢篆之有者、別乃、　四言こを今本わかれちの

と訓るは古くは四言にもよみしをおもはぬゑひ言なり

惜有君者、　をしかるの加は久安の約なり

明日副裳欲得、」　あすもかくてあれよと願なり

天漢、渡瀨深彌、　わたりと顯語に訓は古訓なり瀨を濁るは渡乃瀨の乃を畧くなり且下に例有古によりて改む

泛船而、掉來君之、織之音所聞、」　彦星の心ふかめて渡るとそへたるなり

天原、振放見者、天漢、霧立渡、公者來良志、」　たゞ霧のたちわたるに男星の來るを思ひやるなり

天漢、瀨毎、幣、奉、情者君乎、幸來座跡、」　こはまたく人の情に爲してよめりわたり來ませと幣奉るとなり

久方之、　冠辭

天河津爾、　こゝは冠辭につゞく天ゆゑ正しくよむ例に

よりぬ

舟泛而、君待夜等者、不明毛有寐鹿、」　奴加約奈なりあらなとねがひおさへたるのみながらかくのべて云はゑらべなり

天河、足沾渡、君之手毛、未枕者、　こも後世のまかぬになり

夜之深去良久、」　良久約留なり

渡守、　わたり守と訓しはよし古訓なり後世渡しもりと云はわろし

船度世乎跡、　乎は與に通ふ故大人の古今注によりて與に通とす

呼音之、不至者疑、梶之聲不爲、」　こはゑらべもよく古くと、のへり

眞氣長、河向立、有之袖、今夜卷跡、念之吉沙、」　月日ひさしく川にのみむかひたちてありし袖をこよひ妹と相まきてともねせんとなり

天漢、渡瀨毎、思乍、來之雲知師、　志久約須にて巨須といふなり

逢有久念者、」　維久は留の延言一年に一夜の契りなれば渡る瀨ことにてなづみこぐかひありてあへるとひこば

しのよろこべるなり

人左倍也、見乍有良武、　今本に見不繼將有とあるは歌の意とほらずよて一本を用

牽牛之、嬬喚舟之、　今本つまよぶ舟と訓然訓てはきこえず

近附往乎、」　舟のちかづくを見つゝよろこびのあまりを云

天漢、瀬乎早鴨、　川瀬の早くてわたりなづみ男星のきますがおそきかとおぼつかなむをいふなり

烏珠之、　冠辭

夜者闌爾乍、不合牽牛、」　男星のまだ來まさぬほどの間をよめるなり

渡守、舟早渡世、一年爾、二遍往來、君爾有勿久爾、」　此歌古今歌集にも有わたり守と訓べき事なり織女になりてよめるなり

玉葛、　冠辭

不絶物可良、佐宿者、　さぬらくのさは發語良久は留の延

年之度爾、直一夜耳、」

戀日者、氣長物乎、今夜谷、　前には今だにとあるを紀を引て云如くこよひとのみ心得べし

今之應哉、可相物乎、」　ともしきははじめにいふ如くたちまほしむべしやとこゝも云なり長くこふる折こそあれ今宵はさかあらじと云なりさて此歌もあふ事をよろこべる歌の意もてよめるなり

織女之、　こは字は委しくて訓は略けるなり

今夜相奈婆、如常、明日乎阻而、　あすよりの日をへだてゝと云を乎の一言に約たるなり

年者將長、」　一年はながゝらんといふなり

天漢、棚橋渡、織女之、伊渡左牟爾、　伊は發言左は世多萬波を約いふ則わたらせたまはんにとなり既云なりこは橋の千蔭云

棚橋渡、」

天漢、川門八千有、何爾可、君之三船乎、吾待將居、」　此八十は前の八十の舟津と云に同じ

秋風乃、吹西日從、天漢、瀬爾出立、待登告許曾、」　まつとつげよとねがふなり

天漢、去年之渡湍、有爾家里、　有は借字荒なり又考るに有は絶の草の手を見誤にて絶にけりなるべきかさば安らかなり

君將來、道乃不知久、」　浪などのうち崩しわたり瀬なしとてよめるなり去らなくは禮を略き奴を延たるにて去られぬなり

天漢、湍瀬爾白浪、高雖、直渡來沼、待有苦三、」　浪のさゝづまらんほどをまつはくるしければ高浪をたゞ渡にわたり來ぬといふなり

牽牛之、嬬喚舟之、引綱乃、將絶跡君乎、吾念勿國、」　引綱の如く絶んとは吾思ぬになり一本吾念間に久有は之の誤なりさて吾之はわがとよむ例なり

渡守、舟出爲將去、　今本去を出とするは誤去るければあらたむ

今夜耳、相見而後者、不相物可毛、」　歌の意は渡守ふなでしいなんよ今宵相見てのちあはぬものにあらざるとなり此歌は後の世後朝の戀といふ題の歌の意もて見よ

吾隱有、機梶無而、渡守、舟將借八方、　今本借を惜に誤る訓はよしなしよて字を改

須臾者有待、」　さほかぢは吾かくし置ぬさをかぢなくては舟こぐよしのあらんやはさばしばかりのほどをまちてあれつかの間の名ごりをゝしまんのこゝろなり

乾坤之、初時從、天漢、射而居而、射は發語のみ　六言

一年丹、兩遍不遭、妻戀爾、物念人、

天漢、安乃川原乃、有通、歲乃渡丹、　今本歲を出出としてでゝのわたりとよみたれどさかいふ歌あるべからずこは歲の一字を出出と見誤つる事去るければ字も訓もあらたむ草の手よりの誤りこれにかきらず有り

曾穗船乃、　穗はをの如く唱ふ今本曾を具に誤れるなり具は濁音の字なり我朝に歌の始を濁る例なければ具にあらぬ事明なり

艫丹裳舳丹裳、船裝、眞梶繁拔、旗芒、　【芒はやごとなき御說にていとめでたければ擧つ】今本荒とありてはたあらしと訓せり字も訓もよしなし荒は芒の誤にて後の薄なりさて今本荒とあるは芒の草の手より壽のそはれるならん既唐にも薄をすゝきの意にとる事なく芒をすゝきとす

本葉裳曾世丹、　今本曾を具に誤る事前の如くてもとはもぐせと訓たれど何のこゝろもなしこれ又誤去るければ字も訓もあらたむ

秋風乃、吹來夕丹、天川、白浪凌、落沸、速湍涉、稚草乃、　冠辭

妻手枕迹、大船乃、　冠辭
思憑而、搒來等六、其夫乃子我、荒珠乃、　冠辭
年緒長、思來之、戀將盡、　おもひますまゝに今宵こひをつくしますらんなり
七月、　此集に外の月の名はあれどもふみ月はなしされどこゝはふみ月と訓むか玄ばらくはつあきとす
七日之夕者、吾毛悲焉、」　今本烏とあるは焉の誤玄るければ改此吾はよめる人の吾もかなしと云なりさて此かなしもはかなしき妹などの意にてめづる心をいふなり

反　歌

狛錦、　冠辭
紐解易之、天人乃、　こは國津人の天津人の妻ごひを玄ぬぶなれば彦星に天人の字をかりたるなり
妻問夕叙、吾裳將偲、」　四の句までは二星の事をいひ末にはそを吾も玄ぬばんといふなり
彦星之、川瀨渡、左小舟乃、　左は發語
得行而將泊、　得行は疾行なり
河津石所念、」【河津は添なり石は助字なり（拾穗）】
天地跡、別之時從、久方乃、　冠辭
天驗常、定大王、　今本に豆大王とありておほきみのと訓しは何のこと、もなし豆は定の誤玄るし大王をてしと訓は卷四の別記に委
天之河原爾、璞、　冠辭
月累而、妹爾相、時俟跡、　今本の訓助辭のおき所たがへり
立待爾、吾衣手爾、秋風之、吹反者、　良倍約禮にてかへればなり
立坐、　一本生と有は誤なり
多土伎乎不知、　今本玄らずと訓しはあし、
村肝、　冠辭
心不欲、　不欲は義訓なり欲はおぼし不欲は心におぼえぬゆゑにかれるなり
解衣、　冠辭
思亂而、何時跡、吾待今夜、此川、行行良良爾、　今本に行長とありてゆきながくと訓るは句もたえず字訓ともによしなし歌もとほらずよりておもふに古本の草の手に行々良々とありしを古の重ね字のさまを玄らで行長と改し誤か考るに行々良々なるべければ例によりて爾を補て字訓と句とあらためぬ
有得鴨、　此末の訓類もおぼつかなけれど此川の頭に久しく待つゝあり堪んかと悲しさのあまりに待も堪じといふかとして改む反歌の末の歌にむかへてかくもあらんか

反　歌

妹爾相、時片待跡、　妹にあふ時のみを片待なり物になぞらへず待を片待不勝と云を思へ
久方乃、　冠辭
天之漢原爾、月叙經來、」
竿志鹿之、心相念、秋芽子之、　萩は鹿の妻なるよしの云ならはしもてかくいふ
鐘禮零丹、落俱惜毛、　【字彙鐘諸容切章鐘詔良切章兩字相通ヨウの反由なるを俱に通じ玄ぐれと訓たるなり】今本に落俗とありてちりそふと訓るはいふにもたらぬ誤なり落俱とありしを俗に誤るならん次に散久惜裳と書しに同じ意なり
夕去、野邊秋芽子、末若、　今本するゑわかみと訓しは誤なりよりてあらたむ
露　枯、　梅の花雪爾志乎禮互ともよめり今本の訓はよしなし
金待難、」　秋を時の意に用ひたるなり盛の時をまたず玄をる、といふなり

右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出

眞葛原、　はらのみはりの如く唱
名引秋風、吹毎、阿太乃大野之、芽子花散、」　見るが如きありさまなり葛は葉ひろなればふく風の先みゆるものの故にかくよめるならん阿たの大野は（卷一）に云如く和名抄に大和國宇智郡阿陀とある是なり內ノ大野といふは宇知郡の野故なり
鴈鳴之、來喧牟日及、見乍將有、此芽子原爾、雨勿零根、」　歌の意明かなり
奥山爾、住云男鹿之、初夜不去、　夜かれずと云に同じ
妻問芽子之、散久惜裳、」　古へより萩を鹿の妻といひならはす事既云如くなれば其諺もてたゞちに萩を娶するとよめるなり其花のちらんがをしとなりよりて問を音便にし努布と濁るべきなり
白露乃、置卷惜、秋芽子乎、折耳折而、置哉枯、」　露にちらしてんか又折に折てからさんやと二つにわたる詞なりおきやのやの一言にて斯二つにわたる意のそらるゝなり
秋田苅、借廬之宿、爾穗經及、　かりほのほもにほふの

ほもともにをの如く唱

咲有秋芽子、雖見不飽香聞、」 此にほふは花の色のかり庵までもうつりはえるをいへり香の事にあらずこは歌にて考るべき辭なり

吾衣、 今本わがきぬをと訓しかどこは乎の助字なくてあらん

摺有者不在、高松之、野邊行去者、 今本去を之に誤るなり假字なればかなの下に意を添て訓む例なき事前に云が如し仍て之は去の誤とするなり

芽子之摺類曾、」

此暮、秋風吹奴、白露爾、荒爭芽子之、 露は咲をもよほし花は含みゐんとするを久しといふ仍てあすさかんをまつなり眞木の葉はあらそひかねてといふに似たるを思へ

明日將咲見、」

秋風、冷成奴、馬並而、去來於野行奈、芽子花見爾、」 歌の意明かなり

朝杲、朝露負、咲雖云、暮陰社、咲益家禮、」 【眞淵は下の注の如く見たれど春の部に云如くこも杲は臭の誤として改むべし只下の歌多く草の朝貌なるによりてこも牽牛花の事とすべし今も時として槿牽牛花ともに夕景に咲もあり殊に秋の七草のうちにも朝貌あれば草の花と見るぞあるらめ猶委しく次々の卷にもいひ貌花の別記にもいふ】朝杲は槿花なり牽牛花にあらず詩經に杲々出日とあるを此字をかりて書けり槿花は昨日の花はひめもてありて夜になりて含み又朝ごとに新花の如く咲故に朝貌の名は負べしさて此歌にいふはその花夕景におもしろく見えつる時にふと斯もよむべし何の意あるにあらず

春去者、霞隱、不所見有師、 春はそれとも見えぬと斯いふは歌のならはしなり

秋芽子咲、折而將挿頭、」

沙額田乃、 大和國平群郡額田又河内近江にもあるか上の春部にも狹野方てふ下にもいへり沙は發語にて額田なりさて山田などを濁るはやまの田の乃を略ばなり出立る所にて人のひたいの如くあれば額田と上下ともに體語にいひなせばもとより乃はそふべからず此田は清べし

野邊乃秋芽子、時有者、 今本ときしあればと訓るはいかゞ者のてにをはの字有るに時有の間てにをはの假字なしさらばときなればと訓事定かならずや

今盛有、折而將挿頭、」

事更爾、衣者不摺佳人部爲、咲野之芽子爾、 既いふ如く咲野の地に女郎花を冠するのみ

丹穂日而將居、」 おほく女郎花咲たる野に居らば其花のにほひうつりて花すり衣とならんからに別に衣はすらじとなり

秋風者、急久吹來、 今本に急之とある之は久の誤なり さて急久は疾の意にていたくと訓べしと覺ゆ今本にはやく吹けりと訓るは字も訓もてにをはもたがひ玄かも意もとほらず必誤玄るければあらたむ

芽子花、落卷惜三、 句なり

競立見、」 今本終句に競竟とありておぼろ〳〵にと訓るは何ともなし契冲は立見ならんと見てあらそひたてぬと訓るは字はよく考たれど訓はいまだし助字たがひて開ゆ字は契冲が見たる如く二字を一字に誤しならんよりてきそひたち見むと訓めり四の句はちらまくをしみとありこゝを句とすべしさて萩が花のちらじと風にあらそひたつを見んとよめりと見るべし

我屋前之、芽子之若末長、 今本わかたちと訓るはさもあらんさてかく訓も義訓なれば玄なひとも義訓すべしされどふる所なりともかよはき物は玄なふべしこをおもふに同じ義訓ならばわかなへとよむべしわかく末なるきはなへの意なるをおもへ(卷二)に葦若末乃足痛をあしなへのあしなへとよめるにあはせて見るべし

秋風之、吹南時爾、將開跡思乎、」 乎はよに通ふなり

人皆者、芽子乎秋云、縱吾等者、乎花之末乎、秋跡者將言、」 今本いなわれと訓るはよしなし卷二人者縱とも

玉梓、公之使乃、手折來有、此秋芽子者、雖見不飽鹿裳、

吾屋前爾、開者秋芽子、常有者、我待人爾、令見猿物乎、」

手寸十名相、 【手寸十名相撰要抄云手寸は手の寸一寸なり是を十は一尺なれば一尺計の苗なり曾奈倍てふ言の本は曾は須於の約奈は奈良比奈良倍奈供奈米の奈なり(其奈は奈行云)よて須和里須爲須宇須惠と働言より約て須惠奈倍を約云言なれば曾奈比曾奈布とも曾奈倍ともいふべし】たぐりそなへなり俱利約妓なればなりそなへといふは秋の七草など取殘備へなどせしをいふならんたくりは野より引とり來て植しなるべしたけばぬれたがねばなどよみしだけに同じ辭なりさて相をへ

の假字にかりたるはちまきらへなどの類のへの假字に用れば同言所へに通せしか

殖之毛知久、出見者、屋前之早芽子、咲爾家類香聞、」

今本殖之名とあるは名は毛の草の手の誤にてうゑしもきるくなり

吾屋外爾、　こゝをやどゝ訓しもて前に屋前をにはと訓しを知れ

殖生有、秋芽子乎、誰標刺、吾爾不令知、」　今本令を所に誤るは書などのきえしならん訓によりて字をあらたむ此歌譬喩歌なりたゞの歌とおもひてこゝに取しかよりて例の小書とす

手取者、袖幷丹頬、　今本訓はとるべけれど假字は誤れり字は丹覆とありて覆はおほふ也きかるに今本假字をふと有おほふをふとは訓べからず集中丹頬とありてにほふと訓りよりて字も假字もあらためぬ

美人部師、此白露爾、散卷惜、」

白露爾、荒爭金手、咲芽子、　前の歌は露は咲を催し花は令居んとすなるをあらそふといひ今は露を催しもよふされて花のたえず咲けるをあらそひかねてと云也

散惜兼、雨莫降根、」

嬬嬬等、　冠辭

行相乃速稲乎、　地名と云によるべしくはしく冠辭考云

苅時、成來下、芽子花咲、」

朝霧之、棚引小野之、芽子花、今哉散濫、未厭爾、」　歌の言明かなり

戀之久者、形見爾爲與登、吾背子我、殖之秋芽子、花咲爾家里、」

秋芽子、戀不盡跡、雖念、思惠也安多良思、　あたらしはあたらをしてふ言を轉し約し言なりをしといふも同意なりくはしくは荒良言にいふしるやは既にもいふ如くよしやに同じ

又將相八方、」　戀は盡さじとはおもへど又來る秋ならでは萩の花盛にあはぬ物故よしや此花に戀つくさんといふなり

秋風者、日異吹奴、　日にけには既云如くひにことになりよて異は假字ならねば爾を添訓べし

高圓之、野邊之秋芽子、散卷惜裳、」

丈夫之、心者無而、　紀妍哉此云阿奈而惠夜とあるによれる歟

秋芽子之、　之の下に如を入て心得べし萩の如く玄なひ

うらぶれ戀てなり

戀耳八方、奈積而有南、」　ありなんやもといふにあたる此歌は相聞なるをたゞの歌とおもひてこゝにいれしならんよりて例の小書す

吾待之、秋者來奴、雖然、芽子之花曾毛、　此毛はかるく見るべしてにをはに入たるのみ

未開家類、」

欲見、吾待戀之、秋芽子者、枝毛思美三荷、　玄みゝは玄みゝにて玄げき意なり

花開二家里、」

春日野之、芽子落有、朝東、風爾副而、　此の智に風の言はあれど級戸の風あらしの風とも云如く重ねたるなるべし

此間爾落來根、」

秋芽子者、於鴈不相常、言有者香、　一云言有可聞

言乎聞而者、花爾散去流、」　上にも花に散とてあだなる意によめるをあだにといふ意とも見ゆれどかるく花にちるとのみ見るぞ古意ならん

秋去者、妹令視跡、殖之芽子、露霜負而、　今本露を霧に誤る一本によりてあらたむ

散來毛、」

秋風爾、山跡部越、　こは今いふ國の大和ならでかの大名なる大和の郷をさして云なり部はへの假字に用るのみ

鴈鳴者、射矢遠放、雲隱筒、」　此下に上は同くして四の句聲とほざかるとあり此二句はそれによりて誤れるなりよりてあらたむ

明闇之、　あけくれと濁るはあけくれといへば朝夕の事となるこはあけの暮の乃を略けば具と濁るなり明てまだ暮の如くらきを云

朝霧隱、　りはれに通既出、

鳴而去、雁者吾戀、　今本吾を言に誤一本によりて改

於妹告社、」

吾屋戸爾、鳴之雁哭、雲上爾、今夜喧成、　國方可聞遊群、」　國方は國へかも行とへをえの如く半濁に唱ふべし國部へかも行のへを略しなり且今本末の句の終の二字を左へよせ端詞の如く書るはいかなる行本もてかくはなしけんさて此はなち書しを僻がこと、見とがむる人のあらざりけんあまつさへに國方可聞をくにつかたかもとよめるはわらふべし

左小牡鹿之、　左は發語牡鹿之中臣の祓に今いふ俗說は誤りなり

妻問時爾、月乎吉三、切木四之泣、　【折木四哭之奥人今本を案るに折不四喪とありてをりふしもと訓めり】

所聞、　切木四を雁に借たるは幹孽枝葉の四つを一手に切は鎌もて苅り取るなりこは例の戯書なり（卷十五）に諸王諸臣散二禁授刀寮一時の長歌の中に折木四哭之と有もかりがねと訓べし

今時來等霜、」

天雲之、　冠辭

外雁鳴、從聞之、薄垂霜零、　【奥人云霜は借字といひはたれは雪なりといふはともに誤なりはたれは班てふ言にて班霜班雪はうすらにふれるを云班とばかりいひては雪の事ならず此下冬相聞に小竹葉に薄太禮零覆とも有も雪を省てはたれとのみいひしなり霜は借字志は助字毛はそへていふのみ】

寒此夜者、」　はたれは雪なり　一云彌益々爾戀許曾增焉、

天雲はよそといはん冠辭のみめづらしみもせずよそに聞なる頃にはたれふりて此夜のさむきとよめるのみ一本の方はあし、又今本にさむし此夜とあるはてにをはたがへりさて此歌冬の歌にして玄かも一本をもて見れば相聞の歌なりいづれにても此部にあるべきならねば例の小書とす

秋田、吾苅婆可能、　苅婆可は卷十三十六にも有婆は言便の濁を玄らせて濁言の字を用ゆ

過去者、　苅ばかの過るとは幾計多く苅してふ事をいふ俗にはかの行しといふ是なり

鴈之喧所聞、冬方設而、」　設は向てなり牟加約麻なり計は幾に通ひ幾は伊比に通卽牟加比なり義を延れば加比しなりむかひてともいはる、なり

葦邊在、荻之葉左夜藝、秋風之、吹來苗丹、雁鳴渡、」（卷六）に「いもなるがつかふかはづの佐佐良乎疑あしとひとことかたりよらしも」てふも蘆と荻とをよめり一本秋風爾雁音所聞今四來霜こは上のさやぎと云にはかなはず

押照、　四言冠辭今本おしてるやとよめるは何の言ともなし

難波穿江之、蘆邊者、雁宿有疑、　今本かりねたるかもと訓るはわらふべし

霜乃零爾、」

秋風爾、山飛越、雁鳴之、聲遠離、雲隱良思、」　山に似たる歌ありそこにも云

朝爾往、　はつときを略てつと、いふなり

雁之鳴音者、如吾、物念可毛、聲之悲、」

多頭我鳴乃、　鶴が群をつゞめ云音にあらず下の鴈鳴もかりがむれの意なればなり

今朝鳴奈倍爾、　是もさむき頃鳴なりなへは並にてふ言にて集中に多く有皆二つの物をならべあげていへり古今集に「いなおふ世鳥の鳴なべに今朝吹風に鴈は來にけり」といふは定かなりさればそも、とは此歌又下の多頭我鳴乃云云の歌などとりてよみけん此卷に此辭を具とも從とも書て有もて鳴つ、共にと心得べし

雁鳴者、　かりがねはかりがめなりめは群なり牟禮約米なるを禰に通はして鴈がねとは言なり

何處指香、雲隱良武、」　今本武を哉に誤れり

野干玉之、　冠辭

夜度雁者、欝、幾夜乎歷而鹿、　夜毎に何處ともなく鳴わたるといふ歟、

己名乎告、」　今本吾をよぶと訓しはいまだし後の物ながら後撰に「行かへりこ、もかしこも旅なれやくる秋毎にかり〳〵となく」とよみしは今に似たり

璞、年之經往者、阿跡念登、　阿跡念の阿は奈に通ひて何ともふとなり東歌になぜあせと云に同じ又思ふに阿は何の誤歟さらばいとあきらかなり

夜渡吾乎、　雁になりてよめるなり

問人哉誰、」　年久しくして友も少なきも友を求と夜渡るを問人はたれと云か問べき人もなきよしにて問人や誰とはよめり右の歌に和るならん

比日之、秋朝開爾、　朝開とは書れどこも朝かげなり

霧隱、妻呼雄鹿之、　今本の假字はたがはねど雄をぶにあて、よめるはたがへりよぶは呼の一字にてたれり妻よぶとあれば雄鹿をしかとのみ訓べし

音之亮左、」　今本亮をはるけきと訓れど集中亮淸など皆さやけきと訓り

左男牡鹿之、妻整登、　整は漿の草を見誤て一字にせしかと云說もあれど玄からず刀登乃布は刀は手乎の約登は多呂の約にて手を足はすてふ意なり（卷十四）に網子と、のふとあるも網引手をたらはすを云こ、も妻となさん手をたらはすなり諸成此言を考得れば云なり【網引は手をたらはすといふべしこ、の豆乎はたけの約豆

と見れば妻とせんたけをたらはすとも見るべし】
鳴音之、將至極、　今本かぎりと訓るはあまりにいまだし
靡芽子原、」
於君戀、裏觸居者、敷野之、　大和國磯城郡ならん
秋芽子凌、　云ぬぎは既いふ如く雪霰にまれ分入るを云
左牡鹿鳴裳、」
鴈來、芽子者散跡、左小鹿之、鳴成音毛、裏觸丹來、」
既にいふ如く宇良約和夫利約備なりよりて延ればうらぶりともうらぶれともなり約ればわびとなるなりいづこにても此言同じ
秋芽子之、戀裳不盡者、　つきぬにの意なり
左小鹿之、聲伊續伊繼、　伊は發語つぎつぎなり
戀許曾益焉、」　さをしかの戀つきぬ聲の如く吾泣聲のつぎ〳〵こひまさるとたとへたりこも相聞の喩歌の紛入しなり
山近、家哉可居、　家してやをるべき居るまじきといへるなり
左小牡鹿乃、音乎聞乍、宿不勝鴨、」
山邊爾、射去薩雄者、　射は發語にて行なり薩は借字にて幸男なり山の幸ある人にて狩人なり
雖大有、山爾大野爾文、　今本やまにせのにせとはいかに見たるにかやすらかによまるゝものを
沙小牡鹿鳴母、」　さつをは多くあれど野山にも又鹿の多鳴と云
足日木笑、　冠
山從來世波、　吾により來らばの意
左小鹿之、妻呼音、聞益物乎、」　山路より來りもせば鹿の妻よぶ聲をきかんものをとなり
山邊庭、薩雄乃禰良比、恐跡、　今本おそるれどゝあり
小牡鹿鳴成、妻之眼乎欲焉、」　既いふ如く上つ世には見る事を目といへるぞ多きこも鹿の妻の顏を見ん事をもとむるとなり
秋芽子之、散去見、　鹿の見るなり
鬱三、　萩の花を鹿の妻と云よりおぼつかなく思といふなり今本いぶかしみとよめるは誤なり例依てあらたむ
妻戀爲良思、棹牡鹿鳴母、」
山遠、京爾之有者、　今本京をさと、訓しはいかゞ歌の

意もとほらずよて改
狹小牡鹿之、妻呼音者、乏毛有香、」　山遠ければ京にて聲のかすかにあれば聞たらまほしめづらしまるゝなり
秋芽子之、散過去者、　今本にゆけばと訓るは誤れりぬればとよみてあらん
左小牡鹿者、和備鳴將爲名、不見者乏焉、」　此下三四首皆萩の花を妻といふ意もてつゞけり
秋芽子之、咲有野邊者、　今本さけるのべにはとあるはいまだし
左小牡鹿曾、露乎別乍、孀問四家類、」
奈何牡鹿之、和備鳴爲成、蓋毛、　秋野之芽子也、繁將落、」　今本云げくとあるもきこえぬにあらねどすべての云らべによるに云かはあらじ
秋芽子之、開有野邊、　今本のへのと訓るは助詞たがへり
左牡鹿者、落巻惜見、鳴去物乎、」
足日木乃、山之跡陰爾、　跡陰は常影とも書たれど共に借字にて本陰の意なり本は木の事なり山のふもとゝいふも生本の意にて木は繁く生る所の名なり紀の歌にもとごとに花は咲ともとあるも木毎になり云かれば本かげに鳴鹿と云るべしかり字になづむ事なかれ
鳴鹿之、聲聞爲八方、　加須の約くきくやなり
山田守酢兒、」（卷二）に云如く須は志豆の約の濁なればずと濁るべきを初言濁らぬ例故下にて兒を濁る
暮影、來鳴日晩之、幾許、　既にいふ如くそこばくこゝばくと云如おほくの事なり今本こゝだくのと云はあしし
毎日聞跡、不足、音可聞、」
秋風之、寒吹奈倍、　秋風のいとさむきに蟋蟀の聲床ちかく鳴は秋の霜夜のさむさ身に云むばかりきかるゝ故既いふ如くなへは共の意にて物二つならへかぬるにてもきり〳〵すにあらでこほろぎなるをおもへ下にも別記にも云
吾屋前之、淺茅之本、蟋蟀鳴毛、」　蟋蟀を今本にきりぎりすと訓はいと誤なり和名抄に蟋蟀一名蛬（木里木里須）とあるは中世より名をまがひたるなるべし順ぬしなど萬葉を訓せし時誤て蟋蟀をきり〴〵すと訓しにや後京極殿「きり〴〵す鳴や霜夜のさむしろに」とよみ給へるもいと寒夜の霜夜かは九月にも床ちかく鳴ものな

るゆゑ霜夜のさむきをさむしろにいひかけたまへるなりこは聞なれし歌故いふなり其外萬葉に霜夜によみし歌あげてかぞふべからず今きり〳〵すてふ虫はいとあつき夏の日に鳴虫にて秋の半には其こゑもなき虫なり毛詩に七月在野八月在宇九月在戸十月入我床下とあり されどそは大様をいへりいとさむき時は九月床ちかく鳴事右にいへるごとし此は必こほろぎと訓べし委き眞淵考は別記に在り

草影乃、　物陰に生る草をかげ草といふのみ

生有屋外之、暮陰爾、鳴蟋蟀者、雖聞不足可聞、」

庭草爾、村雨落而、蟋蟀之、鳴音聞者、秋付爾家里、」

草も色付蟋蟀も鳴ばかり秋になると云

三吉野乃、石本不避、鳴川津、諾文鳴來、河乎淨、」　河音のさやけくも有て蝦の鳴をうべといふ是を古へ秋の物とせしなりこゝのみならず秋の歌によめる類有

神名火之、山下動、　今本に山したとあるもあしからねどもとゝあらん

去水丹、川津鳴成、秋登將云鳥屋、」　秋といはんとて蝦のなくといふなり

草枕、　冠辭

客爾物念、吾聞者、此吾聞ばの者は旅にいたづきたるわかとかゝるなり後なれど鎌倉の右のまちきみの「箱根路を吾越くれば云云」とつゞけ給へること同じ

夕片設而、　設は向てなり既にも出

鳴川津可聞、」

瀬乎速見、落當知足、　足は借にて而有なり豆阿約多なり

白浪爾、川津鳴奈里、朝夕毎、」

上瀬爾、河津妻呼、暮去者、衣手寒三、　衣手の手は多計約衣が丈なり

妻將枕跡香、」　吾はださむきに妻を思ふにつけて蝦の鳴もさあるかと吾を押てかれをおもふなるべし

妹手乎、　冠辭

取石池之、　和泉國に有其土人とろすと云といへり

浪間從、鳥音、　今本鳥音異鳴秋過良之

異爾鳴、　水鳥なり此鳥か音の音も借字鳥群なる事既にいふむれゐる水鳥の秋のくれていとさむければ殊更に鳴を異に鳴と云

秋過良之、」

秋野之、草花我未、鳴百舌鳥、　今本に舌百鳥とかけり

かくもあらゝかにかけるにて誤字有を思へ

音聞濫香、片聞吾妹、」　是はたゞ秋の相聞の歌のまぎれてこゝに入たるなりよりて既にいふ如く小書とす歌意はもずの鳴音を聞らんかといふまでにてさて其おもひやるはわが片聞て戀おもふ妹なればそをそへてよめるなり

冷芽子丹、置白露、朝朝、珠斗曾見流、置白露、」　ことも なく安らかなる歌なり

暮立之、雨落毎、　一云打零者又(卷十六)に此一本の同歌あり

春日野之、尾花之上乃、白露所念、」

秋芽子之、枝毛十尾丹、露霜置、寒毛時者、成爾家類可聞、」　時をよくいひかなへたり

白露與、秋芽子者、戀亂、　愛するを云なり

別事難、吾情可聞、」

吾屋戸之、廡花押靡、置露爾、手觸吾妹兒、　手ふれよ吾妹よといふなり

落卷毛將見、」　妹が手ふれておちんをも見ばやの意なり

白露乎、取者可消、去來子等、露爾爭而、　露も今を時と置なりよりてきそふといふなり

芽子之遊將爲、」

秋田苅、　秋の田の稻をかりとらんとて假庵をまうけて守るなりさて秋田苅かりほと同辭別言に重たるなり

借廬乎作、吾居者、衣手寒、露置爾家留、」　秋の夜寒の比かり廬に居れば夜ふけ行まゝに寒さ身にしめるありさまよくとりなしたる歌なり

日來之、秋風寒、芽子之花、令散白露、置爾來下、」　意かくるゝ事なし

秋田苅、苦手搖奈利、　苦手は既衣手にいへる如く苦丈なり借廬をふける苦の風に動くを然いふ帆手綱手の手も其物の大を云なり

白露者、置穗田無跡、告爾來良思、」　一本告爾來良思毛さて露は穗をかりとりたれば白露の我置所なしと此借廬へつけ來つゝ此苦手をうごかすならんといふ此うごくはもと風なれどをさなくよめるなり又おもふに苦手の二字は菴の一字を誤るかさらば菴うごくなりと訓べし又廬の一字廬にて手は毛の誤とせばいほもうこくなりか猶始の說によるべし

春者毛要、夏者綠丹、紅之、綵色爾所見、秋山可聞、」

春はもえ出て見るかひあり夏はみどりのめづべく秋はくれなゐにほふ錦と見ゆるとなり紅はいろどるといふ字にてやがて紅色といふ色もかり字にて赤きとは赤み込をいふなり卽赤げきを赤み、しきといふも同じより て紅色も借字にて丹染の意さて歌の意は錦に見ゆる秋の山といふなり

妻隱、　冠辭

矢野神山、【矢野神山伊勢播磨備後】

露霜爾、爾寶比始、　既にも云如くにほひはいにしへは除光をいへる事此歌などにて明らかなり

散卷惜、」　今本末ををしもと訓るは助字の置所違り【今本末を毛と訓るは助字の置所違へりといへれど此下に本葉之黃葉落卷惜裳とも有ればこゝも今本のまゝにをしもといひても助字違へりとは云べからず奥人】

朝露爾、染始、秋山爾、鍾禮莫零、在渡金、　二の句今本そめはじめたると訓るはいまだし末の金はがにと同じ

右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出　歌も集中の書體にひとしく見ゆれば既にもいふ如くすてず

九月乃、鍾禮乃雨丹、沾通、春日之山者、色付丹來、」いにしへは九月にも時雨をよめり

鴈鳴之、寒朝開之、露有之、春日山乎、令黃物者、」　もみぢてふことは(卷一)考同別記にくはしくする如くまそほみ出る葉てふ言なり此末の句の訓もふるく傳りし訓ならん

比日之、曉露丹、　あかつきの露の乃をはぶけばつゆを濁なり

吾屋前之、　屋前を今本にやど、訓しは誤なるよし既にいへり

芽子乃、下葉者、色付爾家里、」

雁鳴者、今者來鳴沼、吾待之、黃葉早繼、　つゞきてはやもみぢせよと云なり

待者辛苦母、」

秋山乎、謹人懸勿、　秋山の事をゆめ人の言にかけていひ出す事なかれわすれたりし物を人言にかくれば思ひ出らるゝにとなり(卷八)の挽歌に「あきつ野を人のかくれば」といふも同じきなり

忘西、其黃葉乃、所念君、」　今本こをおもほゆるきみとよみしはわらふべし

大坂乎、吾越來者、二上爾、　二上大和國葛城上郡にあ

り

黃葉流、　ちるを流るゝといふ例おほし

志具禮零乍、」

秋去者、置白露爾、吾門乃、淺茅何浦葉、　浦葉は借字にて末なりうれに同じ言を通はす

色付爾家里、」

妹之袖、　冠辭

卷來乃山之、　筑前大宰府歌の中に城の山道と有

朝露爾、仁寶布黃葉之、散卷惜裳、」

黃葉之、丹穗日者繁、　木々の多きをいふ

然鞆、妻梨木乎、　如妻の意にていふか此もみぢのくれなゐのにほひやかなるもておほくもみちはあれど妻てふ言をとりてかくはよめるならん妻梨てふ木あるにあらで唐衣きなしなどのいひなしなり

手折可佐寒、」

露霜乃、　今本乃を聞と有は誤なり

寒夕之、秋風丹、黃葉爾來毛、妻梨之木者、」　こもつまとしもいふからに色に出るてふをふくみてよめる歟

吾門之、淺茅色就、吉魚張能、　紀(持統)十月乙亥幸苑田吉隱丙辰至自吉隱と見ゆ式(延喜)には城上郡陵と有なみしばの野もそこに有べし今もよなばりてふ所初瀨山の背に有今本ふなばりと訓しは誤りなり

浪柴乃野之、　浪はかり字並司馬野ともいふ歟

黃葉散良新、」

雁之鳴乎、聞鶴奈倍爾、高松之、野上之草曾、　野のへはうへの略

色付爾家留、」

吾背兒我、白細衣、往觸者、　行ふれなばといふなり

應染毛、黃變山可聞、」

秋風之、日異爾吹者、　爾は例によりて補既いふが如し

水莖能、　【水莖の岡湊は太宰府より今道拾七八里ほとの海中にさし出たる地なりこは紀(仲哀)に岡縣といひ和名抄に遠賀郡と有を古誤て御牧郡と云しを諸國地名は古に復すべきよし台命ありし時より又遠賀郡とよべり今俗に誤てをんがの郡といふ岡の湊は其郡のうちなり今は蘆屋と呼り水門の邊に大倉生菟夫良媛の社あり紀(仲哀)に見えたり神武の大御舟裝しは此水川なり仲哀天皇の香椎宮にうつらしゝも此水川なり秀吉も皇居の例を追ひてこゝよりあがり給ひ今の世巡見使も此水川より筑紫に入るてふ蘆屋もこゝなりと諸成か友の筑

紫人ぞいへりける】後世水莖の岡を近江にありといふはひが事なり紀(仲哀)を始集中におほく(卷十五)師の旅人卿の水莖の水城の上とよめるも筑前なればこゝも同所とすべし古今歌集にも水莖をかとて歌有近江風は別なり

岡之木葉毛、色付爾家里、」　次のひらに同じ歌有ていさか異なり

雁鳴乃、來鳴之共、　今本きなきしともにと訓りなべとよむべし

韓衣、　冠辭

裁田之山者、　裁田は借字立田なりから衣裁といはんのみなり

黄始有、」

鴈之鳴、聲聞苗荷、明日從者、借香能山者、黄始南、」　意明かなり

四具禮能雨、　六言

無間之零者、眞木葉毛、　既にもいふ如く古へ眞木とは專ら檜を云

爭不勝而、色付爾家里、」　去年の柴皆此ころ色づく物なるを然云

灼然、四具禮乃雨者、零勿國、大城山者、　大城の山は筑前國御笠郡大野山の頂にありといふ

色付爾家里、」

風吹者、黄葉散乍、小雲、吾松原、　我山我岡ともよめるによらん歟

清在莫國、」　朝きよめなど云をおもふに落葉にて清からぬをいふ

物念、隱座而、今日見者、　春日ノ山者、色就爾家里、」　物おもひてゑばし見ぬうちになり

九月、白露負而、足日木乃、　冠辭

山之將黄變、見幕下吉、」　見むもよしなり

妹許跡、馬鞍置而、射駒山、擊越來者、紅葉散筒、」　集中紅葉と書しはこゝのみなり專黄葉と書りたま〳〵紅葉とあるをおもふに此紅葉は後をおもひて書人のわざか

黄葉爲、時爾成良之、月人、楓枝乃、色付見者、」　月の照まさるを見れば世はやもみぢする時になりぬらんとなり

里異爾、　爾は例によりて補へり

霜者置良之、高松能、　今本に野とあれど訓を假字に用る例にも違ひぬ野を乃假字に用る事なしもしくは能を誤れるかとしてあらためつ

山司之、　野にも山にも少し高き所をいふなり

色付見者、」

秋風之、日異爾吹者、　爾を補ふ事既いふ

露重、芽子之下葉者、色付來、」

秋芽子乃、下葉赤、荒玉乃、　冠辭

月之歷去者、風疾鴨、」

眞十鏡、　冠辭

見名淵山者、　大和國にあり

今日鴨、白露置而、黄葉將散、」

吾屋戸之、淺茅色付、吉魚張之、　既出

夏身之上爾、　吉野に有とは別なりかた〳〵に此名は有

四具禮零疑、」

雁鳴之、寒鳴從、水莖之、　既出

岡乃葛葉者、色付爾來、」

秋芽子之、下葉乃黄葉、於花繼、時過去者、　今本過ゆけばとあるは末の句にかけあはずよりて改

後將戀鴨、」　此歌はぎの花もちり其下葉のもみぢもちりぬる時は今をこひんとなり

明日香河、黄葉流、葛木、山之木葉者、今之散疑、」　伊勢の本居の宣長がいふかづらきの木の葉飛鳥川へ流れん事いかゞたゞおもひやれるかとおもふに今の飛鳥川はみなぶち川のながれならんされど古へかつら木の方の水も落合まじきにあらず高鴨は葛城なり下つ鴨の邊の川飛鳥川へ行ふれしか

妹之紐、　旅立には夫の紐を妹の結てたゝす物なればいふなり

解登結而、立田山、　解と結て立となりとくかとすればむすびて寐もあへずと言なり

今許曾黄葉、始而有家禮、」

雁鳴之、喧之從、春日有、三笠山者、色付丹家里、」　意明なり

比者之、五更露爾、吾屋戸乃、秋之芽子原、色付爾家里、」　此歌に似たる歌上にも有同じ案歟同歌の變歟

夕去者、雁之越往、龍田山、四具禮爾競、色付爾家里、」　意明なり

左夜深而、四具禮勿零、秋芽子之、本葉之黄葉、落卷惜裳、」　又同じ

古郷之、始黄葉乎、手折以而、今日曾吾來、　今本わが

くると訓しは誤なり上下かけあはず

不見人之爲、」

君之家乃、黄葉早、落之者、四具禮乃雨爾、所沾良之母、」

此歌字いと亂たり一本をもて補ひたゞせり今本初句君之家乃之黄葉早者落とありて訓もともに誤れり

一年、二遍不行、秋山乎、情爾不飽、過之鶴鴨、」 今本にすごしと訓るは誤なりよりて改む

足曳之、 冠辭

山田佃子、不秀友、 穂に不出ともなり

繩谷延與、守登知金、」 此歌は相聞譬喩歌なり

左小牡鹿之、妻喚山之、 今本よぶと訓しはいまだしよて改む

岳邊在、早田者不苅、霜者雖零、」 右に同じ

我門爾、禁田乎、見者、沙穂内之、 大和添上の郡なり

こはさほのちと訓べし

秋芽子爲酢寸、所念鴨、」 足曳之山田佃子云々より此歌までの三首は相聞の譬喩歌どもなればこゝに入べからず下に其標あればなり下なるが亂て入しと見ゆれば小書とす【こも相聞ならずかし】

暮不去、 ぬる夜おちずなといふが如し夕部〳〵さらずなり

河蝦鳴成、三和河之、清瀬音乎、聞師吉毛、」

天海、月船浮、桂梶、懸而搒所見、 此かけては桂梶をとりつけてといふ意なり集中に阿波の山かけてこぐ舟と云かけにはあらず

月人壯子、」 月を月人男てふかにかくよめると見るべしさて星の林に漕かくる見ゆてふ歌の變なる歟【次の卷天海丹雲之波立月船星之林丹搒隱所見】

此夜等者、沙夜深去良之、雁鳴乃、所聞空從、月立度、」

佐夜中と云々の變なり

吾背子之、挿頭之芽子爾、置露乎、清見世跡、月者照良思」

無心、秋月夜之、 隔句なり月夜の照つゝはつゞく

物念跡、寐不所宿、照乍本名、」 此歌相聞なり【奥人おもふに此歌相聞の歌とは聞えずたゞ月の歌なるべし譬喩に似る歌もなどかなからむや】

不念爾、 隔句おもはぬに天はれてとつゞけり

四具禮乃雨者、零有跡、天雲霽而、月夜清焉、」 今本焉を鳥に誤り訓もきよきをとあれど玄かしては助字違へり一本によりて改こも前と同じく相聞の歌なり

芽子之花、開乃乎々入緒、 今本開乃乎再入緒とありてさくのをふたりをと訓しは何の事ともなし思ふに再は乎の誤とす（卷三）生を、れる玉も云云（卷三）花咲乎爲里（卷十七）花咲乎々理（卷八）開の乎爲里に其外乎乎里乎爲ともあり（卷三）已下乎爲里とあるは烏の誤なり其事卷二の別記にくはしくいへりこゝも乎々里ならでは歌の意をなさず

見代跡可聞、月夜之清、戀益良國、」 又前に同じ戀まさるといふ花のみの事にあらぬと聞ゆよりてこゝろなき云々以て三首皆小書とす

白露乎、玉作有、九月、在明之月夜、雖見不飽可聞、」 月のさやけきをよくよみかなへたり

戀乍裳、稲葉搔別、家居者、乏不有、秋之暮風、」 暑のまだのこれる時風を戀るなり風をだに戀ればともしくもあらじとよめるなり

芽子花、咲有野邊、日晩之乃、鳴奈流共、 今本ともに と訓しはいまだしきなり

秋風吹、」

秋山之、木葉文未、赤者、 もみぢぬになり

今旦吹風者、 今本の日は旦の誤ならん一本旦につくる霜毛置應之、」 應を下に書し例あり今本之を久に誤るさて歌の意はまだもみぢだにせねどけさ吹風の寒きは霜も置ぬべしと心を入て見るべし風はとあれば下はべしと訓べし

高松之、此峯迫爾、 峯に草のあるべきならねど此香の峯もせきまでかさたぢみちさかりなるをいはんとてかくはよめるなるべし

笠立而、 草の香を誤るなり和名抄に芸（久佐乃香）さてこゝに何物をいふか玄らねど後世燕尾蘭てふ物香ありて花は見るめもなし長高く末ひろごれりかゝる物ならんよりて笠立てといふか又たゞ秋の千種の香のおほきをおほかたにかくよめるのみならんか

盈盛有、秋香乃吉者、」 秋の香のよさは秋草の香のよさなり

一日、千重敷布、 今本うへに玄き〳〵と訓るはいかゞ

妹があたりに時雨ふれよ吾も行て見むとなりふれ見んをおもく見るべし

我戀、妹當、爲暮零禮見、」

右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出

秋田苅、客乃廬入爾、　客はかりの意に假れるを今本たびと訓はいまだし

四具禮零、我袖沾、干人無二、」

玉手次、　冠辭

不懸時無、吾戀、　今本にはかけぬときなしわがこひはとあるは誤なり

此具禮志零者、零は一本によりて改む今本に者者とあるは誤りなり

沾乍毛將行、」

黄葉乎、令落四具禮能、零苗爾、夜能衣寒、　今本副とありて夜さへぞさむきとよめれどこゝにさへの辭いかがよりて考るに能の字を誤れりとす

一之宿者、」

天飛也、　冠辭

雁之翅乃、覆羽之、何處漏香、霜之零異乍、」

秋相聞

金山、舌日下、鳴鳥、音聞、何嘆、」　此歌序のみ音だにきかばといふのみ下堤に水を引とて山より落る水の下樋をいふなり

誰彼、我莫問、九月、露沾乍、君待吾、」　九月の露に沾つ、君を待は吾成事いちじろけんにそを誰彼と問におよはずと云なり

秋夜、霧發渡、凡凡、　【夙夙、契沖】おほ、のほはをの如く唱

夢見、妹形矣、」　今本三の句を夙夙としてあさなさなと訓りさて四の句をゆめの如見るとあれどいとかけ合ず初句を秋の夜といひ腰句をあさなさなといふもあまりなり朝な〳〵ゆめの如く見るとはいと〳〵かけあはずよりて考るに凡凡の字を好事の夙夙となして訓をみだりにせしなり

秋野、尾花末、打靡、　今本生靡としておひなびくと訓しはなにのこと、もなし生は打の草の手よりや誤りけんうちなびきと訓て上下よくかけ合

心妹、依鴨、」

秋山、霜零覆、木葉落、歳雖行、我忘八、」　秋山のにほひやかなるに霜ふりおほひ色かはり行如く妹が姿のおとろへぬとも吾はわすれじとなり

右柿木朝臣人麻呂之歌集出、　既いふがごとし

住吉之、岸乎田爾墾、　新田をにひばりと云類などにていふなり

蒔稻乃、而及苅、不相公鴨、」

釧後、　冠辭

玉纏田井爾、　まく田は地名なり此事冠辭考委

及何時可、妹乎不相見、家戀將居、」　此歌班田使の歌なるべし班田使は六年に一度ありすべて此卷には班田使の歌おほし

秋田之、穂上爾置、白露之、可消吾者、所念鴨、」　三の句までは序にてけぬべくといはんためのみたとへ歌なり

秋田之、穂向之所依、片縁、吾者物念、都禮無物乎、」（卷二）に此もとの句互同じ歌有然はこゝは暗にとなへのたがへるならんこもたとへうたなり

秋田苅、　今本秋田叫とありてあきの田をと訓たれど既に出る言の例をもて叫は苅の誤りとす

借廬作、五百入爲而、　廬入してと云なり

有盐君叫、將見依毛欲得、」　今本欲將は欲得の誤ならん假字はがもとあれは字をあらたむ此歌も班田使の妻などの歌ならん

鶴鳴之、所聞田井爾、五百入爲而、吾客有跡、於妹告社、」　こは答歌ならん

春霞、多奈引田居爾、廬爲而、　今本廬付而とあるは其田居のいほへ家こぞりて引うつる事有なればいほ付てといふ歌もあるべきやされど例も覺えずその上訓はしてとあればもとより付の字にあらざりし故に訓をもて字を改

秋田苅左右、令思良久、」

橘乎、　冠辭

守部乃五十戸之、　集中に守部王有二句まで序なり

門田早稻、苅時過去、不來跡爲等霜、」

秋芽子之、開散野邊之、暮露爾、沾乍來益、夜者深去鞆、」　此歌をとりて古今歌集に「秋はぎのちるらんをの、露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも」とよめり

色付相、　色づくと云なり加は幾阿の約にていろづきあふを約たるなり似つかふなども同じ今の訓誤なり

秋之露霜、莫零、妹之手本乎、不纏今夜者、」

秋芽子之、上爾置有、白露之、消鴨死猿、戀乍不有者、」（卷十二）に同歌ありて末の句戀管不有者是弓削皇子の御歌なり七より下は家々の集なれば同歌ある事をかなり

吾屋前、秋芽子上、置露、市白霜、吾戀目八面、」　譬喩歌なり

秋穂乎、之奴爾押靡、置露、消鴨死益、戀乍不有者、」

意明なり

露霜爾、衣袖所沾而、今谷毛、　だにもはかるく見るべし今なり此事既にいふ

妹許行名、　今本こをやらなと訓るは意もたがへればあらたむ

夜者雖深、」

秋芽子之、枝毛十尾爾、置露之、消毛死猿、戀乍不有者、」

前の秋萩の歌の意とおのづから似たる歌か

秋芽子之、上爾白露、毎置、見管曾思努布、君之光儀乎、」

意明なり

吾妹子者、衣丹有南、秋風之、寒比來、下著益乎、」　衣ならば身につけんとなり

泊瀬風、如是吹三更者、　よは、夜間なり三更と書は萬葉の手なり者はにといふべきてにをはなり

及何時、衣片敷、吾一將宿、」　此歌は女歌かおもふに背のはつせのあなたより通ひ來り故に風はげしさ夜はこじと思ひて初瀬の方ゆ吹風をなげく歟

秋芽子乎、令落長雨之、零比者、一起居而、戀夜曾大寸、」

意明なり

九月、四具禮乃雨之、山霧、煙寸吾等胸、　今本煙寸をけむきと訓るはあまりなるにやよりて改猶可考吾告とあるは吾等のあやまりとす

誰乎見者將息、」　一本十月四具禮乃雨降云云とあり

蟋蟀之、待歡、秋夜乎、寐驗無、枕與吾者、」　待にこぬ人を戀わびてよめるなり

朝霞、　冠辭

鹿火屋之下爾、鳴蝦、　【蛙字鏡に加比留和名抄に加閇流萬葉に加敝流豆云木も有よておもふにこゝは鳴かへると訓むか此集に河津と見るは今のかへるちふ虫にはあらで魚にて今俗にかじかと云ものぞ是なるべし】

聲谷聞者、吾將戀八方、」　譬歌なり

出去者、　こは女歌なり背の出ていねば天飛雁の如鳴べしとなり

天飛雁之、可泣美、且今日且今日云二、　下に吾背子乎且今且今出見これをけふかけふかと訓はわろし同さまなれどこゝは年ぞふるといへば毎日の意にてよし下なるは其日の事にて次の句に出て見ればとあればいまかいまかと訓べし

年曾經去家類、」　こは班田使又防人などの妻の歌ならん

夫の旅に出てかへらん〳〵とのみいへるをまちわびてよめるものなり

左小牡鹿之、朝伏小野之、草若美、隱不得而、　かくろひのひはいの如く唱呂比約里にて禮に通へばかくれかねてなり

於人所知名、」【此歌は春の相聞に有べき歌なり】

左小牡鹿之、小野草伏、灼然、吾不問爾、　こと、ひもせぬにといふなり不語を祝詞にこと、はぬと訓

人乃知良久、」

今夜乃、曉、降、鳴鶴之、　鳴たづの如われもなく物故鶴も思ひあるになしていふのみ

念不過、　思ひをやらぬなり

戀許增益也、」　集中焉矣也等の助字を添てかける所もあり是も添たるのみ既に上にもあり此下にも此類あり

道邊之、乎花我下之、　をばなが下にのみはあらぬをかく樣に云なすが古歌の常なり

思草、　もろ〳〵の說あれど定かなるよしあるはなしただ思ひ草てふ草あるべし戀草和草めざまし草なども玄りがたきなり猶おもふに思は忘の誤ならんかと眞淵はいへり又やごとなき御說には紫苑ならんかとおぼすよしのおはすとぞのたまはせし

今更吾、何物可將念、」　今本四の句今更爾何物可と有は字を誤りしとおもはる今更の下の爾の字は吾の字の誤ならん何物にてなにと訓べし爾よりしてなにとよみくだす事こゝろゆかず歌の意もとほらねばあらたむなり

草深三、蟋多、鳴屋前、　今本の訓は誤れりよてあらたむ

芽子見公者、何時來益乍、」　意明なり

秋就者、水草花乃、　水は借字眞の意萩薄萱の類秀に出て花咲ものをたとへ云りさて其穂に出て咲花の如く吾おもふ人を我は思へどたゞにあはさればおもふ人は玄らじとよめるなり

阿要奴蟹、　阿要奴蟹はあえぬるが如にを省きいふあえぬは不肖の字にあたりて他花にあえず不似如く我思ひのいち玄ろきを穂に出る花にたとへいふなり（卷八）に橘の長歌に阿要奴我爾とあるはこゝとは別にて我は解に通ひて時なりぬるげになり土佐人は物の熟ぬる事をあえぬると云も是に同じ

思跡不知、直爾不相在者、」

何爲等加、君乎、將厭、秋芽子乃、其始花之、　はつ花

の如と云なり

歡寸物乎、」　うれしきのうれはうらぶれのうらと同じ卽こゝろなり玄きは及なりされば心玄く君なればいとふ事なしといふなりさてこの歌は右のこたへの如し

展轉、戀者死友、灼然、色庭不出、朝容貌之花、」　朝容貌は前にもいふ如く牽牛花なり委は貌花の別記に其よしをいふ歌の意ば此花いとうつくしきがことく色には出じとよめり

言出而、云忌深、朝貌乃、穗庭開不出、戀爲鴨、」　今本に戀をするかもとあるはてにをはたがへり依てあらたむさて歌意は牽牛花は葉かくれにさく物なれば其如くあらはれず戀するとなり穗に出る物とて穗に出るたとへとするが如し

雁鳴之、始音聞而、開出有、屋前之秋芽子、見來吾世古、」　意明なり

左小牡鹿之、入野乃爲酢寸、初尾花、　上三句序にて初といふ言をのみ下へは用たり

何時加妹之、將爲手枕、」　すゝきは時有て尾花と穗に出るが手枕はいつかせんとなげきいへるなり初といふにかゝれり今本の如く手枕にせんと訓ては聞えず六帖に手枕をせんとあるぞ古き訓にてことわりあるなりさていづれに訓ても將の下に爲を脫つらんと覺ゆ集中の例みな斯あるによりて爲を將の下に補へり

戀日之、氣長有者、三花圃能、　眞菌生なり

辛藍花之、色出爾來、」　案るに延喜染殿式に韓紅といふは深紅の事なりからくれなゐといふももとは吳より始て渡しに後に韓より來しが色よかりし故に韓紅といふなりさて藍てふ物はいとはやく渡りてありしならん此あゐてふ名を藤原菅根が何にまれ其色にあえ染なすよりの名ならんといへるはよし

吾鄕爾、今咲花乃、　女の若盛なるにたとへしならん

女郎花、不堪情、　わすれんとすれども忘られず猶戀にけりとなり

尙戀二家里、」

芽子花、　一本花の下に之の字あり

咲有乎見者、君不相、眞久二、成來鴨、」

朝露爾、咲酢左乾垂、　有進而の意にてさきすゝみなり

鴨頭草之、　つき草はめづべき物なれどもはかなくいろも消うつり花もはかなければ消ぬべきとこそたとへたれさて鴨頭草をつき草といふを此きをいに通してつゐぐさといふは古への常なりそを後に言のひゞくまゝに露草といふは後の俗の誤なり

日斜共、　今本にともにとあるは既もいふ如く訓の誤なり

可消所念、」　さて日斜共夕影をおひてつき草の玄ぼめるを消ぬべくといひ我戀の日ひさしくて命もけぬべきにたとへよめるなり

長夜乎、於君戀乍、不在者、　今本不生者とありていけらずばと訓たれど上下にかけ合ずよりて生は在の誤として訓も改【不生者ならざらはと訓て今本のまゝに隨ふべし】

開而落西、花有益乎、」

吾妹兒爾、相坂山之、皮爲酢寸、　冠辭やごとなき御說にすべて玄のてふ名ある物は皆かはを帶て玄なひたてり玄の竹てふ物もさなりさらば皮爲酢寸とせるは皆玄のと訓べし（卷十四）の皮爲酢寸久米能若子といふも玄のにこもる意もて久米と古毛と通して冠とせるならん（卷一）に婆太須酒寸此卷の長歌に旗芒などあるは幡の意と見るべしよりて此卷又（卷十四）の皮すゝきとあるは玄のずゝきの意と心得べし（卷十二）の波奈すゝきは波太すゝきの誤りなり又古今歌集にあるは字の如く花すゝきと心得べし是は後なればなりすべて眞に似て花の如きものまたはうるはしく言て花なにてふ事は花橘の外は後世言なり花橘は橘橘又金橘ともいひて別種花咲たる橘にはあらずくはしくは別記にいへり

賀茂眞淵冠辭考にいへるとたがひてよらせ給ふ事古へ今の言にもかなひよくわかれ聞えめでたき御說なればあげたり【皮有ておひたてる物は皆玄なへなびく物なりさて奈敝の約禰なり此禰は乃に通なれば玄なへ竹玄なへず、きなりよりて皮の字をかりしならん】

穗庭開不出、戀渡鴨、」

牽爾、　【いさ、めの事奥人既に言此注取がたし】今本に此言をいざなみと訓しより下の訓も歌の意も誤れり此言は（卷四）に委しく解りいな玄らず玄か目にてふ意にてこゝは妹が光儀を絕ず見かほしと云なり

今毛欲見、　今本に見てしがと訓るは誤なりてしと訓んの字なく意通ず

秋芽子之、四搓二將有、妹之光儀、」　欲見を此下に引下して心得よよて上の訓の誤玄るべし

秋芽子之、花野乃爲酢寸、穗庭不出、吾戀度、隱嬬波母、」

意明なり

吾屋戸爾、開秋芽子、散過而、實成及丹、於君不相鴨、」

又同じ

吾屋前之、芽子開二家里、不落間爾、早來可見、平城里人、」 又同じ

石走、間々生有、 石橋とは既云如水わたる便に流に渡こゆべき石を並するうるをいふなり

貌花乃、 かほ花は旋花なり今云ひるがほなり契沖がうつくしき花をすべてかほ花と云といふは笑べし此說多かれど取べきなしやごとなき御說もて別記に云

花西有來、在筒見者、」 歌の意は在經て見れば貌花の如くいつくしくゑみ榮えたる妹なりけりとなり

藤原、古郷之、秋芽子者、開而落去寸、君待不得而、」

奈良の宮の始によめるならん

秋芽子乎、落過沼蛇、 蛇は借字備を美に通しかれり越の國にては今もべみと云とぞ

手折持、雖見不怜、 初の句を此三の句の上に置て心得べし隔句なり【此歌隔句ならず與人】

君西下有者、」

朝開、夕者消流、鴨頭草、可消戀毛、吾者爲鴨、」 既いふ如めづべき物なれどはかなげに朝夕に色も消うつろひはかなき花を吾戀にたゝまじかる命に譬ふなり

蜒野之、尾花苅副、秋芽子之、花乎苅核、 既（卷一）にもいふ如くこはふけをふたゝび延たるなり不計の計を延れば加世となる其加世の世をのぶれば佐禰となるなり

君之借廬、」（卷一）に金野乃美草苅葺とある類なり（卷十三）にも此類の歌あり且此歌は旅のさまにて物によせたる意はなしまぎれてこゝに入し物なりよて小書とす

咲友、不知師有者、默將有、此秋芽子乎、令覩本名、」

此萩の花の咲ぬるとも去らずばもだしてあらん咲しを去りぬればこそとひこしゝか見たゞしてはやくも

とすなりさらばこを見せまじものを見せぬるがよしなしと恨むならん

秋去者、鴈飛越、龍田山、立而毛居而毛、君乎思曾念、」

意明なり

我屋戸之、田苟葉日殊爾、 爾は例によて補ふ

色付奴、不來座君者、 來は一本によりて加ふ今本來の字なし

何情曾毛、」 背のおとづれのなきを待わびたるなり

足引乃、 冠辭

山佐奈葛、 既もいふ如く佐奈葛は五味子なりこは常葉にてもみぢせぬ物なりそをもみづまでといふは烏の頭白からん時と云べし

黃變及、妹爾不相哉、吾戀將居、」

黃葉之、 冠辭

過不勝兒乎、 戀心をえ去ぬびかくしがたきをいふなり

人妻跡、見乍哉將有、戀敷物乎、」

於君戀、之奈要浦觸、吾居者、秋風吹而、月斜焉、」 去なへうらぶれは（卷二）に委し今本活本にも焉を烏に誤る一本によりて改む

秋夜之、月疑意君者、 隨意の字をまに〳〵と訓如く疑意をもてかもといふは義訓のみ

雲隱、須臾不見者、幾許戀敷、」

九月之、在明能月夜、有乍毛、 ありつゞ意にてたえざるなり

君之來座者、吾將戀八方、」

忍咲八師、 忍は心にたへゐる事を堪忍故にて縱の字に借歟くはしくは（卷二）の別記にあり

不戀登爲跡、金風之、寒吹夜者、君乎之曾念、」

惑者之、痛情無跡、將念、秋長夜乎、寐師在、」 終の句今本に寐師耳と有て禰ざめしてのみと訓り上の句ども にかけあはずよりていをねてしのみと訓たれど猶かけ合ずよりておもふに在耳の草の手より在を耳と見誤りたるとす猶考べし思推なくよめるならん

秋夜乎、長跡雖言、積西、戀盡者、短有家里、」 妹ととともねしおもふ心をつくし合ば猶秋の夜もみじかしと前の歌に長しと云をみじかしとよめり

秋都葉爾、 （卷二）あきつばの袖ふる妹とよめるは蜻蛉の羽の如くといへるなり今は秋の黃葉をいへるなればなり思に秋の葉の如にと云を如を略きいへるならん歟

紅衣を云なり

爾寶敝流衣、吾者不服、於君奉者、夜毛著金、」 歌の意は秋津葉のにほへる衣は黃葉なり其もみぢはちりうつろひやすかる物なれば吾はうつろふ心のなければきまじ君に奉らば夜だに着給なりさらば君はいよゝ他人に心うつろひ給はんと男のうつろひやすき心をあやぶめる歌か

問答。

旅尙、襟解物乎、　襟をひもと訓はゑりの紐なればなり
　義訓なりこは旅の衣にてあかひもをいふなり
事繁三、丸宿吾爲長此夜、」
四具禮寄、曉月夜、紐不解、戀君跡、　今本こひしきと
　訓事はひが事なりこひしきとては女の夫を戀おもふなりこは上の歌の答にて此はひもとかで丸寐すると夫のよめるをかけて云なれば夫のこふらんといふなり末の句君とをらましものをといへるが女の夫を戀る意を答るなりされば四の句は戀らんとよむべし
居益物、」
於黃葉、置白露之、色葉二毛、　今本いろはにもと訓
　り上にもみち葉といひて三句に色の葉にもとはよまじにほひにもと訓んとて色葉と書ならんとす
不出跡念者、　例のにといふなりもへるになり
事繁家口、」事は借字にて言なり
雨零者、瀧都山川、於石觸、　下に石爾布里と假字あり
　此によりてこゝもふりと訓べしふりはふれてを通し約ていふなればかへりてくはしきなり
君之擢、情者不持、」【此二首問答にあらず此間に落たる歌あるならん】

今本右歌の左に右一首云云注あれど後人のわざにていと愚なればとらず

譬喩歌。

祝部等之、【祝部は伊波比倍良なり伊を略波を半濁に唱へ比倍の約倍を布もていひ良を里に通して波布里と云なり】
齋經社之、黃葉毛、標繩越而、落去物乎、」神のいがきもこえぬべし又あきにはあへずなどとりなせるも皆是をとれるなるべし

旋頭歌。

蟋蟀之、吾床隔爾、鳴乍木名、起居管、君爾戀爾、宿不勝爾、」今本にいのねられぬにとあるはかけ合てもきこえず
皮爲酢寸、　冠辭
穗庭開不出、戀乎吾爲、玉蜻、　冠辭
直一目耳、視之人故爾、」意明なり

冬雜歌。

我袖爾、雹手走、卷隱、不消有、　今本の如くけすともあれやとては意もなさず意もとほらずよて改妹爲見、」

足曳之、　冠辭
山鴨高、　山は卽卷向にあり
卷向之、木志乃子松二、　卷向の穴師乃川の岸をいふ歟
三雪落來、」
卷向之、檜原毛未、雲居者、　居ぬになり
子松之末由、沫雪流、」今本四の句をするに五の句あわゆきぞふるはいまだし
足引、　冠辭
山道不知、白栁枝、　栁枝は樫木なり舟の器にてかしと訓りよて借しなり今本杜枝とあるはあやまりなり
枝母等乎乎爾、雪落者、」一本に枝毛和多多和とあり
右柿本朝臣人麻呂之歌集出也、　こゝに但一首或本云三方沙彌作とあるは何の歌を云ともなし後人の注歟
奈良山乃、峯尙霧合、宇倍志社、　尙は集中すらと訓るよしは（卷三）の別記にいふきらふの良は利阿の約霧合なり
前垣之下之、雪者不消家禮、」
殊落者、袖副沾而、可通、將落雪、　今本ふらんを雪のとあるはいまだし
空爾消二管、」

夜乎寒三、朝戸乎開、　今本開をあけてとあれどてにをはの字なければひらきとよめり
出見者、庭毛薄太良二、　今本薄大良にとあれど下に薄太禮とあり今は點の落たるなり
三雪落有、」一本も庭裳保杼呂爾雪曾零而有と有
暮去者、衣袖寒之、高松之、山木毎、雪曾零有、」古今歌集の「夕されば衣手さむしみよしの、よしの、山にみ雪ふるらし」は是をもてよめり
吾袖爾、零鶴雪毛、流去而、妹之手本、伊行觸糠、」第三の句を今本にながらへてとよみしは誤れり歌をとくべきやうなしよりて改む
沫雪者、今日者莫零、白妙之、　冠辭
袖纏將干、人毛不有惡、」今本末の句をあらなくにと訓るはよしなし惡はをの借字になりたるのみなり此歌妹がをらぬほどによめるならん
甚多毛、　はなはだとよめるは誤れりいとさはと訓故多を加へり
不零雪故、許多毛、　今本の言と有は傍の午の落たるにて許多なればこゝたなりこゝにこちたくの語はあるべからず

天三空者、隱相管、」
吾背子乎、且今且今、　今本にけふか〳〵と訓たれど出見者とあれば其日の事にて毎日の事ならず仍ていまかいまかと訓めり
出見者、沫雪零有、庭毛保杵呂爾、」
足引、　冠辭
山爾白者、我屋戸爾、昨日暮、零之雪疑意、」　疑意をかもと訓事上にいへり
誰苑之、梅花毳、　今本に毛とのみあるは毳を略せし物なり
久堅之、　冠辭
清月夜爾、幾許散來、」　意明なり
梅花、先開枝、　先開はまづさかん枝にてはやさきぬべきえたをなり
手折而者、裏常名付而、【拾穗につとは家つとなりつと名付て君によそへて此に梅に慰んとなり】
與副手六香聞、」　花を戀る意を諷なり其花の咲を見まほしむなりよそへはよせそへの意にてほめたるなり
誰苑之、梅爾可有家武、幾許毛、開有可毛、見我欲左右手爾、」　今本四五の句訓はいと誤れり四の句さけるかも見て五の句わがおもふまでにと訓り安く訓るゝに誤りけん見がほるはその咲てある薗をさへも見たきよしなり此歌右の歌の答歌なり
來可視、人毛不有爾、吾家有、梅早花、落十方吉、」
雪寒三、咲者不開、梅花、縱比來者、然而毛有金、」　此金は願意なり卷三四にも有を合見よ上にも「春去ばちらまくをしみさくら花をばしはさかで含みてもがも」
爲妹、末枝梅乎、手折登波、　とてのてを略なり
下枝之露爾、沾家類家聞、」　二の句は末枝の花をといはんに同じく花折とて露に沾しつるを云なり
八田乃野之、　此地磯城下郡なるは今は八田、添下郡なるは矢田と云、和名抄には添下郡に矢田郷有磯城の下にはなし是によれば添下にあるべしさて矢代氏をば八代ともかけば字にかゝはらず
淺茅色付、　やごとなき御說にはこゝを今本にいろづくと訓どいろづきぬといふべしこれほどの歌の一言にてことさらに聞ゆとのたまはせりよりて御說による
有乳山、峯之沫雪、寒零良之、」「み山には松の雪だに消なくに都は野邊の若菜摘けり」の類にて都より思ひやるなり【宗祇云矢田野有乳山は歌の名所なり高山にて

秋より雪の降所なり云云】
左夜深者、出來牟月乎、高山之、峯白雲、將隱鴨、」　意明なり

冬相聞。

零雪、虛空可消、雖戀、相依無、月經在、」　今本末の在は去を誤るかさて月をしへぬるなり
沫雪、千里零敷、　里は重の誤歟さらば千重にふりしくなり
戀爲來、食永我、見偲、」
右柿本朝臣人麻呂之歌集出
咲立照、　今本咲出照と有てさきでたると訓れど照はさはよみがたければ出は立の誤ならんとして咲たてると訓べし【押照の言と同じくかくあるをさきてると四言によまん】
梅之下枝、置露之、可消於妹、戀須者、」
甚毛夜、深勿行、道邊之、湯小竹之於爾、　五百をゆといふ例なり
霜降夜焉、」　今本に烏一本に鳥又一本焉今案に焉を正とす
小竹葉爾、薄太禮零覆、消名羽鴨、將忘云者、益所念、」

上は序なり雪の消を身の失に云かけたり
霰落、板玖風吹、　今本に板敢一本枝敢と見ゆいかにも訓べき言なし考るに敢は暇ならんかとすれどさてはいたまと訓ん外なし若四の句を地名とせば板間の字を誤るかおほくは敢は玖の誤にていたくならんとして敢字を改む猶全本をもてたゞすべしさらば旅などの事にもなく雪に近きあたりの野など思ひよする事有てよめるにもあるならん【此歌考もとより眞淵の考によれり此歌誤字多かるべし考るよしなしと眞淵もいへり】
寒夜也、旗野爾今夜、　こを地名とすれば紀(神武)に層富縣波哆丘岬有二新戸畔者一〇神名式に高市郡波多神社和名抄高市郡波多郷と有など合せ考れば地名とも思はれず旗は將の意歟
吾獨寐牟、」　前の如く訓てはたゞ旅のありさまなり又右の地名とすれば波多郷に有て妹がりゆかでよめるとするにぞある
吉名張乃、　上に出づ
野木爾零覆、白雪乃、　野の木の乃を略けりさればのぎと濁るべし軒にあらず零覆雪といふもておもへ前に有なみしばの野を云成べし

市白霜、將戀吾鴨、」

一眼見之、人爾戀良久、天霧之、　良は利阿の約志は及の略なり

零來雪之、可消所念、」

思出、時者爲便無、豐國之、木綿山雪之、　豐後國風土紀云、速見郡抽富鄉此鄉之中栲樹多生常取栲皮以造木綿因曰抽富鄉抽富峯在鄉西此峯頂有石室其深一十餘丈高八丈四尺廣三丈餘常有氷凝經夏不解凡抽富鄉近於此峯因以爲峯名、此歌大和なる人の此國へ行てよめるなるべし

可消所念、」

如夢、君乎相見而、天霧之、落來雪之、可消所念、」　此歌前の一眼見之云云の變か又似たるが有たる歟

吾背子之、言愛美、　言のよろしくうるはしくなりてかへらばなり

出去者、裳引將知、　うは裳ゆたかに裾引出行んに雪ふりてなぬらしそとなり【雪ふらばもすそ引跡つくからに人も玄らんに雪降そとなり拾穗】

雪勿零、」　さてかくしづまゆゑ人に玄られむをいとひよめる意もあり

梅花、其跡毛不所見、零雪之、市白兼名、間使遣者、」

一本に零雪爾間使遣者其將知名、梅の花はそれとも見えぬまで雪のふれゝど使をやらばいち玄ろく人には見られなんとなり

天霧相、　きらひは維は利阿の約にて言をつゞめたるのみ

零來雪之、消友、　ふりくる雪の如く我身はきえぬべきを君にあはんとてのみながらへあるといふなり

於君合常、流經度、」

窺良布、　うかゞひねらふ跡見とかゝるはいめたてゝ跡見といふに同じ意なりうかゞひねらふを省きつゞめたる言なり

跡見山雪之、灼然、戀者妹名、人將知可聞、」　二の句の跡見は大和國の地名なり

海小船、　冠辭

泊瀨乃山爾、落雪之、消長戀師、　消は借字眞氣長などと同じ辭なり

君之音曾爲流、」

和射美能、　四言なり今本能をのゝと訓しは誤なりこはわぎみの嶺とつゞけりわぎみは美濃國不破郡和蹔なり

四言をわすれたる訓なり

嶺往過而、零雪乃、厭毛無跡、白其兒爾、」　こは妹がもとより歸るさのかしこき山路にてかゝる雪に逢なばいかゞくるしからましをつゝがなく嶺も過行ぬなおもひそと妹に傳へいひやるなり

吾屋戸爾、開有梅乎、月夜好美、夕夕令見、君乎社待也、」

今本社を祚に誤る六帖に君をこそまてとあるに歌の意も然なればあらたむ此卷焉也等を助として不訓例上に多

足檜木乃、　冠辭

山下風波、雖不吹、君無夕者、豫寒毛、」　山下風は今本字のまゝに訓たれど前にもいふ如くやまのあらしとかあらしの風とか訓べし【山下風奥人按に山のあらしとは訓べけれどあらしの風とは訓がたし】

萬葉集卷七之考　終

萬葉集卷八之考序

○此卷を八の卷とする事は七の卷のはじめにくはしくいふ如くこも奈良人の一人の集なればなりこは今の七の卷なり

○標の亂たるをあらため雜歌とあるが中の羈旅問答などあるのみをあげて歌毎に詠天詠月などあるをすてし事卷七の始にいへるごとくはじめに雜歌とあればもとよりくさ〴くの事有べければ歌ごとにわけてはし詞の如くせしは後の人の出添しこと既にいふ如なればすてつ

萬葉集卷八之考【流布本卷七】

雜歌。

天海丹、雲之波立、月船、星之林丹、榜隱所見、」 歌の意あきらかなり

右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出 前の卷にもいふ如く歌の書體人麻呂集の如くなれば集の時書るなるべしとおもはる

常者曾、不念物乎、此月之、過匿卷、惜夕香裳、」 今本初句はつねはさもとあれどさよむべき字ならず訓を誤れるなり【者は昔砂也志世の約左となれば左の假字にかれり】

丈夫之、 今本丈を大に誤

弓上振起、 今本ふりたてとあるは誤なり弓は伏おこすとこそいへ集中の例によりてあらたむさて是までは序なり

借高之、 大和國添上郡に在(卷十五)獵高高圓山ともよめり

野邊副清、 此さへは輕く見るべし

照月夜可聞、」

山末爾、 (卷十五)に同歌と見ゆるに山葉とかければこも左かよむべきなり

不知與歷月乎、將出香登、待乍居爾、與曾降家類、」 (卷十五)又此下の次の枚にも似たる歌有末の句今本にふけにけるとあり又次の歌にふけにつゝとあればさも訓べけれど古訓によりてあらたむ

明日之夕、將照月夜者、片因爾、今夜爾因而、夜長有、」 妹にあへるか何ぞ此夜のながゝれとねがへる事のあるならんよりて片よりによれといふ

玉垂之、 冠辭

小簾之間通、獨居而、見驗無、 獨見てはなり

暮月夜鴨、」 此歌は女の歌なるべしさてをすの間通しよりゆふ月とつゞく隔句なり

春日山、押而照有、 今本てらせるとあれどさらば所照と書べしこは今妹が庭にさやけき此月は前に春日の山にてりたるといふなればてりたるとよむべし

此月者、妹之庭母、清有家里、」 妹が家に來て見たるなりさやけかりの加は久阿の約にてさやけくありなり

海原之、道遠鴨、月讀、明 少、夜者更下乍、」 月の光のうすくなり行は夜も明方にくだちくだつならんとなりこは船の上又は西の國のうみ邊にてよめるならん末の句今本にはふけにつゝとあるもわろからねど前にもいふ如く古訓なれば義訓によりて改

百師木之、 冠辭

大宮人之、退出而、 大宮所よりまかりいでゝなり今本たちいでゝと訓るは誤りなり

遊今夜之、月清左、」 今宵といふにはあらず此夜といはんが如し

夜干玉之、 冠辭

夜渡月乎、將留爾、西山邊爾、塞毛有糠毛、」 塞は關もあらぬかなり

此月之、 今照月をいふなり

此間來者、旦今跡香毛、妹之出立、待乍將有、」 逢し頃の月日に成て又其夜月てりたりけんをさやけゝれば妹が門部に出立待らんとなり此月は歳月の月なりと見る說はわづらはし

眞十鏡、 冠辭

可照月乎、白妙乃、 冠辭

雲香隱流、天津霧鴨、」 月の出ざるをよめるなり

久方乃、 冠辭

天照月者、神代爾加、【神代爾加の爾はながらにの約にて神ながらのながらと同くま、てふ言にて神代のまに〻歟と云意なり】

出反等六、年者經去乍、」　こは年經てかはらぬをいへるならん神代より幾度もかへりては出かはらぬとなり

烏玉之、　冠辭

夜渡月乎、何怜、　あはれむとてなり

吾居袖爾、露曾置爾雞類、」　この下の句に古ふりの面白き味あり夜の露も置からに月にめで、ふかくあはれを思ふ心をるし

水底之、玉障清、可見裳、　玉障は借字副の意夜の深行のちまでもきよく見せつべくの意なり

照月夜鴨、夜之深去者、」

霜雲入、　雲入は借字のみ降霜にて空もくもれるかとなり

爲登爾可將有、　するとにかあらんなり

久堅之、　冠辭

夜度月乃、不見念者、」

山末爾、不知夜經月乎、何時母、吾待將座、夜者深去乍、」

上の枚に同歌少し違へる有

妹之當、吾袖將振、木間從、出來月爾、雲莫棚引、」　此照月に我袖ふらんに妹が見んあたりに雲なたな引ぞと云なり

靭懸流、　一本に鞆かくるも有

伴雄廣伎、　ともの雄廣きとは大伴の氏の人のおほきを云

大伴爾、　大伴氏の居所にといふなるか又宮門を守る氏なれば大伴の陣にといふか衞門府などにてよめるにもあらん此伴を靭負伴と云

國將榮常、月者照良思、」　いたく月のてりまさるにめでて此氏人らが賀てよめるなり

痛足河、　大和國城上郡に在

河浪立奴、巻目之、山槻我高仁、雲立立思、」　雲井たなびくとよめるあれど居の字なき方ぞよしとせん一本に居の字なし活本に有の字なし雲ぞたつらしぞよき一本活本によりて居有の二字をすてつ

足引之、　冠辭

山河之瀨之、響苗爾、　なる並になり

弓月高、雲立渡、」　風の吹來て浪たち河瀨のなる並に弓月嶽に雲のたつとなり

右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出　前にいふが如くなればすてつ

大海爾、島毛不在爾、海原、絶塔浪爾、立有白雲、」　大海に島もなきに雲のたてるはと略てよめるなり海原には今も有すがたなり

此歌左に右一首伊勢從駕作とありかくあるほどにて名をあるさぬは如何後人のさがしらならん

吾妹子之、赤裳裾之、將染埼、　今本そめひぢんと訓しは字になづみて意を忘れたるなり豆知約知にてひぢなり又其ぢは多志約なる事既に云

今日之雨者莫零、吾共所沾者、」　今本われとぬれぬなど訓るは助字もたがひ假字の例もたがへればあらたむ【凡字音を假字に用は音の頭の假字を用ひ訓は下の字を用るは例なりたとへば信は信の假字とし共は毛の假字とするが如し】

可融、　今本とほるべきと訓るは助辭たがへりよりて改む

雨者莫零、吾妹子之、形見之服、吾下爾著有、」

動神之、　冠辭

音耳聞、　今本おとにのみきくと訓たれど(巻十五)に鳴神乃音耳聞師ともよめる例あればこれによりておとのみきゝしと訓つ

巻向之、檜原山乎、今日見鶴鴨、」　巻牟久乃日代宮はいにしへ景行天皇のおはしましければ此檜原の山も名高きをけふ初て見つるとよろこぶなり

三毛侶之、其山奈美爾、　山ならびになり

兒等手乎、　冠辭

巻向山者、繼之宜霜、」　三毛呂の山よりつゞく此巻向山もよろしとなり兒等手は巻向山といはん冠辭のみつぎに意有にあらず

我衣、色服染、味酒、　冠辭四言

三室山、　三輪の山なり次の歌卽三輪なり

黄葉爲在、」　第二の句今本にいろ着そめたりとあるはわらふべし末の句もみぢしたるにとあればいろづきそめつと訓べし【奥人按に染はそみつと訓べしみは萬利の約にてそまりつとなればなり】

右三首柿本朝臣人麻呂之歌集出　前にいへるが如し

天諸就、　冠辭今本天を三に誤草の手の天を三と見たる誤なる事冠辭考に委し【天諸就三輪山とつゞけし事冠辭考に見えず詞草小苑などにもなし按にこも天降付天

之香山天諸著鹿背山などの如く崇き山故にあもりつく
ちふ冠辭を置しにや奥人】
三輪山見者、隱口乃、　冠辭
始瀨之檜原、所念鴨、」　歌の意は三毛呂之其山奈美爾云
云の歌に同じつゞけなり
昔者之、事波不知乎、我見而毛、久成奴、天之香具山、」
こはわが世に見しもひさしきとありのまゝによめるま
ことに古歌なり
吾勢子乎、乞許世山登、　此下に越乞所聞と落句にあれ
ば乞はこちと訓べし
人者雖云、君毛不來益、山之名爾有之、」　名奈良之の爾
は爾阿約の意もて爾有と書るなり巨勢山は神名式に葛
上郡巨勢山口神社とあるをよめるなるべし
木道爾社、妹山在云、三櫛上、　今本櫛上とありてかゞ
らきの上訓り一本によりて三をくはへて訓も一本によ
る三は眞の意なり猶考るに三は玉の誤の消しか委は冠
辭考にいへり
二上山母、　式に葛下郡葛木二上神社二座とあり
妹許曾有來、」（卷二）の挽歌に「うつそみの人なる我や
あすよりは二上山を弟世とわが見む」とよめり大津皇
子移葬時の歌なり此類ならんか
片岡之、　式葛下郡片岡坐社とあり
此向峯、　今本こなたのみねと訓るはあやまりなり
椎蒔者、今年夏之、陰爾將比疑、」　なみんかはならばん
かなり
卷向之、病足之川由、　病は痛の誤歟
往水之、　如を籠
絶事無、又反將見、」
黑玉之、　冠辭
夜去來者、卷向之　川音高之母、荒足鴨疾、」　川音の高
きは嵐のはげしきかとなり
右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出　下前に准て玄れ
大王之、　冠辭
御笠山之、　添上郡總名曰春日山三笠山其下にあり
帶爾爲流、細谷川之、音乃清也、」　古今歌集に「まがね
ふくきびの中山帶にせるほそ谷川の音のさやけさ」此
歌は承和の御べのきびの國の歌なり御べは大嘗會にて
おほなべの事なり右の歌は此歌をとりおほしてよめる
なり【さやけさのさは玄なの約奥人】
今敷者、　既いふ如く今はなり

見日尾跡念之、三芳野之、天川余杼乎、今日見鶴鴨、」
馬並而、三芳野河乎、欲見、打越來而曾、瀧爾遊鶴、」
思ふどち馬並川渡り越遊べる心やりをよめるならん
音聞、目者未見、吉野河、六田之與杼乎、　吉野川に在
今日見鶴鴨、」
河豆鳴、清川原乎、今日見而者、　今日の前に見て玄の
ぶとなり下に見乍將思とあるも目の前に玄たふなり
何時可越來而、　再びいつの時か來てなり
見乍偲食、」　けふのおもしろさに又けふの如見つゝめで
んとなり
泊瀨河、　城上郡
白木綿花爾、墮多藝都、瀨清跡、　今本さやけくとゝあ
れどてにをはだがへり
見爾來之吾乎、」　此乎は助辭のみ意なし集中例多し【吾
乎の乎は與に通し見てよからむおく人】
泊瀨川、流　水尾之、　尾は借字水脈なり【水尾のをは
伊呂約水色なり凡水は其色もて淺深も玄らるれば水を
と云奥人】
湍乎早、井提越浪之、　提は堤の誤ならん字音にはあら
ず刀米約泥なり堰止の意なり水をせくをいふ式に堰留
神社といふもありくはしくは（卷四）朝東風爾井堤越浪
之云云の歌にあり
音之清也、」　今本久とあるは前にもありし如く也なるを
草の手より誤りつらん
佐檜乃熊、　今本熊を能に誤るなり
檜隈川之、　檜隈は高市郡なり其地の川なればかさねい
ふ佐の發語を加へたるはうるはしく重ねいはんための
古意なり
瀨乎早、君之手取者、　川をわたる時手を取なり夫によ
りて人の云たてんと云
將緣言毛、」　今本よらんてふかもと訓たれど意とほらす
あらためつ
湯種蒔、　湯は借字齋種の意末の卷にも同語あり水口祭
などするときにいふなり
荒木之小田矣、求跡、　あさらんは小田にある食物を
もとめんとてなりあさりは足獵の略言なり鳥の食求る
に足にてさぐりかりてとればなり志加の約左なればつ
づめいふ語なり轉じては人の物たづぬるをもいふ下に
鳥廻をあさりとよませたるは海人のすなどりなどする
より歟義訓なり求食をあさりといふと同じ

足結出所沾、　あゆひをしていでゝぬれしといふなり
此水之湍爾、」　式に宇治郡荒木神社是をいふなり川とは
其ほとりにある小川などをいふならん
古　毛、　如此聞乍哉、　偲兼、　いにしへの人も吾きゝ、去
ぬべるが如くきゝなし去ぬびけんやといふなり
此古河之、　山邊郡ふるの川又泊瀬川をふる川のべとは
いふなり
清瀬之音矣、」
波禰蕤、　はねかづらは放蕤にて奈知約仁なるを禰に
通しいふくはしくは別記にいふ
今爲妹乎、浦若三、　浦は借字裏にて心なり若は稚なり
みづ〳〵しきなり
去來牽去川之、　式に添上郡牽川坐大神御子神社三坐と
見ゆる是なり
音之清左、」　此歌は四の句の始まではゐといはん序なり
ゐは牽るなり意は川音のさやけきとほむるのみかゝる
ぞまことに古のすがたなる
此小川、　此小川は大利の吉野などのうちにあるならん
白氣結、瀧至、八信井上爾、　走井大和にもあるか伊勢
近江にも有井は前に云如く堰なり流ほどばしる程の井
は皆走井といはんか
事上不爲友、」　日神索二取素戔嗚尊十握劒一打二折三段一濯二
於天眞名井一齩然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧とありこをふ
まへて此歌はよめるならん
吾紐乎、　妹手以而、　こは序にいへるのみ
結八川、　吉野にあり
又還見、萬代左右荷、」
妹之紐、結八川內乎、古之、淑人見等、　（卷十）古之賢人
乃遊兼（卷一）に淑人良跡吉見而と有類なり今本に並人
とありてみなひと見きと訓るは歌の意とほらずよりて
淑の誤とす
此乎誰知、」　既に引卷一の歌をもとにて其ごとくよくよ
しと見る人はたれかあらじ見る人ぞ見んとなり
烏玉之、　冠辭
吾黑髮爾、落名積、　積は借字にてふりなづめるなり
天之露霜、　露霜はひとつ物なればつらねいふとは契冲
が說よし
取者消乍、」　こは露霜のふかく降おける夜道行に髮に露
霜のかゝればふりはらひ〳〵すれども又置まゝに髮を
ふりはらふになづみ堪で手にとり見ればきゆるとなら

ん
島廻爲等、　既に前の枚にいふ如く義訓なり爲等はする
とての略なり
礒爾見之花、風吹而、波者雖緣、不取不止、」　磯邊に見
し花にめでゝをさなくよめるならん
古爾、有險人母、如吾等架、　如吾架にてよきを等を添
るたぐひ集中に例し多し
彌和乃檜原爾、　今本是をひのくにと訓たれど例は集中
にも多此次の歌にもひばらと有
挿頭折兼、」　今本折を切と書たれど假字はをりけんとす
依て字を誤る事去るければ改かざし折けんは此檜の枝
を折しならんとなり
往川之、　冠辭
過去人之、　右の古への人を云問答歌なり
手不折者、裏觸立、　うらぶれの意既にいへり
三和之檜原者、」
右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出
三芳野之、青根我峯之、　吉野郡なり
蘿席、誰將織、經緯無二、」　むしろといふよりおりけん
といひそれよりして經緯なしにといふなり
妹所等、　妹がもとへとてなり
我通路、細竹爲酢寸、　去のはゝ去のぶをいふなりやがて
去なひすゝきなり
我通、廉、細竹原、」　卽すゝき原なり
山際爾、渡秋沙乃、往將居、其河瀨爾、浪立勿湯目、」
秋沙は今もあいさといふ小鴨なりかくめづるばかりの
鳥ならずよそへいふならんさて右の歌は相聞の譬喩に
てこゝに入べきにあらずよりて小書す
佐保河之、　添上の郡なり
清河原爾、鳴知鳥、河津跡二、　此二をふたつと訓は歌
詞にあらざればともにと訓んかといふ說あれどさらば
二二とか又は二爾ともかくべしすべて此書體皆てにを
はの假字あるに二とのみありてともにともよむべから
ず
忘金津毛、」
佐保河爾、小驟千鳥、夜三更而、　今本さよふけてと訓
たれど夜くだちとよむべし例あり
爾音聞者、宿不難爾、」　不勝宿なり奈久の約奴なり
清湍爾、　神南備川を云
千鳥妻喚、山際爾、霞立良武、　甘南備乃里、」

年月毛、未經爾、明日香河、湍瀨由渡之、石走無、」いはばしは既にもいふ如今飛石といふがごときにて淺ら水わたるたよりなり其飛石どものいつしかなくなりしと世の移りかはるをよめり

隕田寸津、走井水之、　前にもいふ如大和にも有か近江伊勢にもあり

清有者、度者吾者、去不勝可聞、」ゆきがたからんなり

安志妣成、　冠辭

榮之君之、穿之井之、石井之水者、雖飲不飽鴨、」しみづをめでゝよめるのみならん

琴取者、嘆先立、蓋毛、　けだしもなりくは添ていふのみ

琴之下樋爾、嬬哉匿有、」琴の裏の穴を下樋といふ右の歌はみまかれる妻の手馴し琴を取てひく物からなげき先だつといふことばも下樋につまやこもれるてふことばもあるならん且雜歌といへど前後水の事なり此歌ここに在べきならず挽歌の亂れてこゝに入たる物として小書するなり

芳野作。

神左振、磐根已凝敷、　岩がねのこり〳〵しきを云ゑきはゑげき意なり

三芳野之、水分山乎、　式に水分坐皇神等、水配と云婆と麻は清濁通ふなり依て美久萬里と云なり田に引水の源に坐神なればなり記に天之水分神（訓分云二久萬里二）如此なれば今本にみづわけ山と訓めるは誤なるをしれ

見者悲毛、」めづるきはみのかなしみなり

皆人之、戀三吉野、今日見者、諾母戀來、山川清見、」淑人のよしとよく見てゝふ御製の如くみな人の戀るもうべなり此吉野の山川を見ればなり

夢乃和太、　吉野のうちにあるならん（卷十四）吾行者久者不有夢乃和太

事西在來、　事は言なり

寤毛、見而來物乎、念四念者、」見まほしと思ひしかひ有てうつゝに見て來し物を思へば夢の和田てふは言のみにざりけりとなり

皇祖神之、　式などにも皇祖神と有はかみろみと訓て神代の皇神達を申すを此集（卷十四）に赤人伊豫の湯の歌其下の挽歌にも皇祖神とあるはたゞすめろぎとて今上を申す事とせりおもふに此集の祖の字にはことわり無なり

神宮人、　禁中の宮人をさし云

冬薯蕷葛、　冠辭葛をつらと訓は（卷十）菟原處女長歌に冬薯蕷都良とあるにてよめり今本さねかづらと訓たれど五味子と書てさねかづらとよみこせたれば冬薯蕷とかくべきよしもなし彌常及とかゝりたるはかづらのいもかづらの如きをもて冬もづらといふにて葉有物とは覺えずこは忍冬にて冬も葛のたえずあれば彌常及とかかるされば我もさきくありて幾度もこゝを見むとなりこはやごとなき御說をもていへりくはしくは別記にいふなり【忍冬は冬も葉有ものなるに葉有ものとは覺えずとは誤なりこはいもかづらの葉はおちぬれどかつらは冬も有】

彌常敷爾、吾反將見、」吉野をかへり見むとなり

能野川、石迹柏等、　かく書るは借字のみこは石門の名にて石門壓石を約いふか加多伊波の多伊の約知なるを志に通して伊波刀我志波といふなり次の句常磐なればなり

時薗成、　常磐を去らせたる借字なり常磐常葉別なりよりて時を借て書りとこいはの古伊約伎なり

吾者通、　萬世左右二、」

山背作。

氏河薗、與杼湍無之、　よどみも瀨もなければにや網代の多しといふなり

阿自呂人、　あじろ守なり

舟召音、越乞所聞、」あちこちの網代守の船呼聲の聞ゆとなり

氏河爾、生菅藻乎、　菅藻とてあるか清藻か食物ならでも都人のめづらしむ故にとりし歟古へありて今はたえしか宇治にきかず今ありても花がつみなどを人の思ひわすれたる如くあれども知らぬか里人にも猶問べし

河早、不取來爾家里、裏爲益緒、」

氏人之、譬乃足白、　人麻呂の歌に武士の八十氏川の網代木にとよみて八十氏の人の名高きが多きを八十といひかけ氏を宇治にいひかけて宇治川の網代を作るがやがて譬の如きいひなしに聞ゆればこゝにたとへの網代といひて其網代を吾身にとりなし木つみの網代木によるが如く我を慕ひて人のよらましといふなりされどもものゝふの八十氏人とは冠辭考に千早人宇治又武士の

八十氏の條にくはしくいへるは氏の事にあらで二つの冠辭皆積威てふ言にかゝれりとす爰には八十氏と氏の事になしてとかではいかにも解れず集中の歌に武士の八十とかゝりて其氏人の多をほめたる歌數あり猶くは しく別記にいふいづれにも此歌解得がたき歌なり後の人猶考得たる事あるをまつのみ○木豆美はこづもりなり毛利約美なればこづみといふなり

吾在者、今齒世良增、　今本世を五とす一本生とあり生志長鳥、　冠辭

五世などの草の手より誤りしと見ゆれば世に改むよといはでは聞えず

居名野乎來者、　居名は猪名とも書て攝津國河邊郡に在

木積不成友、」（卷四）木積成といひ其下に木蓑と書るにいふが如しこはあじろぎにかゝりよれるなればそを譬へ言ならん成を今本來とするは成の誤ならん【此歌有間山、　有間郡なり

夕霧立、宿者無爲、」　旅行まに〳〵夕霧ふかく立て行方契沖は述懷の歌にてこゝに入べき歌にあらずといへり

もわかずせんすべなしといへり一本猪名乃浦廻乎榜來こを述懷の歌とせば氏人の譬のあしろわれなれば今は

者とあるは宜しからず

武庫河水尾急嘉、　水尾を今本みづをと訓て尾を假字によらまじとすみならすともとよまむ歟心はあじろのご

よみたれど尾はてにをはの假字に用ず且此歌てにをはときいやしき我なればこすみならずとも今はより來ら

の假字はそへてよませたれば水尾をと訓べきを去る次しといふ歟心むづかし】

の歌に水尾早見鶴とよみたるをもてもかく訓べきを思氏河乎、船令渡呼跡、雖喚、不所聞有之、檝音毛不爲、」

へ

早川の瀬の水音に船よぶ聲もきこえずかぢの音も聞え赤駒、足何久激、沾祁流鴨、」　武庫川は攝津國武庫郡ぬをいらへなき戀に譬てよめるなり【譬喩歌は末に在こは戀の譬歌にはあらじ只所につけてよめる有のまゝの歌なるべし奥人】

千早人、（冠辭）ちはやのははわのごとくとなふ

氏川浪乎、清可毛、　きよくもありてかといふなり

旅去人之立難爲、」　たちさりがたくするなり

攝津作。

り足何久は足搔を畧いふなり

命、　四言

幸久吉、石流、垂水　水乎、結飲都、」　たるみの水をのめば命ながしと云つたへのありしならん

作夜深而、　作はさの假字ならん又佐のあやまり歟

穿江水手鳴、　紀（仁德）十一年十月堀二宮北之郊原一引二南水一以入二西海一因以號其處曰二堀江一

松浦船、梶音高之、水尾早見鴨、」　松浦船は伊豆舟などいふに同じく松浦の船なり水脉のはやきに梶の音の高なり

悔毛、滿奴流鹽鹿、墨江之、岸乃浦回從、行益物乎、」

磯邊つたひてゆかんを潮滿て行得ずとなり

爲妹　貝乎拾等、陳奴乃海爾、　陳奴は和泉國知泥をいふ歟

所沾之袖者、雖凉常不干、」　下に雖干跡不乾これと同じ

常は添しのみ【凉輕寒也雖凉常不干撮要抄にヒユレトホサスト訓り】

目頰敷、人乎吾家爾、　是まではすみのえといはん序のみにて冠辭ともいはめ

住吉之、岸乃黃土、將見因毛欲得、」　きしのはにぶに行にほひて見んよしをこひおもふなり

暇有者、拾爾將往、住吉之、岸因云、戀忘貝、」　古今集に戀忘草と此歌をかへたり

馬雙而、今日吾見鶴、住吉之、岸之黃土、於萬世見、」

ながく相見んとことほぎてよめり

住吉爾、往云道爾、昨日見之、戀忘貝、事二四有家里、」

事は借字言なりきのふ見し忘貝はたゞ言のみにて戀わする、にはたのめがたしとなり

墨吉之、岸爾家欲得、奥爾邊爾、緣白浪、見乍將思、」

上の河豆鳴清河原云云の末の句をまのあたり見るを見つゝ去ぬばんとよめり此歌も岸に家あらばなり

大伴之、　冠辭

三津之濱邊乎、打曝、因來浪之、逝方不知毛、」　此集の次手をはじめにいへるにも此卷には藤原のふりにし思とよめる歌もあればならの宮の歌を集しならんとおもへば此歌は人麻呂ぬしの武士の八十氏河てふ歌をおもひてよめるならんすがたにるものにもあらず

梶之音曾、髣髴爲鳴、海未通女、奥藻苅爾、舟出爲等思母、」　一本暮去者梶之音爲奈利と有

住吉之、名兒之濱邊爾、馬並而、　今本馬立而とあり後

世平言に馬をたつるなど云と此比にきこえず一本に馬並とあるからは誤玄るしよりて字も訓も改

玉拾之久、　久は添たるのみ上の今しくと云に同じ【之久之は玄たりの約久は計留の約なりよりて玉ひろひ玄たりけるといふならむ又之久の約須なり此須奥人云は之多留の約玉ひろひ玄たるとも云にもあらむ】

常不所忘、」

雨者零、借廬者作、何暇爾、名兒之鹽干爾、　今本吾兒とありて假字はなごと有此事くはしく論なかりしにや次下四首の歌に阿胡の海とあるもて此歌もあごと訓を改るよしのみ有諸成今案るに此並の歌廿一首の初の歌の右に攝津作とあり又其前山背作とあるも他國他所の歌をまじへずはじめにそを心得て部類はわけて集しならんされば此歌より四首の歌も他國の歌なるべからす殊に此歌の上の歌に住吉之名兒之濱とありて此歌次も奈呉とあり又一首をへだて、何胡とありこを上の歌どもをもておもふに此四首は皆名兒なるべし此歌は名を吾に誤り次は何を阿に誤るにてみな草の手より見誤りしならん殊に歌の體も同じく鹽干の玉ひろはんなどよめるなみなればいよ、津の國の同じ地名の歌なるべしもとも訓を假字に用ゐずといへども地名には言きらひなきにや既に前の歌に名兒と書又志摩國阿胡にも吾兒とも書けるをおもへば其外地名には訓を假字に用ゐし事集中に例あり殊に今本の訓によりても字を改むべき事にこそ

玉者將拾、」

奈呉乃海之、朝開之奈凝、　朝開は既いふ如く朝かげなり奈凝は餘波にて潮干のこりたるを云

今日毛鳴、磯之浦回爾、亂而將有、」　歌の意は潮もよく干朝げの餘波のさまよろしければけふは亂居て貝拾ひ玉藻苅て遊をらんとなり

住吉之、遠里小野之、　遠里小野は今をりをといふ地有これならん其野の萩をよめるなり【遠里小野住江郡に在】

眞榛以、須禮流衣乃、盛過去、」　日を經たる事をよめるなり

時風吹麻久不知、　時つかぜは汐時の風なり不知を今本に玄らずと字のまゝに訓るは誤なり

何胡乃海之、　今本に阿胡とありてあごと訓るは誤なるよし上にいへる如し

朝明之鹽爾、　朝明とあるも朝がけなり字によりて泥むべからずよしもてかけるのみ

玉藻苅奈、」　こはあさなぎに玉藻かりてあれなんなり加利豆阿禮奈の豆阿の約多なり又其多と禮を約れば豆となればかりてなどはいふなり

住吉之、奥津白浪、風吹者、來依留濱乎、見者淨霜、」

歌の意は風吹は沖つ波の住吉の濱にきよするを見るはきよしとなり見者の者は例の所々通ふはなり今本に見ればと訓るは玄からずこをさやけきと訓てあれどきよするきよしとうけたればよみこせのかたに玄たかふべし殊に見るとあるからはきよしといふべし

住吉之、岸之松根打曝、緣來浪之、音之清霜、」　今本霜を羅とす一本によりてあらためつ末の句きよしもとよむもあれどうちさらしといひおとのとさへいへばよみこせのまゝさやけさと訓ぞ意かなへり

難波方、　方は借字涵なり

鹽干丹立而、見渡者、淡路島爾、多豆渡所見、」

羈旅作

離家、　いへ遠ざかるなりさを濁るべしこれをもて天ざかるひなざかるを玄るべし

旅西在者、秋風、寒暮丹、雁喧渡、」

圓方之、　伊勢の國なり(卷二)に的方

湊之渚鳥、浪立也、　今本也を巴とす誤玄るければ一本によりて也に改むさて此やは浪たつゆゑにやなり

妻喚立而、邊近著毛、」　こは水門の洲崎などに群居鳥のさす汐に浪たちくればともよびたて、磯邊によるを云

年魚市方、　尾張國愛知郡の海の潟を云

鹽干家良思、知多乃浦爾、　同國知多郡の浦也

朝撈舟毛、奥爾依所見、」

鹽干者、共滷爾出、　こは備後國鞆浦の潟歟鞆の浦は卷十四挽歌に二首此卷にも二首あり

鳴鶴之、音遠放、磯回爲等霜、」　あさりのことはすでにいへり

暮名寸爾、求食爲鶴、鹽滿者、奥浪高三、己妻喚、」　夕汐に浪の高くもあればあさりするすべをなみつまよびたち行たづをよめるなり

古爾、有監人之、　卷十四高市連黒人の眞野の榛原をよめる歌同妻の和歌も有其歌も津の國なりこをおもひていにしへにと云る藤原の朝の人なり

覓乍、衣丹摺拳、　介の字落しか今本の牟とのみありて假字はけんと有諸成案るに牟は拳の草の手より誤れる歟又書の消しか字のちかゝれば志ばらく拳にあらたむ

眞野之榛原、」

朝入爲等、磯廻吾見之、莫告藻乎、誰島之、白水郎可將苅、」　あさりは前いふ如く足狩して求食なり名のりそもとより食物なればかくいへり其見たるをばいづれの島のあま人か苅ならんとよめるのみ

今日毛可母、奥津玉藻者、白浪之、八重折之於丹、　かの沖に打波の折れ立〳〵をかくいふなり

亂而將有、」

近江之海、湖者八十、　今本八千と有は誤なり一本によりてあらたむ

何爾加、君之舟泊、草結兼、」　旅には道のたづきに草結し草枕もむすぶなれば八十のいづれの湊に泊りていづちに草結して行けんとなり

佐左浪乃、　近江國のうちの大名なり其名の地々にはみな冠らせつるなり

連庫山爾、雲居者、雨曾零知香、　そこにいひならはせるこことわざをきゝえてよめるならん

反來吾背、」

大御舟、竟而佐守布、　はてゝさもらふは其磯に舟泊してあるを云

高島之、　遠江の高島なり

三尾勝野之、　同所の地名なり

奈伎左思所念、」　歌の意はいにしへ行幸の大御舟などの此磯にはてたりし事のありしをおもひて今猶それをよめるなり

何處可、舟乘爲家牟、高島之、　右に同し

香取乃浦從、　同地

己藝出來船、」

斐太人之、　飛彈內匠をいふ國をいふにあらず古へは飛彈一國みな大工のみなりよりて飛彈人といへは大工の事なり

眞木流云、爾布之河、　大和なり丹生の意よりてにふのふはうのごとくとなふなり

事者雖通、船曾不通、」　事は言なりこは此川の瀨の早きをよめり言通ふばかりの狹き川なれど舟はかよひがたきを云

霰零、　冠辭

鹿島之崎乎、　常陸の鹿島なり

浪高、過而夜將行、　見ずてや過ゆかんなり

戀敷物乎、」　崎をめでおもふゆゑにいふならん

足柄乃、筥根飛超、行鶴乃、乏見者、日本之所念、」　日本は大和をさしていふ歌の意は我は遠くも來ぬる哉とおもへば都の方へ鶴が飛行がともしみうらやまるゝとなり

夏麻引、　冠辭

海上滷乃、　上總國海上郡

奥津洲爾、鳥者賀竹跡、　すだくはすゝみさけぶなり

君者音文不爲、」　遠き沖洲には群鳥のすだく聲は聞ゆれど故郷人のおとづれもせぬとわぶるめり

若狹在、三方之海之、　三方郡なりみるめの歌ばかり無なり

濱清美、伊往變良比、　良比約利にてゆきかへりなり伊は發語

見跡不飽可聞、」

印南野者、　播磨の印南郡

往過奴良之、天傳、　冠辭

日笠浦、　同じ國にて赤石檜笠岡と記(推古)に見ゆ

波立見、」　一本思賀麻江者(播磨國飾磨郡に在)許藝須疑奴良之

家爾之兵、吾者將戀名、印南野乃、淺茅之上爾、照之月夜乎、」　おのが家にかへりたらば此野に照し月のさまわすられず戀んとなり

荒磯超、　あらいその良以約利なりよりてありそと云は古へなり今あらいそこすと訓るはいにしへをわすれたり

浪乎恐見、淡路島、不見哉將過、幾許近乎、」　播磨路より西の國へ船路行に浪のあらければかしこみて見まほしき所も見ずて行が惜となり

朝霞、不止輕引、　常にたな引なり

龍田山、　難波の海に出ては此山たゞに今道四里ばかりを隔るのみまのあたり見ゆといへり

船出將爲日者、吾將戀香聞、」　舟出したらん日には此龍田山こひ玄のばれんとなり西の國へ旅行にある前によめるならん

海人小船、帆毛張流登、　ほかもの加は疑の加なり毛は助字毛は借字なり

見左右荷、鞆之浦回二、浪立有所見、」既にもいふ如く
　此歌次の歌ともに備後の鞆の浦なり
好去而、　こはよくゆきてとよむべし今本の訓の如くよ
　しゆきてにては歌の意とほらず
亦還見六、丈夫乃　今本丈を大に誤る
手二卷持在、鞆之浦回乎、」
鳥自物、海二浮居而、奥津浪、驂乎聞者、數悲共、」
　此歌の終の句の共は悲哭の字を義訓せる哭の誤歟又喪
　の誤歟といふ説もあれど考るに上の雜歌の二十三首め
　の歌吾妹子之云云吾共所沾者とあるに同じ訓を假字に
　用る例そこに云歌の意は鳥の如く海に居て悲となり
朝菜寸二、眞梶搜出而、見乍來之、三津乃松原、　攝津
　國西生郡に在
浪越似所見、」あしたに船出して海中に至りかへりみし
　てよめるならん
朝入爲流、海未通女等之、袖通、沾西衣、雖干跡不乾、」
　海人のしわざに袖ぬらすを旅の歎によそへしならん
網引爲、海子哉見、飽浦、　今本にあまとや見らんと訓
　たれどらんと訓べき字なし又飽をあきのうらと訓しも
　よしなしこは紀伊國の今和歌浦といふを古へ明光浦と
いひしよし(卷四)に他等濱之忘具てふ歌の考にいふが
　ごとくこもあかの訓にかりしならん
清荒磯、見來吾、」
　右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出
山越而、遠津之濱之、　(卷四)に遠津大浦てふ歌にいへ
　る如く紀の國に在り此次二首は攝津の地を紀の海より
　よめる歌次には紀の國の地名なり
石管自、迄吾來、含而有待、」吾かへりくるを石つゝじ
　に契れるなり古郷人はいふもさらなり浦山越て遠き船
　路に旅行情さこそあらめ
大海爾、荒莫吹、四長鳥、　冠辭
居名之湖爾、　既出
舟泊左右手、」
舟靈、　舟泊なり
可志振立而、　戕柯は和名抄に所以繫舟也とあり今の舟
　人もするわざなり
廬利爲、　舟のうちにて苫などかりにおほひてあるをい
　ほりといへるならん
名子江乃濱邊、　津國の名兒の浦を云か又紀國にかくい
　ふ地の有歟

過不勝見、」こは海にめでゝすぎかぬるをいふ
妹門、　冠辭
出入乃河之、　山城の國乙訓郡入野の川をいふか又乃は
　辭にて入野にはあらぬか妹が門出入といひかけしは妹
　か門入いづみ川てふ表裏なり
瀨速見、吾馬爪衝、家思良下、」諺のあるによりてかく
　よめるならん
白栲爾、　白栲ににほふとつゞけし事此一首の外になし
　にほふはくれなゐなどにこそいへ言を誤るか字を誤る
　歟又冠辭に云如く白栲も穗にあらはれたる物なればに
　ほふまつちといひかけたゞちに山をほむるか
丹保布信土之、　紀伊國なり
山川爾、吾馬難、家戀良下、」
勢能山爾、直向、妹之山、　此二山ともに紀の國なり今
　云地名になづむべからず
事聽屋毛、打橋渡、」山の尾など谷河に橋うちわたせる
　如見えたるをかくよめるならん
木國之、狹日鹿乃浦爾、　今雜賀と云はさいの假字なる
　故假字違へり伊都郡に福門ありこれ福はさいはひとい
　ふ時の伊波を略て佐日とし加登の登を略て佐日鹿とい
　ふかさらば假字かなへり
出見者、海人之燈火、浪間從所見、」
麻衣、著者夏樫、　夏樫は借字なり
木國之、妹背之山二、麻蒔吾妹、」こは麻衣着し比此妹
　に逢そめたるなどもてなつかしみ思ふものから麻蒔と
　いへるなるべし紀の路の人に問ひしに彼國すべて麻は
　よからぬといへり此歌もて麻裳を出せし故に麻裳吉と
　云説は誤にて國つ物もて冠辭とする事なきよしは冠辭
　考にもいへり此歌の左に今本に右七首者藤原卿作未審
　年月とありこは房前卿か宇合卿か撰の時にかけるなら
　ば同時の事なればつまびらかに書べし後に書加へたる
　物なればかく疑ひてかけるなりよりてとらず
欲得裳登、　欲得をいてといふは義訓なり
乞者令取、貝拾、吾乎沾莫、奥津白浪、」家裳にもと貝
　ひろふに浪よ吾をぬらすなと云
手取之、柄二忘跡、磯人之曰師、戀忘貝、言二師有來、」
　手にとりしからにわするとは手にとれば其まゝわする
　るると海人のいへどわすられぬあまりに玄かいひしは言
　のみにてまことならぬとなり
求食爲跡、磯二住鶴、曉去者、濱風寒彌、自妻喚毛、」

今本末の句をおのがと訓たれどこはながとか又たがつまとか訓べし毛はそへたるのみ

藻苅舟、奥榜來良之、妹之島、形見之浦爾、　紀伊國にあり

鶴翔所見、」

吾舟者、從奥莫離、　此山は爾を加へて心得べし奥よりなさかりそと云なり

向舟、片待香光、　豆良の豆は多米の約にて片待ためらなり向舟は吾を待爲なり

從浦榜將會、」　此山も爾を加へて心得べし浦よりにこぎあはんと云なり

大海之、水底豐三、　浪のたつ日は底に響たつなり

立浪之、將依思有、　吾よらんなりみるめたへなる磯のさやかなるをいふのみ

磯之清左、」

自荒磯毛、益而思哉、　玉之浦、　玉浦は(卷十)紀伊國にてよめる二首の中に我戀妹爾相佐受玉浦とあればこも同所なり

離小島、夢石見、」　玉浦のありそよりも其所なるはなれ小島の見るめのよきにいめに見たるとよめるなり

磯上爾、爪木折燒、　鮑とる海人の舟こぎ出て爪木を折たき身をあたゝむるをいふなり

爲汝等、吾潜來之、奥津白玉、」　こは旅の裹に鮑玉を人におくれるなり歌の意は上にもいふ如く海人のしわざを吾身に引うけてとりこしたる玉なりと勞きをよめるなり

濱清美、磯爾吾居者、見者、　人の字脱しか又者をひとよめるならんか

白水郎可將見、釣不爲爾、」　此下に鹽早三、磯回荷居者、入潮爲、海人鳥屋見濫、多比由久和禮乎、(卷十四)に荒栲之、藤江之浦爾、鈴木釣、白水郎跡香、將見、旅去吾乎、ともよめり

奥津梶、漸漸志夫乎、　今本漸漸志夫乎とあるは何のこと、もなし志夫と字音によむ事此比になし漸々志はやや〳〵こゝろざす意にて遠遙の意義訓なり

欲見、吾爲里乃、隱久惜毛、」　とほざかるといはんとて奥津梶といひ見まくほりといはんとてとほづまといふさて見まくほりする里のかくるがをしきとよめりかくらくの良久の約留なり

離小島、夢石見、」　玉浦のありそよりも其所なるはなれ小島の見るめのよきにいめに見たるとよめるなり

奥津波、部都藻纏持、依來十方、君爾益有、　玉將緣八方、」　此歌は相聞の譬歌なり例のまぎれてこゝに入し物なりよりて小書にす歌の意は波のまきもてくる玉藻はありとも吾によりくる君が如き玉のあらんやとなり一本に奥津浪邊波布敷緣來登母

粟島爾、　紀伊粟島をいふに赤石は如何阿波國を云ならんされば濁りて訓べし

許枳將渡等、思牟、赤石門浪、未佐和來、」

妹爾戀、余越去者、勢能山之、妹爾不戀而、有之乏左、」　吾は妹を戀てこえ行背の山は妹山とならびてこひおもふ事なきをうらやみ吾も妹とならび居て背の山の如たらまほしとなり

人在者、母之最愛子曾、　今本此母をおやと訓しは誤なりおやとは二親にわたりて云母ははゝと訓べし末の句妹と背の山の事を同母兄弟の意によめるなればこそ同母の兄弟は母のめづる子なりよりて母とよまでは意をなさず(卷十五)石上乙麻呂卿配土佐國之時長歌に父公爾吾者眞名子叙妣刀自爾吾者愛兒叙云々此愛兒もめづこと訓べければ愛子はめづことよむまなごてふ事は既に出

麻毛吉、　冠辭

木川邊之、妹與背之山、」

吾妹子爾、吾戀行者、乏雲、　吾はかく妹こひ行に妹背の山はならびならびて見ゆ吾はうらやましく妹戀することのたらまほしかるといふなり

並居鴨、妹與勢能山、」

妹當、　この妹は妹山をさしいふあたりは其山ちかきわたりをいふ

今曾吾行、目耳谷、　だにの言既いふ如くかるく見るべし目になり

吾耳見乞、事不問侶、」　皆借字不語なり既に云如くものいふを言とひと云

足代過而、　代は太歟打を誤る歟又代にてもだいのいを略きてだとよむべし今本あしろと訓は僻ことなり紀伊國に在田郡ありあだともいふべし又名草郡に誰戸あり又英多も有是等を云ならん

絲鹿乃山之、　伊都ノ郡あり此郡の山か又神名式に名草郡伊太祁曾ノ神社あり太は登に通ひ祁は加に通ばいとがの山とも通しいふならん

櫻花、不散在南、還來萬代、」

名草山、　紀伊國名草郡の山ならん

事西在來、　事は言なり

吾戀、千重一重、名艸目名國、」（卷五）に大汝、少彦名能、神社者、名著始雞目、名耳乎、名兒山跡負而、吾戀之、千重一重裳、奈具佐末七國、とあるにまたく同じきうたなり

安太部去、　前の行に云如く誰戸もあればあたべを行とふ乎を略るならんか又英多もあれば小爲手山ともに國人に問べし

小爲手乃山之、眞木葉毛、久不見者、羅生爾家里、」　羅はひかげの類ならん

玉津島、　紀伊國也玉津の津は濁て訓べし

能見而伊座、青丹吉、平城有人之、待問者如何、」　玉津島の言に盡しがたかるさまをよく見ておはせよなりともなへる人か又此邊に來てものいへる人のよめるなどにあらん

鹽滿者、如何將爲跡香、方便海之、神我手渡、（卷十五）紀伊國にて石上乙麻呂神之小濱とよめるは海の底の神をいふと見ゆさらばこゝもそれを海童の手を渡るといひて鹽みたばいかにすると云か又方便は豆陀豆と訓めばやがて神の方便にて滿汐をも渡り得るを神が手渡るといひていかにせんとかする神の方便に渡り得るとことわりよめるか【神我手渡與人按多知萬須萬閉の約豆なれば神の立座す前を渡るとの意にて奥邊を指て神かてと云しが神はわたつみの神を云なり（卷十八）に珠洲乃安麻能於伎都美可未爾伊和多利豆と家持卿のよめるもまたく海神の意をとりて沖のふかみをいふなればこゝも其意なり】

海部未通女等、」　今本あまのをとめらとよみしはいまだしこは海人のいそなとるを見などしてかくはよめるならん

玉津島、見之善雲、吾無、京往而、戀暮思者、」　玉津島をめづる餘り都に行て又ゑたはしからんとなり【三代實錄玉出島と書たり是によれば津は濁るべき歟續紀聖武天皇神龜元年勸請衣通姫崇玉津島明神云云日本後紀にも玉出島と書たり】

黑牛乃海、　黑牛の海は紀伊國にあり（卷十）久漏牛潟とあるなり

紅丹穗經、百磯乃、　冠辭

大宮人四、　紅丹穗經などつゞけ下せばこは女官などの行幸の時にやよめるならん

朝入爲良霜、」　朝入は借字なり

若浦爾、　わかの浦の事は既いふ奈良の末には阿を和に通しかく云

白浪立而、奥風、寒暮者、山跡之所念、」

爲妹、玉乎拾跡、　玉はあはび玉なり

木國之、湯等乃三崎二、　丹後の由良にはあらず

此日鞍四通、」

吾船乃、梶者莫引、　（卷二）長歌に梶引をりともよめり

自山跡、戀來之心、未飽九二、」　こもゆらのみ崎なるかやまとゆこゝをこひ來てまだあかねば梶を海路引なとなり

玉津島、雖見不飽、何爲而、裏持將去、不見人之爲、」　おもふがまゝによめるなり初句を玉といふからつゝみもてゆかんといふなり

綿之底、　綿は借字海の底なり

奥己具船乎、於邊將因、風毛吹額、　ぬかはねがふ意なり

波不立而、」　波はたゝずして風のふけかしさらば沖つ船の邊によらんとなり

大葉山、　大庭郡は美作國にありされども美作には海なし紀伊に在か可尋

霞蒙、　今本にこをたな引とよめるは僻事なり

狹夜深而、吾船將泊、停不知文、」　めあてにせし大葉山に霞ゐて見えぬをかくよめり

狹夜深而、夜中乃方爾、　夜中の方は夜半に近づく方なりと契冲か說よし夕方晚方といふに同じ

鬱之苦、呼之船人、泊兼鴨、」

神前、　みわのさきは紀伊國なり讃岐に神前あり伊豫國伊豫郡神前（加牟佐伎）又近江國にも在

荒石毛不所見、浪立奴、從何處將行、與奇道者無荷、」　よきは横切の略なり外に道なしとよめり

磯立、奥邊乎見者、海藻苅船、海人榜出良之、鴨翔所見、」　船こぎいづるに奥邊の鴨のおどろき立飛を云

風早之、　（卷十一）伊豫國風早郡にて風早の浦とよめり又（卷十四）に紀伊國とあり契冲は海邊の風早き故といへどさらば風はやきと云べし早のと云は地名なればなり

三穗乃浦廻乎、榜船之、船人動、　動は集中の例とよむなれど暫よみこせによる波風あらければ今もさわぐと云なればなり

浪立良下、」

吾船者、明旦石之滷爾、搒泊牟、奥方莫放、狹夜深去來、」

此歌は（卷十四）に高市連黒人八歌の中に上下同じく牧乃潮爾とありそを誤てこゝに入たるなりこゝにあかしを明旦石と書も例なく又潮をはま又しほとよみてもかなはずおもふにこゝに誤り入たるにあれどこゝにては滷としてかたとよむべきにや

千磐破、　冠辭

金之三崎乎、　千早振加茂社といひし類なり式筑前國胸像郡紀（稱德）に筑前國宗形郡大領外從五位下宗形朝臣深津云云造金崎船瀬也と見ゆ又三代格宗形神社修理料之賤代傜下同國宗形郡爲二金崎傜丁十八人一とありさて其解を考るに恐らくは此金崎にも彼糟屋郡の宗形の神を齋るなるべしよりて彼此同體なればかくはよめるなるべしこゝをすぐる時牡鹿神社を思へるなり

過鞆、　吾者不忘、牡鹿之須賣神、」　式に筑前國糟屋郡志加海神社ある說に牡鹿郡陸奥に在といへどさにはあらず「玄かの海人はめかり鹽燒」とよめるも筑前國志加の海を云り

天霧相、日方吹羅之、　風の名なり土佐の俗日中の南風を日方といふと云り又たつみの風とひつじさまの風をもいふと云り

水莖之、　筑前國にて大伴卿「みづくきの水城の上になみだのごはん」とよめり

崗水門爾、波立渡、」

大海之、波者畏、然有十方、神乎齋禮而、　こは神をとあればいはひてとか又まつりてと訓べし今本かみをたむけてと訓るは僻事なり神をたむけてといふ事のあらんや神にたむけてとこそいはめこれをもて今本の誤多事を玄るべし

船出爲者如何、」

未通女等之、織機上乎、眞櫛用、掻上、　是迄序なり

栲島、　和名抄に出雲島根郡多久とありこれをよめるか猶考べし

波間從所見、」

鹽早三、磯回荷居者、入潮爲、　これを今本にあさりするとよみたれど字も訓もこゝろえず潮に入と書たるはかつぎと訓べきなりよりて訓をあらたむ

海人鳥屋見濫、多比由久和禮乎、」

浪高之、奈何梶取、　よを入れて心得べし

水鳥之、浮宿也應爲、猶哉可搒、」　浪高きに船の上にて

よみしならん三の句は如くを入て心得べしこは水主梶取などにむかひていひかけたるなるべしと我友のいへるはよし

夢耳、繼而所見、　古郷の見ゆるなり

小竹島之、　玄の島てふ所志摩尾張の間にあれどそれにはあるべからず又後の物に石見に在とて後の集に三の句をとりてよめるはいかゞあらん

越磯波之、敷布所念、」

靜母、岸者波者、緣家留香、此屋通、聞乍居者、」　小簾の間とほしと云類にて家の内まで通て聞ゆるとなりよるの歌なるべし

竹島乃、阿戸河波者、　（卷十四）に高島阿戸川波とよめり今本白波とありて假字はかはとあり一本によりて河に改む近江に在又周防にも在

動友、吾家思、五百入鉾染、」　高島てふ地の名に川なみのとよむといひかけ旅のかりほに我旅たちこせるあとの家おもふをあと川の名にいひよせるなるべし歌のすがたむづかし

大海之、磯本由須理、　磯本は磯岸をいふゆするとはうちよする波の磯をゆすり動すまでなり

立波之、將依念有、濱之淨奚佐、」　今本終の句の末の二字奚久とあれど左の誤玄るければあらたむ

珠匣、　冠辭

見諸戸山矣、　備中の三室戸をいへり

行之鹿蒔、面白四手、古昔所念、」

黒玉之、　冠辭

玄髮山乎、　備中にありといふ後の集には下野とよめりいかゞ

朝越而、山下露爾、沾來鴨、」

足引之、　冠辭

山行暮、宿借者、妹立待而、宿將借鴨、」　こは願意なり

山路行なやみて行暮し所にいもがをりて宿かせかしとおもへるまゝにおさなくよめるなり

視渡者、近里廻乎、　ふるさとをいふなり

田本欲、　徘徊をたもとほりとよめるは既に出たり

今衣、【此衣は古曾に通す衣なり、故に此類の衣には皆第四の音にてうけたり】

吾來禮、巾振之野爾、」　別れし時ひれふりし野といふなるべしひれふる山のわたりとしては聞えず古郷に歸る時の歌なり

末通等之、放髮乎、　こゝまでは序のみ今本ふりわけ髪と訓はひが事なりはなりかみの事は（卷十六）にうなゐはなりは髮上つらんかとよめり

木綿山、　豐後國和名抄速水郡田布郷あり此田は由なるべし

雲莫蒙、家當將見、」

四可能白水郎乃、釣船之、綱不絶、　今本不堪とあれど綱と有ば絶とすべしさて是迄は序なり

情念而、出而來家里、」　古郷をたえずおもひてなり

之加乃白水郎之、燒鹽煙、風乎疾、立者不上、山爾輕引、」　右件歌者古集中出、　撰の時古集中より右の歌どもをとれるならんよりて撰者のかけりとす

大穴道、少御神作、　今本つくりたると訓しはひが事なりさしもの御神なれば崇てこそよまめ

妹勢能山、見吾、」

吾妹子、見偲、奥藻、花開在、我告乞、」　例の奥の草なりと乞を見誤る事玄るければ改

君爲、浮沼池、　今本沼を沾とありて假字はうきぬとせり誤玄るければ改む浮沼の池は石見國なるよし後の物に見えたりいかゞ猶考べし

菱採、我染袖、　女心にいたづき染しよそひもいとはぬをいふ

沾在哉、」　今本是をぬれにけるかなと訓しは誤なり在はたるなりかなとあるも後なれば訓を改

妹爲、菅實採、　山菅の實なり

行吾、　われなるをといふ意なり

山路惑、此日暮、」

右四首柿本朝臣人麻呂之歌集出

問答。

佐保河爾、鳴成智鳥、何師鴨、川原乎思努比、　玄たふ意に云

益河上、」　こは男の妹がりとふとて佐保の川原（大和なり）をのぼるを水鳥にたとへて妹がよめるなり次の歌は男の和歌なり

人社者、意保爾毛言目、　凡にいはめなり水鳥になりて答しなり

我幾許、師奴布川原乎、標結勿謹、」　此歌によりて玄のぶ河原を陸奥の玄のぶ山などにそへてよめるは誤なり是はおもひ玄のぶ河原といひて佐保の事をよめり

神樂浪之、思我津乃白水郎者、　近江國志賀郡の浦なり篠並てふ所も此郡に在大名なる故に其ほとりの所に冠する事も冠辭考にくはし【或說に後世の歌に「志賀の浦はみるめもおひぬ浦よりやうべかづきする海人なかりけり」とよめればこゝの二首にかづきといへる事いかゞと論へりこは古へはたゞしく後世は訛多きを玄らぬ說なり右の後世歌を論に萬葉にかくよめるを見ずやとこそことわるべけれ】

吾無二、　吾居ぬにはなり

潛者莫爲、浪雖不立、」　こは近江宮より他し宮へうつさる時ある人のなごりおもひてよめるにやこは右宮人の中にも大船もたりて船遊びなどするほどの人なるべければ都うつされて此人ゐすば大船の棹梶もあらずなるめれば浪はたゝずなぎたる海づらなりともかつぎはなせそといふなり

大船爾、梶之母有奈牟、君無爾、　大船の梶そなへもたらん君なしになり

潛爲八方、波雖不起、」　右の歌に和て君ののたまふごと君まさずば船の棹梶もなかるほどに波はたゝずともなどかはかづきせめやと云なりかくよみかはせるほどの人なればもとより海人ならずともに海にあそびたりしをおもひ出てたとへて海人と云からに海なれば潛とは云ならん此海にかづきするせぬを云說もあれどそはいまだしたゞ大宮人の乘船をいひて棹梶もなくてさびしもなどよめる意なり

臨時。

月草爾、衣曾染流、君之爲、綵色衣、將摺跡念而、」　君に贈る衣を染るとて吾衣はあやなく染りぬるもいとはぬと云をあやに染よこせりといたづきをあげていふのみなり

春霞、　冠辭

井上從直爾、　井上は大和たゞにはたゞちになり

道者雖有、君爾將相登、他回來毛、」　猶豫てたちもとほりあはんと思ひくるなり毛は添たるのみ

道邊之、草深由利乃、　くさふけのけは加伎約にてくさふかきなり【加伎約計ならずきなりよてかきの約きを計に轉してふけと云とあるべし奥人】

花咲爾、　花のひらくをゑみといへるなり是までは序なり

咲之柄二、妻常可云也、」　人にいひよせられし時によめるなるべし

默然不有跡、　七言

事之名種爾、　事は言なり名種はいひなぐさめなり

云言乎、聞知良久波、　らくはるの延なり

少可有來、」　今本可の下に者の字有一本になし用なければ一本によりてすてつ此歌は背の他心ありやと女の疑ひ恨みがほなるに人聞をはゞかりてあらはしてもいひ出ず物によそへていひなぐさむれどよそへ言をも聞ゑらぬさまなどによめる歟又女の心とけ難きを云りつゝいはでたえがたさにいへと女の云らずがちなるをかくよめるか

佐伯山、　（卷七）に五月山卯能花月夜とありこは佐付山とかけるを佐伯山と見たるにてはなき歟佐伯山に用なき意に見ゆるなり

于花以之、哀我、　吾云ぬびうるはしみ思ふ人を云

手鶯取而者、　今本に子とあるは手の誤云るければ改とりてばはとりたらばなりはを濁るべし

花散鞆、」　花は散ぬるともよしや手を取得たらばと云るなり

不時、珖衣、服欲香、　今本まだらころものきほしきかとよめるはいまだし集中の例もて改

衣服針原、　此針原は上にまだら衣と云よりおもへば地名ならでおもてには花摺をおもひて榛原といひしたには衣はりぬはぬほどの少女を戀おもふをたとへたり

時二不有鞆、」

山守之、里邊通、山道曾、茂成來、　草などの云げれるをかくいふなりひさしくとはれぬをいへり

忘來下、」

足病之、　冠辭

山海石榴開、八岑越、　やつをこえは彌津峯こえなり

鹿待君之、伊波比嬬可聞、」　待人などに譬へなぞらへ遠き路を通ふをいひいはひづまは世になくかしづきおもふをいふさてこは他人のよめるは鹿を待間の君を眞妻にとりなして人のかくよめるなるべしみづからの事にてはいかゞ

曉跡、夜烏鳴雖、此山上之、【山上をしか訓は心ゆかずみぬとよむべきにや猶可考奥人】

木末之於者、未靜之、」　此歌別のなりそは曉といひて夜烏といひいまだ云づけしといふをもて夜のあくるを惜めばなり云づけしは外の山〳〵によがらすのなけども此丘にはまだ鳴ぬと云なり

西市爾、但獨出而、眼不並、買師絹之、　かひ得たりしきぬなり

商自許里鴨、」　云こるは物の專らなるにてつのるをいふたゞ一人を思ふをたとへいふなりけり

今年去、新島守之、麻衣、肩乃間亂者、　和名抄に紕（萬與布）繒欲壞也と見えたり間亂は借字なり、

阿誰取見、」　今本許誰とあり契冲云許は阿歟此說によれり阿の草を許と見たるならん

大船乎、荒海爾榜出、八船多氣、　これ迄は序なりたけは遠き意たか〳〵と云に同じ高々は（卷三）の別記に委し遠くなりても見馴し妹がまみは云るしと遠く隔見ても見もたがはぬを譬よめるなり

吾見之兒等之、目見者知之母、」

旋頭歌。　今本是を小字とせるは誤なり集中の例によりて改む

百師木乃、　冠辭

大宮人之、蹈跡所、與浪、來不依有勢婆、不失有麻思乎、」　この歌も前の問答の中大舟の棹楫なきなどよめる類にて大津のふる都の荒にたるをかなしみよめるなり

右十七首古歌集出

就所發思。　今本前の旋頭歌の前にかく有は誤云るかれば改

兒等手乎、　冠辭

卷向山者、常在常、過往人爾、　こは死したる人をいふならん

往卷目八方、」　卷向からかくいひて枕まかんやなり

卷向之、山邊響而、往水之、三名沫如、世人吾等者、」　世の人も吾もといふにはあらで吾はとことわりて吾は世に在人ゆゑといふなり

右二首柿本朝臣人麿歌集出

寄物發思。

隱口乃、　冠辭

泊瀨之山丹、照月者、盈昃爲鳥、　月はみちかけしながらも常にてよけれど人はさなくてはかなしとなり

人之常無、」

右一首古歌集出

行路。

遠有而、雲居爾所見、妹家爾、早將至、歩黑駒、」　ありのまゝによめるなり

右一首柿本朝臣人麿呂之歌集出

旋頭歌○

劔後、　冠辭

鞘納野通、　納野は式に山城國乙訓郡入野神社と有に同く委は冠辭考に見ゆ今本いるのと訓しは誤なり

葛引吾妹、　句也

眞袖以、　まそでに引葛を布に織着せなんとねくよりくさかるかとなり

著點等鴨、夏草苅母、」　草は葛をいふ

住吉、波豆麻君之、　今本是をはづまの君とよませたれどはづまてふ地もきこえず契沖云なみづまにていなみづまと云に同しはぶきごとなりといへるさもあるべきすむ地をさして云に疑ひなし

馬乘衣、　今本是をまそころもと訓るはまは馬の音なり乘をさうと唱へそのさをそに通じうを略きてよめるなれば字音なり右字音をかゝる歌によむべきいはれなし又こをうまのり衣と訓む說もあれど馬のり衣てふ訓ものに見えずこは義訓にわきあけごろもとよむべし則闕腋袍は圓領の胡服武官の衣なればなり縫腋は馬に乘に便りあしければ闕腋を造れり馬乘衣といはん物必此もの、外なし又こをまそごろもとよまんかといふ說もあれど同じ五言によまばかりごろもとよむべしそは古末の約加なればのりの乃を略きてかりごろもとは訓べけれどこゝは七言の句なりこゝを五言によむほどの古調にもあらねばいよ、七言の義訓ことわりたらひなん

雜豆臘、　冠辭

漢女乎、座而、　こゝのをとめに漢女の字をかりたるは紀（應神）に三十七年戊午朔、遣阿知使主都加使主、於呉令求縫工女云云、四十一年二月云云、是月阿知使主自呉至筑紫時胸形大神乞工女等故以兄媛奉伺形大神云云、既而奉其三婦女以至津國と有る呉女をさして漢女と書たるなりさて紅花を韓藍とも呉藍とも書てくれなゐとよめる如く漢呉を通し書たるたはむれなりされど此古事をよめるにはあらでなみづまの君がわきあげ衣のいとみやびかなるを彼物縫をとめにぬはせたるなり

縫衣叙、」　こはなみづまの君が衣をめでゝかくよめるなり前後の歌もみな見るものをよめる歌なり

住吉、出見濱、莫乘曾苅尼、未通等、赤裳下、潤往將見、」　今本に住吉、出見濱、柴莫苅曾尼、未通女等、赤裳下、潤將往見、と有ていと亂て字を上下に書誤たりとおぼゆればかくはよめりなぞとならば濱に柴といふもいかが又かりそねといひてぬれゆかん見むといふもいかゝ又將の字も集中の例によるに往の下にこそあるべけれすべて歌の意もとほらねば右の如あらたむよりて柴莫苅曾の柴を乘にあらため字を上下してかくよめり闕は一本潤と有によれり正き本を見ん人猶あらためよ

住吉、小田苅爲子、　六言

賤鴨無、奴雖在、妹御爲、私田苅、」　此歌はおのれ〳〵をよめるならで他人の見てよめるとせでは心得がたし今本の訓も然見たるながらいと誤て歌意きこえずよりて改む三四の句去づかもなき去づはあれどとも訓べし

池邊、小槻下、細竹莫苅嫌、　今本莫の字を脫せり次の歌の書體によりておぎなへるなり【此冠注のかく莫はなきこそよけれ（奥人）故大人の考にて此細竹莫苅嫌と莫を補れたれどこは莫は補はで苅嫌の二字をなかりそねと義訓せんか苅事を嫌ばなかりそねなり】

其谷、君形見爾、盤乍將偲、」　男の妹がりとひしをりにたちやすらひなどせし槻が下の細竹を見て男のかれしか遠つ國へ行けるか又むなしくなりしか事有後におもひいで、かくよめるならん

天在、　冠辭四言

日賣菅原、　冠辭考にいふ如く天なる日とつゞけてこゝに在地の名なり

草莫苅嫌、彌那能綿、　冠辭今本彌那能の能を脫せり美奈乃和多と（卷九）に在を以て補ふ

香烏髮、飽田志付勿、」　志は助字なり勿はそへたるのみこは妹があたりの草苅を見て男のかくよめるならん飽田は借字芥なり思ふに阿久多の久多の約加にて阿加なり

夏影、房之下庭、衣裁吾妹、　夏影といふ影も房下といふ下も言を添る斗にて秋さり衣など云如秋冬のまけに夏よりねやにてたつ衣をとつゞけたるのみなり

裏儲、　衣の表裏の事にはあらず裏は心なり心にまふけてなり

吾爲裁者、差大裁、」

梓弓、　冠辭

引津邊在、　引津亭筑前に在冠辭考に云如太宰府の官人などのよめるか

莫謂花、及採、不相有日八方、勿謂花、」

擊日剌、　冠辭

宮路行丹、　大内への道なり

吾裳破、玉緒、念委、　委は玉の緒の長きよりかくつづけたり則八尺の曲玉是なりくはしくは古事記の考にいふ

家在矣、」　意は宮の中に吾がもふ人のあるがまにたえず通はゝ裳はやれながら其玄るしなみさるからにおもひしなへて家にあらんとなり

君爲、手力勞織在、衣服斜、　今本手力勞織在衣服斜とよめるは誤なり玄か訓ては自の事になり君爲といふにかけ合すきぬきせなゝんといへるなり斜は借字なり

【衣服科選要抄】

春去、何何揶者吉、」　てばのばはたらばの略揶衣になしたらばよからんなり

橋立、　冠辭

倉椅山、　大和國高市郡

立白雲、見欲、我爲苗、　わが見むとするならびになり

立白雲、」

橋立、　冠辭

倉椅川、石走者毛、壯子時、我度爲、石走者裳、」　老てむかしを思ひ出てよめるならん今本の訓いさゝか誤れり玄か訓べからねば改

橋立、　冠辭、

倉椅川、河靜菅、　靜は借字下の意にて下草なりちいさき草を云ならんこは譬歌なり

余苅、笠裳不編、川靜菅、」　歌意はかたらひは得ながら吾妹とはなし得ぬをたとへてよめり

春日尙、田立羸、公衰、若草、嬬無公、田立羸、」　男も女もいまだいひよりもせでかたみに心のみかはせるが男の田づらに物思ひて立るをかくよめるなり

開木代、　代と云は地をならすを云異國に代を田地の事とす玄かれば代は地を平すなり紀(聖武)天平七年遷新京代山開地以造室とある是なりかく字を借て書るも紀の文の意にや

來背、社草勿手折、己時、【おのが時とは草の榮ゆべき時とて榮ゆともとなり拾穗】

立雖榮、草勿手折、」　こは相聞の譬喩歌なり

青角髮、　冠辭

依網原、　河内國丹比郡の依羅をいふなりさてよせあみの勢安約佐なればよさみと云

人相鴨、石走、淡海縣物語爲、」

水門、葦末葉、誰手折、吾背子、振手見、　行さまをいふなり

我手折、」

垣越、犬召越、　女の家の犬をよべるなり

鳥獵爲公、　多加約多なるを登に通てとがりといふ

青山、葉茂山邊、　其獵せん山をかねていふ

馬安君、」　女の家の犬をよべるをとがりする君といひてまことは垣間見などするを女のかたよりそのとがりする青山の玄げみに玄ばしいこひてよといへる相聞の歌なり

海底、奥玉藻之、名乘曾花、妹與吾、此荷有跡、　六言今本荷を何とするは誤なり此句をこゝにありとなどよみ次の語をなのりそとよめるは誤なり

莫語之花、」　かくよむべきなり語をなのりそとは訓れず

此崗、草苅小子、然莫苅、　六言今本莫はなくて訓は玄かなかりそとあれば脫せる事玄るし莫ありて六言なり然苅にてさはよまれず假字によりて字を補ふ

有乍、君來座、御馬草爲、」　からずあらば君が馬草に飼むとなり

江林、　こは地の名なるにや如何

次完也物、【完は宍歟】

求吉、白栲、　冠辭

袖纏上、　袖まき上は袖くゝり玄たるを云

完待我背、」

丸雪降、　冠辭

遠江、吾跡川楊、　吾跡川近江なり(卷十一)に高島之阿度何波とよめり遠江にはあらで京より遠き方をかく云ならん委は冠辭考に見ゆ

雖苅、亦生云、余跡川楊、」

朝月日、　冠辭

向山、月出所見、　今本立とあるは出の誤玄るければあらたむ

遠妻、持在人、看乍偲、」

右二十三首柿本朝臣人麻呂之歌集出

春日在、三笠之山二、月船出、遊士之、飲酒杯爾、陰爾所見管、」　後世はかゝるをかげの見えつゝといふをこゝにかげに見えといへるにて玄らべ高し

譬喩歌。

今造、　今本こをいまぬへると訓るは誤なりあたらしきと訓べし

班衣服、面就、吾者所念、　今本吾爾とありてわれにと訓一本は去かと訓りともに歌の意にかけ合ず者の誤り去るければ字をあらたむるなり

未服友、」　めにつく吾妹などよめる如めでし妹なれどまだともねもせぬをたとへしなり

紅、衣染、雖欲、著丹穂哉、人可知、」　今本の訓いさか誤て歌の意とほらずこは貴人をおもへれど紅の衣の穂に出る如人の去りやすきを譬しなり

千名、人雖云織次、我二十物、　二十物は借字織物をいふ

白麻衣、」　人は色〳〵にいひさわぐとも吾は一筋に戀思ふ心をとげんとたとへよみしなり

安治村、　村は借字群なり此事冠辭考にくはし

千依海、　今本十依とありてとをよると訓されど十は千の誤にてちよるならんさらばむれたると訓べし

船浮、白玉採、人所知勿、」　人のいひさやげる中にも心ざまあひて戀をとげん意をたとへよめるならん

遠近、磯中在、白玉、人不知、見依鴨、」　あちこちの磯の見る目多きを人めの繁きにたとへかゝる中は逢事かたきをなげゝるなり

海神、手纏持在、玉故、石浦廻、　磯のいりめぐれる所を去か云にて地名にあらず

潜爲鴨、」　いつきむすめを戀去のぶからに忍ふいたつきをかくたとへしなり此末の句をあさりすると訓は誤りなり

海神、持在白玉、見欲、千遍告、潜爲海子、」　かつぎする海人は媒の意なり此海人に見まくほる事をたひ〳〵おふしつげしといふなり

潜爲、海子雖告、海神、心不得、所見不云、」　こは右の答歌にて媒がよめるなりちゞにのらんとすれど其おやなど守りつよく去かも心をしも去り得ねば媒のなしがてにて其女に見えよともいはずと云を譬よみしならん

天雲、柳引山、隱在、　心にこめてふかく戀思ふにたとふ

吾志、　今本志を忘とかけるは誤去るけれはあらたむ

木葉知良武、」　こは誓に云なり(卷十四)眞木葉乃之全布勢能山之奴波受而吾越去者木葉知家武ともよめり今本假字は去からんと有て良武となし一本に依て補へり

雖見不飽、　三の句に應るなり

人國山、　大和國吉野にあり下に人國山の秋津野ともよめり

木葉、己心、名著念、」　他妻をおのが心よりおもふなり

是山、黄葉下、花矣我、　おもへる女を秋のはなにたとふ

小端見、反戀、」　戀わびる意ゆゑかく書てわびしもと讀なん今本には字のまゝ戀しもと訓たれどさては意とほらず

從此川、船可行、雖在、渡瀨別、守人有、」　今本の訓てにをはたがへればあらたむさてこは戀おもふ人にいひよりなんとするにさはり多きをかくたとへよめるならん

大海、佞水門、事有、　防人などの守湊に異國人などの來りて事あらん如にたとへたるなり

從何方君、吾率隱、」　こは宮女などの去のび夫もたるがあらはれなんずるをかしこみてかく譬よめるならん

今本隱を陵として訓は去のがんと有こゝは去のぐ意にあらねば誤去るしよりて字も訓もあらたむ

風吹、海荒、明日言、應久、君隨、」　待わびしに人のこちたくわびさわければ明日なん來んとの給ふを右はいと久しくおもほゆれど君がみ心のまゝとなり

雲隱、小島神之、恐者、目間、心間哉、」　遠方の小家の女を思へるが其戸主の守りつよく逢事かたかれど心かはらぬをかくたとへてよみおくりしならん

右十五首柿本朝臣人麻呂之歌集出

橡、衣人者、事無跡、　貴き人にて賤をうらやみしなりつるばみの衣きる人は賤きなり

曰師時從、欲服所念、」　次の歌に紅の衣を下に著は事なさんかともよみたる如く貴人は所せき身にて少しの事を言繁くいひなされなどすれば賤の事なきをおもふといへるにていやしき人を戀るをかくたとへよみしならん

凡爾、吾之念者、　今本之を乎と訓るはまたき誤なれば改

下服而、穢爾師衣乎、取而將著八方、」　ふりぬる衣を再びきるをもとつ人にまた逢にたとへよせてよめるなり

紅之、深染之衣、下著而、　【下著而の而は互阿禮約下にきてあれなり奥人】

上取著者、　着たらばの畧なり
事將成鴨、」　事は借字言なりよき衣を上に着てあらば人言にいひさわがれてあらはれんとなり
橡、解濯衣之、　賤き人の衣は必あらふなり
恠、殊欲服、　殊はことになり
此暮可聞、」　ふるくわかるればなれし人をおもひ去ぬばるゝをかくたとへしなり
橘之、島爾之居者、　大和の島の宮の地を云らん池はあれど川は遠し
河遠、不曝縫之、吾下衣、」　さらさでぬひしはあらはさで去ぬびもへるをいへるならん
河内女之、手染之絲乎、絡反、片絲爾雖有、將絶跡念也、」　こは第三の句迄は片絲といはん序なりそは心に念なればおもはめやてふ意に念てふ言を加へいふのみ此言の解は(卷一)人麻呂近江荒都歌の反歌に委く見ゆさて歌の意はわれのみたえんとおもはざるをよめり
海底、沉白玉、　沈てあるを云深くこめたるいつきむすめを戀心に譬
風吹而、海者雖荒、不取者不止、」
底清、沉有玉乎、　計留約久にて右の去づくに同

欲見、千遍曾告之、潛爲白水郎、」　此歌は上に海神持有白玉とて下は同歌にて既に在歌なり
大海之、水底照之、　今本に之を寸とよみたれど之を寸と訓例なし
石著玉、　石著は去づくにて沉なり蚫とよまんには著石と書べきを今本こをあはびとよめるは誤なり
齋而將採、風莫吹行年、」　上は時を得し人のおごそかに深く籠りたるいつき娘を云扨其娘のがり去ぬび通ふをいはひといひ人言のさやぎなんとかしこむを風にたとへよめるなり
水底爾、沉白玉、誰故、心盡而、吾不念爾、」　そこより外に吾か心盡しておもふは無にといへるなり
世間、常如是耳加、結大王、　今本の訓は誤なりこをてしと訓ることは(卷四)の別記に委し
白玉之緒、　今本に緒を結とありて訓はをとあり誤去るければ改む
絶樂思者、」　世間は常なかれば結びたりし玉の緒だにもたゆる思へば今こそかくかたみに思ひあへれど去られなん時もあらんかとおぼつかなむなり
伊勢海之、白水郎之島津我、　伊勢海部郷あり白水郎は

借字島津は其郷の舟津をいへるならん
鰒玉、　伊勢國ゆ今鰒玉を多く出せり昔より去か有るべければかく伊勢を取出て思ひよせよめるならん
取而後毛可、　毛は助語
戀之將繁、」　忍妻等逢得て後の思ひ深きにたとふなり
海之底、奥津白玉、緣乎無三、　白玉とるよしをなみなりそを思ふ妹にあひがたきに譬
常如此耳也、戀度味試、」
菫根之、　【菫根菅根の誤歟集中あしの根のねもごろといへる此外になし皆菅の根とのみ有】
懃念而、結篆之、　今本懃を勤とするは誤なり訓によりて字を改義之を篆之とす(卷四)に既にいふ
玉緒云者、人將解八方、」　深くねもごろ戀に思ひて相逢中は人のさけなめやとたとへたり
白玉乎、手者不纏而、　今本而を爾とすれど語の例たがへればまたき誤なりよりて字をあらたむ
匣耳、留有之人曾、　活本に是を會とするは二字の一字となれるなりこれを以集中の誤を知べし
玉令泳流、」　いつき娘に逢事かたく又其妹も戀わびなんをかく譬よめるなり

照左豆我、　てるの豆は登米約にて富る幸人なり山の幸人海の幸人といふが如し
手爾纏古須、玉毛欲得、其緒者替而、吾玉爾將爲、」　歌の意は富る幸男が富にまかせて手にまく玉のまきふるす玉もかもといふは富る人の枕卷ふるせる妹もがもとなり其まきなせる妹はもとより吾が戀思ふ妹ならんさて其緒も其男をおもひてよめるにて其男かへて吾妻にせんとたとへたるなり(卷十六)眞珠者、緒絶爲爾伎登、間之故爾、其緒復貫、吾珠爾將爲、
秋風者、繼而莫吹、海底、奥在玉乎、手纏左右二、」　ふかくこめたる女を去ぬび通ひて事なるまでは人にいひさはがれぬをねぎてかく譬よめるなり
伏膝、玉之小琴之、　女にたとふ且事といはん科なり
事無者、　事の出來し故に遠ざかりしなり
甚幾許、吾將戀也毛、」
陸奥之、吾田多良眞弓、　今陸奥の二本松の人にとひしにそこに吾多々良山有と木はいかに檀もありやととひしにそは木を去らず山ははげ山なりといひし今も其名に呼とぞ
著紐而、　今本には著絲とありてつるすげてとよめるは

字も訓も誤なり一本によりてあらたむ
引者香人之、吾乎事將成、」 上は序なり引は弓をとるなれば此女を得たらばにたとふさて人の言なしいひさやがんとかしこむなり
南淵之、 大和國に在
細川山、立檀、 いまだ若木にて弓にならぬを女乃年まだきに思ひかくるにたとへたり
弓束級、 【級式糸の次第と字書にありといへり】級は本纏及の二字なりしがかたへのこれるを一字と見てかくかけるものか
人二不所知、」
磐畫、恐 山常、 いと貴き人の家居をたとふ
知管毛、吾者戀香、同等不有爾、」 なぞへはなみよそへを畧く辭にて今は比類せぬを云なれば高きを戀るなり
伊勢物語に「隨方おもひはすべし比無高きいやしきくるしかりけり」てふも此歌をとりてよめるなり此眞字を見ても辭の意を玄るべし伊勢物語古本はよく言を解く字をあて、かけるなり
石金之、凝木敷山爾、入始而、山名付染、出不勝鴨、」
こゞしきは凝々敷にてはなれずかたき意なりこはかたみに思へるを譬てよみしなり
佐保山乎、於凡爾見之鹿跡、今見者、山夏香思母、風吹莫勤、」
奥山之、於石蘿生、恐常、思情乎、何如裳勢武、」 こは貴き人をこひて心に玄のぶ思ひをいかにせんとなり
思勝、 今本賸とありておもひあまりとよめり一本によりて改む訓は字によりぬ
痛文爲便無、玉手次、 冠辭
雲飛山仁、吾印結、」 其情せんすべなければまだきうなひの程より心にしめおけるがたえかぬるをよめるなり
冬隱、春乃大野乎、燒人者、燒不足香文、吾情熾、」 こは女の自らのおもひにたとへたり
葛城乃、高間草野、 今本字の終にくさのと訓るはいまだし集中かゝるはかやと訓る例なり
早知而、標指益乎、 今本標を樔とするは誤玄るければあらたむる
今悔茂、」 今本悔拭とありてくやしきと訓茂の誤玄るければ字も訓も改つこは吾がはやくおもひそめにし妹を人の玄めけるを悔てかく譬よめるなり
吾屋前爾、 今本に是をやど、訓は誤なる事既に云へり

生土針、 生せしは野よりとり來て植生したてしを云土針は和名抄に玉絲一名黄絲(沼波利久佐)此間云(豆知波利)かくあれどもこゝの土針は借字にて野榛をいへば秋萩ならん此卷の末に白菅之眞野榛原心由毛不思人乃衣爾摺奴と有も萩ならでいかで衣にすらん
從心毛、不想人之、衣爾須良由奈、」 良由約留にてするなといふなり歌意はいとまだきよりおのが方におふしたてひとゝなれるをまてる妹の他人に心そめなんがうしろめたきにかくいましめたとへよみしならん
鴨頭草丹、 鴨のきは伊のごとく唱ふ
服色取、摺目作、變 色登、稱之苦沙、」 鴨頭草摺にきぬをいろどりよそはしくきまほしかれどうつりやすき色なるを妹が吾心も玄かならんといはんかと譬よめるなり
紫、絲乎曾吾搓、 今本橡とあり(卷十三)玉緒乎沫緒二搓とあれば誤玄るければ改紫の糸とはみやびの情をよそへていふのみ
足檜之、 冠辭
山橋乎、 こを女にたとふ
將貫跡念而、」
眞珠付、 冠辭
越能菅原、 今本こしのと訓しは誤なりこは越の小菅に同じく近江の越野をいふなり
吾不苅、人之苅卷、惜菅原、」 こは後なれど伊勢物語に人の結ばんことをしぞおもふと同じたとへなり
山高、夕日隱奴、 日にかくれぬのにを略けばかを濁る
淺茅原、 日にてれる茅原のいつくしきを惜む
後見多米爾、標結申尾、」 いと貴なる女のまだいとけなきをはつかに見て戀おもふこゝろを夕日がくれのちばらに譬なり
事痛者、 事は言なり
左右將爲乎、石代之、 紀伊國なるよし(卷一)に既に出
野邊之下草、吾之苅而者、」 かりてあらばを約め通したる言なれば者を濁るさて歌の意はおもふ妹を吾得てあらば人の言痛くいひさわがんはとにもかくにもいひしづめなんを野べの下草苅にたとへしなり一本に紅之寫心哉於妹不相將有うつゝの心うつろふ心と二つ有こゝはわが事故うつゝのこゝろにていかであはざりけんと思ひたるなりけり
眞鳥住、 冠辭

卯名手之神社之、【史記周本紀贊所謂周公葬我畢畢在鎬東南杜中註杜一社本居云】此森は大和國高市郡さて神社は木も茂げればかく義訓せり

菅核乎、　今本根とあれど根は衣に摺物ならず核を誤れる事玄るければ字も訓も改む此上にも妹が爲菅實取に行我乎とあるをもおもふべし

衣爾書付、　書は借字掻付にて摺なり

令服兒欲得、」　歌意はかく卯名手の社をしもいへるは然かしこき妹を吾得て摺衣着せ得てんまでに吾得んてふをかく譬しならん

常不見、　今本常不とありてつねならぬと訓たれどさらば不常と書べし末の句歌の意にても字の脫し事玄るかれば見を補ひ訓をあらたむ

人國山乃、　常不見他國とかゝる

秋津野乃、　既出

垣津幡鴛、夢見鴨、」　常に戀おもふと見ぬ人をいめに見しをかくたとへしなり

姫押、生澤邊之、眞田葛原、何時鴨絡而、　くりよする意にとれるのみか

我衣將服、」　此歌いつかもなどいへばこもいとけなき妹を思へる歟又事ならんをまてるをかく譬しか

於君似、草登見從、我標之、野山之淺茅、人莫苅根、」　君に似る草とは淺茅のうつくしまるゝもてたとへたり

三島江之、　攝津國嶋上郡

玉江之薦乎、從標之、己我跡曾念、雖未苅、」　右の歌此歌はまだ枕まかねど吾妹とさだめしを譬なり

如是爲而也、尙哉將老、　此なほはたゞ人をなほ人といふ如くたゞにやなり

三雪零、太荒木野之、　大和國なり

小竹爾不有九二、」　小竹の雪に玄なへながら生るを不逢して玄なへうらぶれ年を經んとたとへしなり後ながら古今歌集に「さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみもとくだち行我さかりかは」と此歌の意に似たり

淡海之哉、八橋乃小竹乎、不造矢而、　これまではさねといはん序なり

信有得哉、戀敷鬼乎、」　歌意は小竹もはがでは矢とならず矢根の意もて信の序にいひてさて左は發言ねは寢なり今本信有をまことありと訓るは僻事なり此歌玄か訓ていかに解んとすらん

月草爾、衣者將摺、朝露爾、　妹にあひ得て歸るあしたの露をまうけて譬へり

所沾而後者、徒去友、」　摺衣着てよそほしく出たち思ひだに心とげ得て後は妹が心の他人にうつろひぬるともと云なり

吾情、湯谷絶谷、浮蓴、邊毛奥毛、依勝益士、」　妹によりつきがたきをたとふ終の乎は添たるのみよりがたからんと云なり【がてましの豆麻の約多にてよりがたしやよりがたからむと有注はよくも聞えず】かく人の上をいふ如くなるは蓴がうへを云さていひよりつきなんすべをなみ吾心のたゆたひを譬

石上、　冠辭

振之早田乎、雖不秀、　年まだきをおもふにたとふ

繩谷延與、守乍將居、」　よき比まち得るまでまもらんとなり

白菅之、眞野乃榛原、【眞野類字和歌集大和國と有は誤なり契冲吐懷編にも然云り此歌本集には寄木と有】(卷十四)に白菅眞野乃榛原とあり攝津國なり

心從毛、不念君之、衣爾摺、」　此歌はさま〳〵に意得らる其一つははぎか花の衣にいろづくが如く思ひもかけぬ人になるゝと云か又一つは吾を心より思ふともなき君になるゝを譬しか又はぎ原のみならではぎをいひたるは(卷七)に吾衣摺有者不在高松之野邊行去者芽子之摺類曾とよめる類歟又吾を心より思ふともなき君に馴るを譬へしか

眞木柱、作蘇麻人、伊左佐目丹、　此言は既に上の卷にもいへる如(卷四)にくはしくす「いな玄らず玄か目にてふ言なりさてこは言を上下にいふにて玄か目に見すとふ意なり」眞木柱は三つ葉四つ葉の殿作りの料にとて柚人の伐も削もなして作れゝどたゞかりそめの借廬の料とせん事は玄らずといひて妹戀おもひのかりそめならぬ眞心にたとへたるなりけり

借廬之爲跡、　とての意

造計米八方、」　理計の約禮なり其禮は良に通て作良米八なりもはそへていふのみと玄るべし

向峯爾、立有桃樹、成哉等、　成は借字にて實をむすぶをなるといふを事の成しにたとへしなり

人曾耳言爲、汝情勤、」　さゞめきは私語などの意いひさやぎたつるなりゆめはいめと同言ながら心に忌つゝしめと云なり

足乳根乃、　冠辭

母之其業、　蘭爾在に借しなり
桑子尙、　今本桑尙とのみありてくはもなほと訓しは僻事なり桑子こそ絹には織なり歌の意もて子を補ひてすらと訓集中に其例あまた有
願者衣爾、著當云物乎、」　ねぎおもひて事をなせば絹にも織るゝを戀の思ひ切なれてふにたとへたり
波之吉也思、　此言（卷二）別記に委
吾家乃毛桃、本繁、　本は木立なり
花耳開而、不成在目八方、」　逢事を得ずてゆるせしのみをきければそを花にたとへ花咲實ならぬ事やあるといふなり
向岡之、若楓木、下枝取、　若かる妹に思ひかけて妹か下心を引試得たるよりたとふ
花待伊間爾、　花待は時至るを云伊は發語花待間なり（卷七）に不亂伊間爾令視兒裳欲得と有伊間にこゝも同じく間に發語を添しを思へ
嘆鶴鴨、」　時ならんを待程なれど妹がゆるすをいとよろこべるなり
氣緒爾、念有吾乎、山治左能、　和名抄に秬（和左之木）或人北國に多くて木はみづ木に似て葉はいぼたの大なるに似たり花は玄ろくて躑躅より少しちいさしと云
花爾香君之、　花ばかりなるあだ心に實なきをかく譬いふ例集中に多し
移奴良武、」
墨吉之、淺澤小野之、垣津幡、衣爾摺著、將衣日不知毛、」　おもふ人を得ぬにたとへたり
秋去者、影毛將爲跡、　【張要抄云影は形の誤か形毛將爲歟形アカキカサリ】
吾蒔之、韓藍之花乎、誰採家牟、」　韓藍は紅花なり吳藍といふに同じ吾おもふ人と相逢影にもせんと蒔置しなれば高かれとなも思へるに誰か摘けんと云なり【今案に秋來は此紅もて衣を染匂ひてりかばかりによそひ影うつる迄のよそひとて蒔し韓藍を誰かつみ取けんとわが思ふ妹を人のかたらひ得たるにたとへたるならん】
春日野爾、咲有芽子者、片枝者、未含有、言勿絶行年、」　こは姉妹などならび生ひたてる妹の方のまだいはけなきをおもふ事絶ずとげなんとねぐに譬しならん言は借字事なり
欲見、戀管待之、秋芽子者、花耳開而、不成可毛將有、」

右に同じ人のよめるか花開は妹のとし比になれるにたとへ不成可毛將有は我戀のかなひがたからんとうらむもとなかりし事はたしてさはらひ出きなんに譬
吾妹子之、屋前之秋芽子、自花者、實成而許曾、戀益家禮、」　又同人の歌かつひに心とけてよめるならん
明日香川、七瀨之不行爾、　よどは水のよどみとまる所を云よりて淀に不行をかれるなり
住鳥毛、意有社、　心あればこそなり
波不立目、」　淀なれば波立ずといへり物のとまれるをもよどむといふはともかくもせぬもてなりされば事成らではたさぬ中にたとへしならんさて此淀よりいひ下せば波とはかけれど住鳥もといへば鳥も並もたゝぬ意に借て淀に鳥もよどみいよゝはたさぬ意にたとへしなり
三國山、　信濃越前又武藏にもありいづれならん式神名帳に越前坂井郡三國神社とあり
木末爾住歴、武佐左奴之、　【顯】
待鳥如、　今本待の上に此とあるは衍字なり
吾俟將痩、」　待わぶる思ひをかせんずらんといふをかく書ててにをはの待やせんに借しなり
石倉之、小野從秋津爾、　大和國吉野に在
發渡、雲西裳在哉、　あればやの意
時乎思將待、」　石倉の小野と秋津野との中に高山の隔あれば雲の行ぬ譬とし又高山よりも高く雲たちて雲のいゆく折もあれば時を待にいひよせしなり
天雲、近光而、響神之、　是までは次の二句をいはんたとへの序なり
見者恐、不見者悲毛、」　貴き人を恐にたとへしなり（卷十三）筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲左此たぐひならん
甚多毛、不零雨故、庭立水、　にはかいつみの加を横に通はせて泉の伊を略なり
大莫逝、人之應知、」　母などのゆるさぬを玄ぬびて通ふに譬しならん
久堅之、雨爾波不著乎、恠毛、吾袖者、干時無香、」　此歌譬喩歌ともなく見ゆ涙をいはで涙を玄らせかくたとへの意によめるならん歟
三空往、月讀壯士、夕不去、　夕べ落ず常になり
目庭雖見、因緣毛無、」　貴き人を戀て常見れどいひよらんすべなきにたとへしなり天雲のよそにも人のといひ

又目には見て手にはとられぬなど後に讀しも是によれるならん

春日山、山高有良之、石上、菅根將見爾、月待難、」 此歌は二の句より五の句へうつしてさて三四の句へつゞけ心得べしされば山の高きに月のいでがてにすれば菅の根の見えぬといふなりこをもて思へば菅の根いさゝかなる物にて石につき土に入べければ高き山に見むてふ事いふべからず誤るべからぬ字ながら松の草の消そこなへるを見て菅ならんと闇に補しものなるべきかさらば松が根見んにと有しならん

闇夜者、辛苦物乎、何時跡、吾待月之、 今本月毛とあれど之の誤ならんよりて改む

早毛照奴賀、」 おもへる人を月によそへ吾闇にまどへるをたとへしならん

朝霜之、消安命、爲誰、千歳毛欲得跡、 今本欲得をかなと訓たれど集中の例がもと訓て意均し例によりてあらたむ

吾念莫國、」 君かためなど人をさしいふべきをたがためにとうちつけならでいひてさて千歳をも經んとこひねがふ心のせちなるをおもふといふをたがためにとおほよそにいへれば下におもはぬにとかけてかへし心得るてにをはにいひ出たるなり「みちのくの玄のぶもぢずりたれ故にみだれんとおもふわらならなくに」などのちによめる皆此歌にすがたをとりたる物なり

今本こゝに右一首不有譬喩歌類也云云と云り撰者の意ならば雖不類と書べし其上此歌のみならず譬歌ならぬもあればかた〳〵後人のさかしらならんよりて注を捨つ

山跡之、 四言

宇陀乃眞赤土、左丹著者、 妹に手ふれたらばといふを宇陀の赤土の物につきやすきもてたとへて下に其所もか人のといふ今本者を脱せり左丹著とのみありては語をなさずよりて補ふさて左は發語なりにつかば、似つくなり

曾許裳香人之、吾乎言將成、」 そこもかはそれをもと云が如しわれその人に似つかばそれを人のいひさわぎて言をなすらんといふなり

木綿懸而、祭三諸乃、神佐備而、 三諸は地の名にあらず三は眞に通ひ神室を云神さびは神すさみぶりなり是まではいむといはん序なり

齋爾波不在、人目多見許增、」 いみさくるにはあらず人をはゞかるとなり

木綿懸而、齋此神社、可超、 今本いみしやしろもと訓るはひが事なり社をこゆる事あらんやのちに千早振神のいがきも越ぬべしとてよめるなり

所念可毛、戀之繁爾、」 他妻か又いはひむすめか

不絶逝、明日香川之、不逝有者、故霜有如、人之見國、」 相もへる中におもひかけず通がたき事あるをかくたとへよみしならん

明日香川、湍瀨爾玉藻者、雖生有、四賀良美有者、靡不相、」 女の歌にてもる人多みなびきあひがたかるに譬よみしなり

廣瀨川、 紀(天武)に祭大忌神於廣瀨河曲と見え神名式にも大和國廣瀨郡坐神云云と見えたり

袖衝許、淺乎也、 川瀨を渡るに垂たる袖の末のや、著ばかりなるはいと淺き水のさま也そを夫の心淺に譬ふ

心深目手、吾念有良武、」 さばかり人の心は淺きにわれのみいかでふかめてはおもふらんとみづからをとがむるなり

泊瀨川、流水沫之、絶者許曾、吾念心、不遂登思齒目、」 流る沫のたえぬ如くにとげざる事あるまじければとげじとおもはじとなり

名毛伎世婆、 長息なり

人可知見、山川之、 如くを入て心得べし

瀧情乎、塞敢而有鴨、」 せがへの加は伎阿の約にてせぎあへたるなり心も涙もたぎりたるを人に玄られん事のつゝましさにせきとめたりとなり

水隱爾、氣衝徐、早川之、瀨者立友、 こはくるしき事の限をいひならべてちかひことのたとへとしたるなり水に入くるしき徐りたつところも又早川にてくるしきなりさて此立友を今本にたてどもとよめり然よみては此歌解得べからず且雖立とか、ば玄かよみなん立友とかけるは清てたつともと訓事もとよりなり

人二將言八方、」 いか成苦敷事有共ちぎりたる事を人にあらはしいはんやとなり

眞鉋持、 冠辭

弓削河原之、 河内國若江郡

埋木之、 是まで序なり

不可顯、事等不有君、」 事とあらなくには事にあらぬになり人とあらずはなどいふに同じ忍びたる事あらはれ

安きを譬事等一本事爾と有

大船爾、眞楫繁貫、水手出去之、　【水手出去之こゝに去之と云てはにしは過去の辭故心とほらず奈者とかともとかいふ言は聞えがたし】

奥將深、潮者干去友、」　鹽は干去ともにて潮干にも沖はふかしと云さてこは貴き人を戀るか又女のゆるさじと思へるなどを譬しならん

伏超從、　案に土佐國安藝郡の海邊の山道に今伏越と云地有若是ならん歟

去益物乎、間守爾、　後に波の關守と云に同じ

所打沾、浪不數爲而、」　浪不數は浪不考なり今も遠江人は船出するに波をかぞへそこなひしなど云といへりおもひ合よさてふしごえゆ行ましを磯邊を行て波の打來るひまをかゝなへ得ずして浪にぬれぬといひて玄ぬび逢中の通路は人玄づまりて行べきを心はやりてかゝなへもせで行て事あらはれしを悔おもふ涙にぬれぬるにたとへしなりこは防人などの行守る地にて思ひあへる中の歌ならん

石隱、　今本灑とありていはそゝぐと訓たれどさては歌意とほらず例もて隱の誤として改【こは今本のまゝいはそゝぐの方よかりなん奥人】

岸之浦廻爾、　岸の浦地名にあなずたゞに浦のこゝろのみ

綠浪、邊爾來依者香、言之將繁、」　石がくりはかくれ玄のぶにたとへよする浪來よるは絶ず通ふ事にたとふこは女の歌にてたび〳〵かよへる男に人のいひさやぎなんと玄めしたるなり

磯之浦爾、　或人云住吉にありと又紀伊國とも今案に集中磯の浦とよめる唯二首あり地の名にあらずたゞ浦といふのみなり

來依白浪反乍、　きよりつ〳〵の意

過不勝者、雉爾絶多倍、」　雉は借字岸なりかゝる借字淸濁にかまはざるは例あり岸うつ波のよせてはかへるを男の來りてはやかへりなんとするにたとへてかくこゝをすぎがたく通ひ來り給ふからは玄ばしはたゆたひとまれどこも波のたゆたひなんにたとへて男のためらひあらんをこへるなりけり

淡海之海、浪恐登、風守、　船出せんに風のはげしかれば風待するなり

年者也將經去、榜者無二、」　浪あらきをかしこみて風待して船出せずしてあらば年經て船を榜とふ事なけんといひて吾思ふ中も人のいひさやけらんをかしこみはゞからば事はたしがたからんてふたとへにいへるなり

朝奈藝爾、來依白浪、欲見、吾雖爲、風許增不令依、」　朝毎に便につけて來る男をあひおもへれどかたみになかだちのすべなかるを譬しならんこも女歌なり

紫之、　冠辭

名高浦之、　紀伊國在

愛子地、　砂地に同じ

袖耳觸而、　こは冠辭よりかくいひ下せるなり（卷一）に「引馬野ににほふ萩原入みだり」などいふつゞけがらに似て此紫の名高き浦の眞砂子地ににほひふれたるばかりにてとこ云なり

不寐香將成、」　名は其の浦てふに人にいひさわがれて名のたゝんをいひよせさるから妹があたり行ふれたるばかりにて枕まくまでならずやあらんとなりかく冠辭の意を下までもいひ下すは奈良に至りての事にて古へならず

豐國之、　豐前なり

間之濱邊之、　今本是を間之濱と訓るは僻事なり（卷十六）に豐國之聞之池有菱之未乎採跡也妹之御袖濡家武とあるによるなり

愛子地、　眞直道として眞直にいひかく是まで序なり

眞直之有者、何如將嘆、」　眞直にうけひかば何をかなげきなんと云

鹽滿者、入流磯之、　今本入流と訓るはいまだし義訓にかくるゝとこそよまめ

草有哉、見良久少、戀良久乃大寸、」　磯邊の草の滿潮にかくるゝを見る少く戀るおほきに譬ふ

奥浪、依流荒磯之、名告藻者、心中爾、靡成有、」　今本靡を疾跡としてとくと、訓歌意とほらず一字の二字となれる事次の歌にても玄らるれば改むさて名告藻を名告妹にたとへそは吾になびくならんと浪をおのれにたとへてよめるをとこの歌なりけり

紫之、　冠辭

名高浦乃、名告藻之、於磯將靡、時待吾乎、」　乎は添たるのみ名のりて名高しと浦の名によせ浪の來よする時まつと右の歌にこたへたる女の歌なり

荒磯超、浪者恐、　かしこしは父母などの見とがめなんをかしこむなり

然爲蟹、海之玉藻之、惜者不有乎、」今本乎を手として
あらずてとよみたれどさてはてにをはたがひ歌の意心
得がたし一本にとりてあらたむかく玄のびあふからに
かしこまるれどなびきかよへるがにくからぬとよめる
女歌なり
神樂聲浪乃、四賀津之浦能、船乘爾、　是までのりに
しといはんための序なり
乘西意、常不所忘、」妹が心にのりにしが道わすられず
といふか又妹がおのれにゆるして名をのりしがわすら
れぬと云か
百傳、　冠辭
八十之島廻乎、榜船爾、　是までのりといはん序
乘西情、忘不得裳、」序にたとへをいひて心の乘しを思
ひわすれがたしとなり
島傳、足速乃小船、　あばやはあしはやきの略言輕きを
云されば嶋〳〵を漕めぐるにたより有なり
風守、年者也經南、相常齒無二、」はやき物の遲きをい
ひて心ははやれどあはでふる年月の長きにたとふなり
水霧相、　語は天霧相などに同じさて波立あるゝをいふ
なり
奥津小島爾、風乎疾見、船緣金都、心者念杼、」他妻を
おもふ歟いつきむすめを思ふ歟いひよるべきすべをな
みたるたとへなり
殊放者、　殊は船の事をいはんとての借字言をさけばな
り
奥從酒甞、港自、邊著經時爾、可放鬼香、」船といはね
ど歌意は此港に船泊せんをいみさくる事あらば沖邊よ
り心して他し港に入べきに邊つ方迄至て船の着時にい
みさくべきものかといひてさて人言をさくるとならば
はじめにこそさくべけれ今事なる時にそをはゞからん
やと譬たり
旋頭歌。
三幣帛取、　三は眞の意
神之祝我、鎮齋杉原、　ふりにし世より生たてる神杉な
れば折取事までもいみさけて祝部が守りめかたき杉は
らなり
燎木伐、　燎木伐は其祝部が守るひまをうかゞひて伐と
らなんとする木樵人を指よりて體語にたきゞこりといい
ふなり
殆〻之國、　ほど〳〵はほどに〳〵てふ言なり敢は戀し
き淋しきてふ敷に同じくて物を玄きらする辭守る人立
廻り見るほどの玄きるをいふなり
手斧所取奴、」まもりめがほと〳〵玄げゝれば樵夫が手
斧とり得ぬといひて守りめかたきいつきむすめを戀ひ
て守る人のひまを伺かねしにたとふ
挽歌。
鏡成、吾見之君乎、阿婆乃野之、　物に見えず但次に吉
野の歌あればこはよしのゝうちにあるならんか
花橘之、珠爾拾都、」こは火葬をいひて骨を拾ふを云な
り
蜻野叫、　今本の叫は叫の誤既云
人懸者、　葬の後此野を人の言にかゝればなり
朝蒔、　欲詣の字にかれるのみ句なり
君之所思而、　君之は君乎の意なり
嗟齒不病、」不病は不止の意にかれるのみ
秋津野爾、朝居雲之、失去者、　此野に時に起る雲の立
消失るを見てわが思ふ人のうせにしむかしも今もかな
しく思ふとなり
前裳今裳、無人所念、」
隱口乃、　冠辭
泊瀨山爾、霞立、　こは妹をだびする煙にたとふ
棚引雲者、妹爾鴨在武、」
枉語香、逆言哉、　ふたつの加はかなと云入るなり
隱口乃、　冠辭
泊瀨山爾、廬爲云、」こゝに云逆言は轉倒したる意をい
ふべし紀に在る倒語とは少し異なりはつせの山に葬せ
しをいほりせりと云枉言逆言もそをいふなり
秋山、黃葉恠怜、浦觸而、　うらぶれはわびなる事既に
いふ
入西妹者、待不來、」もみぢあはれとめでゝそのめづる
あまりうらぶれて山に入しと妹が死のさまを常に取な
しいひ續るがいとかなしきなりさていりにしの言葉は
死をいふなり
世間者、信二代者、不往有之、過妹爾、不相念者、」す
ぎにし妹にあはぬをおもへばまことに世の中は二世と
ならび行事はあらぬなりとなり(卷十三)に空蟬乃、代
也毛二行、何爲跡鹿、妹爾不相而、吾獨將宿、とある
も同じ意なり
福、何有人香、黑髮之、白成左右、妹之音乎聞、」此歌さ
して玄らべのよきにもあらずたゞに見てはめでつべき

歌ならねどまことのまこと、云はか、る類を云なりまづ歌の意は白髮までもろともに物かたらへる幸人も世にはあなれ吾も玄か契りたるにいとはかなくさき立ぬる妹がわかれのかなしけれとなり扨吾が妹を先立て人の妹背黑髮の白かるまで在合を見ば誠にかくこそうらやみぬべき事なりされどひが人はおのれがうれはしきには人の幸をもねたみぬべきにかくめづるぞまことなる玄かるからにあかずわかれし妹をこひ玄のべる情の深さも一しほに千五百年の後にもめで、もひはからるるはまことならずや他の國に品たて、敎ゆる信てふ事義てふ事にもかざらずをしへずしておのづからにかなへるは吾國のなしのま、なる益人ならん玄かも此歌いさ、けばかりも義めきたる事なくて思ふがま、にうち出たるにおのづからそなはれりかく見れば歌もいよ、よろしくおもはるれされば歌はかくこそあるべけれ吾國ぶりのをしへごと外にとめまどふべき事ならず

吾背子乎、何處行目跡、辟竹之、　冠辭

背向爾宿之久、【之久の約須なり此須は佐志多留の約にてたがひにねさしたると云なり奥八云卷十四東歌の末に可奈思伊毛乎伊都知山可米等夜麻須氣乃曾我比爾宿思久伊麻之久夜思母と有は理りよし玆に吾背子と有は心ゆかず妻として夫をそがひにねさすべき事にあらねば吾妹子の誤なるべし】

今思悔裳、」　歌の意は在し世にはたはやすく思ひてうしろむきてもねしが今きらくやしとなりねしくは寐しなり前に今はを今しくはと云類なりこも又おもふがま、なる物なり

庭津鳥、　冠辭

可鷄乃垂尾乃、亂尾乃、　序なり

長心毛、不所念鴨、」・こは妹背の中の永きわかれのかなしみにたへず世にながらふべくもあらぬとなり玄らべよき歌なり

薦枕、相卷之兒毛、在者社、夜乃深良久毛、吾惜責、」

相まくら卷し妹があらばこそあれ今はなし世に有ならば夜の更行も吾をしみなんと云なり言も心もおのづからなる物なり

玉梓能、妹者珠罷、　玉梓の妹と云ふ事外になしおしていはゞ玉梓の使にてき、つる妹といふか又玉梓は玉柜にて山柜の事歟といふ説もありさらば山柜のうつくしきより妹と云冠辭ならん【玉瓜はからす瓜の小き物にてうつくしき物なれば妹にたとへたり小苑】

足氷木乃、　冠辭

清山邊、蒔散漆、」　今本散染とありてちりぬると訓めり漆の草の染になりつらん或本の歌により假字に玄たがひて字を改むさて玉は山にもあるべけれど此國にてはいひなれず集中にたゞ水邊にのみよめり然ればこは或本によるべし或本の歌に玉梓之、妹者花可毛、足日木乃、(冠辭)此山影爾、麻氣者失留、玉梓の使にて在と聞つる妹は花かともひて山路に覓つ、來て見るにちりてなしとなり葬しを慕來てその山にてよめるうたなり

羇旅歌。

名兒乃海乎、　住吉なる歟又越中を云か

朝榜來者、海中爾、鹿子曾喚成、何怜其水手、」　鹿子は借字水手なり今本鳴とあるは喚なり鳴の草喚に似たりよりて誤りしなるべしゆゑにあらたむ水手が聲の聞ゆと云なり(卷十五)新羅へ渡る海路にてよみしに此樣ありよりてより所有にまかせ字を改む

萬葉集卷八之考終

萬葉集卷九之考

附ていふ

○此卷を九の卷とする事は末に天平五年の歌あるをもてなり卽今の五の卷なり其よし卷一のはじめ同卷の記にくはし

○此卷は山上の憶良の太夫の歌集なり自の歌あるひは大伴旅人卿と大伴淡が贈答又旅人卿と房前卿贈答其外他人のも載たれど皆おのれをいやしめ人をたふとめるさきにて書體も一曲あるは必憶良太夫の家集なり

○歌の端詞の如く小序體の文あるは詩ありこは歌にあづかれる歌にて其言なければ歌意とほらぬもあれど此考は歌のことわりをいふなれば考には皆のぞきてくはしくは別記にあげてそもことわるべき事はあら〳〵ことわりぬ

○右の小序文右左にはじめの卷々のさまにはし詞あるは年月日あるは國所人の名などをあげしはみな前にならひて訓を書そへことわりを云べきは其下にいへり

○今本一條のわかち左につくや右につくやわかちがたし仍て間一行をあけて一條々々をわかちて其ことわりをきざごとの下にいふ

萬葉集卷九之考〔流布本卷五〕

雜歌。

○大宰帥大伴卿報凶問歌一首、

（卷十二）に式部大輔石上堅魚朝臣の歌の左に右神龜五年戊辰大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉于時勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣太宰府吊喪幷賜物と見ゆ右に凶問といへるは此つかひをさし云但此端詞は山上憶良が旅人卿より左の詞幷歌をおくられたるを云るしおかむとて書たるなり卿のはし書にあらず

此所に大伴旅人卿の小序の文あり其意は彼卿妻大伴郎女薨られし憂をいひ勅使の二人になぐさめられてやうやく命を全したりといふ事あり其文をのぞける事ははじめに云下これにならひて見よ

余能奈可可波、牟奈之乃伎母乃等、志流等伎子、　こゝに毛の辭を省きたるなり毛をそへて見よ

伊與余麻須萬須、加奈之可利家理、」　此歌卽旅人卿の歌なるを憶良の書とゞめ置たるははし詞にて云れ

神龜五年六月二十三日　此年號月日は上の歌につゞきて旅人卿よりおくられし時日なり

此所に山上憶良の自の文幷詩一首あり別記にいふ此文歌ともに憶良の妻の卒し時の事なり

○日本挽歌一首、　歌に文と詩あるによりてこゝは日本挽歌と書たるなり後世和歌とふ類にあらざるを見よ

大王能、　等保乃朝庭等、　こゝに豆を入て心得よみかどとてなり遠つ國といへども云ろしをす所は皆みかどなりされば新羅高麗とても云なり

斯良農比、　冠辭四言

筑紫國爾、泣子那須、　冠辭

斯多比枳摩斯提、　あとより妻の太宰府へ來りしなり

伊企陀爾母、　こは道いそぎ行はいきぐるしくせはしきなり妻の太宰府にきたりて程なく過にしはかなさを次次にいはんとてなり

伊摩陀夜周米受、年月母、伊摩他阿良禰婆、　此婆は既云如くあらぬにと心得べし

許許呂由母、於母波奴阿比陀爾、宇知那比枳、　身のうちなえるなり

許夜斯努禮、　こゝにこやしぬればとあるべきを婆の辭をのぞきたるは古體を用ゐたるなりさてこゝは七言の句なれどこも古體にせるなり許也斯奴禮は紀に（推古）聖德太子飢人にたまへる御歌に許夜勢婁諸能多比等阿波禮とよませ給へる同言なり語の意は許は許呂の下略夜は也留の下略にて凝遣なりこを許夜須と云は世婁約にて則太子の御歌は許夜須を延たるなりさて此許婁は許呂備ともいふは備は不志約なりこゝの歌に許夜斯といふ斯は世里約にて許也里世利なり此集反又展を許伊不須と訓し許も右に同じ

伊波牟須磐、世武須磐斯良爾、石木乎母、　いは木をもはたとへいふなりこやしふしすぎぬれば石木の如くなるをもて下の毛はそへたるのみその石木は非情のものなればとひさけ辨んすべなしと下のとひさけにつゞけしなり

乃比佐氣斯良受、　とひさけのとひは問なりさけは式の祝詞にふみさくといふはふみさけなり此さけはさきと同言にて問分辨ふるを云らずといふにて分ちを云らぬなり

伊弊那良婆、　都の家ならばなり

迦多知波阿良牟乎、　知は利に通ひ阿と乎と通ひてかたりはをらんをなり都の家ならば人も多く語合てもなぐさみ居んになり

宇良賣斯企、伊毛乃美許等能、阿禮乎婆母、　あれは吾
なり下の母は助辭なり
伊可爾世與等可、爾保鳥能、　冠辭
布多利那良吠爲、　此ふたりならび居を關雎の意と云說
あり此頃に至りてはもはら唐ざまを用ゐたればさもあ
るか左か見るすぎたり
加多良比斯、許許呂曾牟企豆、　背向てなり
伊弊社可利伊摩須、」　家さかりは家放なり
反歌
伊弊爾由伎豆、　奈良の家なり
伊可爾可阿我世牟、摩久良豆久、都摩夜佐夫斯久、於母
保由倍斯母、」　四の句のつまやは閨房をいふ
伴之技與之、　はしきよしは(卷一)の別記にいへる如く
うつくしむこゝろなり
加久乃未可良爾、　からにはゆゑにて卽かくすぎゆかん
ゆゑ一しほ其心の中に左たひおもはるゝまゝに左たひ
こせるいもがこゝろとなり
之多比己之、伊毛我己許呂乃、須別毛須別那左、」　妹が
心の爲便の爲方なしなどいひ入なげくなり
久夜斯可母、　くやしきかなゝり

可久斯良摩世婆、　良は里と通摩は毛と通ひてかく左り
もせばなり
阿乎爾與斯、　あをによしといひて奈良の都の事とする
は奈良の朝に至りての轉ひなり
久奴知許等其等、　くぬちのぬは乃字の約にて國の中な
り
美世摩斯母乃乎、」　都に在し時國のうちをことゞく見
せんものをとなり女は物見をこのめれどさはりありて
出がたかるものなるをかゝるなげきにつけておもひ出
らるゝ心のまことをそのまゝよめるにてまことなる歌
なり(卷十七)に哀傷長遊之第一首幷短歌とある末の歌
に可加良牟等可禰豆思理世婆古之能宇美乃安里蘇乃奈
美母見世麻之物能乎も同意なり
伊毛何美斯、阿布知乃波那波、知利奴倍斯、和何那久那
美多、伊摩陀飛那久爾、」　長歌にいきたるもいまだやす
めずとあれば妻の卒せしは五月のはじめにや又はじめ
の歌に家にゆきてといへるも故郷の家なれば此樗もな
らの家にて妹の見し木なるべしさてわがなく涙はまだ
かはきもやらぬに此木の花はちり過ぬらんと思ひあは
せてなげくなり

大野山、　筑前國御笠郡
紀利多知和多流、　句なり
和河那宜久、於伎蘇乃可是爾、紀利多知和多流、」　大野
山に立霧は卽わがなげく息なりとなり神代紀に吹棄氣
噴之狹霧とあるぞこれらの言のもとなり四の句の於伎
は息なり蘇は佐志の約にて息さしなり【蘇は佐志の約
志を曾に通し云と有べし】
神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上、
是は憶良の妻の卒し時いたみて作りし詩歌なりこゝ
に憶良上るとあるは靈に對せる詞歟若旅人卿あるひ
は別人に見せらるゝゆゑよし有か
○令反惑情歌一首幷序、　是も同じ時に人ごとめきてみ
づからのまどひをはるけし歌のはしことばなりこゝに
歌一首とあれど反歌ともには二首なり唐めきてかきた
れば反歌はこめ言て序をいふ下これにならへ此卷より
下唐意をおもにせれば吾國の手風にかなはず
此所に父母へのつかへをわすれ妻子を不顧ものありと
して三綱てふ事を左めし五敎てふ事をひらき歌もて惑
をはるけさするなどいふ序あり
父母乎、　美禮婆多布斗斯、妻子美禮婆、　米具斯宇都久
志、　米具之はまくはしをつゞめいへるなり宇都久志は
愛しむなり一本こゝに遁跡得奴、兄弟親族、遁路得奴
老見幼見、朋友乃、言問交之云云とあり【米具之の具は
具牟の約目籠敷と云言なり惠も同じ秀は荒良言に云】
余能奈迦波、加久叙許等和理、　序中にいふ三綱のうち
二綱をこゝまでに云こゝを句とすべし
母智騰利乃、　もち鳥のかゝるといひかけたりさてこゝ
はそのかゝるをかゝはるにいひかくる冠辭のみ妻子を
めで思ひかゝはるはもとよりうべなりといふなり
可可良波志母與、　此間一句說其輩乃などの句ありしな
るべし其ともとはやがて憶良の妻をさし云めぐしうつ
くしの語に應
由久弊斯良禰婆、　こは妻の死しを云
乎既具都遠、　小毛沓也いさゝげなる沓にてぬき捨やす
きなり
奴伎提、【一本奴伎提の提字無】
都流其等久、　序文の脫屐にあたるこは舜の天下をたつ
る事のやすきにたとへし唐語なれどこゝにては自の妻
のなげきに官職をも容易すてめと思ひなりしを云
布美奴伎提、　上の詞此句までかゝるなり

由久智布比等波、　卽みづからをさすなれど序文の異俗先生といふにあたる

伊波紀欲利、奈利提志比等迦、奈何名能良佐禰、　こゝは五言の句なるを七言に云も古體を用ゐしなりさてかくいふもかの異俗先生は岩木より生出し人かことなる人なれば名を告となり此さねの延言の解は卷首にくはし

阿米弊由迦婆、　奈何麻爾麻爾、　此句まで言の數を定めずこも上にいふが如しさてその先生のさまを見るに心空にて其つとめにうときはいかなるにやされども天に行まさんならばいましがまに〳〵せよとなり

都智奈良婆、大王伊麻周、許能提維周、日月能斯多波、阿麻久毛能、牟迦夫周伎波美、　式の祝詞に四方國者天乃退立限青雲乃向伏限こはいつ方に向ても天の退立如く見え雲の向はる、方に伏てある限天皇知食國土の廣きをたとへしことばなり

多爾具久能、佐和多流伎波美、　こも同じ祝詞に皇神乃敷坐島乃八十島者谷蟆能狹度極とありてこは谷澤の木の枝にいとちいさき蛙のあるがかれが歩のはこびを狹き事にたとへ大王の知食さぬ方なきをいへることばなり

企許斯遠周、久爾能麻保良叙、　つちならば以下の十句は序文にいへる三綱の中の一つをはじめにのこして對句として歌を終るにてこゝが君臣にあたるこはあめ行き空かけるならばながまに〳〵せよ此國土にては遠き近きも皆大君の聞食國の眞中ぞとなり麻は眞なり保は穂にて眞秀なり良はそへいふ辭のみ

可爾迦久爾、　左に右になり

保志伎麻爾麻爾、　ほしき隨意とはかの先生の思へるまに官職つとめをおろそかにしてなりこはみづからおのれをいましむるなればはじめにいふ如く事をまうけたるをもはら唐意なれば歌もことにむづかし

斯可爾波阿維慈迦、」　たがへる事をならべあげてさはあるまじといひてみづからいましむるなり迦は疑の歟にて問意の辭なり

反歌

比佐迦多能、　冠辭

阿麻遅波等保斯、　長歌の天行ばをふたゝびいふなり

奈保奈保爾、　こは直人と云はたゞ人をいふと同じくただ〳〵なり

伊弊爾可弊利提、奈利乎斯麻佐禰、」　爾は禰に通ふなればゑまさねか又禰を誤る歟歌の意は遠きあまぢにまどひたらんよりも此國ちの家におのが業をつとめねとかへすゞ〳〵もおのれをいましむるなり

○思子等歌一首　幷序

此所に佛も子をめぐしとしたまへば人誰かは子をうつくしまぬてふ憶良の序文あり別記にいふ

宇利波米婆、　熟瓜を食なり

胡藤母意母保由、　保由は不の延言にておもふなり

久利波米婆、　栗を食なり

麻斯提斯農波由、　子等をなり婆由は夫の延言ゑのぶなり

伊豆久欲利、　枳多利斯物能曾、　愛の餘りにいふなり

麻奈迦比爾、　眼の際にてまみのあひを通し約いふ

母等奈可可利提、　もとなはよしなゝりかゝりては目にかゝりてなり

夜周伊斯奈佐農、」　やすいは安寐なり斯は助字なりなましめぬにて夜も安くねぬとなり

反歌

銀母、金母玉母、奈爾世武爾、麻佐禮留多可良、古爾斯迦米夜母、」　都にとゞめたる子を筑前の國にておもふなり此終に戀二男子名古日一長歌に「世の人のたふとびねがふなゝくさの寶もわれは何かせんわが中の生れ出たる白玉のわか子古日者云云」もこゝに似たり

○哀世間難住歌一首幷序

此所に唐の書の意もて老をなげく憶良の序あり委別記に云

世間能、周弊奈伎物能波、年月波、奈何流流其等斯、等利都都伎、意比久留母能波、毛毛久佐爾、　百種になり

以上四句はながるゝ如しといふよりつゞけて世の中のうきことも、ちよりつゞき死なん時も近より來たりせめよるといひてくるしき心の多きを云一首の大意なり

勢米余利伎多流、　上の注此句までかゝる

遠等咩良何、遠等咩佐備周等、　今本二つの咩を呼にあやまれり誤ゑるければ改をとめさびは少女ずさみと云が如しなぐさみといふにあたるなり事は(卷一)の別記にくはしく云

可維多摩乎、　此頃もはら唐をたふとみしゆゑから玉とほめていふのみ

多母等爾麻可志、　加志の約謎にてまきなり或本之路多倍乃、袖布利可伴之、久禮奈爲乃、阿可毛須蘇吼伎、茶知古良等、　今本茶を余に誤か書の消しなるべしよりて改どちこらは達兒なりたと同音同士の字音とおもふは誤なり宇萬人は宇萬人どちやいづこはやいづこどちといふにおなじなり

手多豆佐波利提、阿蘇比家武、等伎能佐迦利乎、等等尾迦禰、　難留なり

周具斯野利都禮、　こゝに婆のてにをはなきは古なり且これまで十句は女のさかりをいふ十句の終の二句はつぎに老おとろふをいはん序なり

美奈乃和多、　冠辭

迦具漏伎可美爾、伊都乃麻可、斯毛乃布利家武、　白髮をいふ

久禮奈爲能、　一云爾能保奈酒（丹の穂なり）

意母提乃宇倍爾、伊豆久由可、斯和何伎多利斯、（句なり）上の八句は女の老のおとろへをいふ此跡の句より男をいふ一本都禰奈利之惠麻比麻欲吼伎散久伴奈能宇都呂比爾家里余乃奈可伴可久乃米奈良久

麻周羅遠乃、遠刀古佐備周等、都流岐多智、　古事記に都牟賀利乃太刀と有此牟と留とは横に通ひ賀利の約義にてつるぎと云なり其つるぎとは尖てふ言にて都と登と同言とがりなり都留義乃太刀の乃を省は都留義陀智と濁なりされどこゝもつるきだちといふはたゞほむる意有

許志爾刀利波枳、佐都由美乎、　幸弓なり記紀ともにみえたり

多爾伎利物知提、阿迦胡麻爾、　赤駒なり

志都久良宇智意支、　こゝの志都久良を今いふ馬具の切付の事として下鞍なるべしと和名抄物具裝束こを引ていふ説あれどつるぎたちと云幸弓といひ皆ほめて云具の中なれば常の物にてはこゝにかなはず男ざかりの裝にてうるはしきをつとへよめれば倭文繦の鞍なるべしとやごとなき御説ありをとめさびの裝をいふにあひて對にもかなひいとめでたき御説にこそ

波比能利提、　【波は波世の約比は夫利の約早ふりのりてと云ならむ（奥人）蜻蛉日記に例の人はあないする便もし有なば女などしていはする事こそあれ是はおやとおぼしき人は戯にもまめやかにもほのめかしゝにひけきこと、言繼をも去らず顔に高所はひ乘りたる人しむる事もあればそをたかぬといふ歟さらば老人の腰のくるしさにいこふとて杖をたはめて腰押すさまにやたがねはたはめなり

可久由既婆、比等爾伊等波延、　いとはれなり

可久由既婆、比等爾邇久麻延、　此まえのえもれなりこれより上六句も男女にあつ

意余斯遠波、　老しをばの意なり源氏物語におよづけと云も老付意なり【意與斯遠波斯遠の約會なれば凡は歟】

迦久能尾奈良志、多摩枳波流、　冠辭

伊能知遠志家騰、　をしけれどの略

世武周弊母奈斯、」　男女ともにおいしはかくの如くのみにあるらしと云なりさてそのおいしいのちのきはみにちかければせんすべもなき世の中ぞとなり

反歌

等伎波奈周、迦久斯母何母等、　今本何母はなくて加久斯母等とあり脱たるなるべし一本による

意母閉騰母、余能許等奈禮婆、等登尾可禰都母、」　常磐の如くあれかしがなとねがへど世の中のさまにてとゞめかねつとなりとゞみのみに尾を借たるは美は備の半濁故なり

て打たゝかす云云】

阿蘇比阿留伎斯、　句なり是まで十句男ざかりをいふ

余乃奈迦野、都禰爾阿利家留、かはらず常にありけるなり

遠等咩良何、　今本咩を呼に誤る

佐那周伊多斗乎、　佐は發語奈良の約奈なれば良を略けるにて奈良須なり女のうちより戸を押開きて通來る男を内へいれんとする者を云なり

意斯比良伎、伊多度利與利提、　伊は發語たどりよるは男なり

摩多麻提乃、多麻提佐斯迦閉、佐禰斯欲能、　摩たまでの摩は眞にてほむることば玉手の玉も同じくほむる辭うるはしきはだへをいふさしかへはまくらをかはすなりさねしのさは發語なり

伊久陀母阿羅禰婆　此禰婆は例のぬにに通ひてあらぬになりいくたは幾度の略ならんとせんか猶考るに伊は發語にて久は古に通はせこゝたくを略きいふ歟これより上十句は男女をこめてさかりをいふなり

多都可豆惠、　手束杖なり

許志爾多何禰提、　此ことば杖に應せぬ言なり但したは

神龜五年七月二十一日於嘉摩郡　筑前の國なり
撰定筑前國守山上憶良
此所に大伴淡等大伴旅人卿へこたへまつる文あり
○歌詞兩首（太宰帥大伴卿）此二首の歌は此所の注の如く旅人卿なり此集に憶良のかき集るとき返翰の歌のみにては歌の意わきがたき故こゝに旅人卿の歌をものせられしなり
多都能馬母、　周禮に凡馬八尺以上爲龍といへどこゝに龍馬とは只良馬をいふのみ
伊麻勿愛氐之可、　欲得と書意なれば此可は濁るべし
阿遠爾與志、　冠辭
奈良乃美夜古爾、　冠辭
宇豆都仁波、安布余志勿奈子、奴婆多麻能、　冠辭
用流能伊味仁越、都伎提美延許曾、」　夢を伊味とよむべき事こゝにはじめて假字書出たり伊味仁越の越は助辭のみ此二首筑紫にて旅人卿の都を戀給ひよみて淡等におくりたまへるなり
○答歌二首　これも憶良の書つけし時の標なり歌は大伴淡等返翰につけたるなりけり
多都乃麻乎、阿禮波毛等米牟、阿遠爾與志、　冠辭
奈良乃美夜古爾、許牟比等乃多仁、」　多仁は多米爾の略か一本には多米とあれば誤字か
多陁爾阿波須、阿良久毛於保久、　句なり阿良久はあるの留を延たるなり
志岐多閉乃、　冠辭
麻久良佐良受提、伊米爾之美延牟、　見えなんに同じ夢に見えめといふは見えとぞと願ひとせるによりてなり此二首都にて筑紫より旅人卿のおくり給へる歌にこたへ奉りて筑紫への返翰と共に奉りし淡等が歌なり
○大伴淡等謹狀
此所に梧桐日本琴一面と有て【日本琴和名抄云體似箏而短小有六絃俗用倭琴二字夜萬止古止大歌所有鴟尾琴止比乃乎古止倭琴首造鴟尾之形也伊勢鎮座本紀曰天香弓與並叩絃今世謂和琴其緣也】次に文あり別記にいふ其文の意は夢のうちに彼琴をとめとなりて君か手にふれんとねがふ意なりさて其琴の娘子のうたなりとて左の歌につゞく
伊可爾安良武、日能等伎爾可母、　いつの時いづれの日にかなり
許惠之良武、　列子曰伯牙善鼓琴鍾子期善聽てふ言をお

もひより給ひてその伯牙鍾子期等を房前卿にたとへ給へる意も琴の娘子の歌とし給へるにやさて聲をらん人の膝の上とつゞけて見るべし
比等能比射乃倍、　聲をらん人とは房前卿をさす
和我摩久良世武、」　今本世を可に作るは誤をるければあらたむ
○僕報詞詠曰、　これは旅人卿の自琴の娘子の歌にこたへ給へるはし詞なり
許等等波奴、紀爾茂安理蒿毛、　今本蒿作等
和何世古我、多那禮乃美巨騰、都地爾意加米移母、」　移を耶とよめるは紀（神功）に爰斯摩宿禰、卽以偃人爾波移、與二卓淳人過古一二人遣二百濟國一と見え其移の字の傍に野私とそへたり野は訓をゑらせんとてなり私の字は和名抄にいふ公望か日本紀私記の印なりさればいづれにも耶と訓べき證はあるなり百濟などの音にや
○十一月八日附二還使大監一　還使大監とは大伴宿禰百代なりさてこは朝集使正稅使などにて百代の都にのぼれる序に右の書等と琴とを旅人卿より房前卿へ贈られし其返翰を此百代に房前卿の附られしなり百代の太宰の大監なる事は卷十三十四に見えたり
謹通二　尊門　記室一
百官志曰王公大將軍幕府皆有記室掌草表書記】大伴旅人卿より藤原房前卿へ和琴を贈らる、時のたはむれにつくり給へる文並歌どもなり左にある歌は卽房前卿よりの返束なるを其儘に憶良の自の集に書のせしものなり
此所に總前卿より旅人卿へ返翰の文ありて左の歌につづく委しくは別記にいふ
許等騰波奴、紀爾茂安理蒿毛、　今本蒿作等
和何世古我、多那禮乃美巨騰、都地爾意加米移母、」　移を耶とよめるは紀（神功）に爰斯摩宿禰、卽以偃人爾波移、與二卓淳人過古一二人遣二百濟國一と見え其移の字の傍に野私とそへたり野は訓をゑらせんとてなり私の字は和名抄にいふ公望か日本紀私記の印なりさればいづれにも耶と訓べき證はあるなり百濟などの音にや
○十一月八日附二還使大監一　還使大監とは大伴宿禰百代なりさてこは朝集使正稅使などにて百代の都にのぼれる序に右の書等と琴とを旅人卿より房前卿へ贈られし其返翰を此百代に房前卿の附られしなり百代の太宰の大監なる事は卷十三十四に見えたり
謹通二　尊門　記室一

此所に憶良の文にて筑前國怡土郡深江村子負原の丘に息長足姫天皇の御袖につけ給ひしてふたつの石【日神功皇后本紀九曰于時也適當開胎皇后則取石挿腰而祈之曰事竟還日產於茲土其石今在于伊都縣道邊云々鎮懷石大者長一尺二寸六分圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺一寸圍一尺八寸重十六斤十兩並皆隨圓狀如鷄子】大さ小さおもさかるさをいひて此石をぬかづきをがみてよめる歌とて左の歌につゞく

可既麻久波、　かけまくは音にかけんはなり

阿夜爾可斯故斯、　綾の紋の如くとざまかくざまいりたちてかしこみたふとむなり

多良志比咩、可尼能彌許等、　六言こゝは七言の句なるを始にもありし如く古體にせんとて六言にせし歟又誤て乃を脫せし歟

可良久爾遠、　から國は三韓國なり

武氣多比良宜豆、　むけは吾朝廷にむかはせ給ふ加波世の三つを約計となればなりたいらげも同じ言なるをかさねていふなり

彌許々呂遠、斯豆迷多麻布等、　鎮なり

伊刀良斯豆、　伊は發語とらしましてなり

伊波比多麻比斯、　齋なり

麻多麻奈須、　眞玉の如きなり

布多都能伊斯乎、世人爾、斯咩斯多麻比豆、余呂豆余爾、伊比都具可禰等、　可禰は哉の意にてかもと云に同じ

和多能曾許、　冠辭

意枳都布可延乃、　上のおきつはふかえといはん句中の序なりふかえははじめの文にいへる怡土郡なり

宇奈可美乃、　筑前に今もうなかみてふ所あり

故布乃波良爾、　はじめの文に子負の原と云これなり

美豆豆可良、意可志多麻比豆、　令置たまひてなり

可武奈何良、可武佐備伊麻須、久志美多麻、　奇魂紀にくしみたまと訓てあやしきまでにたふとき神御魂をいふ

伊麻能遠都豆爾、　現にてうつゝなり

多布刀伎呂可儀、」　呂は助字なり

反歌

阿米都知能、等母爾比佐斯久、伊比都夏等、許能久斯美多麻、志可志家良斯母、」　志可の下に字を入て心得べしかなしてけらしもなり

右事傳言那珂郡伊智郷箕島人建部牛麻呂是也、　右のいはれを此牛萬呂のいひしを聞しなるべし

○梅花歌三十二首幷序、　こを訓にならびに序と訓は江家の傳序あはせたりと訓は菅家の說といへるは實しき言にあらじ

此所に天平二年正月十三日帥の家に人々集ひて宴し春の庭のよきにもよほされて歌よみして心をのべたりてふことの文有くはしくは別記にいふ

大貳紀卿

武都紀多知、　武都紀多知は正月はもとつつきなり毛都約武なればなり委三四五六の別記にあり

波流流能吉多良婆、　多良婆の多は豆阿約きてあらばなり

可久斯許曾、烏梅乎乎利都々、　梅を烏梅と書たるは假字書なるのみ心有にあらず戲書なり

多努之岐乎倍米、」　たのしきをへめはをはらめにてかくの如く梅を折かざして樂をつくさめなり（卷十九）春裏之樂終者梅花手折毛致都追遊爾可有

小貳小野大夫、　（續日本紀太宰大貳從四位下小野朝臣老卒とあり此人也卷十四にも少貳と見ゆ）

烏梅能波奈、伊麻佐家留期等、知利須義受、和我覇能曾能爾、　わがへのへはゑの如く唱べし

阿利己世奴加毛、」　己世奴は乞の意にて有こせにて奴はよといふに同じくありこせよかなりやがてねがふ意なり【奥人按に奴はよと云に同じとはいかゞこせねと云に同じとはいふべし又本のまゝにてこせぬといひても聞えざるにあらず】

少貳粟田大夫

烏梅能波奈、佐吉多流曾能々、阿遠也疑波、加豆良爾須倍久、奈利爾家良受夜、」　古へ梅を挿頭すにも柳の蔓もし正月七日の節會の舞の臺にも梅柳をたてらるこれらもていにしへは梅の歌に柳をよみそへたる多し下これにならひて見よ末の句はなりにけらずやはあるなれりとかへるてにをはなり

筑前守山上大夫

波流佐禮婆、麻豆佐久耶登能、烏梅能波奈、比等利美都都夜、　此やはやはの略なり

波流比久良佐武、」

豐後守大伴大夫、（卷十三に大伴三依悲別歌あめつちとともに久しくすまはんとおもひてありし家の庭はもとよめるは帥卿歸路の時よめれば此人なるべし）

余能奈可波、古飛斯企、　何なり今本宜とあるは誤なり
一本によりて改
志惠夜、　しるやはよしやなり
加久之阿良婆、烏梅能波奈爾母、奈良麻之勿能怨、」　世の中にこひしきてふはすべて人にこひとはるゝてふこそ人のほりおもふ事なるを此宴の梅こそやがて人にめでかつうらまるゝ物にはあれ吾かくありて世の中にあるかひあらずば此梅の花にならん物をとなり
筑後守　葛井大夫
烏梅能波奈、伊麻佐可利奈理、意母布度知、加射之爾斯豆奈、　斯豆奈はしてあれなを再約たる言なり豆阿の約多なればしたれなりその多禮の約豆なればしてなといふなりてんなどいふ言の約におなじきなり【こゝの再約てふ言いとむづかし豆あれの約豆なれば去てあれなりといふべし又多萬倍の約も豆となればかざしに去たまへなりとてもよからむおく人】
伊麻佐可利奈理、」
笠沙彌、（笠は姓沙彌は名なりかゝる名の事卷一に有）
阿乎夜奈義、　こゝに等を入て下を心得べし
烏梅等能波奈乎、遠理可射之、能彌豆能々知波、　うたげの酒をなり
知利奴得母與斯、」
主人、（大伴旅人卿なり）
和何則能爾、宇米能波奈知流、　句なり
比佐可多能、　冠辭
阿米欲里由吉能、那何列久流加母、」　やがて梅のちるを雪と見てよまれたるなり
大監　大伴氏百代
烏梅能波奈、知良久波伊豆久、志可須我爾、許能紀能夜麻爾、　筑前國下座郡三城の山卽城山なり
由企波布理都々、」　こも右に同じく梅を雪と見たるなり
小監　阿氏奥島、（阿の下に部か跡を脱せるか）
烏梅乃波奈、知良麻久怨之美、和我曾乃乃、　今本我を家とするは我家の草を誤れるなり
多氣乃波也之爾、于具比須奈久母、」
少監　土氏百村、
烏梅能波奈、佐岐多流曾能々、阿乎夜疑遠、加豆良爾志都々、阿素吠久良佐奈、」　くらさんの略にて左は辭なり
奈はいひ入たる詞

大典史氏大原、（史の下に部を略けるか）
有知奈壁久、波流能也奈宜等、和我夜度能、　今本我を誤る事既にいふ
烏梅能波奈等遠、伊可爾可和可武、」　をとりまさりをわかぬなり
少典山氏若麻呂、（卷十三に山口忌寸若麻呂とある人なり）
波流佐禮婆、許奴禮我久利豆、　乃宇約宇にて木の末なり
宇具比須曾、奈岐豆伊奴奈流、　伊奴は寢なり茂木かうれにやとるを云
烏梅我志豆延爾、」
大判事舟氏麻呂、（舟の下に一字略る歟）
比等期等爾、乎理加射之都々、阿蘇倍等母、伊夜米豆良之岐、　今本岐を坡に誤る一本によりて改米豆良之岐は愛の意今いふまれなる意にはあらず
烏梅能波奈加母、」
藥師、（此間尾を略けるか）張氏福子、（太宰の藥師なり）
烏梅能波奈、佐企豆知理奈婆、佐久良婆那、　今本佐を脱す補へり
都伎豆佐久倍久、奈利爾豆阿良受也、」　奈利爾豆はなり去てにて梅はちり櫻は咲べく時はなりいにてあらずやなりさて其あらずやはあれかしとかへるてにをはなり
筑前介佐氏子首、（佐の下に伯を略か）
萬世爾、得之波岐布得母、　來り經るともなり
烏梅能婆奈、多由流己等奈久、佐吉和多琉倍子、」
壹岐守板氏安麻呂、（板の下に一字を略歟）
波流奈例婆、宇倍母佐和多流、烏梅能波奈、岐美乎於母布得、用伊母禰奈久爾、」　夜寢もねなくなり
神司荒、（此間一字を略なり）氏稲布、（太宰の神司なり）
烏梅能波奈、乎利豆加射世留、母呂比得波、家布能阿比太波、多努斯久阿流倍斯、　あるべしはあるなりゝかへるてにをはなり
大令史野氏宿奈麻呂、（野の上下の中に一字を略ならん）
得志能波爾、（卷十九）家持歌の注に毎年謂二之等之乃波一

波流能伎多良婆、可久斯己曾、烏梅乎加射之豆、多努志
久能麻米、
小令史田氏肥人、（田の上下に一字を略か）
烏梅能波奈、伊麻佐加利奈利、毛毛等利能、己惠能古保
志枳、　戀しきなり
波流岐多流良斯、」
藥師高、（此間一字を略か）氏義通、（二字音なり
多くは高麗氏ならん）
波流佐良婆、阿波武等母比之、烏梅能波奈、家布能阿素
吡爾、阿比美都流可母、」
陰陽師磯氏法麻呂、（磯の間一字を略けるか）
烏梅能波奈、多乎利加射志豆、阿蘇倍等母、阿岐太良奴
比波、家布爾志阿利家利、
算師志氏大道、（志の間一字を略けるか）
波流能努爾、奈久夜汙隅比須、奈都氣牟得、　押付るな
り
和何弊能曾能爾、汙米何波奈佐久、」
大隅目　榎氏鉢麻呂、（榎の間一字略けるか）
烏梅能波奈、知利麻我比多流、　散亂なり
乎加肥爾波、　岡邊なり
宇具比須奈久母、波流加多麻氣豆、」
筑前目　田氏眞人、（田の間一字を略歟眞
人一本眞上と有）
波流能々爾、紀利多知和多利、布流由岐得、比得能美流
麻提、烏梅能波奈知流、」
壹岐目　村氏彼方、（村の間に一字を略ける歟）
波流楊奈宜、　冠辭
可豆良爾乎利志、烏梅能波奈、多禮可有可倍志、佐加豆
岐能棓爾、」（卷十二）に杯に梅の花うけて思ふどちのみ
てののちはちりぬともよしとよめりこゝの歌はかつら
にせんと思ひしを誰歟さかづきのうへにうかべしとと
がめたるなり
對馬目　高氏老、（高の間に一字略歟）
于遇比須能、於登企久奈倍爾、烏梅能波奈、和企弊能曾
能爾、佐伎豆知留美由、
薩摩目　高氏海人、（高の間一字を略けるか）
和我夜度能、　我を家に誤るは既にいふ
烏梅能之豆延爾、阿蘇毗都々、宇具比須奈久毛、知良麻
久乎之美、
土師氏御通、（こは卷十三に土師宿禰水通とある

人なり）
宇梅能波奈、乎理加射之都々、毛呂比登能、阿蘇夫遠美
禮婆、彌夜古之叙毛布、」
小野氏國堅
伊母我陛邇、由岐可母不流登、彌流麻提爾、許々陀母麻
我不、烏梅能波奈可毛、」
筑前掾門氏石足、（門の間部の字を略る歟）
宇具比須能、麻知迦豆爾勢斯、宇米我波奈、知良須阿利
許曾、意母布故我多米、　ことはすべて女をいふ又他人
をもいふべし
小野氏淡理、（こは治をはりなど訓たぐひにて阿
波の波を略て阿波利と訓か理の字音にあらず）
可須美多都、那我岐波流皐乎、可謝勢例杼、伊野那都可
子岐、烏梅能波那可毛、」
○員外思ニ故郷一歌兩首、　右をうけて員外といへり
卽憶良の歌なり【奥人案に此二首の歌一本に後追和梅
花歌四首のあとに在】
和我佐可理、伊多久久多知奴、久毛爾得得夫、久須利波武
等母、麻多意知米也母、」　おちめの米は牟に通ひておち
んやなり母はそへていふのみ歌の意は憶良の七十にお
よびぬるまで受領にて遠き國に在事をなげきてよまれ
たるなるべし雲に飛藥とは彼淮南王の故事を思ひて雞
犬の藥をはみて天へのぼるとも卑賤の吾身なれば都にふり得ず
て又あらぬ國に任さすらへぬべしとなり【奥人云こゝ
の遠知ちふ言を本居がとりたてゝ若きに變る事なりと
して卷十四に在吾盛復將變八方の歌の將變を衰知と訓
べき證なりといへるはゑひ言なりけり再考ふるに乎は
和に通和加の約とし知は多知加閑里の約とすればわか
たちかへりにて若に立かへる言となるめりさらば僻言
にもあらじかしされど末の歌にいたりて聞えず○也母
此やもは例の打反す辭にはあらで也母の約與ゆゑまた
おちむよと云なるべし】
久毛爾得得夫、久須利波牟等母、　今本等母を用波とする
は誤なり一本によりてあらたむ【用波と有によれり猶
思ふに此用波てふは夜はの事にはあらず從者にて卽よ
りはと云歌なり此集中從を可良とも訓たればからと云
を同意にて神代卷に一夜之間と有も意同きなり此言は
其事に臨さしかゝりたるうへに云意にて前方に設てい
ふ言ならず右の歌は故郷を立ぬにまに〳〵其時に取て

よめる歌成に藥はむからはとさし付て云べき言ならず
是にては治定の辭となりてよしも不叶こそ】
美也古彌婆、伊夜之吉阿何徴、麻多於知奴倍之、」 此歌
も同じ意なり右の二首の意於の假字を今本遠越とかけ
るはたがへり墮落の事ならではきこえぬは必誤なるを
知るよりてあらたむ
○後追和梅歌四首、 上下のつゞきをもて見るに憶
良の歌なるべし
能許利多流、由乗仁末自例留、宇梅能半奈、半也久奈知
利曾、由吉波氣奴等勿、」
由吉能伊呂遠、有婆比豆佐家流、有米能波奈、伊麻左加
利奈利、彌牟必登母我聞、」
和我夜度爾、左加里爾散家留、宇梅能波奈、 今本宇を
牟に誤るよりて改む
知流倍久那里奴、美牟必登聞我母、」
烏梅能波奈、伊米爾加多良久、伊多豆良爾、阿列乎知良
須奈、 一本河と有は誤なり
左氣爾于可倍己曾、」 又一本に牟に作る今本一本于なり
さてこはいたづらにちらさで酒にうかべよと梅のいへ
るとするは古の意にかなへり今本には美也備多流波奈
等阿列母布左氣爾于可倍許曾とあるはみだれしなるべ
しよりて一本の方を用ゆ梅の精靈娘子などに化して夢
に入てつけたるさまに新しくいはんとてまふけていへ
るなるべしされば一本いよゝよし
○遊於松浦河序【與人案に遊松浦河贈答歌八首并
序 蓬客と拾穗に在て注に蓬客は山上憶良か作名と云
説有可尋之と有】
此所に松浦の縣玉嶋てふ所にあそびつるに鮎つる娘子
等に逢て名をとひしにいやしき海人なりとこたへたる
より歌の贈答をなしたりと憶良の自序ありくはし
くは別記に云
阿佐里須流、阿末能古等母等、比得波伊倍騰、美流爾之
良延奴、 ゑられぬなりぬは終のぬなり
有麻必等能古等、」 良人の子とはゑられたりといへり實
の海人にあらねばなり卷一の菜摘須兒の類をおもへ
○答歌曰、 彼娘子らがこたへなり今本歌を侍に誤る
多麻之末能、許能可波加美爾、伊返波阿禮騰、吉美乎夜
佐之美、阿良波佐受阿利吉、」 やさしとは此下に世の中
をうしとやさしと又古今集にとしのおもはんことぞや
さしき源氏眞木柱に人ぎゝやさしかるべし又俗に心あ

る人をやさしといふもはづかしき人と云ほどのことな
りさればこゝを君をはづかしみてと云なり本彌添敷て
ふ言の約なり
○蓬客等更贈歌三首、 今本蓬客とありされどこは憶良
かいざなひ行し友人をさすなれば客の誤明らかなりよ
てあらたむ蓬は先に旅人卿より房前卿への返翰に蓬
身とあるがごとくおのれを卑下していふ蓬なりおそら
くは憶良の歌にあらじ【與人案に拾穗に更贈歌 蓬客
とあり】
麻都良河波、可波能世比加利、 かはのひかりは鮎のさ
ばしるひかりなりこゝは句の如しひかりと切て見るべ
し
阿由都流等、多々勢流伊毛河、毛能須蘇奴例奴、
麻都良奈流、多麻之麻河波爾、阿由都流等、多々世流古
良何、伊弊遲斯良受毛、」
等富都比等、 冠辭
末都良能加波爾、和可由都流、 わか鮎つるなり
伊毛我多毛等乎、和禮許曾末加米、」
○娘等更報歌三首
和可由都流、麻都良能可波能、可波奈美能、奈美邇之母
波婆、 なみ〳〵の人とおもはゞなり
和禮故飛米夜母、」 こひんやこふるにとなり
波流佐禮婆、和伎覇能佐刀能、加波度爾波、 かはとは
川門なり
阿由故佐婆斯留、 あゆこは鮎子なりさばしるのさは發
語
吉美麻知我豆爾、」 君難待なり君とは鮎になりて云
麻都良我波、奈奈勢能與騰波、與等武等毛、和禮波與騰
麻受、吉美遠志麻多武、」 松浦川のはやくさはゑる瀬々
はよどむ事ありともわれはとゞこほりよどまず君をま
たんとなり
○後人追和詞三首、帥老、 今本こゝに都とあるは衍
字なり大伴卿なりおきなと云意にたふとみ書るなり
麻都良河波、可波能世波夜美、久禮奈爲能、母能須蘇奴
例豆、阿由可都流良武、」 今本阿由可流良武とあるは誤
なり一本によりて改む
比等末奈能、美良武麻都良能、多麻志米乎、美受豆夜和
禮波、故飛都々遠良武、」
麻都良河波、多麻斯麻能宇良爾、和可由都流、伊毛良遠
美良牟、比等能等母斯佐、」 等はたその約呂は良に同萬

保の約母にて欲足てふ意なり

此所に從五位上吉田連宜か筑紫にて梅の歌並松浦の歌詠ありしを山上憶良より贈られしに報て相撲部領使【相撲使卷廿防人歌の冠注に委し】につけて歌よみして天平二年七月十日に筑紫へ下せしよし序有委別記に云

○奉レ和二諸人梅花歌一首

於久禮爲天、婀我古飛世殊波、　今本那我とあり那もとは婀なりしを娜に誤りて其書の消しまゝに那我と書しならんかくては意とほらず又端詞と序文にあはせ見るにいと不敬なり旁誤としてあらたむ【奥人按に世は受阿良禮の約戀ずあられずばなり】

彌曾能不乃、于梅能波奈爾忘、奈良麻之母能乎、」　都におくれ居てわが其うたげをこひ思ふかひあらせずとならば梅の花にもなりて戀おもはれんにとなり

○和二松浦仙媛歌一首

伎彌乎麻都、　この君をば憶良をさしていふ

麻都良乃于良能、越等賣良波、等己與能久爾能、　こゝに常世の國とは唐をいふにあらず蓬萊などすべて仙家ある所をさし云【常世を唐にあらずとことわるは常夜とは唐をいふ事恐き御說なりこゝに用なければ古事記注にいふ】

阿麻越等賣可忘、」　海人娘子なるをとこよの國といひかけつればこゝは天女といふかたに見るべし

○思君未盡重題二首、　こゝに君といふも卽憶良をいふ

波漏婆漏爾、　紀(皇極)に波魯波魯爾拳騰曾枳擧喩婁と有はるゝなり

於志方由流可母、志良久毛能、智弊仁遊多天留、都久紫能君仁波、」

枳美可由伎、氣那我久奈理努、奈良遲那留、志滿乃己太知母、　大和の國嶋の地にて憶良の家あるなり二首の始の初句に同く心得べし

可牟佐飛二家里、」　もりふりけるこゝろなり

天平二年七月十日、　此年號月日までは吉田連の書なるを憶良の自の集にあげられたるなり

此所に憶良つゝしみてまをすてふ言ありて都督刺史法によりて其所地をめぐりて手風を見るそのうち意に憂事ありて口に出しかたみつゝしみて三首の歌をつくりて意をのばゆとふ序ありくはしくは別記にいふ

麻都良我多、佐欲比賣能故何、比例布利斯、夜麻能名能美夜、伎々都々遠良武、」　佐用姫の信ある心をめで、此山の名のみ聞つゝをらんといふは國の政のたゞしからぬをふくみてなげきよめることは既に序にて云るべし

多良志比賣、可尾能美許等能、奈都良須等、　奈は魚の古言なり都良須の良須の約留といふならずつらしますとあがみていふなり

美多多志世利斯、　多志約知なり

伊志遠多禮美吉、」　石は礒の通音さて歌の意は古へは紳德おはして他の國まで平ませしに今は中々其みいきほひあらせず臣たちの忠ごゝろも上つ代にあえずとこころなげきてよめりたれ見きの誰は第一の人より下の諸司の人をさす一本に阿由都流等とあれど不敬歌なればとらず

毛毛可斯母、由加奴麻都良遲、家布由伎豆、阿須波吉奈武遠、奈爾可佐夜禮留、」　さやれるはさはるなり下にもこゝろさやりぬといへり歌の意は百日もふる事にはあらずたゞちに今日行てあすはかへらんを何のさはれることぞといふなりかくいふもなしやすきをさめかたもあるをなさでまつりごとのおこたりあるをおもへるならん事上に云如し

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上、

こゝにつゝしみて奉るとあるを見れば旅人卿へ奉たるにてはあらじか

此所に大伴佐提彥を任那國へ遣されし時の事を云るし其妻佐用媛が夫のわかれをゝしみて領巾ふりしより此山をなつけしてふ序あり委は別記にいふ

得保都必等、　冠辭

麻通良佐用比米、都麻胡非爾、比例布利之用利、於返流夜麻能奈、」　卽憶良の歌なり於返流は名にし負などの類なり

○後人追和、

夜麻能奈等、伊賀都夏等可母、佐用比賣河、許能野麻能閉仁、やまのへは山の上の略

必例遠布利家牟、」

○最後人追和、

余呂都余爾、可多利都夏等之、　之は助字なり

許能多氣仁、　此嶽なり

比例布利家良之、　良之は利の延言なり

麻通羅佐用嬪面、」

○最最後人追和二首、　今本人を脱す目録によりて補ふ

宇奈波良能、意吉山久布禰遠、可弊禮等加、比禮布良斯家武、　良期は利の延なり

麻都良佐欲比賣、」

由久布禰遠、布利等騰尼加禰、　領巾をふりてとゞむるにとゞめかねてなり

伊加婆加利、故保斯苦阿利家武、　こほしくはこひしくのひと音通へり

麻都良佐欲比賣、」

○書殿餞酒日倭歌四首、　これは天平二年十二月大伴旅人卿大納言に任られて都へ登らるゝ時憶良の書院にうまのはなむけせし歌なり此時のつどひに唐詩有けんされば倭歌とこゝにかきたり

阿摩等夫夜、　冠辭

等利爾母賀母夜、美夜故摩提、意久利摩遠志豆、等比可弊流母能、」飛かへらんものをゝ畧なり

比等母禰能、　ひとも禰は毛禰約米にて人目なり人目のうらなるとは人の面のうらぶれなり面を目といふは妻の目をほり又目欲君などいふに同じ或説にひとも禰はひとむね音通にて一家をいふといへるはつぎの説ならん【人皆歟母は美と同禰は奈に同かれは古には人皆のと云歌歟】

宇良夫夫禮遠留爾、多都多夜麻、　今本多夜の間の都は衍字なり仍改む

美麻知可豆加婆、　御馬なり

和周良志奈牟迦、」　良之の良は禮佐の約志は勢と同音わすれさせなんかなり太宰にてはみなうちわびて居るに御馬が都近き龍田山にちかづかば太宰の事は忘れたまはなんかといふなり

伊比都々母、能知許曾斯良米、　かくいひつゝものちこそ思ひ出らめなり

等乃斯久母、　ともしくもなり

佐夫志計米夜母、　計は加良の約の加を通しいふにてさびしからめやなりもはそへたるのみ

吉美伊麻佐受斯豆、」

余呂豆余爾、伊麻志多麻比提、阿米能志多、麻乎志多麻波禰、美加度佐良受豆、」　朝庭にありてと云なりさてみかど、云事もとは御門なるを朝廷にあて、云は此比までなり天皇の大御身をさしいふは後世のさたなり朝廷をよろづ代までさらず久しく奏聞事をもしつゝつとめ給へとなり政をとるをまをすといふなり此時旅人卿大納言に任て登りたまへばなり（卷二）に高市皇子尊薨時人麻呂の「やすみし、吾大王の天の下まをしたまへば萬代に玄かしもあらん云云」又關白を置れしも此意の名なり

○聊布私懷歌三首、　【聊一本敢布と有】續紀（廢帝）に天平寶字二年冬十月詔に國司交替は四年なりしを六年となさしめられし事見ゆされば此天平二年の比は四年の交替の定なるが憶良既歌にもいへる如く五年任にありしよりなげきて大伴卿の都にのぼりませば吹擧をあふきねがへる歌なり契冲が代匠記の説は紀の文を終迄見ずあらましに見たる説なり

阿麻社迦留、　冠辭

比奈爾伊都等世、周麻比都々、　麻比の約美なり

美夜故能提夫利、　風俗を云

和周良延爾家利、」　良延は禮の延音歌の意はひなのことわざにのみかゞつらひて五とせ經つれば今はなれし都の風俗をもわすれにけりとなり家持ぬしも越中より登る時に玄なさかるこしに五年すみしてとよまれしは是をおもへるなるべし

加久能未夜、伊吉豆伎遠良牟、　物のうち歎る時にため息つくなるもの故しかいふなり

阿良多麻能、　冠辭

吉倍由久等志乃、　古事記に美夜受比賣の歌に璞玉廼月波來歴行云云こゝも來經行なり冠辭を言を隔て、云はぬば玉のかひの黒駒などの類なり

可伎利斯良受提、」　既四年の任なるを五年になればかぎりをゝらずてとなげくなり

阿我農斯能、　主は旅人卿を指君主大人を宇志とよめり宇志は卽ぬしなり宇奴通ふ例集中に多し

美多麻多麻比豆、　御魂なり予心と同じ

波流佐良婆、奈良能美夜古爾、咩佐宜多麻波禰、」　咩佐の佐は志阿の約めしあけなり

天平二年十二月六日筑前國司山憶良謹上

○三嶋王後追和松浦佐用嬪面歌一首、　續紀（光仁）に從四位下三嶋王とあり

於登爾吉伎、目爾波伊麻太見受、佐容比賣我、必禮布理伎等敷、吉民萬通良楊滿、」

○大典麻田連陽春爲大伴君熊凝述志歌二首、

今本大伴君熊凝歌二首とのみあるはたらず目錄をもて補ふこは歌のさまも然見ゆればなり陽春が熊凝になりてよめるなり

國遠伎、　黃泉をさして云

路乃長手遠、　黃泉の道なり

意保保斯久、　おぼつかなきなり

許布夜須疑南、　許布歟はこひやにて黃泉の道に現身の父母をこひつゝすぎんとなり

己等騰比母奈久、」　身まかりぬればこととふことなきを云

朝霜乃、　今本露一本霧とあるは共に誤れり朝霜消といふ冠辭によりて改

既夜須伎我身、　身まかるをいふ

比等國爾、　他國の意もていふ卽黃泉なり

須疑加豆奴可母、意夜能目遠保利、」　前の歌にこふやすきなんといふに同じく父母を去たふ餘りによもつ國の遠きすぎがたくするとなり

○敬和爲二熊凝一述其志歌一首幷序、筑前國司山上憶良、　今本筑前國司守山上云々とあれど國司とあれば守は衍字なる事去るし仍てのぞく且六首とあるは左の序の末に熊凝か死時六首の歌をよめりと云事あるをおもひ誤りてなり目錄によりて改むこれは陽春か熊凝になりてよめる歌になぞらへ報へよめるなり又國司守とあるを掾目まで廣く云なりとある說は目錄に心づかざる歟國の守大典に答る歌なるにこと〳〵しく下司まではならべていはじ

此所に大伴熊凝は肥前國益城郡人にて十八の年天平三年六月廿七日相撲使某が從人となり都にのぼる道安藝國佐伯郡高庭の驛家にて死んとして父母をおもひて歌六首をよみて死ぬといふ序ありくはしく別記にいふ

宇知比佐數、　冠辭今本數を受に誤る例によりて改

宮弊能保留等、　天皇の宮といひて都の事なり

多羅知禰能、　冠辭今本の斯は禰を斯と見たる草の手の誤なり能は古本による今は夜なり

波波何手波奈例、常斯良奴、國乃意久迦袁、　おくがは奥所なり

百重山、越豆須疑由伎、伊都斯可母、京師乎美武等、意母比都々、迦多良比袁禮騰、　同じ道行人と語合なり

意乃何身志、　志は助詞

伊多波斯計禮婆、　後に病をいたづきいたはりなど云に同勞なり

玉桙乃、　冠辭

道乃久麻尾爾、　今本乃麻の間に久を脫隈邊なり

久佐太袁利、志婆刀利志伎提、等許自母能、　今本許を計に誤るよりて改等許は床なり自母能は馬自物と云に同

宇知許伊布志提、　許伊は展にてまろびふすなり宇知はことおこすことばなり

意母比都々、奈宜伎布勢良久、　良久約留にてふせるなり

國爾阿良波、父刀利美麻之、家爾阿良婆、母刀利美麻志、國のうち家のうちならばとほきちかきによらず父母のありて手をとりて見んをとなり

世間波、迦久乃尾奈良志、　奈良志の奈は爾阿の約

伊奴時母能、　冠辭

道爾布斯豆夜、伊能知周疑南、」　一本和何余須疑奈牟とあり

反歌、　一本なし

多良知泥能、　冠辭今本泥を遲にあやまれり【拾穗に多良知子乃と在】

波々何目美受提、意保々斯久、伊豆知武伎提可、阿我和可留良武、」　死て何方にむかひわかれんとなり

都禰斯良農、道乃長手遠、　黃泉の道を云なり

久禮久禮等、　くれ〳〵は京言にはくりかへし〳〵てふ意にてかぎりなきをいへどこゝにてはくらき意もこめてたどるを云くらきにも通ふ言か

伊可爾可由迦牟、可利豆波奈斯爾、」　可利豆は旅にやどをかりて其代に宿主にとらする物をいふ記にも此類の豆といふ所に代の字をかけり豆は加倍の約計なるを横の同音の豆に通して云○一本可例比波奈之爾（かれひは餉なり此かりてかれひ共に現の旅のものなれば黃泉の道にはなきなり）

家爾阿利豆、波々何刀利美婆、　手をとり見ばなり

奈具佐牟流、許々呂波阿良麻志、斯奈婆斯農等母、」　一本能知波志奴等母

出豆由伎斯、日乎可俗閉都々、家布家布等、阿袁麻多周良武、　多周約都にてまつらんなり

知知波波良波母、」　一本波々我加奈斯左

一世爾波、二遍美延農、知知波々袁、意伎豆夜奈何久、

阿我和加禮南、」　一本に和加利南又一本に相別南此歌と

も、陽春か歌に同じく能疑になりてよめるものなり

○貧窮問答歌一首幷短歌

風雜、雨布流欲乃、雨雜、雪布流欲波、爲部母奈久、
すべもなくはせんすべなきをはぶきいふなりさてすべは爲方の意にてなすべきわざもなきなり

寒之安禮婆、堅鹽乎、　和名石鹽一名白鹽又延喜大膳式釋典祭料石鹽十顆これをかたしほとよみこせり今燒鹽といふ物これなれば何顆とは書り又日本紀私記に堅鹽木多師是也とも見えたりかれこれ通し見てしれ

取都豆之呂比、　つゞゑろひは喰切〳〵するなり源氏につゞゑりうたふといふもきり〳〵にうたふをいふいとさむければ鹽をさかなとしてさけをのむなり【司馬相如傳大人賦嘰二瓊華一奥人按に都はつまむの約之は支に通ふ呂比の約利なりよてつまみ〳〵切てふ言なり】

糟湯酒、　酒の糟を湯にときし物なり

宇知須々呂比氐、　呂比約利にてす〻りなり

之波夫可比、　ゑばぶかひに嗽にて可比約伎ゑばぶきなり今本波を可に誤る ゑるければ改

鼻嚏之嚏之爾、　嚏爲々々を略言なり

可登阿良農、　今本此句の上に志の字有古本なければのぞきぬ才あらぬなり

比宜可伎撫而、安禮乎於伎弖、　我を除てなり

人者安良自等、富己呂倍騰、　呂倍は禮の延音にてほこれどなり

寒之安禮波、麻被、　麻衾なり

引可賀布利、　被なり

布可多衣、　今も田舍人など袖なき腰丈なる物をきる是なり即官服の中なる半臂背子などもこれなり

安里能許等其等、　あるかぎりなり

伎曾倍騰毛、　着添ともなり

寒夜須良乎、和禮欲利母、貧人乃、父母波、肌寒良牟、
今本肌を飢とありてうゑと訓こせれど麻衾といふよりうけたれば肌の誤とす

妻子等波、乞弖泣良牟、　今本乞弖を乞乞とすれど假字はこひてとよみこせたれば字の誤を ゑるよりてあらたむ

此時者、伊可爾之都々可、汝代者和多流、　これより上は問の意なりそはいかにしつゝかながよはわたるといひ終りたればなりそが上にもいはゞいかに云々といふをもおもへ且自問自答なりよりて二首にはあらねど七言七言とおきて問答をわかてるものなり

天地者、比呂之等伊倍杼、安我多米波、狹也奈理奴流、
日波月波、安可之等伊倍騰、安我多米波、照哉多麻波奴、
人皆可、吾耳也之可流、　此所句なりいとまづしきより物ごとたらはぬをいひのべたるなり人皆可の可は疑の可なり吾のみやゑかるの下にも同じく右の疑のかをこめて見よさてたま〳〵に人とは生れてあるをなり

和久良婆爾、　こゝの婆は半濁を ゑらせて濁音を用たり此婆和の如く唱べし眞淵云わくらはゝあからさまと同じ和はあに通ひ久と加と同音佐は略婆と麻は通ふさてあからさまは自地と字もあてかりそめたま〳〵ともに通ふ自地の意は明らかなる所には何のかくれたる事もなきにそこより物のにはかに出たる如きをもてはかりそめなる事にあからさまと云なり又そはかりそめと通ひかりそめはすこしばかりの意なればたま〳〵の事どもなるなりよりてこゝはたま〳〵の意なり

比等々波安流乎、比等奈美爾、安禮母作乎、　こゝの二つの乎は物をと心得べし

綿毛奈伎、布可多衣乃、美留乃其等、　海松の如くなり

和々氣佐我禮流、　わかれ〳〵にさがるなりうつぼ物語能杼與比居爾、　咽呼にてかなしく鳴鳥なれば譬たりにかたびらのわゝけたるをきてと有も同【和々氣拾穗和々氣佐我禮流と有】

可々布能尾、　今も田舍にてふちなどにてあみつくる布をかゞ布といへりかゞりぬの、意なるべし

肩爾打懸、布勢伊保能、麻宜伊保乃内爾、　伏庵曲庵にてふせ庵とはひくゝ作れるなりまげ庵とは木竹又蘆などの類を折まけてかりそめなるを云これをまろ屋といひてふたつながら賤が屋のうちにもいやしきをいふこもせちにいはんとて重ねたるものなり

直土爾、葉解敷而、　かの賤き庵には床などもなげればそのさまをいふなり

父母波、枕乃可多爾、妻子等母波、足乃方爾、　日本紀の脚邊此云阿度邊【足乃方爾拾穗には足爲方爾と有】

圍居而、憂吟、　さは發語まよひなり

可麻度柔播、火氣布伎多弖受、許之伎爾波、　和名抄に甑(古之伎)今も田舍にて貧家に飯かしがぬてふ事をこしきに蛛の巣かくといへり甑は飯を蒸具にて圓座のやうに藁にて作て釜の内に置物なり

久毛能須可伎弖、飯炊、事毛和須禮提、奴延烏乃、　冠辭

能杼與比居爾、　咽呼にてかなしく鳴鳥なれば譬たり

伊等乃伎提、　いとゞしくと云に同じ杼乃は同音伎は志
　伎の略なり氏はことばのみなり
短物乎、端伎流等、云之如、　此頃の諺なり下の文の中
　に諺曰云云短材截端といへる是なり
楚取、五十戸長我許惠波、　戸令云凡戸以五十戸爲里每
　里置長一人と見えたり
寢屋度麻恒、　度は所の略ふしどなど云も同じ
來立呼比奴、　貧して田租賦役等をせめらるゝ體此里長
　せむるに笞狀をもてはたくされば楚とる長といへるなり
可久婆可里、須部奈伎物能可、世間乃道、」
反　歌
世間乎、宇之等夜佐之等、於母倍杼母、飛立可禰都、烏爾之安良禰婆、」　歌の意はまづしきさまのうらはづかしけれど烏ならねばとびさることもならじとなげくなりやさしきはもとみやびたるをほめいふことなれどそのみやびにわがさまのおよばねばそをはづかしむ意となるをもてはづかしき意とも轉いふなり
富人能、家能子等能、伎留身奈美、久多志須都良牟、久多志の多志の約知にてくちすつるなり
絁綿良波母、」　歌意は富人の身ひとつなるに絹布などの多く有て著餘すをいひうらやむものなり
麁妙能、　冠辭
布衣遠陀爾、伎世難爾、　父母妻子に着せがたきになりがての且は我多伎の多伎約智なるを且に通しいふ
可久夜歎敢、世牟周弊遠奈美、」　此二首は此下老身重病經年云云七首とある中にまぎれ亂て今本にはのせたりそこの長歌に歌言も歌の意も合ずよりてこゝに引上たり猶その歌の條にもいふ
山上憶良頓首謹上、　こゝにかくあるをもておもへば是も百姓のまづしきありて貢など出し得ねば御政のさまを得ぬといふ意にて諷諫して旅人卿などへ奉りしなるべし
○好去好來歌一首、　これは天平五年に多治比眞人廣成遣唐大使にて出立べきに憶良がよみておくれるなりことは歌の下にも見ゆ且此端詞の好の字の訓常の如くよしとも又紀によりてさきくともよむべしいづれにてもつひには同意なりされど歌のうちにもつゝみなくさきくいましてはやかへりませとよめればさきくといふによる今本こゝに小字にて反歌二首とあるは後人が書加しなればのぞきぬ
神代欲理、云傳介良久、　云傳の且は多倍約介良久の良久は留の延言なり
虛見通、　冠辭
倭國者、皇神能、伊都久志吉國、　嚴なり
言靈能、　我皇國は字を用ゐず言の國なりしかばたふとみてそのことばに魂の有といふ
佐吉播布國等、　さきはふ國と云はかの言もてつとふるにさち合國といふなり
加多利畿、伊比都賀比計理、　我比約伎なり
今世能、人母許等期等、　悉く卽言辭にも通ふ
目前爾、見在知在、　句なり
人佐播爾、滿弖播阿禮等母、高光、　冠辭
日御朝庭、神奈我良、愛能盛爾、　うつくしみあひしますめぐみの盛になり全盛と云におなじ
天下、奏多麻比志、家子等、　天下まうしたまひし家の子とは執政したる家の子なり卽廣成をさしいふ
撰多麻比天、勑旨、　或云大命
戴持且、唐能、遠境爾、都加幡佐禮、麻加利伊麻勢婆、　退去なり
宇奈原能、邊爾母奥爾母、神豆麻利、　神集なり
宇志播吉伊麻須、　眞淵云大人備なり播吉約備なり仍て大人振なり延れば播吉となり約れば備となるされば言便に吉をにごるなりといへり古事記に問二大國主神一云汝之宇志波祁流葦原中國者云云又延喜祝詞式遷二却祟神一祝詞に山川能淸地爾邊出座豆吾地止宇須波伎坐世止進啓云云と見ゆ
諸能、大御神等、船舳爾、　或云布奈能閉爾、こは船の上にあらず船の舳なり
道引麻袁志、　後に毛宇志と書て申の字を書これなり麻毛宇袁同言なればなり
天地能、大御神等、倭、　四言
大國靈、　三輪を云
久堅能、　冠辭
阿麻能見虛喩、阿麻賀氣利、　延喜祝詞式出雲國造神賀詞云天八重雲乎押分氐天翔國翔氐天下乎見廻爲云云これをとれるなり
見渡多麻比、事了、還日者、又更、大御神等、船舳爾、御手打掛且、墨繩袁、播倍多留期等久、問遲可邊志、
今本阿庭可遠志とあれど何の事ともなし一本庭の字を

遲とす此句上の御手掛且とある句よりか、れば彼遲の字より考て阿は問の誤とし遠は邊の誤として問遲可邊志なるべしと橘枝直がいひぬるをさる事なるべきとて眞淵が改たるによりぬ

智可能岬欲利、　肥前國松浦郡血鹿岬今本岬を岫に誤るよりて改む

大伴、　冠辭

御津濱備爾、多太泊爾、　直なり

美船播將泊、都々美無久、佐伎久伊麻志且、速歸坐勢、」

反　歌

大伴、　冠辭

御津松原、可吉掃且、　源氏椎本にかきはらひいといたうしなし給りといへるもこれに同じ掃きよむるなり

和禮立待、速歸坐、」

難波津爾、美船泊農等、吉許延許婆、紐解佐氣且、多知婆志利勢武、」　ときさけてはあけてなり紐結ぶまでもなく立急きはしらんとなり

天平五年三月一日良宅對面獻三首、山上憶良謹上大唐大使卿記室、　此大使は既云如く廣成なり此遣唐使の往來の事留學生上道朝臣眞備が唐よりもち來て奉し雜の物の事などくはしく續紀に見えたり

此所に沉痾自哀文山上憶良作　とありて次になかく〳〵しく其文ありひたすら歌の事ならねばのぞく別記にも他文よりはことわりあら〳〵とのせたり

此所に悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首幷序とありて文と詩あり憶良の自の文なれど歌のことにあづからずよりて別記にあげてあら〳〵といふ

○老身重病經年辛苦及思兒等歌五首、　今本は七首とあれど貧窮問答の短歌二首亂入てありしをもて後人七首となほしたるものなればあらたむ且小書にて長一首短六首とあるもいよ、後人のわざなれば除ぬ

靈剋、　冠辭

内限者、　謂瞻浮州人壽一百二十年也此注は憶良の自注と見えたりうちのかぎりはいのちのかぎりをいふなり

平氣久、安久母阿良牟遠、事母无、裳無母阿良牟遠、

（卷十）に多婢爾且母毛奈久波也許登和伎毛故我牟須比思比母波奈禮爾家流香聞とある母奈久も同じく喪の事を喪なくといふなり【奥人按にもなくのもはまがごと

の約曲事とてわざはひなきに云なり】

世間能、宇計久、　うくを延たるなり

都良計久、　つらくを延たるなり

伊等能伎提、　前にいふ

痛伎瘡爾波、鹹鹽遠、　此前の文の中に諺曰痛瘡灌鹽とあるは此ころの諺と見えたりこゝの句これによる

灌知布何其等久、益々母、重馬荷爾、　地藏本願經曰云云菩提流子三藏釋云云今も俗に小附を打といふも付添る事の諺なり船荷を打といふはこれとは別なり天曆の天皇の御製に「年のかずつまんとすなるおもに、はいとどこづけをこりもそへなん」とあり

表荷打等、伊布許等能其等、　いふ言の如くなり、

老爾且阿留、　おい往てあるなり

我身上爾、病遠等、加且阿禮婆、　【奥人案るに拾穗に加氏之阿禮婆】今本病遠等加且阿禮婆と假字あれど言とほらずこゝは病をさへの意あればやまひをらくはへてとよむべし等はかるく助語の如心得べし兒等綿等などに同

豊波母、歎加比久良志、　加比は伎の延言

夜波母、息豆伎阿可志、年長久夜美志渡禮婆、　志は助字

月累、憂吟比、許等許等波、斯奈々等思騰、　許等々々は前にいひたる辛苦の事なり其くるしさには死ん〳〵とおもふなり

五月蠅奈周、　冠辭

佐和久兒等遠、宇都且且波、　智須約都なり打捨てと云

死波不知、　死ん事はゑらずなり

見乍阿禮婆、心波母延農、　もえぬは燒が如くといふ燃るなり（卷一）に念曾所燒吾下情死んこと云ゑらねど病おもければおもはるをいふなり

可爾可久爾、　左に右に同じ

思和豆良比、禰能尼志奈可由、」　可由約久なり

反　歌

奈具佐牟留、心波奈之爾、雲隱、　こゝに雲隱とはやまひのおもきに死んとおもへるをふくみたる歟

鳴往鳥乃、禰能尼志奈可由、」

周弊母奈久、苦志久阿禮婆、出波之利、伊奈々等思騰、許良爾佐夜利奴、」　せんかたもなくくるしければ死の道に出はしりいなんとおもへども子等いとほしむよりおもひやむとなりさやりは前にいふさはりなり

水沫奈須、　みづの沫の如くなり乃安の約奈なり
微命母、　栲縄能、千尋爾母何等、　網の綱の長に譬
慕久良志都、」　子等を思ふよりなり
倭文手纏、　冠辭
數母不在、身爾波在等、　やまひおもくていきるもの、
數にはあらねど、なげきたるなり
千年爾母何等、意母保由留加母、」
去神龜二年作之、但以類故更載於茲、　此に注は
前の水沫奈須の歌にひとしき歌なればさきつとしに
よみたれどこゝにのせぬと憶良の自注したるなり
天平五年六月丙申朔三日戊戌作、　こは右の歌ど
もを作る日なり彼神龜二年の歌をも此時に書添たれ
ばこゝに年月を去るせるものなり
○戀男子名古日歌三首、　こは憶良の男子の死したる
時かなしみてよめる歌なりこゝに長一首短二首と小書
したれど前にいふ如くなれば除く
世人之、貴慕、七種之、寶毛我波、何爲、　金銀瑠璃
硨磲瑪瑙珊瑚琥珀等の七種なりはじめに去ろがねも金
も玉も何せんにとよめるも同じ
加奈志伎妹與
□□□□□□和我中能、　今本何爲和我中能とあり言つ
づかず脫句ありとして白圈をおきかたはらに補ふ
產禮出有、白玉之、吾子古日者、　うつくしむ心より白
玉とたとへ云源氏桐壺に玉の男皇子さへ生れたまひぬ
といふに同じこゝろなり
明星之、　毛詩云晨見東方爲啓明和名抄歲星一名明星此
間云(阿加保之)
開朝者、敷多倍乃、　冠辭
登許能邊佐良受、立禮杼毛、尾禮杼毛登母爾、□□□□、
四言
半部禮
□□□戲禮、　今本登母爾戲禮とあるは言も意もたらず
よりて試に白圈を置て傍に補へり
夕星、　毛詩に昏見西方爲大白和名抄大白一名長庚此間
云由不豆々
由布弊爾奈禮婆、伊射禰余登、手平多豆佐波里、父母毛、
遠者奈佐柯利、　八言今本遠を表とし柯を我とするは誤
なりなさかりは莫放その略言にて古日が言なり
三枝之、　冠辭
中爾乎禰乍登、　中爾乎の乎は助字なり
愛久、志我可多良倍婆、　己がかたればなり良倍は禮
の延言己は古日をさすさがとも云は言通ふ故なり

何時可毛、比等々奈理伊且天、　八言
安志家口毛、　家久は久の延言なり
與家久母見武登、大船乃、　冠辭
於毛比多能無爾、於毛波奴爾、　おもひよらぬになり
横風乃、　邪風なりこゝは七言の句なるを五言とするは
例有
奥留母
□□□、　四言
邊留母布浪
□□□□□、布敷爾、　此歌は子をうしなひし悲のあま
りによめれば句も亂つゞかぬもあるべけれど今本に横
風乃爾母布敷可爾布敷可爾とあるは脫句衍字ありと
見えていかにとも訓がたく餘りに意もとほらず句つゞ
かずよりて白圈を置傍に字を補て脫句を足し衍字をす
て、誤字とおもへるを試に改むさて上の敷は浪の草を
敷と見たる誤ならんとす横風より布敷とはつゞかずさ
れど重りたる同句悉に誤し下の布敷は去く〳〵とよむ
べけれは上は浪の誤として暫補へり正しき本を得てあ
らたむべし
覆來禮婆、　邪風の病ます〳〵つのるをいふなり
世武須便乃、多杼伎乎之良爾、志路多倍乃、多須吉乎可
氣、　六言白多倍は木綿なるべし次の鏡をとるは幣帛な
り
麻蘇鏡、且爾登利毛知且、天神、阿布藝許比乃美、地神、
布之且額拜、可加良受毛、可賀利毛神乃、　かゝらんも
かゝらざらんも神の御心にまかせてといへるなり源氏
須磨の卷に「海にます神のめぐみにかゝらずば汐の八
百會にさすらへなまし」といへるもこれなり神の御心
にうけひき給ふをいふなり
末爾麻仁等、　此句と次の句の間に七言の句を脫し句並
亂れぬれどこゝは歌の意もとほり言もつゞけり仍てお
ぎなはず
立阿射里、　こは立足摺の志受約受なるを射に通はせり
よりて射と濁音を用うさて平言にあせりと云も足急に
て同意なり此句は上の伏而額拜の對句なるをおもへ
我乞能米登、　今本我乞の間に例の字あるは衍字なり
須臾毛、余家久波奈之爾、漸漸、可多知久都保里、　今
本都久とあるは上下したるなり一本によりて改くづほ
りは久都禮の禮と里は同音其里を延れば良比となる其
良を略き比を延て保里といふ形崩はおとろへたるな
いふなり【奥人按に久都保里は崩惚なるべし】
朝々、伊布許登夜美、　六言こゝは言たゆるをいふ

靈剋、　冠辭
伊乃知多延奴禮、　死をいふ
立乎杵利、足須里佐家婢、　前は天地の神をあふぎなし
　歩をはこびこひいのるをいひこゝはなげきさまよひて
　立ておどり居ては足ずりして起伏して歎を云
伏仰、武禰宇知奈氣吉、　こゝまで四句は上の如くかな
　しみに去づむかたちをいふ
手爾持流、　白玉のわが子といふより持といへり多は弓
　阿約持てあるなり
安我古登婆之都、　横風のといふよりこゝにつゞけてと
　ばしつといふと見るべし
世間之道、」　すべてはかなきさまをいひ終り

反　歌

和可家禮婆、　幼稚なり負といふをおもへば七つ八つの
　子か
道行之良士、　幼年なればなり
末比波世武、　幣はせんなり此集古今集にもある辭なり
之多敝乃使、　去たべは黄泉國をさす冥官などいふをさ
　すなるべし
於比弖登保良世、」　負てなり良世の約禮なり
布絶於吉弖、　伏起なり
吾波許比能武、　祈なり
阿射無加受、　天上へ率ゐゆけとなり
多太爾率去弖、　直にひきゐゆきてなり
阿麻治思良之米、」　天道へゆくを去らしめよとなり

今本こゝに右一首作者未詳但以裁歌之體似於山上之操【操劉向別錄回其道閉塞悲愁而作者名二其曲一曰操言遇二受害一不レ失二其操一也】載此次焉とあれど憶良集なればもとより其主の歌なるにかゝる事注せんや後人の書加へしなればすてつ

萬葉集卷九之考　終

萬葉集卷十之考〔流布本卷九〕

雜歌。

○泊瀨朝倉宮御宇天皇御製歌一首、　大泊瀨幼武天皇【後に雄略天皇と申】

暮去者、小椋山爾、【卷八秋雜歌に崗本天皇御製、暮去者小倉山爾鳴鹿之云々】小椋ををぐらと訓は(卷十二)の同歌に小倉とかきたるもてよめるなり【椋を按の誤りとして契冲は此外をも改め按を案の意にとりけるなめりこゝは座の意ならず小闇の意なれば字書に實熟て黑しとあるもて烏の意にかりたるにて改むる事にあらざるなり】

臥鹿之、今夜者不鳴、　今本にはこよひとすれどこゝは
　このよといふぞ古訓なるべしとやごとなき御說によりてあらたむ

寐家良霜、」(卷十二)に此歌を崗本天皇の御製とあるはよし泊瀨朝倉宮の比の去らべにはいさゝか後の世ふりにちかからんにやさて此家持集の始に是を出されて次の十二に又此歌を載られたるは重ねのせられたるに似たれど撰集にもあらず家の集にて聞にまかせ筆にまかせて書れたる物なれば末にもかゝる事あるなり誤りとしてあらたむべき事にもあらず

今本こゝに在或本云崗本天皇御製不審正指因以累載とあれど本より後人の書加しなれば小書とす事は正しともせめどみづからかゝる事を家の集に注せらるべきにあらぬをおもへ此末にも左の注には如此後人のわざも交れゝは心して見るべし

○崗本宮御宇天皇、息長足日廣額天皇、　紀(舒明)に息長足日廣額天皇二年冬十月遷於飛鳥岡是謂岡本宮云々【後に舒明天皇と申まつる】

幸紀伊國時歌二首、　同天皇三年秋九月云々幸于攝津國有間溫泉冬十二月天皇至自溫湯云云十年冬十月幸有間溫湯宮とみえたり紀伊國に行幸の事見えず紀の說正か此集の誤なるか

爲妹、吾玉拾、奥邊有、玉綵持來、奥津白浪、」　此歌男の歌なり此行幸從駕の公卿大夫の中の歌にて都にとゞめおきし妻をさして妹とよめるならん歌の意かくるゝ事なし玉はあわび玉を云事既みえたり

朝霧爾、沼爾之衣、不干而、一哉君之、山道將越、」　此歌は女の歌なり此行幸に夫の從駕にて紀伊國に至るを

都にて思ひやりてよめるなるべし二首ともに此幸の時の歌なればよせてあげしのみ

右二首作者未詳

○大寶元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時歌十三首、

續紀（文武）大寶元年九月云云天皇幸紀伊國冬十月車駕至武漏溫泉宮戊申從官并國郡同等進階云云當年租調并正稅利唯武漏郡本利并免曲赦罪人戊午車駕至自紀伊と見えたれば文武天皇の行幸なりさらばこゝに太上の二字あるは衍文歟又紀に太上（持統）の二字を落したる歟持統天皇の幸のありしか且太上天皇とあるに今本に大行天皇（崩御の後謚奉らざるほどをかく申なり）とあり一本によるにこは全衍字なればすてつ

爲妹、我玉求、於伎邊有、白玉依來、於岐都白浪、」 此歌前の歌と全く同じいさゝか辭の違るのみされど同案のあるべきなれば必同言ともいふべからず聞にまかせ筆にまかせられたりと見えたればおのづからかゝる事もあるにや端詞まで別なればいづれを誤とはいひがたしさるを今本に右一首上見既畢但歌辭小換年代相違因以累載とあるも前にいふ自の注ならず後人のわざなればすてつ

白崎者、 同國伊都郡郡郷名云賀美又云指理次の歌に白神とよめるもこれならん

幸在待、大船爾、眞楫繁貫、又將顧、」

三名部乃浦、 六言紀伊國なり今もみなべたるへの地の名有

鹽莫滿、鹿島在、 紀伊國なり島のしは濁るべし

釣爲海人乎、見變將來、」 朝開、榜出而我者、湯羅前、 紀伊國藤代より今道十三里を隔つ熊野へよれり

釣爲海人乎、見變將來、」 從駕の人なればめづらしみてかくよめるなり

湯羅乃前、鹽乾爾祁良志、白神之、 前にいふ如く白崎同所ならん

磯浦箕乎、 浦は借にてべと同じ

敢而榜動、 あへては喘てふ意なり

黑牛方、 呂宇約留なるを呂に通じいふ故に今を略し下に久呂牛方と六言も有上にも既出

鹽干乃浦乎、紅、玉裙須蘇延、往者誰妻、」 供奉の女房をさしいふ

風莫乃、 【風莫濱紀伊なり拾穗】此まゝにて訓は加射奈美か又莫は暴にて加射波也歟前にも同國にかざはやとよみし歌あれば風早ならんを字を誤しなるべし

濱之白浪、徒、於是依久流、見人無、 めづらしと見る浦なれば浪のよするも面白くてかくはよめるならん一本に於斯依來藻と有

今本こゝに右一首山上臣憶良類聚歌林曰長忌寸意吉麻呂應詔作此歌とあれど家持卿のかゝれたるにあらず此歌樣てふは僞つくれるものなりされど後の世の僞書とちがひ古につけてたま〳〵はとる事有と眞淵いへりさて憶良家持少しのたがひにて同時なれば此歌林家持卿の比にあるべきならねば此注後人の加へし事明なり仍てすてつ

我背兒我、使將來歟跡、出立之、此松原乎、今日香過南、」 此ならびの歌皆男歌なり一二三の句の詞女ことばめきたりこれによるにもとの三句は序にて出立の之は是の誤是迄は序歌にて四の句の此松原の此は吾の誤乎は衍字吾松原に地名と見る方やすからん

藤白之、 紀伊國なり今和歌の浦てふ地海の向にあたれりといふ

三坂乎越跡、白栲之、 冠辭

我衣手者、所沾香裳、」 旅の日數そひてなるゝによりてぬれしにや又有馬皇子をおもひまつれる歟紀路に至りて都べの遠ざかりたれば故郷こひしらの增りて袖の沾るとみんか

勢能山爾、 同國の山なり

黃葉常敷、 とこ玄くはもみぢの今に染及てあるをいふ十月なるにかくあるはとりたて、書と見えたり

神岳之、 紀（雄畧）に神岳と見ゆ又雷岳とも書りまことは三輪なり

山黃葉者、今目散濫、」 今本目を日に誤る一本により改今日としてはけふかと訓かのてにをはの字なくては然よまれず今もちるらんとは今かもちるかといふなり

山跡庭、聞往歟、大我野之、 和名抄に名草郡大屋又大宅郷あり式に名草郡大屋都比賣神社あり是か又は大神野の義なる歟

竹葉刈敷、廬爲有跡者、」 おもふに此末の句はいほりするとはとこそよまめ

木國之、昔弓雄之、 弓に名高人ありしならん其古事は不傳

響矢用、　和名鳴箭漢書音義云鳴鏑如今之鳴箭也
鹿取靡、　なめしはならべしにて數多を云ならん古へこ
こにありしならん今本の訓は誤なり
坂上爾曾安留、」　此段の上に來りて古をおもひてよめる
歟
城國爾、不止將往來、妻社、　今本に都末とあるは誤な
り妹山の事をよめるなればなり
妻依來西尼、妻常言長柄、」　ながらは既にいふ如く隨の
意妻のまゝなり妹山の名をもて云歟下はこゝに山もい
もといひながし實の妹にあらずまことの妻をよせこよ
といふならん一云孀賜奈毛孀云長柄と見ゆ
右一首或云坂上忌寸人長作、　既にもいふ如く家集な
ればよみ人かくとある人のいへばそれによりて書加
へられたるぞ家の集のまことなるべしかゝる書加へ
にならひて後の人みだりにあらぬ事を云加ふる事と
して書添しは前に云如く其妄なる證見ゆそは改て皆
捨
○後人歌二首、　右の行幸の時夫は從駕にて紀の國に
至りたるに妻の都にとゞまりたるをおくれし人とは書
たるなり

朝裳吉、　冠辭
木方往君我、　木方の方はゐのことくとなふ
信土山、　紀伊國なり今も眞土峠と云有
越濫今日曾、雨莫零根、」　此歌は妻のよめる歌にて意明
かなり
後居而、吾戀居者、　後に戀をるにといふに同じてにを
はなり此例既に出つ
白雲、棚引山乎、今日香越濫、」
○獻忍壁皇子歌一首、　天武天皇九のはしらの皇子今本
こゝに詠仙人形てふ注は書體も俗にて家持卿の筆なら
ざる事ゑるかれはすてつ
常之陪爾、　とこしへはときなしへてふ言にて絶ざるを
いふなり
夏冬往哉、裘、扇不放、山住人、」　この歌は仙人繪を見
てよめること歌にてゑらる意は裘は冬の物扇は夏の物
なるをひとつに畫たるゆゑたえず夏冬行とはよめるな
り
○獻舍人皇子歌二首、　同し天皇五はしらにあたり給ふ
皇子なり
妹乎、　冠辭

取而引與治、　既いふ如く取ひき攀なり是迄は序なり
採手折、吾頭刺可、　今本吾下刺の上に頭を脱せり刺を
かざすとは訓がたし次の二首めの歌の例をもて頭を補
へり
春山者、　地名なるべし
散過去鞆、三和山者、未含君待勝爾、」　かゝるがては不
勝の字をあてたれどまつがためと云なりやがてがての
君は多米の約なりさて歌は明なり
○泉河邊間人宿禰作歌二首、　山城國相良郡
河瀨、激乎見者、玉藻鴨、　藻は借字にて助字なり玉か
もなり
散亂而在、此河常鴨、」　河とのとは門なり此二首合見れ
ばうつくしき小石などの色あるがはやき瀨に流ちりて
多しと見えたり
彥星、頭刺玉之、孀戀、亂祁良志、此河瀨爾、」　此歌も
右の事なれどこは彥星の挿頭の玉の妹戀あまりてちら
しみだらしたるかとたとへよめるなりけり
○鷺坂作歌一首、　山城國久世郡下の歌に山城の久世の
さぎ坂とよめり

白烏、　冠辭
鷺坂山、　眞淵は白烏の鷺とつゞけしはことなしといへ
ど玄かいひては冠辭の例に違り仍ておもふに志良約左
なれば玄ら烏の玄ろきといひかけたる歟さぎのきは濁
音なれどか、る事には淸濁をいまざるは例なりさて白
烏とはまことは鵠をいふなりこゝに玄ら烏といふはな
にとさしたるにはあらずたゞに白烏といふのみなり
【詞草小苑に云 白烏なるもの 鷺とか、るなりなるもの
の約能なり】
松影、宿而往奈、　今本ゆきなと訓るは誤れり
夜毛深往乎、」
○名木河作歌二首、　山城國久世郡標を見るに二首とあ
りて一首とすこゝはもとより二首ありしか脱しなれば
本を殘して二首とおきぬ今は一首なり
發干、人母在八方、沾衣乎、家者夜良奈、羇印、」　久し
き旅になれそこなへる衣なるに名木川の水にぬれぬる
をほしもやらで旅行を隔句にかくいふにて第三の句を
初句の上に終の句を第二の句の下へかけて心得しか
ぬれ衣をほす人あれや旅の玄るしにはやらなといふな
り

今本此間に名木川の歌今一首を落せり又次の歌のはしことばも落たるなるべし

○杏人濱作歌一首、　こゝにかくあるべきを脱し事上にいふ如くなれば標にもこゝにも補へり

在衣邊、　荒磯なり

著而榜尼、　尼は借字海人なり

杏人、　此杏の字をからと訓べき事心得ずされど訓によりて前後の歌もて考れば玄がの唐崎などいふあたりの地名と聞ゆさればからはまならんかおしていは、杏はからも、と訓はそをもてからに借しかされどあまりしき用ゐさまなれば誤とすべしおもふに唐の草を夜と見し草の手より誤りしならんか

濱過者、戀布在奈利、」　歌の意はから人の濱の磯べにつきて榜行海人の小松のにはよきにこゝをすきざれはそのさまのこひしく玄たはるゝとなり

○高島作歌二首

高島之、阿渡河波者、騷鞆、吾者家思、別加奈之彌、」　人麻呂のさゝの葉は眞山もさやにさわげども吾は妹おもふ別きぬればてふをよみうつせしなれば末はわかれかなしみなるべし今本別を宿とし訓はたびねとせりかかる例もなく又客の字とすればたびをと訓んには乎の字を添べき事なれば宿は前の別の手の誤りとして改む

【旅にての宿なればことわりもて宿をたびねとよむもわろからず今本の方によるべし奥人】

客在者、　此初句は終句にかけて見るべし旅なれば夜中にも道行は其照月のかくるゝをも見るなり此五言もて古への調のよきを見るべし

三更刺而、照月、高嶋山、隱惜毛、」

○紀伊國作歌二首

吾戀、妹相佐受、　あはずといふを延たるなり佐受約受なり旅なれば妹にあはずなり

玉浦丹、衣片敷、一鴨將寐、」

玉匣、　冠辭

開卷惜、怯夜矣、袖可禮而、　怯は恪に同じくをしむなり妹が衣手離てなり旅なればなり

一鴨將寐、」

○鶯坂作歌一首

細比禮乃、　冠辭細をたくに訓よしは冠辭にいへりされど眞淵はさぎとかゝるよしを云きこも細比禮乃白とかかる事前の白鳥の鶯坂とかけしに同く志羅約左なる故

さきの左の一字のみにかけ云事前にいふが如しこをもて前の說とすべし

鶯坂山、白管自、吾爾尼保波氐、妹爾示、」　さて此四の句の氐は泥にてねの意なり今の京の俗言に雨ふらで野もあをみなんといふに同じ此泥は平聲にあらず上聲に唱ふ歌意は白躑躅の色のわれにほひつかね妹に示さんと云なり

○泉河作歌一首

妹門、　冠辭

入出見河乃、　山城國相良郡に在

床奈馬爾、　川のとこなめをいひてそれより殘雪のとこしなへなるにいひよせたり

三雪遺、　三は借字例の眞の意なり

未冬鴨、」

○名木河作歌三首

衣手乃、　冠辭

名木之河邊乎、春雨、吾立沾等、家念良武可、」　家に思ふらんをにを略て家もふといへり

家人、使在之、春雨乃、與久列杼吾乎、沾念者、」　歌意は吾をはやもかへりねともふ家なる人のつかひならめかく雨をさけよくれどもぬらしぬるよと思ふとなり

發干、人母在八方、家人、春雨須良乎、問使爾爲、　問は眞の意なり歌は前の意の如し

○宇治河作歌二首

巨椋乃、　山城國伏見と淀の間に在

入江響奈理、射目人乃、　冠辭なり此目は牟禮の約なり

伏見何田井爾、　何は乃に通ふ田井は田居なり遠き田に假ほつくり居を云

雁渡良之、」

金風、山吹瀨乃、響苗、　此苗も例の並なり

天雲翔、雁相鴨、」　秋風は山に吹なる故山吹の瀨にいひかけて其風に其瀨のなみ立響故にそこに居たる鴈のこなたへ天雲とひとしく飛來るにあひしと云なり初句二の句のもちゐざまいたく後の世ふりなり

○獻弓削皇子歌三首、　淨見原天皇四柱の皇子

佐宵中等、夜者深去良斯、鴈音、所聞空、月渡見、」　月のかたふける方に鴈の鳴わたるげに物しづかにあはれもことにて且夜のふけたることも玄るき空のさまなるをもてかくよめるなるべし

妹當、茂苅音、夕霧、來鳴而過去、及乏、」 歌意は妹があたりに去げからん鴈のわが方にたらまほしきまで鳴過るといへるなりとぼしきはすくなきにて既に其如く足欲敷を約たるなり

雲隱、鴈鳴時、秋山、黃葉片待、時者雖過、」 黃葉をかたづにまつなり片は借字正しくは方なりさて今則秋の時なればもみちの遲きをいふなり

○獻舍人皇子歌二首

捄手折、 冠辭

多武山霧、 霧雨ならん

茂鳴、細川瀨、 大和の地名なるべし

波騷祁留、 ある人遠つ國べに遊べるがいへらく高山には霧雨いと〳〵つよく里の大雨の如しとさらば谷川などの細きは激つべし

冬木成、 既に是を盛の誤とすれど字書を見れば成も盛の字に同じく借るべし

春部戀而、殖木、實成時、片待吾等叙、」 こは打聞の歌なり下に相聞とわかたれぬれば此歌こゝに入べからねと撰集とちがひ私の家の集なれば筆にまかせられかく手の事はあるべければ見過すべし

○舍人皇子御歌一首

黑玉、 冠辭

夜霧立、衣手、【冠辭考に云こは袖をたぐるとつゞけしなるべし具利の約妓なれば約てたぎと云りさてこゝは其幾を加に通して多加とつゞけたるは例の冠辭のいひかけ也とみゆ偖是をころもでのと訓ては次の語のことわりなければころもでをとよみつ】冠辭

高屋於、 地名なり河內國古市郡に在

霏微麻天爾、」

○鷺坂作歌一首

山代久世乃鷺坂、自神代、春者張乍、秋者散來、」 佐保川の柳にも張とよみたりさてはるは草木のめはるをいひて秋のちるをいふのみ

○泉河邊作歌一首

春草、 冠辭

馬咋山自、 山城國綴喜郡に咋岡神社と有に同じ地の委は冠辭に云今本是をうまぐひやまをと訓るは誤れりまぐひの山ゆと訓べし自ををと訓る例無

越來奈流、鴈使者、 たゞ鴈を云此比の事なれば唐意にていふ

宿過奈利、」 すぎぬるの意なり

○獻弓削皇子歌一首

御食向、 冠辭

南淵山之、巖者、落波太列可、消遺有、」 今本消を削に誤て末の句をちるなみたれかけづりのこせると訓しはわらふべしよて字を改訓を改むこは橘の千蔭か考なり

右柿本朝臣人麻呂之歌集所出、 今本には集所出てふ三字を脫左の人麻呂の歌とてあげし歌の端ことばとせるは誤り也又標には歌の下に二首と加へしはいよいよ後人のさがしらなりさて大寶元年幸紀伊國時の歌十三首後人の歌二首は歌ともの前に歌數をあげ此次々ははし詞に歌一首二首云々と歌數を擧て其歌共の終に高橋蟲麻呂歌集所出あるは笠金村あるは田邊福麻呂など歌集出とある下の例によりてこゝの書體をあらためぬ次〳〵にてらし合せて見るべし

吾妹兒之、赤裳泥塗而、 ひたしてなり豆智約智是を再延れは多志となるとなり

殖之田乎、苅將藏、倉無之濱、」 かりてをさめんまではくらなしの濱をいはん序なり倉無濱後のものに豐前と有猶可考

百傳布、 冠辭今本百傳之とあるは之は不の誤歟又布歟委冠辭考に在

八十之島廻乎、榜雖來、粟小島者、 和名抄に阿波板野郡小島(乎之萬)と見ゆ紀伊國粟島にあらす

雖見不足可聞、」

右二首或云柿本朝臣人麻呂作、 今本こゝに或說を擧しは家持卿の書給へるなり此二首の右にはし詞あるべき例なれど何てふ傳へもなく且きはめて人麻呂の歌ともなければ人麻呂家集の歌の次に出しあげて或說を歌の右にことわられたる物なるべし

○登筑波山詠月歌一首、 今本歌を脫せり例によて補ふ

天原、雲無久爾、烏玉乃、 冠辭

霄度月乃、入卷惜毛、」

○幸二芳野離宮一時歌二首

瀧上乃、三船山從、秋津邊、來鳴度者、誰喚兒鳥、」

落多藝知、流水之、磐觸、與杼賣類與杼爾、月影所見、」 たぎりて流る川の月影は岩間の淀みにのみ宿れるが見ゆる物なるをそのまゝによくいひとりつ

右二首作者未詳

○槐本歌一首、　姓ならんされど其人は云られず

樂波之、　冠辭

平山風之、海吹者、釣爲海人之、袂變所見、」　意明なり

○山上歌一首、　山上は姓にて則憶良をいふならん此歌

卷一に既に出

白那彌之、　（卷二）の説によりて改那は加の誤ならん

濱松之本乃、　一本木を本とするはよしよりてあらたむ

手酬草、　草は借字種の意なり

幾世左右二箇、年薄經濫、」　（卷二）には年の經ぬらんと

ありされど此卷は私の集にてうち聞まゝにかき入給

へるなればてにをはのかゝるほどの事はいかばかりも

あるべし

卷一に幸紀伊國時河島皇子御作歌或云山上憶良とあ

るはこゝに山上歌とあるによりて後人の書加へなる

を云りて眞淵はすてつこゝは山上の歌と傳へのまゝ

に家持卿の書給へるなれば今本こゝに右一首或云河

島皇子御作歌と書たるはかの卷一によりて後人のさ

がしらにかき加へたるを云るよりてすてつ

○春日歌一首、　春日藏首老か下に春日藏とあるも同人

なるべし

三河之、　地の名ならん三河國にはあらずされどいづく

とはわきがたし

淵瀬物不落、左提刺爾、衣手潤、干兒波無爾、」　四の句

潤今本に湖とあるは誤なり訓によりて改一本に溫とあ

るは濕の誤なるべしいよゝ今本の誤なるをおもへ

○高市歌一首、　高市連黑人ならんか

足利思代、　今本あしりおばと訓るはわろふべしことに

思は於の假字にてにをはに用る例なく訓を假字に用

る例も違ひぬ集伴意なり言の解は前にいひつ

搒行舟薄、高島之、足速之水門爾、　既出近江地名なり

こゝにあとのみなとゝうけたるもても今本初句の訓を

誤るを云るべきなり

極爾濫鴨、」

○春日藏歌一首、　此歌も上の春日と同じてふ事既云

照月遠、雲莫隱、島陰爾、吾船將極、留不知毛、」　意明

なり

今本こゝに右一首或本云小辨作也或記姓氏無記名字

或稱名號不稱姓氏然依古記便以次載凡如此類下皆效

焉といへるはまたく後人の注明らかなりよりてすて

つ姓をいひて名をいはす名をいひて姓をいはぬなど

は私の集なればたやすく畧もすべきをや

○元仁歌三首、　こは名なるにやさらば法師か

馬屯而、打集越來、今日見鶴、芳野之川乎、何時將顧、」

歌意明なり

辛苦、晚去日鴨、吉野川、清河原乎、雖見不飽君、」　苦毛

落來雨可てふにてよめるならん體似ものにあらす

吉野川、河浪高見、多寸能浦乎、不視歟成晉、戀布眞國、」

眞久約牟にて戀しけんになり

○絹歌一首、　名なるべかればかくよむべし

河蝦鳴、六田乃河之、川楊乃、　青やぎといへは川楊と

訓べし案に奈義約爾なるを同行の義にも通へば奈を畧

くは例なり刺楊根はふともよみたれば根とつゞけたる

は例なり

根毛居侶雖見、不飽君鴨、」　此歌も相聞の歌なりことは

上の冬木成てふ歌に見るか如し

○島足歌一首、　名なるべし

欲見、來之久毛知久、【久は助辭なり又之久の約須にて

此須は之多留の約こしたるも云るくと云なり】

吉野川、音清左、見二友敷、」　見まほしみこしかひあり

て音さやけく見るにたらまほしみするなりやがて見あ

かぬをいふなり

○麻呂歌一首、　名なるべし京職大夫麻呂卿を云は少し

くなめげなり他人ならん

古之、賢人之遊兼、吉野川原、雖見不飽鴨、」（卷一）

に「淑人のよしとよく見て」又（卷八）に「妹か紐ゆふばか

うちをいにしへのよき人見きとこをたれか云る」など

よみていにしへの益人のあそびし所といひつたへたり

右柿本朝臣人麻呂之歌集出、　登筑波山詠月云々以下

の十四首人麻呂集の歌なる事既にいふがごとし

○丹比眞人歌一首

難波方、鹽干爾出、玉藻苅、海末通女等、　今本あまの

をとめらと訓しは例にたがへりよりて訓を改む女は例

によりて補へり

汝名告左禰、」　今本つげさねとあるも卷一にいふ如く誤

なり

○和歌一首

朝入爲流、人跡乎見座、　乎は助辭そへて云のみ

草枕、　冠辭

客去人爾、　今本客を容に誤仍て改

妻者不敷、」　敷は借字及の意妻の如くにはあらしなり

○石河卿歌一首

名草目而、今夜者寐南、從明日波、戀鴨行武、從此間別者、」

こゝよりわかれなばなり

○宇合卿歌三首

曉之、夢所見乍、梶島乃、　後の物には丹後とあり心ゆかず此歌の前の歌難波次々は山城遠江の地名あり遠き國ならじ可尋

越浪乃、　如くを入て心得べし

敷豆志所念、」　敷は及の意なり是より上四首は極めたる相聞の歌なり事は既にいふが如し

山品之、　山城なり

石田乃小野之、母蘇原、　柞の多ある所なり俗言に楢にあたる

見乍哉公之、山道越良武、」

山科乃、石田社爾、　一本杜とあり

布靡勢者、　今本布靡越者とありてふみこえばと訓しは何の事もなし(卷五)に山代石田杜心鈍、手向爲在、妹難相、(卷三)の長歌の末の句に山科之、石田森之、須馬神爾、奴左取向而、吾者越往、相坂山遠、またく此一首もてよみたる歌なれば越を勢の誤としてたむけせばとあらたむ布靡の二字をたむけと訓は義訓なりぬさは布麻の類を裁切て袋に入て旅行く人道の神に奉るなれば布なびかすとは書きたるなり

蓋吾妹爾、直相鴨、

○碁師歌二首、　碁檀越と有人歟師とはあがめたる意なり

母山、　地名いづれの國か玄らず但次の歌も同じ時の歌と見ゆさらば近江國高嶋郡より見る山歟

霞棚引、左夜深而、吾舟將泊、等萬里不知母、」　行とゞまる地を玄らずといふなり

思乍、雖來來不勝而、水尾崎、　近江國高嶋郡紀(繼體)式高嶋郡水尾神社二座とあり和名抄にも同じよしに見えたり

眞長乃浦乎、又顧津、」

○小辨歌一首、　左右小辨なる人を云か誰とも知がたし

高嶋之、足利湖乎、榜過而、鹽津菅浦、今香將榜、　一わたりに打きゝては人事めけれどさにはあらじ其鹽津菅浦てふ地の名をは聞てまだ玄らぬを今舟人の榜行らんこゝはそこかと云なりかゝる體もある事なり今本著をかと訓しは誤なり訓により香と改

○伊保麻呂歌一首

吾瑩、　冠辭

三重乃河原之、　紀(雄略)に伊勢國之三重采女和名抄に同所に三重郡あれば伊勢なるべし委は冠辭考に云

磯裏爾、　裏は借字浦なり

如是鴨跡、　かばかり面白所かなとて蛙の鳴かとなり

鳴河蝦可物、」

○式部大倭芳野作歌一首、　かくあるは氏か又大丞かおほくは丞の草を倭と見誤しならん

山高見、白木綿花爾、落多藝津、　おちたぎりつるの略なり(卷八)に泊瀨川白ゆふ花に落たぎつと有

夏身之河門、　字の如く心得すみて訓べし

雖見不飽香門、」

○兵部川原歌一首、　此人誰とも玄りがたし

大瀧乎、過而夏箕爾、榜爲而、　榜は搒の誤にてこぎて率而かと云說もあれど端詞に川原の歌とあれば字のまゝよみこせのまゝにて安らかに心得らるゝなり

淨河瀨、見河明沙、」

○詠二上總末、　和名抄上總國周准と有

珠名娘子一歌、　今本歌字なし前後の例により補

一首并短歌、　是より下二十三首は末をもて見れば高橋蟲麻呂が家集より拔出て家持卿の擧給るなり

水長鳥、　冠辭水は須伊約志なれば借れるなり

安房爾繼有、　安房の方へつゞきたる上總なれば云

梓弓、　冠辭

末乃珠名者、胸別之、　人相に乳の間の廣を英雄の人とする是歟されど形もていふはをとめにふさはしからずこゝは心の思ひあけのせまからぬをいふ歟

廣吾妹、　六言

腰細之、　冠

須輕娘子之、其姿之、端正爾、如花、咲而立者、玉梓乃、　冠辭

道行人者、己行、道者不去而、不召爾、門至奴、指並、隣之君者、頓、　今本頓を預に誤か頓は多知萬知なり次の長歌に頓にとあるによる

己妻離而、不乞爾、鎰左倍奉、　またしはつかはしなり玉名に寶物の鎰をさへわたしたるなり玉名はさぶるこならん

人乃皆、如是迷有者、容艶、緣而曾妹者、多波禮豆有家留、」　されば此さぶるこたはむれしてをるなり

反歌

金門爾之、　金門は門の本の語（卷六）に左乎思鹿能布須也久草無良見要受等母兒呂家可奈門欲由可久之要思毛とよめり紀にも有一本は鐵鎖の意より云なり

人乃來立者、夜中母、身者田菜不知、　既いふたなしらずはたねらひ云らずなり

出曾相來、」

○詠二水江浦島子一歌、　水江は氏浦島は名なり今本歌を脫前云如なれば補

一首并短歌、　紀（雄畧）二十一年丹波國餘社郡管川人（續紀和銅六年夏四月割丹波五郡始置丹後國云々餘社も丹後に屬す）水江浦島子乘舟而釣遂得大龜便化爲女於是浦島子感以爲婦相逐入海到蓬萊山歷視仙衆語者在別卷云云【續紀淳和天皇天長二年丹波浦島子自蓬萊山歸于丹波古鄕逗島三百餘年今歲歸國日本紀云雄畧天皇二十二年秋八月丹波水江浦島子遊蓬萊山本朝通記曰按舍人親王撰日本紀在於元正天皇之時元正天皇先于淳和天皇九代親王何以得知其到蓬萊乎本朝神仙傳云經百年而歸于故鄕得其實耶奥人按雄畧天皇二十二年より淳和天皇二年迄三百四十六年也】

春日之、霞時爾、墨吉之、　丹後の地名なり

岸爾出居而、釣船之、得本良布見者、　今本本を乎に誤る事玄るかれはあらたむ

古之、事曾所念、　一明なり

水江之、浦嶋兒之、堅魚釣、鯛釣矜、　今本矜をかねて

と訓しは誤なり字によりて訓を改

及七日、　易にも七日而歸といひて古へより用ゐ來れり

こは唐音なれど奈良にありては歌言に用ゆ

家爾毛不來而、海界乎、　今本に宇美妓波と訓るはとらず

過而榜行爾、海若、神之女爾、邂爾、伊許藝趍相、　伊は發語わしりあひなり

誂良比、【伊許藝趣相誂良比云云つきのおち葉かくよめりされど下の菟名負處女の歌さては猶よみては調よくも聞えずかゞらひのかはけはの約にてかけはり合なるべしかけありあひとては聞がたし】四言次の加は計阿約良は利安約にて加利安比なり相聞の歌をうたひかけありあひて妹脊の思を通しあふなり奥の嬬歌會歌、菟名負處女墓歌、にも此言ありそこにも猶いふなり

言成之賀婆、　言は借字事なり既かけあひかたみに思ひあひたればこゝは事成しといふなり

加吉結、　此吉は伊の如唱ふる例なり俗のかひつれたりと云類なりつらねに結の字を書しは唐字に連結と有によりてかけるなるべし

常代爾至、　始に云紀の文もて見れば蓬萊にてこゝの字の如盡せず在代の國なり

海若、神之宮乃、　六言既常代に至りとあればこゝにわたつみの神の宮といふも卽蓬萊は海中の國なればそれを指て言なり龍の宮にはあらざるべし下にも常世べとあるもてもゝれ

內隔之、　內隔は內方なりたとへば九重の內と云が如し

細有殿爾、　細有殿は莊嚴のいつくしきを云細は妙に書に同じ卽內宮の意もてかくいふなり

携、　既に前に云

二人入居而、　神のをとめとなり

老目不爲、死不爲而、永世爾、　卽常世を云

有家留物乎、　一段なり

世間之、愚人之、　世の中の玄れたる人は此歌人の浦島子をさし云なり後の物語ぶみに世の玄れ人など云が如し

吾妹兒爾、　彼をとめになり

告而語久、須臾者、家歸而、父母爾、　浦島子が自の父母を云なり

事毛告良比、如明日、　あすのごとは俗のあすのほどなと云が如し次のけふの心に對へいふ

吾者來南登、言家禮婆、妹之答久、　いらへくは倍久約不にていらふなり或說にいへらくをつゞめし言なりといへどさはつゞめがたし

常世邊爾、復變來而、如今、將相跡奈良婆、此篋、　下に箱とあれど玉篋ともいへればこゝもくしげとよむべし

開勿勤常、曾己良久爾、　そこばくのことなりこと多く心をいれていふ意なり十ばかりを約云なり

堅目師事乎、　契をかたくなり

墨吉爾、　此男の在所をいふに二所共に墨江と書名をいふには水江とあれば墨江は在所なりはじめに云如く水江は氏浦島は名なり右に引紀の文に管川の人といひて水江云々とあるを合て見るべし墨江は諸國に在名なれば餘謝郡にも有しなるべし諸說は皆わろかりけり

還來而、家見跡、宅毛見金手、里見跡、里毛見金手、惟常、　四言

所許爾念久、　こもそここゝらのそこに同し俗のそこで直に思ふと云意なり

從家出而、三歲之間爾、墻毛無、家滅目八跡、　常世べにてたゞ三年のほどにおもへるに垣もあとなく家もなからんやとなりまことはいと年歷にたるを次々にいはんとてかくいふなり

此筥乎、開而見手齒、　見たればの約言なり手は多良約多なるを手に通しいふなり

如本來、　今本に來本と有は上下したるなり

家者將有登、玉篋、小披爾、白雲之、自箱出而、　ここまでにくしげともはことゝもいへれど皆一物なり

常世邊、　かの蓬來の方になり

棚引去者、立走、叫袖振、反側、足受利四管、頓、情消失奴、　今本消を清に誤り

若有之、皮毛雜奴、　玄はみの美は半濁にて玄はびといふに同じやがて玄はぶりをつゞめし言なり

黑有之、髮毛白斑奴、由奈由奈波、　由奈々々を夕なゝなりそは夕べなれど調べのために重ね云とふ說あれど取がたし歌の意とほらねばなりおもふに由奈約也なりされば也々久の久を省きて也々波といふ歟かくいふは後遂にとあるにむかへてやうやくに息絕たりとせんか猶可考

氣佐倍絕而、後遂、壽死祁流、水江之、浦島子之、家地見、」　歌の始に古への事ぞおもほゆとあるもて見ればこは見んとよむべし又思ふに見は是の誤にて家地是といふ歟【鴨長明無名抄云丹後國よさの郡にあさもかはの明神と申神います國の守の神とかやいふ事物にもみえて今□□□□給ひてかつまへらる程の神にておはすなる是は昔浦島の翁の神になれるとなも傳】

反　歌

常世邊、可住物乎、劍刀、　冠辭

己之心柄、於曾也是君、」　おぞやとは鈍なり心おそきをいふなり卽浦島子をいふなり

○見二河內大橋獨去娘子一作歌一首幷短歌、

級照、　冠辭

片足羽河之、　河內國交野にて安寧天皇片鹽浮穴宮所ありしなり

左丹塗之、　丹塗なり左は發語のみ橋の高欄を塗る事既

宇治橋などもぬりたると見えてふるき石山の緣起の書卷物に見えたり

大橋之上從、紅、赤裳數十引、山藍用、　山藍とは山草にて何てふ事はなしこれに訛たる說多しやごとなき御說なりくはしく別記に云

摺衣服而、眞獨、伊渡爲兒者、　伊は發語なり

若草乃、　冠辭

夫香有良武、桓賢之、　冠辭

獨歟將宿、問卷乃、欲我妹之、家之不知久、」

反　歌

大橋之、頭爾家有者、　今本頭をほとりと訓しはわらふべし頭はかうべの訓の下のべを假字にかりたるにてやがて方の意なり訓を假字に用る例は既云

心悲久、獨去兒爾、屋戶借申尾、」

○見二武藏小埼沼鴨一作歌一首、

前玉之、　和名抄に武藏國崎玉佐伊太末と唱るに伎を伊の如云例なり

小埼乃沼爾、鴨曾翼霧、　はねきるははねきりあはすを三たび約省きたる言なりはねぎるの留を延れば良須となる又其良は利阿約なりさて安波約安なりかく延たるを約めかへせば留となるなりさて羽根をかくいふなりけり【こゝの三度約省と有はいとむつかし利阿波須の約留にて羽きりあはすなり】

己尾爾、　（卷十）挽歌の長歌の中に加母須良母都麻等多具比豆我尾爾波之毛那布利曾等之路多倍乃波禰左之可倍氐宇和波良の云云とあるもこゝに同じともに尾を美と訓べし

零置霜乎、掃等爾有斯、」　奈は爾阿約なり故にかく書てならしと訓べし掃は打はぶりなり霜を掃すてゝ水に遊をかくよめるなり

○那賀郡曝井歌一首、　和名抄に武藏國那賀郡と有

三栗乃、　冠辭

中爾向有、　中とつゞけしは武藏國那賀郡に向ひてながるゝをいふべし

曝井之、　古へ井と云は多くは流水の事なり

不絕將通、　ながれのたえずと云かけて上は序なり

彼所爾妻毛我、　我は欲得と同じく願意なり

○手綱濱歌一首、　此國地わきがたし武藏國の中なるか此歌の外此名見えず

遠妻四、亭爾有世婆、　今本亭を高に誤る諸成案るに驛

亭の亭の草を高と見し誤なり手綱の濱にもよしあれば高を誤る事去るし或説に其を誤る歟といへど取がたし又高として遠しの意としては聞えず

不知十方、　去られずともと云をはぶけるなり

手綱乃濱能、尋來名益、」　歌の意は此驛に泊れる時相知し妹のあるよし又あらん事をおもひてよめるなり

○春三月諸卿大夫等下二難波一時歌、　こは幸のたびなるべし次の歌にて去か見ゆ

二首幷短歌、　幷短歌と可有例なりこゝに脱せり標によりて補ふ

白雲之、　冠辭なり眞淵が考にもれたり

龍田山之、瀧上之、小鞍嶺爾、開乎烏流、　（卷六）花咲乎々留ともいひ又此言は（卷二）の別記にくはしく云今本に爲とあるは烏の誤なり

櫻花者、山高、風之不息者、　例のやまぬになり

春雨之、繼而零者、最末枝者、　四言穂津枝の意借字なり

落過去祁利、下枝爾、　四言

遺有花者、須臾者、落莫亂、草枕、　冠辭

客去君之、及還來、」　こゝに君と指は同じく幸の從駕の卿をさして大夫等のよめるなり

反　歌

吾去者、七日不過、龍田彦、　龍田彦は風の神にませばかく云なりけり後に龍田姫とて紅色を愛とふ誤を知れ

勤此花乎、風爾莫落、」

白雲乃、　冠辭

立田山乎、夕晩爾、打越去者、瀧上之、櫻花者、開有者、落過祁里、含有者、可開繼、許智期智乃、　遠近なり

花之盛爾、　さかりにはのはを省けるなり

雖不見、左右、君之三行者、　三行は幸なり

今西應有、」　此歌前の歌よみたる大夫等にあらず同時別の大夫の歌なりさるは歌の意にて去るべし或説に雖不見と左右の句の間小數の句の落たる歟といへど歌の意を考るに咲たる花はちりすぎふくめるはやがて咲ぬべけれど此花を盛に見がてなるをいかにせんとにもかくにも幸は今なるべければと花の盛を見ぬを惜るなりかく見ずては反歌までもとほらず從駕のいとまなきをいふ歌とすればとほりて聞ゆ

反　歌

暇有者、魚津柴比渡、向峯之、櫻花毛、　乎毛といふべきを乎を略てよめり

折末思物緒、」

○難波經レ宿明日還來之時歌一首幷短歌、

島山乎、射往廻流、河副乃、丘邊道從、昨日已曾、吾越來壯鹿、一夜耳、宿有之柄二、　これより上は難波河内などの事なり峯上よりして立田の事なり此立田の事眞淵が説に今の平群郡なるは後にうつされたるにて古への立田は高市郡なりといへり此前の歌の小倉の峯といへるも今のくらがり峠にてこゝに小倉と云山有紀（神武）に越立田山大和に攻入らんとおぼしけれど山けはしく道せばくして不叶とあればなりといへり此歌の立田もそこなるべし

岑上之、櫻花者、瀧之瀬從、落墮而流、君之將見、其日左右庭、山下之、風莫吹登、打越而、名二負有杜爾、　前にもいへる如く立田彦は風の神にて式の説詞にも朝廷の風神祭ると有是なりよりて名に負といへり

風祭爲奈、」　此歌は前の歌とも以て見れば幸につきて御先へ行てかへりくる人の從駕の大夫等をさして君といひたる歟反歌の兒もがもとこゝにあはせて去るべし

反　歌

射行相乃、　冠辭考をとめらにゆきあひのわせてふ條に擧し如く龍田迄の道に在地の名なるべし

坂上之蹈本爾、　今本に坂上を字のまゝによみしは誤りなり

開乎烏流、　今本爲とあるは既云如く烏の誤りなり

櫻花乎、令見兒毛欲得、」

○檢税使大伴卿登筑波山時歌一首幷短歌、　作の字もなく歌意も自の歌ならず國官のよめるならん

衣手、　冠辭

常陸國、　六言

二並、　こは此山に男神女神のひかひておはせばなり（卷十四）登筑波岳丹比眞人のよめる長歌の中に朋神之貴山乃儕立乃見果石山跡とあるも朋にはあらず淵なればともにふたなみなりそのよしはそこにいふなり

筑波乃山乎、欲見、君來座登、熱爾、汗可伎奈豆、　六言今本氏を氣とす歌意もて誤を去るよりて字も訓も改む

木根取、嘯鳴登、【奥人按にうそぶきの字は伊伎の約伊を宇に通し曾は曾刀の約外にて息外吹ちふ言なるべし】

上の五句は嶮岑にのぼるさまなり
岑上乎、君爾令見者、男神毛、許賜、　六言
女神毛、千羽日給而、　ちはひはさちはひの佐をはぶくのみ
時登無、　俗の時ともなくと云に同じくとこしくときしくと同詞なり
雲居雨零、　今本布利と訓さてはてにをは違ふ布留と訓て筑波根をと訓
筑波嶺乎、清照、　雲井雨降るは此山のつねにしてふらし照し見せしめ給は此神の意なり
言借石、　四言いふのふをにごるは借字の常なり扨言の意はいぶせきなどに同じ今の訓は四言の句ありとも云らぬ人のわざなり
國之眞保良乎、　まほらは眞中といふに同じ
委曲爾、　四言
示賜者、　歡登、　四言
紐之緒解而、　かたぬぎなどして打くつろぎたるをいふなり
家如、解而會遊、　心うちとけてあそぶなり
打靡、　冠辭

春見廡之從者、夏艸之、茂者雖在、今日之樂者、」

反歌

今日爾、何如將及、筑波嶺、昔人之、將來其日毛、」

○詠霍公鳥歌一首幷短歌、　今本歌の字を脱標にあり例をもて補へり

鶯之、生卵乃中爾、霍公鳥、獨所生而、己父爾、似而者不鳴、　六言

己母爾、似而者不鳴、　六言

宇能花乃、開有野邊從、飛翻、來鳴令響、橘之、花乎居令散、　とまり居ちらしなり

終日、雖喧聞吉、幣者將爲、　今本幣を弊に誤るは違へる事云るかればあらたむ幣は賂の意なり

遐莫去、吾屋戸之、花橘爾、住度鳥、」

反歌

搔霧之、　羅志は利の延言かきくもりと同意

雨零夜乎、霍公鳥、鳴而去成、阿怜其鳥、」

○登筑波山歌一首幷短歌、

草枕、　冠辭

客之憂乎、名草漏、事毛有武跡、筑波嶺爾、登而見者、

尾花落、師付之田井爾、【師付今雫村筑波の麓に在と或い

へり】

雁泣毛、寒來喧奴、新治乃、鳥羽能淡海毛、　常陸國に新治郡有そこの鳥羽てふ地の湖に波立はかく云

秋風爾、白浪立奴、筑波嶺乃、吉久乎見者、　計久約久にて乎は助字よく見ればなり

長氣爾、念積來之、憂者息沼、」

反歌

筑波嶺乃、須蘇廻乃田井爾、【奥人案に須蘇廻乃田井童蒙抄云すそわの田井とは山の裾めぐりの田井と詠るなり云云】

秋田苅、妹許將遣、黄葉手折奈、」

○登筑波嶺爲嬥歌會日【或云筑波の古き人にかゞひの事尋に不知事といへり今六月十五日踊有あれど人妻など戯たる事なしと云り】

作歌一首幷短歌、　此爲嬥歌會日とあるをかゞひしてつどへる日と訓說有あしからねど此國ふりならず既歌もてかゞひの事を見るに歌を掛合うたひて戯つどふ日なりされば嬥歌會をかゞひと訓かゞひする日とよむぞまさるべし【嬥　玉篇往來貞韓詩田嬥歌也人歌也】

鷲住、筑波乃山之、裳羽服津乃、　地名なるべし

其津乃上爾、率而、未通女壯士之、往集、加賀布嬥歌爾、【奥人案に今本卷六難波宮作田邊福麻呂は長歌に夕薙丹嬥合之聲所聞と有かゞひは上の加は加伊約伎を加に通せしにて次の加は加計阿の約加にてかいかけあひのおとてふ意にてこゝのかゞひとは別言と聞ゆ】上の加賀布は辭にて掛合の約言なり古のかゞひは名とせる故同言を體にていふのみ

他妻爾、吾毛交牟、　交は義もて云けるなり他妻將求の意こをかよはんまぢらんなど訓は皆あたらず

吾妻爾、他毛言問、此山乎、牛掃神之、　牛掃は借字主張にてぬしばるなり

從來、不禁行事叙、　いましめずゆるし給ふを云なり

今日耳者、日串毛勿見、【奥人抄に日串の久は久留の約にてめぐるしてふ言なり卽目苦の意なり】吾妻を目細も見めでそとなり

事毛咎莫、」　こと人よりもいひとがむるとなり

嬥歌者東俗語曰二賀我此一、　此注蟲麻呂の集の時嬥歌の事を注したると見ゆれば此所にあげつべしさて今も土佐國白美郡大川上美良布神社式に有其事疑二非一生一と有て今も亜多此祭に出す此かゞひに同じく不

義を不禁神の意に叶ふと云傳へたりとぞ是もかゝる
たぐひと歌もて明らかに知らる是は此國人の歌なり

反歌

男神爾、　此山を前に二並と云も此男神女神の二尽もて
云

雲立登、斯具禮岑、沾通友、　今本沾と有は誤なり一本
によりて改む

吾將反哉、」　かゝる神事のたはれたる日なれば雲立知ぐ
れはふるともかへるまじと云なり

右件歌者高橋連蟲麻呂歌集中出、　以上廿三首の事前
にいふ

○詠二鳴鹿一歌一首幷短歌、

三諸之、神邊山爾、立向、三垣乃山爾、秋芽子之、妻卷
六跡、朝月夜、明卷惑視、足日木乃、　冠辭

山響令動、喚立鳴毛、」

反歌

明日之夕、不相有八方、足日木之、　冠辭

山彦令動、呼立哭毛、」　今本こゝに右件或云柿本朝臣人
麻呂作とあるは時代の知らべあるとも歌のこと知らぬ
後世人のひがわさなり此あつめ主家持卿の知らへには
近きものをよてすてつ

○沙彌女王歌一首、　今案に沙彌氏御母方の姓歟又さみ
の子てふ歌もあれば沙彌滿誓など云僧の沙彌にはあら
ず

倉橋之、　大和國十市郡

山乎高歟、夜窄爾、出來月之、片待難、」　此歌相聞なる
を常の歌の部にはふとのせられたるか片まちがたきて
ふ言もて知らる【卷十三に問人宿禰大浦初月歌二首其
二首めに椋指乃山乎高可夜隱爾出來月光之寸とあるは
此改る卷の序もて見れば既云如必此卷十一の卷なりさ
らばこゝに既出とは書べからず其上十三なるは月のみ
の歌こゝは相聞の歌なり必女王の歌にて同案の終の句
のたがへるなりされば後人の僞わざなる事知るし】

今本こゝに右一首問人宿禰大浦歌中既見但來一句相
換亦作歌兩主不敢指因以累載とあるは既沙彌女王の
歌と定てあげられたるに又此注あるべきならず後人
のわざなり仍て捨

○七夕歌一首幷短歌、

久堅乃、　冠辭

天漢爾、上瀨爾、珠橋渡之、下瀨爾、船浮居、雨零而、
かくやうにもうけ云事古き體にあるは自らなる如聞下
りてはよろし共聞えず

風吹不登毛、風吹而、雨不落等物、雲不令濕、不息來益
常、玉橋渡須、」

反歌

天漢、霧立渡、　秋の來りしを云

且今日且今日、吾待君之、船出爲等霜、」

右件歌、　今本こゝに或云と有知からざる事下云
中衛大將藤原北卿宅作也、　北卿は房前卿なり
且上の歌の下に或云の二字有此歌家持卿の作るとお
もはるれば自或云てふ事をかゝるべき事にあらずこ
ははじめの言どもにかくかゝれしもあるもて其よし
知らぬ後人のはじめにならひ書加へし知るし歌のす
がた書體もて家持卿とは知らる

相聞

○振田向宿禰退二筑紫國一時歌一首、

吾妹兒者、久志呂爾有奈武、　くしろにあれかしなり手
に纏玉なり訓の事は冠辭考釧著佐久々志呂玉釧の條に
委

左手乃、　釧は左右共にあるを左とのみ云は右手はつか
ふ事繁き物なれば其方をばいはで左手の然も奥かに隱
しもてつゝがなくつくし迄ゐてゆかんものをといふな
り釧は左手にのみ有る歟と思ひ誤る事なかれ

吾奥手爾、纏而去麻師乎、」

○和氣大首、【拔氣大首　一本然なり】一本も拔とあり
されど明ならずよて考るに拔は和の誤にて和氣氏歟大
首はかばねならん前後氏尸のみなれば是もさならんと
思侍り

任二筑紫一時娶二豐前國娘子紐兒一作歌一首、　今本
三首とあれど一首なり次の二首端詞の落たるにて別の
歌なり

豐國乃、加波流波吾宅、　かはるは地の名なり豐前國河
田郡香春の郷此所に紐兒が家あるなるべし

紐兒爾、伊都我里座者、　伊は發語つがりはつながりに
て俗のつながれと同言契沖云袋の口を鎖の如く縫なつ
がりといへり紐の兒の名によりて相思心緒をつがりを
るをいへり兒が家は吾家なりと云

革流波吾家、」

此間にも端詞脫たり全本を得たる人は加へよ

石上、　冠辭

振乃早田乃、穂爾波不出、心中爾、戀流此日、」
如是耳志、戀思渡者、靈刻、　冠辭
命毛吾波、惜雲奈師、」
○大神、【和名抄鄉名有大神(於保無知)大和豐後筑後攝津等有國名】
大夫任二長門守一時集二三輪河邊一宴歌二首、
三諸乃、　四言
神能於婆勢流、　佩にせるといふが如し神なればあがめていふ
泊瀬河、　後に三輪川てふも同じ泊瀬は上なり
水尾之不斷者、　水尾の緒は伊呂約卽水色なり流の絶ぬを云
吾志亂來也、」　此歌大神の太夫の歌なるべし
於久亂居而、吾波也將戀、春霞、多奈妣久山乎、君之越奈者、」　こえなばこえいなばといふなり此歌は宴の時大夫の妻人姉妹などの詠か調も然なり
右二首古集中に出
○大神大夫任二筑紫國一時阿部大夫作歌一首、
於久禮居而、吾者哉將戀、稻見野乃、　播磨の國なり
秋芽子見都津、去奈武子故爾、」　たゞの人をいさこども行はたがこぞなどいふはあれどたゞ子といふほもはら女をいへりさらば大神大夫の妻などに阿部大夫の贈たる歌なるか
○獻二弓削皇子一歌一首、　女のたてまつれるなるべし
神南備、神依板爾、爲杉乃、　神より板は神座の下の板をいふべしそれを杉板にてするもあればこゝはおもひもすぎずの序に置たるなり
念母不過、戀之茂爾、」
○獻二舍人皇子一歌一首、　右に同じ女歌なり今本二首とあるは誤なり次の歌は別なり
垂乳根乃、　冠辭
母之命乃、言爾有者、年緒長、憑過武也、」　たのみといふからは母の末にはとゆるせるなり末にやはの意なり
此間に今本端詞の落たるなり既いふが如し次の歌は男の歌なり
泊瀬河、夕渡來而、我妹兒何、家門、近春二家里、」　今本春を春に誤る
右三首柿本朝臣人麻呂之歌集出
○石河大夫遷二任上京一時、播磨娘子贈歌二首、　今本磨を麿に誤仍て改む
絶等寸笑、　播磨の地名
山之岑上乃、櫻花、將開春部者、君乎將思、」　是を今本におもはんと訓るは誤なり
君無者、奈何身將裝飾、匣有、黃楊之小梳毛、將取跡毛不念、」　是をとらんとおもはじと訓說あれど將取の下跡毛とある事諸本同一なればとらんともはじとよむ其說の誤りならん
○藤井連、　前に葛井連と有同じ人歟
遷任上京時娘子贈歌一首、
從明日者、吾波孤悲牟奈、名欲山、　和名抄に豐後國直入郡直入鄉是か
石蹈平之、君我越去者、」
○藤井連和歌一首
命乎志、麻狹伎久母願、　今本二の句麻勢久可願とあるはおちゐなくても聞えず考に勢は狹の誤其下に伎を脫し久は其まゝにて可は母の誤にて本文の如補へるは眞淵もいとやすからんと云り命はまさきくと云例集中多し正本を得て糺すべし【麻勢久可願　奥人按に如是可訓歟勢はさきかれの約勢にてまさきかれ久にかもとなるかくありこせのまゝによみてむも字を改補にまさりなむ】
名欲山、石踐平之、後亦毛來武、」　今本終の句の復亦毛と有は全く字を誤る事疑るかれば復を後に改て本文の如哲改なり
○鹿島郡苅野橋、　和名抄輕に作
別二大伴卿一歌一首幷短歌、
牡牛乃、【和名抄に牡牛(古度比)頭大牛也眞淵云卷十六にも事負乃牛と書たるもて見るに大牛にて物を餘に多負故特負牛と云歟】冠辭今本牝と有は誤なり此牡牛の事もつゞけがらも冠辭に委
三宅之滷爾、　今本滷を酒に誤こもよしは冠辭考に委し
三宅は和名抄に下總國海上郡三宅鄉と有
指向、鹿島之崎爾、狹丹塗之、　既云如く狹は發語丹塗にて赤色なり
小船儲、玉纏之、小梶繁貫、夕鹽之、滿乃登等美爾、
汐の滿終たるを四國にてはとゝひと云美と比の濁と通ふ東にてはたゝへといふ又音通へり
三船子呼、　大伴卿の乘給へる舟の水主なればみふなことあがまへ云すべて狹塗玉纏もあがまへ云なり

阿騰母比立而、喚立而、三船出者、濱毛勢爾、　道も狹にといふに同じく送り人の濱せまきまでにならび居てなり

後奈居而、　おくれならびをりてと云なり

反側、戀香裳將居、足垂之、泣耳八將哭、海上之、　卽三宅の郡の名なり

其津乎指而、　今本乎を於とす一本によりて改

君之己藝歸者、」　泣耳將哭以上の七句は大伴卿を玄たひおほくの人のなごりを惜をいひ海上を指ていにまさばと句を終る

反歌

海津路乃、名木名六時毛、渡七六、加九多都波二、船出可爲八、」　此反歌長歌をうけたる事見えず長歌に海路のある事もなし其上長歌はあがみ此歌はなめげなり然れば異歌のまぎれてこゝに入しならん

右二首高橋連蟲麻呂之歌集中出

○與妻歌一首

雪己曾波、春日消良米、心佐閉、消失多列夜、言母不往來、」　意明なり

○妻和歌

松反、　待却てなり

四哲而有八羽、　强てなり待とは强言にてあるかなり

三栗、　冠辭

中上不來、麻追等言八毛、

今本呂は追の誤末の子は毛の誤ならんとして暫字を改其據は（卷十七）に大伴家持思放應夢見感悅作歌に麻追我弊里之比爾而安禮可母佐夜麻太乃乎治我其日爾母等米安波受家牟此歌は今の歌の意をとられしと見ゆればもとの句の意は明らかに玄らるこれによりて今本の末句の字の誤も玄らるさて歌の意はまたはかへりこんといひたるは强言にて其時も通てきまさぬからはまつといふ事はいはじものぞとうらめるなり【麻呂　奥人按に今本呂と有を追と改もいかゞなるべきたけは有こせのまゝに玄たがふそよかる麻呂とありては三ぐりの中すぎても來ずしてかへりて心さへ消うせたりと丸が事をいはむや玄かいふべきにあらずといへる心なり】

右二首柿本朝臣人麻呂之歌集中出

○贈入唐使一歌、　既いふ如く入と書しは此比より誤たるなりよて玄か訓

海若之、何神乎、齋祈者歟、　海中にていづれの神を祭ばよからんと云なり

往方毛來方毛、　久佐の左は須良約にて行すらもくるすらもなり

船之早兼、」　此歌家持卿の歌なるべし此次の長歌以上朝臣金村歌集中の歌なれば此よみ人は自なる事あきらかなり

今本こゝに右一首渡海年記未詳と有は一本になし全く後人のわざなればすてつ

○神龜五年戊辰秋八月作歌一首幷短歌、　今本作を脫す【奥人按に此歌は笠朝臣金村と今本に出】

人跡成、事者難乎、和久良婆爾、　たまさかと同言既出づ婆は未約を玄らず

成吾身者、死毛生毛、君之隨意常、　今本まゝにと有はいまだし古きによて改む

念乍、有之間爾、虛蟬乃、　冠辭

代人有者、大王之、御命恐美、天離、　冠辭

夷治爾登、朝鳥之、朝立爲管、群鳥之、群直行者、留居而、吾者將戀奈、不見久有者、」

反歌

海若之、雪零山乎、將越日者、留有吾乎、懸而小竹葉背、」　長歌共にこは女歌なり

○天平元年己巳冬十二月作歌一首、　今本作字なし幷短歌二首、　今本此二首なし例に依て補ふ續紀十、天平元年十一月癸巳任京及畿內班田使云々此時の歌なるべし

虛蟬乃、　冠辭

世人有者、大王之、御命恐彌、磯城島能、　冠辭

日本國乃、石上、　冠辭

振里爾、　六言

紐不解、左寐乎爲者、吾衣有、服者奈禮奴、每見、戀者雖益、色二山上復有山者、　こは出の字を戲書せるなり山上にまた有山は出の字なり

一可知美、冬夜之、明毛不得啼、　今本呼は啼の誤玄るし仍て改

五十母不宿二、吾齒曾戀流、

妹之直香仁、」　たゞかはよきかといふに同じ妹に正に相時を云短歌の直に相左右をむかへ見よ扨此たゞは借字直人のたゞにあらずたゞし、まさし、たゞしき、まさしきといふは同言なるおもへ

反歌

振山從、直見渡、京二曾、寐不宿戀流、遠不有爾、」

吾妹兒之、結手師紐乎、將解八方、絶有絶十方、直二相

左右二、

件右五首笠朝臣金村之歌中出

○天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌一首并短歌、　續紀天平五年三月遣唐大使多治比眞人廣成辭見授節刀ニ夏四月己吉天遣唐四船自難波津進發此内の遣唐大使なり

秋茅子乎、妻問鹿許曾、一子二、子持有跡五十戸、　今本ひとつごふたつこもたりといへと訓るは誤なりさては句も亂ぬ且鹿は子一つ生もの故に次の冠辭にも鹿兒自物吾獨子とつゞくるにあらずやされば今改る如く句を分てはいとやすらかに句も亂ずことはりも明なりかくやすらかに訓る、物をむづかしく訓てむつかしげにいひなすはわらふべき事なりとやごとなき御說にはあるなり

鹿兒自物、　冠辭

吾獨子之、草枕、　冠辭

客二師往者、竹球乎、【竹は借字寶の略なり此注甚誤れり削るべし卷三に云說よろし、與人】竹は借字にて寶の略なり神代紀に五百箇野簫八十玉串と有是なり

密貫垂、　密は義もて書繁なり

齋戸爾、木綿取四手而、　四手は借字垂なり

忌日管、吾思吾子、眞好去有欲得、」　今本歌次に奴者多本奴去古本とあるは後人多本を見て書るにて家持卿自の書にあらずよて小書して本文はすてつ扨これをまよくゆかぬがとも訓てよくゆけかしと云意なり例ありてふ說有例ありとも去の下の有の字を奴の誤とせばさもよむべし有のまゝにてはゆけれがもとよまんこそやすく然も古意にかなふものを後人のひがわざにつきてよまんや本文はなるべきほどはあるまゝに考助てやむ事得ぬ誤字を補ひ誤を糺すぞ考にはあれさてゆければは山伎阿禮の伎阿約加なるを計に通してよめる例なり

反歌

客人之、宿將爲野爾、　此二句はすべて此度の遣唐使に從ひ行人をさすなり

霜降者、吾子羽裹、天乃鶴群、」　むらはむれなりさては鶴は大鳥なる故に母の心にていひ出たるは愛情のいと深しまこしとの歌故さらべまでと、のへり長歌も心深く短くやすらかなり

○思娘子作歌一首并短歌、　是より下三首は田邊福麻呂が歌集の中なり

白玉之、　人をほめて瑕なくよきを云

人乃其名矣、中々二、辭緒不延、　緒は假字にて言乎のはへずなり反歌に横辭とあるをもおもへ隔る人のあれば吾言を妹にのべいはんよしなくあはぬが多く重るといふなり

不遇日之、數多過者、戀日之、累行者、思遣、田時乎白土、肝向、　冠辭

心摧而、珠手次、　冠辭

石懸時無、口不息、　今俗の口につくと云是なり

吾戀兒矣、玉釧、　冠辭今本に鉐と書て玉だすきと訓る誤考に委

手爾取持而、　とりもちて見ねばの意なり

眞十鏡、　冠辭

直目爾不視者、　たゞちに見ねばなり

下檜山、　攝津國能勢郡下樋山なりこゝにひけるは下行といはん序のみ攝津國風土記の說まで云はわろし

下逝水乃、上丹不出、　色にはいでずといふに同じ

吾念情、安虛歟毛、」　かはの意にてやすきそらかはやすからぬとかへるてにをはなり毛はそへていふのみ

反歌

垣保成、　吾中を隔るなり成は如なり

人之横辭、　邪言なり

繁香裳、不遣日數多、月乃經良武、」

立易、月重而、雖不遇、核不所忘、　核は借字實の意

面影思天、」

右三首田邊福麻呂之歌集出

挽歌○

○宇治若郎子宮所ノ歌一首、【宇治若郎子　應神天皇の太子仁德帝の御弟御位を是の帝に讓てうせ給へり紀に委しく見】應神天皇は豐明宮に都したまへり若郎子命も始はそこに宮居し給しなるべし大和なり

是より下五首柿本人麻呂の歌集の中なり

妹等許、　冠辭

今木乃嶺、　大和國高市郡紀(雄略)には新漢紀(欽明)に今來紀(齊明)今城集中今城今木とあり皆同地なり

茂立、　茂一本並と有今本なみたてると訓たるは一本に

並とあるによりたるなれど茂の字なれば去みたてるとよむべき事なれば訓をあらたむ

嫗待木者、古人見祁武、」 歌意は此今木の宮所のあたりの嶺に去げくたてる松は今も有其若郎子皇子の見給ひけんと古を思ひ去ぬびまつるより挽歌には入たり妹らがりの冠辭より松をつままつといひかけたり

○紀伊國作歌四首、

黄葉之、 冠辭

過去子等、携、遊磯廻、見者悲裳、」 むかしこゝに遊し妹のみまかりたる後又來てよめるなり

鹽氣立、荒磯丹者雖在、往水之、 冠辭

過去妹之、方見等曾來、」 この歌の句のうち往水のとある水を磯の水とおもふべからずたゞ冠辭とせでは古意にあらず且川の水は行といふべし磯の水にはふさはしからずかへすゞすぎにしといはんのみの冠辭と見るべし

古家丹、 家は假字へにかりしのみ今本ふるいへとよみしはわろふべし

妹等吾見、黑玉之、 冠辭

久漏牛方乎、見佐府下、」

玉津島、磯之裏末之、眞名子仁文、 今本の訓によりて落字を去る名仁の間に子を脱る事去るければ補へり

爾保比弖去名、 訓によりて弖を補

妹觸險、」 玉津島のいそのほどの砂のうつくしきをそのかみ妹が手ふれなどしけんを思ひ出てよめるなり

右五首柿本朝臣人麻呂之歌集出、

○過二足柄坂一 今本坂を板に誤る仍て改

見二死人一作歌一首、【見の上に時字脱しなるべし奥人】是より下七首は田邊福麻呂が集中なり

小垣内之、麻矣引干、妹名根之、 名根は稱美辭男を名背といふに同じ名は大名持の如く根は母の國を根の國といふ根にて根元の根なり名ある人をたとへて名持といひ既いやしめては名なし雄子と云をも思へ

作服巽六、白細乃、 冠辭此間に衣の辭を略き云

紕絡毛不解、 此緒も前の歌に云如く假字詞なり

一重結、帶矣三重結、 奉公の勞に身もつかれ疲たるさまをいふなり

苦侍伎爾、仕奉而、 今谷裳、國退而、父妣毛、妻矣毛

將見跡、思乍、往祁牟君者、鳥鳴、 冠辭

東國能、恐耶、神之三坂爾、和細布乃、 今本細布を靈

とするは細布の草を靈と見し誤としてにぎたへと眞淵はよめりいかさまにも和靈にてはこゝに不叶よて字を改

服寒等爾、烏玉乃、 冠辭

髮者亂而、邦問跡、 今本郡とあるは邦の誤去るければあらたむ

國矣毛不告、家問跡、家矣毛不告、益荒夫乃、去能進爾、

今本進をすゝみと訓るは後なり古によて訓を改む

此間假有、」

○過二葦屋處女墓一時作歌一首並短歌、

古之、益荒丁子、 丁に出る男なればこゝに丁子とはせり

各競、妻問爲祁牟、葦屋乃、菟名日處女乃、 【歌林良材云昔津の國蘆屋の里にうなび處女といふ女有これを二人の壯士いとあらそひけり男の名一人をちぬ男と云一人をさゝた男と云けり男の心ざし何もひとしかりければ女思ひ煩ひて親に暇乞て終自害去てうせぬ其時二人の男も同く自殺去ければ其所の人是を葬るとて女の墓を中に築二人の男の家をあひ双べてつけるをうなび處女のおさつきといへり又花山院の大和物語にも此事見えたり奥人按大和物語云彼家の名はもとめづかとなむいひける云云此集をとめ家と有はもとめづかといへるは非なるべし】下の歌に宇奈比壯士と有津の國名なるべし

奥城矣、吾立見者、永世乃、語爾爲乍、後人、偲爾世武等、玉桙乃、 冠辭

道邊近、磐搆、作冢矣、 冢は令によるに三位以下は地と均しとあり磐搆など云は歌故にかくいへるか又格別の事故にかくせる歟

天雲乃、退部乃限、此道矣、去人毎、行因、射立嘆日、感人者、 上の句の射は發語なり此句の感今本に感とあるはまたく誤故改

啼爾毛哭乍、語嗣、偲繼來、處女等賀、奥城所、吾幷、見者悲裳、古思者、」

反歌

古乃、小竹田丁子乃、 小竹田は同國又隣國の地なるべし

妻問石、菟會處女乃、奥城叙此、」

語繼、可良仁文幾許、 からにも(卷三)の別記にくはしくある如く故に同しく又そのまゝてふ意ともなるこゝ

は何を切て意をつゞけり

戀布矣、直目爾見兼、古丁子、」末の句今本むかしのを

のことよめる訓のいまだしきをあはせ思へ

○哀二弟死去一作歌一首幷短歌、

父母賀、成乃任爾、　成は借字生なり

箸向、　冠辭

弟乃命者、朝露乃、鋺易竹詩、神之共、　此神は黄泉の

神なりさて朝露の消安きと此神を共といひてそれにあ

らそひかねてなり

荒競不勝而、葦原乃、水穂之國爾、家無哉、又還不來、

遠津國、黄泉乃界丹、蔓都多乃、　如を入て心得べし

各各向向、天雲乃、　こも如くを入て心得べし

別石往者、闇夜成、思迷徜徊、所射十六乃、　冠辭

意矣痛、　いらるゝ鹿のいたみの如く心をいたみといふ

を言を隔てゝらせるなり

葦垣之　冠辭

思亂而、春鳥能、　又如くを入て心得べし

啼耳鳴乍、味澤相、　冠辭

雷豊不云、蜻蜓之、心所燎管、　こもいるゝてふつゞ

けに同じかぎろひのごとく心のもえつゝなげくとな

り

悲接別焉、」

反歌

別而裳、復毛可遭、所念者、心亂、吾戀目八方、」一本

云意盡而とあり

蘆檜木笑、　冠辭

荒山中爾、送置而、還良布見者、情苦裳、」野送してか

へりなん情誰か此情なくてあるべきまことのまことな

る意なり

右七首田邊福麻呂之歌集出

○詠二勝鹿眞間娘子一歌一首並短歌、　是より下五首高

橋蟲麻呂の歌集中なり

鶏鳴、　冠辭

吾妻乃國爾、古昔爾、有家留事登、至今、不絶言來、勝

牡鹿乃、眞間乃手兒奈我、　眞間は下總國なり手兒はは

ての子の意名はほめいふ言なり

麻衣爾、青衿著、【青衿、今本かく訓】衿は和名抄に帶也

釋名に衿者禁也禁不得開散也とあれば於備と訓べし今

本の訓はあやまりなり

直佐麻乎、　ひたは直なり直麻をなり佐を助字と　いふ

說は誤なりあさのあをはぶけるのみ

裳者織服而、髮谷母、掻者不梳、履乎谷、不著雖行、

今本著を看に誤よりてあらたむ

錦綾之、中丹裏有、齋兒毛、妹爾將及哉、望月之、滿有

面輪二、　今本みてるとあれど例によりて改既神の御名

にも面足と申をもおもふべし

如花、咲而立有者、夏蟲乃、入火之如、水門入爾、船己

具如久、歸香具禮、　かゞひの所に云如く香具禮の具禮

約計にてよりかけなりかたみに心意をよせかくるなり

委くは別記にいふ

人乃言時、　何なり是迄男の方を云

幾時毛、不生物乎、何爲跡歟、身乎田名知而、　既いふ

如く身をたねらひゝなり

浪音乃、繁湊之、奥津城爾、妹之臥勢流、　何なりさ

わく湊の墓にこやすといふは則溺死をいふなり是まで

手兒名のこゝろを云なり

遠代爾、有家類事乎、昨日霜、將見我其登毛、　所念可

聞、」末の句共はよみ人の意なり

反歌

勝牡鹿之、眞間之井見者、立平之、水挹家牟、手兒名之

所念、」

○見二菟名負處女墓一作歌一首並短歌、　菟名負今本に菟

原和名抄に菟原(宇波良と訓)さて此端詞には假字なけ

れど歌のはじめに菟名負處女と既書たりこをもておも

ふに原は名負の二字の草を一字と見たる全き誤なれば

字をあらたむ作は例によりて補

葦屋之、菟名負處女之、八年兒之、　(卷十三)に歳乃八

歳乎切髮乃とあるをあはせて見よ

片生乃時從、　こは誠に生たらはぬをもて片生といへ

り

小放爾、　小放は髮のやゝのびて十五六歳をいふ

髮多久麻庭爾、　既女となりたるをいふ委は別記にい

ふ

並居、　父母など、並居しなり

家爾毛不所見、虚木綿乃、　冠辭

牢而座在者、　此者は爾に通ふほどの言なり

見而偲香跡、　見たりしかを約通していふ

悒憤時之、　をとめがいぶせがるなり

垣廬成、人之誂時、　八言垣穂の如く其家の通りに人多

くつどひて心をかけ合時といふなり誂は既に云

知奴壯士、　和泉の地名なり
乎奈比壯士乃、　處女と同地なり
廬八燎、　冠辭
須酒師競、相結婚、爲家類時者、燒太刀乃、　冠辭
手頭押禰利、　今本預一本頭とある頭の誤玄るし鈔は頭
といへば手はそへいふ辭にて頭を押ひねりてふを略云
なり
白檀弓、靫取負而、入水、火爾毛將入跡、立向、競時爾吾
妹子之、　菟名負處女をいふなり
母爾語久、倭文手纏、　冠辭今本文を父に誤れり
賤吾之故、大夫之荒爭見者、雖生、應合有哉、　此やは
也波のやにてかへるてにをはなりあふべからぬをいふ
なり
宍串呂、　冠辭
黄泉爾將待跡、隱沼乃、　冠辭
下延置而、　下ばえおくは知奴壯士に玄たがはんてふ心
をうち〳〵に通し置てなり
打嘆、妹之去者、血沼壯士、其夜夢見、取次寸、追去祁
禮婆、後有、菟名負壯士、　今本菟原と有て假字はうば
らとせりこゝをもて端詞の字を誤事いよゝ玄るきを見
よ仍て改む
伊仰天、　伊は發語のみ
叫於良妣、　さけびあらびなり於と安通
踢地、今本踢地を跟地に誤る玄るければ改む
牙喫建怒而、如己男爾、　もころは友比なり登毛は同行
故登を略て毛基呂といふ比とは同俗の意なり年比など
云比に同じやがて友又同きと云に意通ふ如己の字をあ
てつるにてもこゝろは玄らるゝなり
負而者不有跡、懸佩之、　帶取足緒などいふ物をもて取
着る故かく云なり
小鈔取佩、冬草黄都良、　冠辭今本字を誤る事も訓を誤
れる事も又冠辭考にもれし事もやごとなき御說をもて
委く別記にいふ言多わづらはしければこゝに略
尋去祁禮婆、親族共、射歸集、永代爾、標將爲跡、　今
本標を梗とせるは誤なり一本によりて改
還代爾、語將繼常、處女墓、中爾造置、　八言
壯士墓、此方彼方二、造置、　是よりよみ人の意なり
故緣聞而、雖不知、新裳之如毛、哭泣鶴鳴、」
反歌
菫屋之、宇奈比處女之、奥槨乎、往來跡見者、ゆきく

るとての留と呈を略いふなり見てばは見てあればを再
約いふ意なる事上にいふ
哭耳之所泣、」
墓上之、木枝靡有、如聞、陳奴壯士爾之、依倍家良信母、」
こは前の長歌の中の下ばえおきにあたるなり
右五首高橋連蟲麻呂之歌集中出、

萬葉集卷十之考終

萬葉集卷十一之考

此卷は今本の九の卷なりこれを今改めて十一の卷とするよしは考の十の卷(今十五)のはじめにくはしくいへり此卷を十一の卷とすれば此下二十の卷まで十卷すべて家持卿の集のまゝにならび集ぶりも書體も同しさまにつらなり且卷一の卷より六の卷までの集ぶりにもあへりよしをいはゞ古きみやぶりを始とし卷のはては國風ある二十の卷を終の卷とする事古萬葉の六の卷にひとしかたゞ〳〵ついでをかく定めなん事うべならずや

○はしことばは卷の一より卷の六までのさまに此國ぶりに訓べきなれど奈良の末となりてはもはら唐ざまに文字かき玄かよまんとすめれば此家持集も其意にてかき給へるなりさればあきらかに吾國ぶりにかけるはしごとばはみやびかによみかの唐ざまなる文はからざまによむべくせり唐めきたるは唐ざまによみて歌にかゝはらぬ事なればいたく心をもちゐざるなり

○契沖などが説のことさらによろしきはそをよしとして其名をあげたり誰も玄らるべきをいふには契沖またはあだし人のいへる意も必其名をあけことはらず玄かりとて他の説をぬすまひたりとおもふ事なかれ

萬葉集卷十一之考【流布本卷十五】

○遣二新羅一使人等悲別贈答及海路之上慟二情旅陳思一作歌

并當所誦詠之古歌、續紀(聖武)天平八年四月丙寅遣新羅使阿倍朝臣繼麻呂等拜朝とありて同九年正月辛丑大判官小判官は歸たる事見え大使繼麻呂津島にかへり來て卒し副使大伴宿禰三中病によりて入京せずといふ事ありしは此時の遣新羅使なるべし

武庫能浦乃、　攝津國なり

伊里江能渚鳥、　洲の鳥なり

羽具久毛流、　はぐゝまるなり毛は末と同言なり

伎美乎、波奈禮弖、古非爾之奴倍之、」　妹の背に贈れる歌なり歌の意はそのわかるゝ地の諸の鳥をおのれにたとへて夫にはぐゝまるゝをいひてわかれをなげくなり

大船爾、　使人の乘舟をさす

伊母能流母能爾、安良麻勢波、羽具久美母知弖、由可麻之母能乎、」　背の答の歌なり

君之由久、海邊乃夜杼爾、　奇里多多婆、安我多知奈氣久、伊伎等之理麻勢、」　妹の贈る歌なり事を切にいはんとて霧を息と云は古し

秋佐良婆、安比見牟毛能乎、奈爾之可母、奇里爾多都倍久、奈氣伎之麻佐牟、」　背の答歌なりほどなく逢べければばかくせちになげきそとなくさめたるなり

大船乎、安流美爾伊多之、　あるみは荒海なり流は良宇の約

伊麻須君、都追牟許等奈久、　意なくなり答の歌にさはりあらめやもといふ是なり

波也可敵里麻勢、」　妹の贈るなり

眞幸而、伊毛我伊波伴伐、於伎都奈美、知敵爾多都等母、佐波里安良米也母、」　背の答る歌なり意は妹か幸くてなり一わたりに見ばまさきくと妹がいのらばと見るべけれどこは妹がさきくありていはひいのるならばまことかたみにさきからんとなり古の妹背のむつびおもひはかるべし

和可禮奈婆、宇良我奈之家武、　心かなしからんとなり加良の約加なるを計に通なり

安我許呂母、之多爾乎伎麻勢、多太爾安布麻弖爾、」　妹の贈る歌逢までは下にきませなり乎は助字なり

和伎母故我、之多爾毛伎余等、於久理多流、許呂母能比毛乎、　此紐は下紐なり下紐とは古への服は下衣上衣ともに今の法師の衣の袗前に紐ありて結ぶが如くなりむかしはさしたればそを下紐と云

安禮等可米也母、」　背の答るなり此紐とかめやは他し妹に紐とくことはせじといふなり

和我由惠爾、於毛比奈夜勢曾、　おもひいたづきて痩そとなり

秋風能、布可武曾乃都奇、安波牟母能由惠、」　此歌も上の答とすべしあはんものゆゑはたゞにあふまでにといふにこたへたるなり

多久夫須麻、　冠辭

新羅邊伊麻須、　往ますなり【こゝを在とは云べからず今新羅へ行人にいふなれば往ますなり邊はゑの如く唱新羅へ去ますなり在なれば新羅邊に在すと言なれば爾のてにをはなくては在とは唱べからずもとより新羅に在る人におくるにあらず今行わかれを嘆歌なり】

伎美我目乎、　目とは顏をいふ事既に見えつ

家布可安須可登、伊波比弖麻多牟、」　妹の背におくる歌なり

波呂波呂爾、於毛保山流可母、之可禮杼毛、異情乎、

安我毛波奈久爾、」 爾はなげきいひ人る丶辭右の歌と此歌二首はいまだ背の道だちせぬほどにかねて思ひなげきてよめる女歌なり

右十一首贈答、

山布佐禮婆、比具良之伎奈久、伊胡麻山、古延呂曾安我久流、伊毛我目乎保里、」

右一首秦間滿、　此間滿も右の使人のうちにて難波の三津にて風待するほどに我家にかりそめに歸來る道にてよめるなり次の歌も同さまなり

伊毛爾安波受、安良婆須敝奈美、伊波禰布乍、伊胡麻乃山乎、故延呂曾安我久流、」こも右の間滿と同じくかりそめに家にかへれる人の歌なり

右一首暫還二私家一陳レ思、　こ丶にかく書たるはよみ人志らぬ物から心の意に志るしたるものならしとみゆ

妹等安里之、時者安禮杼毛、　此時も寒かりしと云なり

和可禮呂波、許呂母呂佐乍伎、母能爾曾安里家流、」

海原爾、宇伎禰世武夜者、　舟泊を云なり

於伎都風、伊多久奈布吉曾、妹毛安良奈久爾、」 意明なり

大伴能、　冠辭

美津爾布奈能里、許藝出而者、伊都禮乃思麻爾、伊保里世武和禮、」

右三首臨發之時作歌、

之保麻都等、安里家流布禰乎、思良受志呂、久夜之久妹乎、和可禮伎爾家利、」 風は汐待するほどにかりそめに家に歸て妹に逢得し人もあるに汐待してあはで船出せるをくひたる歌なり

安佐妣良伎、許藝呂天久禮婆、乍故能宇良能、之保非能可多爾、多豆我許惠須毛、」

和伎母故我、可多美爾見乍乎、印南都麻、　播磨の國にありさていなみづまの都は助字にていなみしまの略なりさつまつしまのまも島の意なり(卷十五)長歌にいなみづま幸荷の島ともよめるなり

之良奈美多加彌、與曾爾可母美乍、」 印南島を漕はなれば浪たかくして妹がかたみとせん島も見えずとなげきたるなり

和多都美能、於伎都之良奈美、多知久良思、安麻乎等女等母、　沖の島邊に舟のりする海人をとめをみてかくはいふならん

思麻我久流見由、」 風を放て島に隱る丶事なり譬は西風立來れば東の濱に舟隱するが如し

奴波多麻能、　冠辭

欲波安氣奴良之、多麻能宇良爾、　備前備中のうちなるべし(卷八)(卷十一)なるは紀伊國なれどこ丶は異地同名なるべし

安佐里須流多豆、奈伎和多流奈里、」

月余美能、比可里乎伎欲美、神島乃、　延喜神名式に備中國小田郡神島神社と見ゆこ丶ならん

伊素末乃宇良由、　池川などにも磯間のうら有地名にあらず

船出須和禮波、」 此歌は船泊してありしが風汐かなひて夜乘出るとてよめるとみえたり

波奈禮蘇爾、多良流乍漏能木、　檉和名抄に爾雅注一名川柳和名無呂弟三天目香樹又室木此木冬は枯花はうす赤にして香有比吉山に大木ありといへり

宇多我多毛、比左之伎時乎、須疑爾家流香母、」 うたがたは水沫なり空形の意もていふさてはかなき事あやうき事にとれりはなれ磯に一木あるさまはあやうくおもはる丶に其木の久しくあるをわが身の海をわたり他の國へ行てあやうきを志のぎて行くにたとへていへり

之麻志久母、　志ばしもなり久は辭にてそへていふなり

【與人按に之麻思久はしば敷の意ならむ歟志は須古之の約婆は比萬の約なりすこしのひまの乃を略けば婆と濁るなり伊佐々米に似たる言なり之久の之は曾比の約久は加行に働辭母は助辭なりよてすこしのひまそひくもなり】

比等利安里宇流、毛能爾安禮也、之麻能乍漏能木、波奈禮豆安流良武、」 意は上の如しはなれてあるらんとは妹はもとよりにてやからにもはなれてあるをいふなり

右八首乘船入海路上作歌、

今本こ丶に當所誦詠古歌とあるは既にもいふ如く後人妄に書しものなりこは右にある右八首乘船云云とある如く歌どもの左にあるべき事なり且是までの書法にたがひぬれば歌どもの終の左に書てこ丶の標はすてぬ

安乎爾余志、　冠辭

奈良能美夜古爾、多奈妣家流、安麻能之良久毛、　安米といふべきを唱へたがひたるなりよしは既にいふ

見禮杼、安可奴加毛、」 折しも白雲のたなびけるを見て古き歌をおもひ出てうたへるなり

今本こゝに右一首詠雲とあれど既に此前の卷にもいへる如く家集にかゝる事書べき事ならず古へ人のわざならず後人書加へしなれば捨つ

安乎楊疑能、延太伎里於呂之、　苗代は里回の田につくり其畔には柳など多きものなりされば枝葉田に覆てさはりとなれば切拂ふなり

湯種蒔、　苗代におろす稲實はいみつゝしみて蒔けば齋種なり水口祭などにいふ辭なり是まではゆゝしきといはん序なり集中齋種蒔あらきの小田とよめり

忌々伎美爾、故非和多流香母、」　ゆゝしきは齋敷にて今俗に大事といふにあたる又貴くよろしきにもいふことばなり妹戀あまりにおもひ出てうたふなり

妹我素呂、　冠辭なり考には脱せりこは袖は左右にわかれてある物なればわかれにのみ冠辭はかゝりて久まではかゝらず

和可禮呂比左爾、奈里奴禮杼、比登比母伊毛乎、和須禮呂於毛倍也、」　わすれておもはめやなり波女約倍なり今の俗言におもひわすれんやといふなり此事は既卷一の別記に云

和多都美乃、宇美爾伊呂多流、　わだつみの神のます海といふなり此つゞけかゝるはすくなしわたうみと同言なれば重れり

思可麻河伯、　播磨なりみなとなれば其所の川は海になかれ出るなればそれをいふ

多延無日爾許曾、安我故非夜麻米、」　たえぬ物からかくいふなり

今本こゝに右三首云云とあるも前にいふ如くなればすてつ

多麻藻可流、乎等女乎須疑兵、　暗誦誤れるなり敏馬過而なり

奈都久佐能、野島我左吉爾、伊保里須和禮波、」　又暗誦の誤なり船ちかづきぬなり此歌卷十四人麻呂歌八首の中なり

今本こゝに柿本朝臣人麻呂歌曰云云とあるは此次にあるも誤字のまゝひきたり多く後人の注をくるかれば皆すてつ

之路多倍能、　暗誦の誤なり荒栲なり

藤江能宇良爾、伊射里須流、　須受伎都留、安麻登可見良武なり

安麻等也見良武、多妣由久和禮乎、」　此歌も卷十四にあ

りて右の歌の次にあるなり

今本こゝに前の如くあれど既いふごとくなればすてつ

安麻射可流、比奈乃奈我道乎、　暗誦の誤にて長道從なり

孤悲久禮婆、安可思能門欲里、伊敵乃安多里見由、」　暗誦の誤なり夜麻等思麻見由なり是も右に同じ

今本前にいふ如こゝにあるを捨る事右に同じ

武庫能宇美能、爾波余久安良之、伊射里須流、安麻能都里船、奈美能宇倍由見由、」　此歌も右に同じ卷十四の一本の歌なり

今本こゝの注を誤る事右にいふが如し

安胡乃宇良爾、布奈能里須良牟、乎等女良我、安可毛能須素爾、之保美都良武賀、」　此歌卷一に出たりくはしくそこにみゆ

又前に同じければすてつ

今本こゝに七夕歌一首と標せれど月の歌にて此船路にて月の出たるを見て古き歌をおもひ出でうたへるなり此卷是までの例に違れば極めて後人のおもひ誤てさかしらして書加へたるなれば捨つ

於保夫禰爾、麻可治之自奴伎、宇奈波良乎、許藝呂天和多流、月人乎登枯、」　今本枯を祜に誤る

右當所誦詠古歌、　既云如く前の書體によりて始をすてゝこゝに此目をあぐ又今本こゝに右柿本朝臣云云と有も既云如くなれば捨

○備後國水調郡、　和名抄に御調郡

長井浦船泊夜作歌三首、

安乎爾與之、　冠辭

奈良能美也故爾、由久比等毛我母、久佐麻久良、　冠辭

多妣由久布禰能、登麻利都礙武仁、」　旋頭歌と今本こゝに小書せるも後人のわざなれば捨つ

右一首大判官、　此大判官ははじめにえるせし遣新羅使の事なれば續紀に從六位上壬生使主宇太麻呂とあるこれなり

海原乎、夜蘇之麻我久里、　こは數さはなる島々をこぎすぎゆくをいふなり

伎奴禮杼母、奈良能美也故波、和須禮可禰都母、」

可敞流散爾、伊母爾見勢武爾、和多都美乃、於伎都白玉、比利比呂由賀奈、」　利呂同言にてひろひてゆかんなり奈はいひきはむる詞なり

○風速浦、　備後なり

船泊之夜作歌二首、

和我由惠仁、妹奈氣久良之、風早能、宇良能於伎敵爾、奇里多奈妣家利、」　奈牙伎の奈は禰阿約にて音擧の言に加行の語を働云

於伎都加是、伊多久布伎勢波、和伎毛故我、奈氣伎能奇里爾、　なげきは長息也汐くもりをやがて霧といふさて汐曇は風の發に從て立と海べの人いへり此鹽くもりをきりといふは集中にあり【上には音擧といひこゝには長息也と有はまことは一つ心とも成べけれどさだめならぬ言也】

安可麻之母能乎、」　歌の意は妹がなげきのつよきとしてよめるなりこは海邊すこし風ある頃によめるなれば猶風吹て汐曇つよからばあくまでふかんとなり

○安藝國長門島船泊磯邊作歌五首、

伊波婆之流、　冠辭

多伎毛登杼呂爾、　鳴といはん序なり

鳴蟬乃、許惠乎之伎氣婆、京師之於毛保由、」　此歌は磯邊にてよめる歌なれば其邊のいそに鳴せみをきゝたるなるべし

右一首大石蕓麻呂、　此人も此夏の使人の中なるべし

夜麻河伯能、伎欲吉可波世爾、安蘇倍杼母、奈良能美夜古波、和須禮可禰都母、」

伊蘇乃麻由、　石の間よりなりいはばしると云に同

多藝都山河、　此間に爾乃如を入てこゝろ得べし

多延受安良婆、　身のつゝがなきを山川にいひよせしなり

麻多母安比見牟、秋加多麻氣長、」　あきかたまけなり秋のかたにむかひてなり既にもいふさてあひ見むは此所の景色をいふか古へ人は景色をみてかゝる意によむ多かれど前後の歌意もて見れば古郷の妹忍ぶ成らん

故悲思氣美、奈具左米可禰長、比具良之能、奈久之麻可氣爾、伊保利須流可母、」

和我伊能知乎、　乎は助字かろく見るべしこは見てをわたらんなどの乎の如し

奈我刀能之麻能、小松原、　松原を見てふりし世には小松原なりけんと見しなり

伊久世乎倍豆加、可武佐備和多流、」　かみさびの上に如是をそへて心得べし

○從長門浦船出之夜仰二觀月光一作歌三首、

月余美乃、比可里乎伎欲美、由布奈藝爾、加古能古惠欲妣、　俗によばひなり

宇良末許具可母、」　うら間も磯間といふに同じ浦の誤也

山乃波爾、月可多夫氣婆、伊射里須流、安麻能等毛之備、於伎爾奈都佐布、」　月の光のうすくなるより沖の船のいざり火のなみにゆられて見えきたるをよめりなづさふはなづみさはるなりさはるはそはるに同じ佐曾同言なればなり

和禮乃末夜、欲布禰波許具登、於毛敵禮婆、於伎敵能可多爾、可治能於等須奈里、」

○古挽歌一首幷短歌、　今本古の字を右に作るは誤なり左の歌こそ挽歌なれさて右の字をおきたるは此前後皆新羅使の歌をあげたれば此歌はさきによみたる挽歌をこゝにおもひ出るまにまに玄るすなれば古きとは書たるなりけり

由布佐禮婆、安之敵爾佐和伎、安氣久禮婆、　明來ばなり

於伎爾奈都佐布、可母須良母、都麻等多具比呂、和我尾爾波、　こをわが尾にはと訓なりと云說もわろからねど

此歌廿三言悉音を用ゆこゝにのみ訓を用ゆべきにあらず尾と訓て意にたぐふ事なし既和我とさへ書しをおもへばよみこゑのまゝぞやすからめ【此次の卷に小埼沼鴨をよめるに前玉之小埼乃沼爾鴨曾翼霧己尾爾とよめるに合見るべし】

之毛奈布里曾等、之路多倍乃、　此玄ろたへを鴨に玄ろきはなきなど云はいりほがなりこは鴨の羽に霜おきたるを白たへの如くとたとへたり既下に打はらひと云は霜をはらひなりこをもても上の我尾と云も尾ばかりならぬを思へ

波禰左之可倍呂、　さしかはしなり

宇知波良比、左宿等布毛能乎、　句なりさは發語ぬるといふものをなり

由久美都能、可敵良奴其等久、布久可是能、美延奴我其登久、安刀毛奈吉、與能比登爾之呂、　現身を云

和可禮爾之、伊毛我伎世呂思、奈禮其呂母、　着馴衣なり

蘇呂加多思吉呂、比登里可母禰牟、」　反歌一首、

多都我奈伎、安之敵乎左之呂、等妣和多類、安奈多頭多頭志、比等里佐奴禮婆、」　多都我奈伎に手著なきをふく

みさてするにたづきなきをうけてたづ〳〵しといひそれを序體に末の句を獨さぬればととめたりつゞけかたは古に似て始の五言末まで働かせたりかゝるたくみをいひかなへんとするほどに古の歌の玄らべはわすれて終に後世にながれたりされどこは挽歌なれば此よみ人たくむとおもふ心もあらじを此少し前より折ふしごとにかゝるたぐひなるも見えたれば目うつれるすがたなるべし源氏須磨の卷に「たづが鳴雲井にひとりねをぞなくつばさなるべしともをわびつゝ」てふもこをよみうつせしならん

右丹比大夫悲二愴亡妻一、

○屬物發思歌一首幷短歌、

安佐散禮婆、　あささればも夕されば　などに同じくあさになればなり

伊毛我手爾麻久、　妹が手に設るなり　計留約久なり

可我美奈須、　かゞみなすみとかくるのみなり

美津能波麻備爾、　於保夫禰爾、　眞可治之自奴伎、　玄ゞぬきは玄げく眞かぢとるをいふなり

可良久爾爾、　新羅をいふなり

和多理由加武等、　多太牟可布、　眞向なり

美奴面乎左指天、　之保麻知呂、　美乎の乎は伊呂の約にて水色なり水脈の字をあつるも水色を見ればなり引は梶引折などの引にて舟漕行なり水脈を引てふ乎をはぶけは妣と濁るは例なり

於伎敝爾波、　之良奈美多可美、　宇良末欲理、　間にてはとりなり

許藝呂和多禮婆、　和伎毛故爾、　安波治乃之麻波、　由布左禮婆、　久毛爲可久里奴、　左欲布氣呂、　由久敝乎之良爾、

安我己許呂、　安可志能宇良爾、　こふる心をおもひあきらめるあかしといふなるべし但此歌のつゞけがら後の世の長歌のあしきさまをおしへたるつゞけ多し

布禰等米呂、　宇伎禰乎詞都追、　和多都美能、　於枳敝乎見禮婆、　伊射理須流、　安麻能乎等女波、　小船乘、　都良良爾

宇家里、　連々にてつら〳〵つらなるを云なり

安香等吉能、　曉はあくる時なり

之保美知久禮婆、　安之辨爾波、　多豆奈伎和多流、　安左奈藝爾、　布奈呂乎世牟等、　船人毛、　船にのりたるなり即御使人らなり船の人の乃を畧けば備と濁なりこは船出すといふをかく云なり

鹿子毛許惠欲妣、　柔保等里能、　冠辭

奈豆左比由氣婆、　伊敝之麻婆、　播磨の地名なり伊を省きて敝島といひけんを後に繪島と云にて既に假字もたがへり

久毛爲爾美延奴、　安我毛敝流、　許己呂奈具也等、　波夜久伎呂、　美牟等於毛比呂、　於保夫禰乎、　許藝和我由氣婆、

於伎都奈美、　多可久多知伎奴、　與曾能未爾、　見都追須疑由伎、　多麻能宇良爾、　此浦は前とは同名異地にて備後歟

布禰乎等杼米呂、　波麻備欲里、　はまべなり

宇良伊蘇乎見都追、　奈久古奈須、　禰能未之奈可由、　なくなり可由は久の延言なり

和多都美能、　多麻伎能多麻乎、　手纏なりわたづみの手にまきもたる白玉ともよめり

伊敝都乃爾、　伊毛爾也良牟等、　比里比等里、　前にいふ如く拾ひ取なり

素呂爾波伊禮呂、　可敝之也流、　都可比奈家禮婆、　毛呂禮杼毛、之留思乎奈美等、麻多於伎都流可毛、」　此歌古言をまじへいにしへめくさまによみたれどわが心あかしのうらなどのつゝけがら後にちかくかゝるすがたより延喜の比の長歌のさまにはなりくだりけん

反歌二首

多麻能宇良能、　於伎都之良多麻、　比利敝禮杼、　麻多曾於伎都流、見流流比等乎奈美、」

安伎左良婆、　和我布禰波呂牟、　和須禮我比、　與世伎呂於家禮、　家は伎呂の約おきてあれのあを略るなり

於伎都之良奈美、」　此歌はおのれはおもへど相おもはぬ妹が心をうらめる歌なり遠國より歸來てわすれ貝のあらんをおもふはおのがせちに玄ぬばるゝをわすれんとならん此歌もおそれおきつなどかさねたるたくみ長歌とゝもに後の世ぶりなるものなり

○周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首、

眞可治奴伎、　布禰之由加受波、　ゆかずしてあらばをはぶきいふなり

見禮杼安可奴、　麻里布能宇良爾、　也杼里世麻之乎、」　今本一本ともに乎を牟に誤る假字をもて字をあらたむ

伊都之可母、　見牟等於毛比師、　安波之麻乎、　周防の地名なるべし四國の事にてはこゝにかなはず

與曾爾也故非無、　由久與思乎奈美、」　浪風あらきに物もひつゝこしゝあはじまをよそに見つゝあるとなり

大船爾、　可之布里多呂天、　柯枝は既いふ如舟をつなぐ

杭をいふ今もかしをたつるをかしをふると云これなり
波麻藝欲伎、麻里布能宇良爾、也杼里可世麻之、」 こも
浪風あらきに船泊せんかとなり
安波思麻能、安波自等於毛布、伊毛爾安禮也、 既もあ
る如くあればやなり
夜須伊毛禰受呂、安我故非和多流、」 夢にもあはじとお
もふ妹にあればや風波あらくして吾はいをやすくねず
て戀わたるとなり
筑紫道能、可太能於保之麻、 周防に大島郡あれば可太
もそのわたりの地名なるにや
思末志久母、 しばしなり所の名を得て志ばしくといは
ん序とせり
見禰婆古非思吉、伊毛乎於伎呂伎奴、」
伊毛我伊敵治、知可久安里世婆、見禮杼安可奴、麻理布
能宇良乎、見世麻思毛能乎、」
伊敵奴等波、可敵里波也許等、伊波比之麻、 周防の地
名なるべし
伊波比麻都良牟、多奴由久和禮乎、」 古しへよりかく旅
人を幾代を經てかいはひて此名を負けん島の名の如家
人のいはひて吾を待らんとなり

久佐麻久良、 冠辭
多奴由久比等乎、伊波比之麻、伊久與布流末呂、伊波比
呂爾家牟、」 前の歌と此歌二首もていはふ心を、へつく
しよめり古はかくなだらかにやすらかなり後の世ぶり
は家人のいはふといへじまの幾代か人をいはふも一
首によみなす故こゝろむつかしく歌のすがたたけから
ず
○過二大島嶋門一而經二再宿一之後追作歌二首、
巨禮也己能、名爾於布奈流門能、宇頭之保爾、多麻毛可
流登布、安麻乎等女杼毛、」 こはあやうき所にて玉藻か
るをいひ傳へたるを聞てかくよめるなり
右一首田邊秋庭、 同じ御使人のうちなるべし
奈美能宇倍爾、宇伎禰世之欲比、安杼毛倍香、 豈思に
て妹か子にその事を思ふかしてなり（卷七）に船をあ
ともひといふは集ともなふにて別なり次に「吾妹子が
いかにおもへかぬば玉のひとよもおちずいめにし見ゆ
る」とあるは似たり（卷二八）に「安杼毛敵加あじくま山
のゆづる葉のふゝまる時に風ふかずかも」と云初句は
こゝと同じ
許己呂我奈之久、伊米爾美要都流、」

○熊毛浦、周防國熊毛郡熊毛郷あり卽其浦なり
船泊之夜作歌四首、
美夜故邊爾、由可牟船毛我、可里許母能、 冠辭
美太禮呂於毛布、許登都礙夜良牟、」
右一首羽栗、 同じ度の丁男などなるべし
安可等伎能、伊敵胡悲之伎爾、宇良末欲理、可治乃於等
須流波、安麻乎等女可母、」
於伎敵欲理、之保美知久良之、可良能宇良爾、 筑前唐
泊か長門赤間よりたゞ一里の程なりといふ
安佐里須流多豆、奈伎呂佐和奴、」
於吉敵欲里、布奈奴等能煩流、與奴與勢呂、伊射都氣也
良牟、多婢能也登里乎、」 一本に多奴能夜杼里乎、伊射
都氣夜良牟、とあるはゝらべおとれり
○佐婆海中忽遭逆風漂流經宿而後幸得順風到著豐前國下毛郡分間浦於是追但二艱難悽惻作歌八首、
於保伎美能、美許等可之故美、於保夫禰能、由伎能麻爾
米爾、夜杼里須流可母、」
右一首雪宅麻呂、 下に見ゆる雪連宅滿なり但壹岐
雪同言なれば通し書たるなり

和伎毛故波、伴也母許奴可登、麻都良牟乎、於伎爾也須
麻牟、 住むなり
伊敵都可受之呂、」 家にちかづかずしてなり
宇良末欲里、許藝許之布禰乎、風波夜美、於伎都美宇良
爾、夜杼里須流可毛、」 美は例のほむる言なり
和伎毛故我、伊可爾於毛倍可、 おもへばかの婆をはぶ
けり
奴婆多末能、 冠辭
比登欲毛於知受、伊米爾之美由流、」 既いふ如ゆめとい
はでいめと云此頃にて古言を誤らぬなり
宇奈波良能、於伎敵爾等毛之、 乏はたらまほしを約て
云なり
伊射流火波、安可之呂登母世、 あかくしてなり
夜麻登思麻見無、」 大和の國の見ゆるにはあらずおさな
くよめるなり
可母自毛能、 冠辭
宇伎禰乎須禮婆、美奈能和多、 冠辭
可具呂伎可美爾、都由曾於伎爾家類、」
比左可多能、 冠辭
安麻呂流月波、見都禮杼母、 雖見なり

安我母布伊毛爾、安波奴許呂可毛、」

奴波多麻能、欲和多流月者、波夜毛伊弖奴香文、宇奈波良能、夜蘇之麻能宇倍山、伊毛我安多里見牟、」 今本こ

こに旋頭歌と小書せしはことさらに後人の注なり

○至二筑紫館一遙望本郷一悽愴作歌四首、

之賀能安麻能、 筑前國糟屋郡式糟屋郡志加海神社と見ゆ然浦の地名なり既にも出

一日毛於知受、也久之保能、可良伎孤悲乎母、 からきは五味にたとへてあまきくるしきなどいふ如く其さまをいふはた鹽は唐字の意もていはゞ鹹なれどもこゝにはそをもちほからしと云より辛しとしてかくつゞけたり此言此集古今集にもあまたあり

安禮波須流香母、」 此歌どもは御使人等の旅の長路に古郷の奈良の妹子らをおもふあまりに地のものもて心をのばしたるなり

思可能宇良爾、伊射里須流安麻、伊敝奴等能、 漁する海人の家人等なり

麻知古布良牟爾、安可思都流宇乎、」 明の意にて夜あかし魚を釣をいふ歌の意は地につけて海人の家人の待戀るをいひて古郷人の戀るこゝろをよめるなり

可之布江爾、 地名にて同國の中の入江などにて浪ちづかなる所歟

多豆奈吉和多流、之可能宇良爾、於枳都之良奈美、多知之久良思毛、」 ちくは及の意にて ちき浪なり此歌は赤人の潟をなみあしべをさしてとよみしは汐のみち來るなりそれとは異にて然の大浦に沖つ高浪の打ちきればかしふ入江のなみちづかなるあたりに鳴わたるとよめるなり一本に美知之伎奴良思とあり

伊麻欲里波、安伎豆吉奴良之、安思比奇能、 冠辭

夜麻末都可氣爾、日具良之奈伎奴、」 こは磯山の松かげに鳴をよめりと見ゆ此四首はつくしのたちにてよめると有に皆海邊のことなるは其館の海邊ならん

○七夕仰二親天漢一各陳二所思一作歌三首、

安伎波疑爾、爾保敝流和我母、奴禮奴等母、伎美我美布禰能、都奈之等理弖婆、」 織女になりてよめるなり吾裳はぬるゝとも君かみふねのつなしとりてあらばなり弖安良の約多なるを弖に通せるなり

右一首大使、

等之爾安里弖、 年毎にあり待てある一夜なり

比等欲伊母爾安布、比故保思母、和禮爾麻佐里弖、於毛

布良米也母、」 歌の意は一年に一たびあふと云星よりもわか古都の妹戀心はいやまさらめとなり

由布豆久欲、可氣多知與里安比、安麻能我波、 既いふ如く此比になりては古事記のおもむきの古言は誤れるなり古はあまつがはと訓

許具布奈妣等乎、見流我等母之佐、」 歌の意は星の逢夜のともしといひて吾古郷の妹子等に逢はぬ久しきをそへてよめるなり二の句は夕附夜の影より星の立より逢なり此二首も副夫判官などのうたなるべし

○海邊望月作歌九首、

安伎可是波、比爾家爾布伎奴、和伎毛故波、伊都登加和禮乎、伊波比麻都良牟、」 こは秋にはかへらんてふわかれの時の歌なれど末に妹がまつらん月は經につゝとあるをもて見れば其時もやゝすぐるとよめるなりけり

大使之第二男、 これは御使人の中にて行か又親に去たがひたゞに行しなどなるべし

可牟佐夫流、 此神さびは其地のふるきをいふのちにかうぐしきと云も是なり

安良都能佐伎爾、 筑前國宗像郡大荒津に荒津あり是か

與須流奈美、麻奈久也伊毛爾、故非和多里奈牟、」 いつまでかくはこひわたらんずらんとなり

右一首士師稻足、

可是能牟多、與世久流奈美爾、伊射里須流、安麻乎等女良能我、毛能須素奴禮奴、」 意明なり一本安麻乃乎等賣我毛能須蘇奴禮奴

安麻能波良、 海原なり海は廣ければ原といひ遠長く見らるればふりさけ見ると云

布里佐氣見禮婆、欲曾布氣爾家流、與之惠也之、比等里奴流欲波、安氣婆安氣奴等母、」

こゝに右一首旋頭歌也とあるはあまりにつたなく集の時の注ならず後人のわざなればすつ

和多都美能、於伎都奈波能里、 今長海苔といひて長き海苔ありそれをいふか又俗に海索麵などいふものかさてこゝまでは序なり繩はたぐりよする物故くるといひさて吾かへりくるを妹がまつらん月日は經ぬるとよめるなり

久流等伎登、伊毛我麻都良牟、月者倍爾隧追、」

之可能宇良爾、伊射里須流安麻、安氣久禮婆、 夜あけければなり

宇良末許具良之、 浦のほとりを漕來るらしなり【岐久

の約具なり】

可治能於等伎許由、」

伊母乎於毛比、伊能禰良延奴爾、　今本禰を禮に誤るねらえぬはねられぬなり音通へばなり

安可等吉能、安左宜理其問理、可里我禰曾奈久、」　此歌はあけがた霧のうちをかりむれの鳴て行が旅の心にさびしくおもふよりよめり此かりがねの言にてかりがねの禰はむれの約女を禰に通はせしといふ事玄らるべし

由布佐禮婆、　後世佐を濁りて婆を清と思へるは誤なるなり既いへるをこゝに清濁をわけて書しを見て玄れ

安伎可是左牟思、和伎母故我、等伎安良比其呂母、由伎呂波也伎牟、」　意あきらかなり

和我多妣波、比左思久安良思、　あふらしはあるらしなり

許能安我家流、　伎呂安の三つを約は計なればかくいふなり

伊毛我許呂母能、阿可都久見禮婆、」

○到筑前國志麻郡之韓亭船泊經三日於時夜月之光皎皎流照奄對此華旅情悽噎各陳心緒聊裁歌六首、

於保伎美能、等保能美可度登、　吾朝庭といふ時はひろく吾日本の諸の國をみかどゝいふべく伊勢物語に吾がみかど六十餘州といへるに同じこゝは筑紫の國にてよめるなればやがてそを遠のみかどゝいふすべて皇國にまつろへる國をば遠のみかどゝいふ事下の長歌に新羅を遠のみかどゝいふ事あるをもて玄れ

於毛敵禮杼、氣奈我久之安禮婆、　旅にある日久なり氣奈我久の氣は伎武加倍を約て氣といふなり年月日は來迎るなればいふ本居宣長か氣は伎倍の約にて來經なりと云も同じ意なり月日の久を云

古非爾家流可母、」　古郷をなり

右一首大使

多妣爾安禮杼、欲流波火等毛之、乎流和禮乎、也未爾也伊毛我、古非都追安流良牟、」　此歌われはたびなれど火ともしありといひてさてあやなく妹がこふるをやみといふなり

右一首大判官、

可良等麻里、　和名抄に筑前國志摩郡韓良とあり則是なり

能許乃宇良奈美、　和名抄に同國早良郡能解然はのげにて和名抄にあふされど下にも能許とありと說もあれど計許同言なれば方言誘言或は古今の唱違もあるべければ此比までは和名に能解とあるが能許といふとも玄るべからず【能許の島は韓亭出崎の東にあたる島にて海上廿里ばかり有り和名抄にある能解とは別の地なりこゝはから泊より六七里も隔りたり韓亭より見わたす所といひかたゝ是ならん神功皇后舟魂神を殘し給ふ故にのこり島なり白髮明神と云も祭神は猿田彦と地の人いへり】

多々奴日者、安禮杼母伊敵爾、古非奴日者奈之、」

奴婆多麻乃、　冠辭

欲和多流月爾、安良麻世婆、伊敵奈流伊毛爾、安比弖許麻之乎、」

比左可多能、　冠辭

月者佐利多里、伊刀麻奈久、　何なり月はてりいざり火はあかくともし合たりと云

安麻能伊射里波、等毛之安敵里見由、」

可是布氣婆、於吉都思良奈美、可之故美等、　故美は伎の延言

能許能等麻里爾、安麻多欲曾奴流、」　舟にて風待するほどの歌なり

○引津亭船泊之夜作歌七首、　今本夜字脫歌により加ふ【引津亭志摩郡なりこゝ引津亭と訓べし陸地ならねばなりからどまりより唐地へ舟の進む順路なりといへり】

久左麻久良、　冠辭

多婢乎久流之美、故非乎禮婆、可也能山邊爾、草乎思香奈久毛、」　新古今雜下に菅贈太政大臣「苅萱の關守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり」とあるは筑紫路にてよみませるなれば後ながらこゝをふるくはかやの山べといひつるか【可也能山は今筑紫富士と云よし山は高からねど富士に似たる故に然云志摩郡金丸村の上に在俗邊多山ともいふよし細川幽齋の名護屋の道記に在りかやの山は誤なり古鷲尾山といひあたご山とも云早良郡の內なり○苅萱は三笠郡のにて可也能山とは十二三里前の所にて唐國への順路ならず山邊なりと云】

於吉都奈美、多可久多都日爾、安敵利伎等、美夜吉能比等波、伎吉弖家牟可母、」　浪たかくたつけふしもふなのりしあへりと古郷人はきゝてありけんかと旅の物うさ

をよめるなり伎吉ヒ安里家武の ヒ安約多なるを ヒに通し里をはぶきしなり家を濁るは言便なり

右二首大判官、

安麻等夫也、　冠辭

可里乎都可比爾、衣ヒ之可母、奈良能美夜古爾、許登都礙夜良武、」　いと遠きさかひに來て都へ便りのなきにわびて空行鴈を使になすよしもがなとまでおもへるが切なりさて此使古詠をも唱へたれどそは其よし云るせり

此歌もとは初二首は大判官のよめるにて此末の五首は從へる人々のなる事前後の書體にて云るし然るに拾遺集に此歌を人麻呂の唐にてよめりと有はいとひが事なり人麻呂筑紫へ下りし事は見ゆれど新羅へしも行けん事なし凡拾遺集に此集の歌をとれるは誤多し人麻呂は奈良の朝までありし人ならず

秋野乎、爾保波須波疑波、佐家禮杼母、見流之流思奈之、多婢爾師安禮婆、」　秋野を萩の花のてりにほはせたれど妹としも見ねば見る云るしなしとなり

伊毛乎於毛比、伊能禰良延奴爾、安伎乃野爾、草乎思香奈伎都、追麻於毛比可禰ヒ、」　おもひかねはおもひを別ねるにて鹿の妻をおもふおもひをわかねたづねとふ故いとゞいのねられずとなり

於保夫禰爾、眞可治之自奴伎、等吉麻都等、和禮波於毛倍杼、月曾倍爾家流、」　大船の眞梶はやめてかへりつかなん時を待とすれど遠きさかひにしあればおもはず月を歴ぬるを云なり

欲乎奈我美、　夜をながびにて夜の長ぶりていねられずとなり

伊能禰良延奴爾、安之比奇能、　冠辭

山妣故等奈米、佐乎思賀奈君母、」　毛はそへたるのみ

○肥前國松浦郡狛島亭舶泊之夜遙望海浪一各慟旅心作歌七首、

可敵里伎ヒ、　はやも故郷に歸來見なんとおもひしなり

見牟等於毛比之、和我夜等能、安伎波疑須々伎、知里爾家武可聞、」

右一首秦田麻呂、

安米都知能、可未乎許比都々、安禮麻多武、波夜伎萬世伎美、麻多婆久流思母、」

右一首娘子、　遊女か又古郷の妹の別るゝ時の歌をここにてとなへしなるか

伎美乎於毛比、安我古非萬久波、安良多麻乃、　冠辭

多都追奇其等爾、　年月たつごとになり

與久流日毛安良自、」　無不思日をいふ日毎におもはぬ月日なければよくる日なしとなりこも右と同じく遊女歟又古歌か

秋夜乎、奈我美爾可安良武、奈曾許己波、　許己波こゝばくはなり許々多も同言既出

伊能禰良要奴毛、　毛は助字

比等里奴禮婆可、」

多良思比賣、御舶波ヒ家乍、松浦乃宇美、　地につけたる序歌なり

伊母我麻都敵伎、月者倍爾都々、」　歴去つゝなり

多婢奈禮婆、於毛比多要ヒ毛、安里都禮杼、伊敵爾安流伊毛之、於母比我奈思母、」　われは旅にあれば思ひたえてもあれども家に在妹がおもふらん心かなしきといふなり

安思必寄能、　冠辭

山等妣古山留、可里我禰婆、　是も亦かりがねは聲の事ならでかりむれなる證とすべし婆は半濁にてわの如く鳴るゆゑに濁音の字を用

美也故爾由加波、伊毛爾安比ヒ許禰、」　禰はねがふ意なり

挽歌。　今本こゝに到二壹岐島一云々の二十二字あれど前の例にも違ひ標の體もこゝのみたがへれば右の二十二字は歌の左に出て前の例に從て同じ集なりにあらためぬ猶よしは下にいふ

須賣呂伎能、等保能朝廷等、可良國爾、　吾朝廷に屬まつりたる故百濟新羅高麗など迄も遠の朝廷と云り

和多流和我世波、　友の親みて云なり

伊敵妣等能、伊波比麻多禰可、　いはひてまたねばかなり

多太未可母、　故郷にて床の疊をいみてあやまちなきさまにかしこみひめ置事なり古事記などの歌にあり【肥前の島原の人旅立し人の其居たる疊を大切にして米衣を置て鎮守とするよし其國人の云り是其古への遺風なり】

安夜麻知之家乍、安吉佐良婆、可敵里麻左乍等、多良知禰能、　冠辭

波々爾麻乎之ヒ、等伎毛須疑、都奇母倍奴禮婆、今日可許乍、明日可裳許武登、伊敵比等波、麻知故布良乍爾、等保能久爾、　遠の國は新羅の國をさす

伊麻太毛都可受、也麻等乎毛、登保久左可里豆、伊波我禰乃、安良伎之麻禰爾、夜杼里須流君、」 こは友人の歌なり伊波我禰より下葬て石の中にあるもていふ人麻呂の妹山のいはねしまけると云も是なり

反歌二首

伊波多野爾、　壹岐の島に在べし

夜杼里須流伎美、　是も葬の地をいふなり

伊敝奴等乃、伊豆良等和禮乎、　友のみづからをいふわれをの乎後に家にと云てにをはなり

等波婆伊可爾伊波武、」

與能奈可波、都禰可久能未等、和可禮奴流流、君爾也毛登登奈、もとなはむなしきにてよしなくわれはこひんとなり

安我孤悲由加牟、」

右到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死之時作歌一首并短歌、　今本既いふ如く右の二十二字を他標の如くかきたれどはじめの古挽歌とあるは歌の左の讀人と標を云るせり今本歌の左に右三首挽歌とあれど既にはじめの標に挽歌とあげて其目をわかち書しには挽歌の文字を云ず既に初の標の書體を改しよしをかきし所に云如く標に一字あげて書しは其すべてをかき下書しは歌の左にある事をあげ書し事奥の中臣宅守弟上娘子の贈答の歌をくはしく見ば云らるべしこは謄寫の誤りなるをあらためずあつめぶりにそむきまち〳〵に亂し事云るければ改む扨此讀人は云らえずやがて御使人の中なるべし次の挽歌も此時の歌と見ゆそはよみ人云られたればそれ〴〵に云るせり此長歌反歌二首はよみ人の傳へなければかくかけるなるべし

天地等、登毛爾母我毛等、　於毛比都都、　安里家牟毛能乎、波之家也思、　愛しきよなり下の思は助字なり卷二別記に委

伊敝乎波奈禮豆、奈美能宇倍由、奈豆佐比伎爾豆、　なれいたづき來てなり爾はかるく見るべし

安良多麻能、　冠辭

月日毛伎倍奴、　來歷奴なり

可里我禰母、都藝豆伎奈氣婆、多良知禰能、　冠辭

波々母都未良母、安佐都由爾、毛能須蘇比都知、　ひづちは豆知約知にてひぢなり其言の本は多志約知にてひたしなり物ひづちといふは古言なり

由布疑里爾　己呂毛豆奴禮豆、左伎久之毛、　幸くしも

なりしは助字なり

安流良牟其登久、伊低見都追、麻都良牟母能乎、世間能、比登乃奈氣能、知良敝流流野邊乃、　良敝約禮なり

波都乎花、可里保爾布伎豆、　かりほのほはをの如く唱ふ荒墓に喪屋を作れるさまなるべし旅のかり庵にはあらじ御使人は驛亭にやどるなればなり

久毛婆奈禮、　冠辭なりと考には說たり雲は物にそはず放たな引ば遠しといひかけたるなるべし風の音の遠きに同じ

等保伎久爾敝能、　壹岐の島をさして云

都由之毛能、佐武伎山邊爾、　既に秋も過るよし前にも見ゆればこゝは冬の初つかたにて露霜の寒さと云へるなるべし

夜杼里世流良牟、」　此終の良牟は上の君にあれやもよりいへり

反歌二首

波之家也思、都麻毛古杼毛母、多可多加爾、　遠みの意なり

麻都良牟伎美也、之麻我久禮奴流、」　此嶋隱は上の長歌の終の意とひとし

毛美知葉能、知里奈牟山爾、夜杼里奴流流、君乎麻都良牟、比等之可奈思母、」　奈良の宅滿か父母妹子などをいたみてよめるなり

右三首葛井連子老作歌、　是も御使の官人なるべし今本こゝに作挽歌とあれど前の下挽歌とかゝず又古挽歌なる歌にも此字をくはへず標の書體にならひて挽歌とあげし條下にて歌毎に書まじき例なれば後人の加筆云るしよりてすてつ

和多都美能、可之故伎美知乎、也須家口母、奈久奈夜美伎豆、やすけくもなくなやみなり

伊麻太爾母、毛奈久久由可牟登、　喪なくは恙なくなり

由吉能安末能、　事なくゆかんとゆきの海人のとはつゝみなくゆかんゆきとかけさてゆきの嶋のあまのわれらと地につけてかくつゞけたるなり

保都手乃宇良敝乎、　秀手の占にて都は助字手はそへたる辭秀ノ占は太古と云に同じく稱美の言なり

可多夜伎豆、　古事記岩戸の條に眞名鹿肩を燒て占ふ事あり此集中にも武藏野のうらべかたやきと云則こゝも是なり中世異國より傳へて壹岐對馬伊豆より龜卜を出

すといふ事のあれどこゝはそれにはあらず

由加武士須流爾、伊米能其等、美知能蘇良治爾、　中なる事をそらといふ道の中路なり

和可禮須流伎美、」　死するきみなり卽宇連宅滿をいふ

反歌二首

牟可之欲里、伊比祁流許等乃、　むかしより唐へ行事の歌にからき事をいひしをいひてやがてから國の名に云かけたり

可良久爾能、可良久毛已許爾、和可禮須流可聞、」

新羅奇敵可、伊敵爾可加反流、由吉能之麻、　此句はゆかんといはんためにかきたるのみ

由加牟多登伎毛、於毛比可禰都母、」　おもひかねつのつはぬに通ふつなりおもひかねぬなり

右三首六鯖作歌、　挽の字を捨る事前にいふこは此うれひにあひて心惚て新羅へかゆかん家にかゆかんとわかちおもひさだめかねぬるといふなり本末皆六鯖か心なり是も御使人に從つる丁などなるべし

○到二對馬島淺茅浦一舶泊之時不二得順風一經二停五箇日一於二是瞻望物華一各陳二慟心一作歌三首、　【瞻望奥人案に舊磐余彦尊條ニヲゼリト訓めり考に乎は宇知美也呂約呂は利と同言世は左計約則打見遣放なり仍てこゝもヲゼリと訓むべし】

毛母布禰乃、波都流對馬能、安佐治山、　志具禮能安米爾、　毛美多比爾家里、」　多比約治にてもみぢにけりなり

安麻射可流、比奈爾毛月波、已禮々杼母、伊毛曾等保久波、和可禮伎爾家流、」　意明なり

安伎左禮婆、於久都由之毛爾、安倍受之已、京師乃山波、伊呂豆伎奴良牟、」　此歌も既いへる如く秋かへりなんといひしをおもひふくみてよめるなり

○竹敷浦　對馬なるべし

舶泊之時各陳二心緒一作歌十八首、

安之比奇能、　冠辭

山下比可流、毛美知葉能、知里能麻河比波、　散亂物見えわかぬまでまぎれちればいふ事なり

計布仁聞安留香母、」　散は今日なりと云のみながらちりのまがひおもしろかればかく云ならん

右一首大使、

多可之伎能、母美知乎見禮婆、和藝毛故我、麻多牟等伊比之、等伎曾伎爾家流、」　此歌も又秋かへらんといひしをおもひ出たるなり

右一首副使、

多可思吉能、宇良末能毛美知、和禮由伎已、可敵里久流末低、知里許須奈由米、」　ゆめちりこそなりこすはよの意ねがふ意なり

右一首大判官、

多可思古能、宇敵可多山者、　うへかた山は地名なり

久禮奈爲能、也之保能伊呂爾、奈里爾家流香聞、」

右一首小判官、

毛美知婆能、知良布山邊由、　良布約留にてちるなり

許具布禰能、爾保比爾米已、　地のありさまにめづるなりやがてもみちの散ほとりの舟なればかくいふなり

伊已已伎爾家里、」　御使人たちのにほひにめで、吾たち出るといふ意をもそへてよめるか

多可思吉能、多麻毛奈婢可之、已藝低奈牟、君我美布禰乎、伊都等可麻多牟、」　此浦の玉藻靡し漕出なんも此をとめが心をなびかすにたとへ其ふね漕出又こゝに來まさんをいつとかは待んと言をも添てよめりと見ゆ

右二首對馬娘子玉槻、　此娘子をさぶること訓はもとゆ姓もなく女を書すべきならねはもとよりなり前の例によりて遊行女とす

多麻之家流、伎欲吉奈藝佐乎、之保美已婆、　已は多禮約此多は已阿約なり則みちてあればなりよりて婆の濁音を用

安可受和禮由久、可反流左爾見牟、」　鹽のみちたればかかるきよきなぎさをあく迄見ずて吾はゆければ歸るさに見むと玉槻をおもふ心をこめてよめる右使の歌なり

右一首大使、

安伎也麻能、毛美知乎可射之、和我乎禮婆、宇良之保美知久、伊麻太安可奈久爾、」　こも上の歌の如玉槻をもみぢにたとへいまだ見あかなくに漕出なんと副使のよめるなり

右一首副使

毛能毛布等、比等爾波美要縮、　見えまじとなり

之多婢毛能、思多由故布流爾、都奇曾倍爾家流、」　故郷をおもひてよめるならん

右一首大使、

伊敵豆刀爾、可比乎比里布等、　とてのてを略なり

於伎敵欲里、與世久流奈美爾、許呂毛豆奴禮奴、」

之保非奈波、麻多母和禮許牟、伊射遊賀武、　いざかへりゆかんとなり賀を濁音なりと論あるはいりほがなり賀は清濁兩音なり

於伎都志保佐爲、　既いふ如井は和妓約鹽さわぎなり

多可久多知伎奴、」

和我袖波、多毛登等保里豆、　手のさきを手なさき手のもとをたもと、いへば肘の上にてぬれぬるをいふなり

奴禮奴等母、故非和須禮我比、　等良受波由可自、」歌意は道の長手に古郷戀る心のくるしかればわすれ貝ひろひとらずばやまじとなり

奴波多麻能、　冠辭

伊毛我保須倍久、安良奈久爾、和我許呂母豆乎、奴禮豆伊可爾勢牟、」貝といはねど貝拾ふ事をよめる歌なり前の歌に忘貝をうたへばなり後の歌をよめるを意違へるを思へ

毛美知婆波、伊麻波宇都呂布、和伎毛故我、麻多牟等伊比之、等伎能倍由氣婆、」既にいふ如く秋はかへりなんといひければなり

安伎佐禮婆、故非之美伊母乎、　此美も夫利約の備より通したるなり

伊米爾太爾、比左之久見牟乎、　秋の長夜に向ふをかくいひ長夜さへはやくあけぬと云

安氣爾家流香聞、」

比等里能未、伎奴流許呂毛能、比毛等加婆、　こは既云下紐なり

多禮可毛由波牟、伊敵杼保久之豆、」長き旅路ひとり着たる衣の紐解ぬるものならば誰か紐結ばんと云は妹こひしらにいふのみ

安麻久毛能、多由多比久禮婆、　船にてたゆたひくれば

を約て云なり新羅人の使人は久しく船路にあればなり

九月能、毛美知能山毛、宇都呂比爾家里、」既いふ如くうつろふは散をいふ

多婢爾豆毛、母奈久波也許登、　あしき事なく歸り來といひてなり

和伎毛故我、牟須比思比毛波、奈禮爾家流香聞、」こは長紐なり旅の摺衣の右の垂衿にむすび垂るなり赤紐ともいふ

○回二來筑紫海路一入レ京ニ到播磨國家島一之時作歌五首、

伊敵之麻波、奈爾許曾安里家禮、　名ばかりふりけりとなり

宇奈波良乎、安我古非伎都流、伊毛母安良奈久爾、」

久左麻久良、　冠辭

多婢爾比左之久、安良米也等、伊毛爾伊比之乎、等之能倍奴良久、」　良久約留

和伎毛故乎、由伎豆波也美武、安波治之麻、久毛爲爾見延奴、　たゞはるかなるをいふのみ

伊敵都久良之母、」家は古郷の家をいふづくは近づくなといふか如し家のかたにつくといふなり

奴婆多麻能、　冠辭

欲安可之母布禰波、許藝由可奈、美都能波麻末都、麻知故非奴良武、」

大伴乃、　冠辭

美津能等麻里爾、布禰波豆々、多都多能山乎、伊都可故延伊加武、」越ゆかんのゆを伊にかよはせりひろひてをひりひてと云におなじ

○中臣朝臣宅守與狹野　大和なり

茅上娘子贈答歌、　此端詞は是より末六十三首の歌をすへあけたるのみ事は初の標にくはしそこに其誤れる事あるをもよしをも續紀をあげて委くいふてらしあはせて去れ扨姓の下に娘子とあるはいらつめと訓事集中の例なり古への常なり【中臣朝臣宅守後に赦に遇しと見えて天平寶字七年の紀に授中臣朝臣宅守正六位上と出たり茅上娘子も赦にあひしなるべけれど其事の見えざるは脫しなるべし】

安之比奇能、　冠辭

夜麻治古延牟等、須流君乎、許々呂爾毛知豆、夜須家久母奈之、」初の標によりて見ればつみなはれて越路に別れんとするを心に思ひかねてかくよめるなり

君我由久、道乃奈我氐乎、　氐は多計約にて長丈をつゞめいふなりたけは長短をわかず其程をたゝへ云辭なり

旗手蜘手綱手も同じすへて古言のもとの去らへぬを源清良とおのれ論て東萬呂眞淵考を交とられぬはすてゝいふめり

久里多々禰、　くりたかねなり我と多と音通ふなりまたたはめたゝむも同

也伎保呂煩散牟、安米能火毛我母、」天火なり女の心にかはる時天のたすけを得て使のさすらへ行道を燒亡したべとおさなくいひ出たるにふるき心はこもれり

和我世故之、氣太之麻可良婆、　けだしはけはときのとをはぶきて伎を計に通し陀は知加約にてけぢかしと云意なり唐音に蓋の意は物をわかち疑ふにいへどこゝにいふときちかくかりそめなる意に云

思漏多倍乃、　冠辭

蘇低乎布良左禰、　袖をふらさねの言卷一に委くいふ

見都追志努波牟、」　都よりさすらへ行國にまかるなり前に袖ふる事既におほしかたみに忍び見んといふなり

己能許呂波、古非都追母安良牟、多麻久之氣、　冠辭

安氣弖乎知欲利、　あけは明日なりをちはのちなり又遠にも通ふ

須辨奈可流倍思、」　別て後はせんすべなからんにこの比はこひつゝあらんとなり

右四首娘子臨別作歌、

知里比治能、　塵涅なり

可受爾母安良奴、和禮由惠爾、於毛比和夫良牟、伊母我可奈思佐、」　今はさすらへ人となればつかさ位もなく人かずならぬわれ故になり

安乎爾與之、　冠辭

奈良能於保知波、由吉余家杼、　行よけれどもをはぶきいふなり

許能山道波、由伎安之可里家利、」　此山道はおもふ妹にわかれさすらへ行にさへあれば行くるしき道なりけりとなり

宇流波之等、安我毛布伊毛乎、於毛比都追、由氣婆可母等奈、由伎安思可流良武、」　此歌も前の歌と意同じくうるはしくおもふ妹にわかれ行ゆゑにやむなしくよしなく行くるしとなり

加思故美等、　此美は萬行に働くなり

能良受安里思乎、美故之治能、　三越路をいふなり

多武氣爾多知弖、　手向に立てなり道の神をまつる所をいひて後峠の字にていふもこれなり卽手祭の意を云ここにしてかへりみしたればおもはず妹こひしきより妹が名いひしといふなりかのあづまはやとのたまひしにひとし

伊毛我奈能里都、」

右四首中臣朝臣宅守上道作歌、

於毛布惠爾、　こはおもふゆゑをはぶきいふなりゆゑの惠はゑの假字なり此比までは假字正しなり

安布毛能奈良婆、之末思久毛、伊母我目可禮弖、安禮乎良米也母、」　せちにおもへば相逢ものにしもあらばいたく戀おもへばさばしがほども目くれず吾は相見ずてあらめやといひ遠き國にさすらへ行てあふ事のたへてかたきをなけきけるなり

安可禰佐須、　冠辭

比流波毛能母比、奴婆多麻乃、　冠辭

欲流波須我良爾、禰能末之奈加由、」　加由約久なり

和伎毛故我、可多美能許呂毛、奈可里世婆、奈爾毛能母氏加、伊能知都我麻之、」　いとおさなく讀るに心ふかし

等保伎山、　こは越路に遠き山ならん

世伎毛故要伎奴、　下の歌もて見ればこゝに關といふも逢坂のせきならん

伊麻左良爾、安布倍伎與之能、奈伎我佐夫之佐、」　かく云はうらぶるかたへ心のすさびてせんすべなきなり一本左必之佐とあり

於毛波受母、　おもはずにあられんやなり母はそへたるのみ

麻許等安里衣牟也、　まことにをられんやの心なり

左奴流欲能、伊米爾毛伊母我、　うつゝにもいめにも妹が影の目につきてあるとなり

美延射良奈久爾、」

等保久安禮婆、一日一夜毛、於母波受弖、安流良牟母能等、於毛保之賣須奈、」　おもひたへぬをことわりよめるなり

比等余里波、伊毛曾母安之伎、故非毛奈久、安良末思毛能乎、於毛波之米都追、」　おもふあまりにあだし人よりもあしとまで思ふとなり

於毛比都追、奴禮婆可毛等奈、奴婆多麻能、　冠辭

比等欲毛意知受、伊米爾之見由流、」　おもひつゝぬればや一夜もおちず猶戀ひしさを增しむる事のよしなやとなり

可久婆可里、古非牟等可禰弖、之良末世婆、伊毛乎婆美受曾、安流倍久安里家留、」

安米都知能、可末奈伎毛能麻能爾、安良婆許曾、安我毛布伊毛爾、安波受思仁世米、」　神のなきてふ事あらねばいのりてあはめと思ふをいのる神なくばこそあはずしてえにせめとなり

伊能知乎之、　此乎之は助字なり今多爾毛阿故與の多爾の如くすてゝ見るべしかゝる助字の事は既にもいふ

麻多久之安良婆、安里伎奴能、　冠辭